
勇者だけでは勝てない

音無声無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者だけでは勝てない

【Nコード】

N6208U

【作者名】

音無声無

【あらすじ】

魔王を倒すのは勇者の役目だ。しかし、国を守り、人々を守るのは私たちの役目でもある。これは勇者たちが魔王を倒すまで人々を守り抜いた孤高の騎士の物語。

勇者だけでは勝てない 設定資料（前書き）

本編ではまだ説明されていない設定も載っています。そういうのが見たくない人は見ないほうがいいです。人物紹介は後々別に投稿します。

勇者だけでは勝てない 設定資料

世界名 パンゲア

神と魔法が実在し科学がそれほど発達していない世界。

魔王

オーガス帝国で行われていた魔術実験によって生み出された存在で、魔術が意志をもったとでもいうべき存在で魔力の塊。
ほとんどの魔術の効果を理論上の限界値まで引き出すことができる。

勇者

勇者。 召喚の儀によって異世界から呼び寄せられた存在。
基本的に召喚者が存在する世界より高位の世界から召喚されるので
召喚された世界では
超人的な能力を持つこととなる。
今回召喚された勇者は柊凜と新藤和也の二人である。

魔法

神に祈りをささげることにより奇跡を起こす方法。 使用するための条件は使用したい魔法に合う神様を信仰していること。 特に神殿などで洗礼を受けたりする必要性はないが、受けたほうが精度、威力が上昇する傾向にある。 複数の神を信仰することもできるが、魔法の効力が低下する場合が多い。

魔術

神に祈ることなしに奇跡を起こす技術。魔法は神を信仰してさえいれば使えるためこの世界において魔法を使えないのは神を信仰していないものだけである。しかし、神は人同士の争いに魔法が使われるのを拒むため、人々によって対人用に魔術が編み出されたのである。使用するためにはある一定以上の魔力と才能が必要であり、使用できる人数は人類の半数程度であると見積もられている。

魔力

魔法と魔術を使うために必要な力。大気中に漂っている。基本的に有害であり、あまりに高濃度の魔力にさらされていると魔物や魔族になってしまう。人類が使用するためには気と反応させて無害化する必要がある。

気

生体エネルギーのこと。基本的に体を鍛えることによって増える。魔力の代わりになるが特に身体能力を向上させるのに向いている。唯一回復魔術には使うことができない。使い過ぎると衰弱し最悪の場合死にいたる。

神

パンゲアに存在する人類を見守る存在。世界の管理を始原神から任されており現在人類が信仰している神の数は8柱。火の神 フリート。水の神 マケミア 風の神 シンディー 大地の神 ゴレ
ー 雷の神 エレク 光の神 ルーナ 闇の神 レニア
始原神 ??? 祈りに応じて魔法という形で人々に力を貸す。

過去に2度世界に完全に顕現したことが分かっているがそのことについて神々が語ることは少ない。

始原神

この世界の創世神。始原神だけは神々が存在するといっているだけで実在を確認した者はおらず、信仰したとしても新たに魔法が使えるようにはならなかったためあまり信仰されていない。名前も不明。神々によると「呼ぶことができなくなった」とのこと。

神殿

元々は神々を祀る場所の事を指していたが、現在では託神教団を指すことが多い。神殿で祈りをささげた場合通常よりも深い祝福を神から授かることが多い。

託神教団

神殿を管理する神官たちの組織。組織での地位はいかに神を深く信仰し、深い祝福を受けるかで決まるため。盛んに慈善事業を行うことで有名。

ギルド

世界に蔓延る魔物たちを討伐することを目的に創設されたが、現在では日常的な厄介事から傭兵の斡旋まで請け負うようになった何でも屋とでもいうべき組織。所属しているものはGとSにランク分けされている。

魔術教団

魔術の研究、研鑽を行っている組織。所属しているものたちは優秀だが奇人、変人が多く。とんでもない騒動をたびたび起こすため、魔術教団に所属していると知られるとかなり白い目で見られる。

人間

ヒト。繁殖力が強くパンゲアにおいて最も数が多い人型生物。数は力という理論の体現者達。ほぼできないことはないが、特化した能力などではなく特徴に欠ける種族。しかし、他の種族にはない圧倒的なまでの多様性があり、個体によって大きく能力差がある。寿命は50～100歳ほど。

ドワーフ

土人。頑強な肉体をもち凄まじいパワーをもっている。鉱山に町を作り住んでいるものが多い。戦いにおいては頼れる前衛となるが頑固な性格のものが多く連携に難があることが多い。手先が器用で火の神を信仰しているものが多い。魔術を使えるものは皆無に等しい。

エルフ

森人。美男美女が多い。ほっそりとした体型をしているものが多い。あまり力はないが俊敏である。森で自然と共に生きており、森に害なすものに容赦しない。排他的でよそ者を容易に受け入れることがない。大地の神を信仰している。自然魔術と呼ばれるものの使い手であり魔術が生まれて広まるまでは対人戦において無敵を誇った。

獣人

獣人。さまざまな種類がありいまだに分類が終わっていない。俊敏なもの、頑強な肉体をもつものなど多様性に富むがどちらかに偏っているものがほとんどである。人と獣の血が混じったものではないかといわれてきたが、神歴5021年とある神の証言により過去に神獣と呼ばれていた者たちとヒトの混血であることが分かった。神獣たちの血をひく故か極稀に魔術に絶大な適性をもつものが現れることがある。固有能力をもっている個体が多い。

魔人

魔人。知性があるヒト型の魔物の事。魔物であるためか魔物と意思の疎通をすることもできる。過去にこのことが原因で魔物と同一視され迫害を受けたが魔族も普通に魔物に襲われることが判明し終息した。しかし、このことが原因で他の種族を嫌っている。

使徒

神の召使。一定以上の信仰、崇拜をもつと神によって使徒として選ばれる。限定的な不老不死となる。

亜神

神に選ばれた者。使徒からさらに位階が上がったもの。神には及ばないが強大な力をもつその力は一国を一夜にして滅ぼすほど。人間、ドワーフ、エルフ、獣人の各種族の亜神が1柱ずつ存在する。

超越者

神から選ばれず位階が上がったもの。純粋な才能のみによってなるものがほとんど。なぜなら、神を信仰していないので神からの祝福

による簡単な能力の底上げができず、なまかな努力では位階を上げることはほぼ不可能だから。ほとんどが魔人。

魔物

高濃度の魔力に中てられて生物などが変質したもの。ほとんどの魔物が人を襲う。

オーガス帝国

パンゲアにおいて2番目に巨大だった国。魔王を生み出す原因となった魔術実験により崩壊し今ではそこに住む人々は存在せず魔物がはびこっている。

オーラリア帝国

パンゲアにおいて最も巨大で強大な国。対魔王戦線の最前線の一つ。高度に発達した魔法国家。国民が選ぶ議会がおかれ意外と民主的なところである

オーライル学術都市

いわゆる都市国家。この世のすべての謎を解き明かし、よりよい生活を求めるためありとあらゆる学問の研究を行っている。魔術教団の本拠地があるため世界で最も危険な街と呼ばれている。

イーリア連合王国

絶対王政の国。同盟した4つの国の集まりだったが互いに仲が悪く、

世界の争いの半分が生まれる国と呼ばれるほど内戦ばかりしていた国。神歴5909年、現女王が他三力国を征服し統一国家となる。パンゲアにおいて3番目に広大な国土を誇るが、内戦で荒れ果ててしまい国力はその辺の小国家のほうがあるかもしれないというところまで落ち込んでいる。対魔王戦線の最前線の一つ。主人公が仕える国。

ライガート商業都市

いわゆる都市国家。この世のすべてに値札をつける勢いで商売をしているところ。此処で買えないものはないとまで言われている。ギルドの本拠地がある。

シンディック神殿国家

託神教団の本拠地があるところ。周りを山に囲まれ非常に不便なところ。神殿ばかり建っていて、初めて来た人はその荘厳さに圧倒される。医療の最先端を突っ走っており此処で治せない病気は不治の病といってもよい。

魔国

魔王の治める国。オーガス帝国の領土をほぼそのまま受け継いでおりパンゲアにおいて2番目に広大な領土を誇る。魔王の影響ですべての国土が高濃度の魔力に満ちており、無尽蔵といえるほどの魔物が存在する。この魔力に触れて魔物化したものは魔王に従うため実質魔王の兵力も無尽蔵といえるほどとなっている。

パンゲアの一年

フリートの月〃一月
マケミアの月〃二月
シンデラーの月〃三月
ゴレーの月〃四月
エレクの月〃五月
ルーナの月〃六月
レニアの月〃七月
始原神の〃八月
一か月は50日

勇者だけでは勝てない 設定資料（後書き）

いかがでしたでしょうか？
こんな世界観の世界です。

崩壊する帝国（前書き）

はじめまして、音無声無と言います。これが初投稿作品ですので、未熟なところもありますがよろしく願います。

崩壊する帝国

此処はパンゲア。魔法が実在し神が存在する世界。世の人々は魔法と神の祝福により平和と繁栄を享受していた。

神歴5911年フリートの月26日までは

オーガス帝国 帝都オーガス

「急いで皇族の方々を避難させる！」

重々しい鎧を着た兵士達が宮殿の中を怒声を上げて走り回っている。兵士たちの顔色は蒼白で血の気がない。ひしひしと感じる死の予感の中で兵士たちは己の役目を果たすべく動いている。

「何が起こったというの！？近衛騎士があわてるものではありませんせんわよ」

豪華な服を着た少女が兵士に向かって声を上げる。

「帝都にて行われていた魔術実験において事故が起きました。その結果、強大な魔物が出現し近衛を含むほぼすべての戦力が壊滅いたしました」

なにを言われたか理解できずに呆然とする少女を肩に担ぐようにして騎士のひとりが運び始める。

少女は我に返って抵抗するが、窓から見えた光景にまた凍りつく。城を囲っていた城壁はがれきの山と化し、その向こうには巨大な異形の姿が見える。

魔力そのものが実体化したような圧倒的な魔力をまき散らし、数百

の魔術を同時に行使して、殺戮の限りを尽くしている。

「あれがそうなの？」

騎士が頷くのがわかった。

「我らだけではあれには勝てません」

騎士の声には絶望がこもっている。

「しかし、必ず勝つ方法があるはずです。我々だけでは勝てずとも、オーラリア、オーライル、ライガートやシンディックの力を借りることができれば必ず勝つことができるはずです」

だからあなたがた皇族は生きて我々の仇を取ってください。

それはあなたがたにしかできないことです。

その声に周りにいた兵士たちも頷く。

「我らの献身と勇気と忠誠にかけて皇女様を安全なところまで連れて行きます」

そう言っただけで、騎士は黙りさらに移動速度を上げた。

随分と時間がたった気がする。あれだけ周りにいた兵士達は死体にするにはできなかった。

あまりに高濃度な魔力にさらされた結果、魔力が尽きたものから魔物に姿を変えていったのだ。

その度に兵士たちはついさっきまで仲間だったものを殺し、先を急いだ。しかし、状況は悪くなるばかりだ。すでに兵士は二人しかおらず騎士もそのほとんどの魔力を使い果たしいつ魔物化してもおか

しくない。そしてその周りがかつて人だったであろう魔物の群が取り囲んでいる。

「くそ！ 転移魔術陣まであと少しなのに・・・」

魔物の群れを挟んで10メートルの距離に目的地はある。しかし、魔力は尽きかけ満身創痕の彼らには10メートルはあまりにも遠かった。

「私が魔術で魔物を吹き飛ばします」

騎士が術式を編み始める。兵士たちは皇女を守り、騎士の魔術を妨害させないために騎士の前で魔物に相對する。

「やめなさい！ 今お前が魔術を使えば魔物化してしまいます！」

皇女の叫びを無視して騎士は魔術を詠唱する。騎士にとって守るべき主のために命をかけることは当然のことであり、その結果自身が魔物に身を落とそうともやるべきことは変わらなかった。

「皇女様。私が魔術を放った瞬間に合わせて魔術陣まで走ってください。前だけを見ていてください、横と後ろは我らが守ります」

魔術を放つ。待ちなさい。皇女がそう言ったような気がした。動くとしらない皇女前に押し出す。二人の兵士が皇女様の腕を引っ張りながら魔術陣内に到達した。私も前に進もうとするが身体感覚がない。身体を見てみると、魔物化が始まっている。ああ、死ぬのか。そんな思いが心に浮かんた。魔術陣は皇女様の魔力を吸い取りもう間もなく起動するだろう。しかし、それよりも魔物たちが魔術陣に到達するほうが速そうだ。ならば自分がすべきことは決まっている。

わずかに残っている気をかき集める。死にかけの私にはほんの少しの気しかないがそれで十分だ。そして私は自爆術式を起動した。

オーガス帝国国境　ゼーナス砦

「なにが起こっている！！」

怒鳴っているのはこの砦の司令官である男だ。

その声に答えられるものはいない。

それは突然始まった。

帝都に定時連絡を入れようとしたときだった。凄まじい魔力の波動が砦を揺るがした。男はすぐさま砦の兵士に厳戒態勢をとるように命令するとともに、帝都に向けて連絡を取ろうとした。しかし、敵国などから侵攻された場合に使われる最優先コードを使用したにもかかわらず、全く連絡が取れない。敵国からの攻撃の可能性がある以上はこの砦の兵力を帝都に向かわせるわけにはいかない。他の砦と連絡を取るうにも先ほどの魔力の波動の影響か魔術による通信ができなくなっている。八方塞がりだ。どうしたものかと悩んでいると

「報告です」

部下の一人がやってきた。

「司令官。緊急脱出陣を使用してマリー皇女と兵士二人がいらつしやいました」

戦慄が走った。緊急脱出陣は帝都陥落のような事態でなければ使わ

れることはないはずだ。それが使われたということは・・・

この日オーガス帝国の帝都を壊滅させた事件において生存者は皇女と二人の兵士だけだった。

そして世界は皇女たちの証言により魔王とでもいうべき存在が生まれたことを知り、長きにわたる戦いの日々が始まるのだった。

崩壊する帝国（後書き）

主人公が登場するのはまだまだ後になります。

召喚される勇者たち（前書き）

勇者登場。

召喚される勇者たち

いい天気だ。空は晴れ渡り、温かい日差しが降り注ぐ。こんな天気の中で昼寝をすることができたら
どんなに気持ちいいだろう。だが私にそんな暇はない。それにこのいい天気もすぐに悪くなるだろう。
戦場ではいつも血の雨が降る。

日本 東京 某所

暑い。ただひたすらに暑い。さんさんと降り注ぐ太陽光は私から容赦なく水分を奪い取っていく。

いくら真面目な私といえどもいつもの鍛錬をサボりたくなる。

目の前で元気に私の祖父と鍛錬する幼馴染の和也を見ていると私と本当に同じ生物なのかと疑問がわいてくる。

「凜、ボーとするな」

祖父に叱られてしまった。いつの間にか二人の鍛錬は終わっていたらしい。ということはこれから私の鍛錬が始まるということだ。逃げ場はないかとボーとする頭で考える。

「おい。大丈夫か？」

何の反応もない私が心配になったのか、和也が声をかけてくる。

「全然大丈夫じゃないよ。暑くて暑くてたまらない。海でも南極でも暑くない所ならどこでもいいから行きたいよ」

心からの声だ。私は暑さに弱い。寒さにならいくらでも耐えることができるが、暑いのはだめだ。

だから私は地球温暖化を防ぐために節電を呼び掛けながら、自分の部屋のエアコンは19度に設定しているくらいだ。だがここにエアコンはない、まさに地獄だ。屋気楼で景色が歪んで見える。

ぐにやぐにやに歪んだ世界がさらに歪んでくる。そんな中和だけが歪まずにこちらに駆けてくる。

ああ、熱中症かなと思いつながら私の意識は暗転した。

シンディック神殿国家 始原神の神殿

勇者を召喚するための魔法陣がまばゆく光った。まさか成功したのでしょうか？正直に言うとな本当に召喚が成功するとは思っていなかった。いくら神々が協力してくださったとしても異世界から物ではなく生物を召喚できるとは思えなかったからだ。しかし、その考えは間違っていたらしい。目の前には二人のヒト（？）が召喚されている。王侯貴族の者でも滅多にいないような金髪碧眼の美しい男の勇者は呆然として気を失っている女の勇者を抱えている。なんと模様になる光景に思わず息を止めて見入ってしまった。そうしているうちに男の勇者がこちらに気づいたようだ。あわてて表情を取り繕いもし成功したときのためにかけておいた翻訳魔法がうまく機能するように神に祈りながら高鳴る胸の鼓動を抑えて、とびきりの笑顔を男に向けて声をかけた。

「はじめまして、勇者様。私はオーガス帝国第二皇女マリー＝オーガスです」

気が付いたら目の前に美少女がいた。

私の額には冷えたタオルが置かれているからおそらく、熱中症で倒れた私の看病をしてくれたのだらう。しかし、私にはこんな美

少女の知り合いはいない。和也のハーレムにもこんな子はいなかったはずだ。まだ働かない頭で状況を把握しようと周りを見渡してみるのが、かなり豪華な内装をした石造りの建物だとしかわからなかった。まるで中世の城のようだ。

「大丈夫ですか？ 柊凜様」

そんなことを考えていた私に向かって美少女さん（仮）が声をかけてきた。この美少女さん（仮）はどうやら私のことを心配してくれているらしい。しかしなぜ、私の名前を知っているのだろうか？

「はじめまして、私はオーガス帝国第二皇女マリー＝オーガスです。起きられたばかりで申し訳ないのですがお話したいことがございます。よろしいでしょうか？」

反射的に頷いてから嫌な予感がしてきた。彼女が言ったオーガス帝国なんて国は知らないし、もちろん皇女を名乗るような知り合いもない。妙にリアルだがこれは夢に違いない。いや、夢であつてください。

存在するとも思っていない神に祈りたくなってくる。だがそんな私の願いは叶わないようだ。

「どうか勇者になってくれませんか？」

そんなぶっ飛んだ問いをマリー皇女からかけられた。思わず固まってしまう。

「ええっと、勇者ですか。私が？」

そうです、と頷かれてしまった。本格的に嫌な予感がしてきた。

「和也様には勇者になることを承諾していただきました」

どういうことだ？そう思っていると、扉が開き見慣れた顔が現れた。

「あつ、無事に目が覚めたみたいだね」

和也は無駄にさわやかな笑顔を浮かべていたがそんなことはどうでもよかった。

「和也、なんでそんなにセンスのない格好してるの？」

和也の笑顔が凍りつく。和也は最高にセンスの悪い妙な模様があしらわれた服を着ていた。

見ていると妙な感じになる模様だ。引き込まれるようにその文様を眺めていると、再起動したらしい

和也から先ほどの質問の答えが返ってきた。和也いわく、

「勇者やることになったからそのための準備らしい」

その時の私は何とも言えない表情をしていたと思う。十七歳になった幼馴染が「勇者になる。」と言ったら普通は病院を紹介すると思うが、なんとというか、納得してしまったのだ。

ああ、和也なら勇者になることくらいやってのけるだろうなど。だが、

「マリーのよると凜にも勇者になってほしいそうだからさ、一緒に勇者やらない？」

私まで勇者に勧誘することはないでしょう？

召喚される勇者たち（後書き）

次話は凜が目覚めるまでの和也視点です。

勇者たちの決意（前書き）

説明回です。大まかな世界観はこんな感じです。

詳しくは設定資料を投稿するのでそちらを見てください。

そちらはまだ説明していない設定も載っているので気を付けてください。

勇者たちの決意

凜の手当てを頼んだ後、マリー皇女の話聞いていた俺は決意に燃えていた。マリー皇女から聞いた話によれば、今この世界は魔王の侵略により大きな危機を迎えているそうだが

パンゲアというそうだが

魔王が生まれた原因はマリー皇女の祖国が行った

魔術実験のせいだという。その実験のせいでマリー皇女の祖国は崩壊し、5億人以上いた人口のうち

無事に避難できたのは500万人以下だという。

絶句するしかない被害だ。

一気に人口を100分の1以下にする存在がいるなんて、俺には想像すらできない。

人類は総力を挙げて魔王の迎撃にあたっているそうだが、迎撃以上のことをする余力がないという。

それを打開するために神々に協力を得て異世界から勇者を召喚するという荒技に出たそうだ。

そんな相手の事情も考えない迷惑行為をするな、と普通は言うところだろう。

しかし、俺にとっては違った。驚くことすら困難な非日常これこそ俺は求めていた。

正義の味方。まさにそのものである勇者という役柄。どんな困難も苦難も乗り越える英雄になる。

そんな夢想が現実になるチャンスだ。

「わかりました。勇者になりましょう」

気づけばマリー皇女の話の途中にも関わらず承諾していた。

彼女は驚いたような顔をした後、溢れんばかりの笑顔になって抱きついてきた。

彼女は真っ赤な顔になって俯いている。抱きついてしばらくして我に返ったようで、

もう5分ほどこの調子だ。これ以上気まずい雰囲気の中には居たくない。

「マリー皇女。凜、いや柊、えーとそれでもわからないか、俺と一緒に召喚された奴のことなんだけど、容体はどうなんだ？」

マリー皇女は耳に手を当てるような仕草をした後、

「隣の部屋で寝かせてあります。暑さに当てられたような症状だそうですね、水を飲ませて、体を冷やせば回復すると思います。それと私のことはマリーと呼んでください。勇者様は神々の祝福を受けた存在です。私などよりよほど地位は上になりますから」

なんかさらっとすごいことを言われた気がする。気のせいかな？

「そろそろ柊凜様でしたか？そちらの方も目が覚めるようですので様子を見に行きましょう。ですがその前にこれに着替えてください」

なんか物凄く趣味の悪い服を渡された。これに着替えないといけな
いのかな？

確かに俺は汗をかいていて少し臭いかもしれないが、この服には着替えたくない。

なんでこんな趣味の悪い模様が付いているのか聞いてみると勇者としてやっていくときに役に立つ魔術を体に付加するためだそうだ。それならしょうがない、と思いつつも、嫌がる気持ちが顔に出ていたのだろう、マリー皇女は申し訳なさそうな顔をしていた。

女の子にそんな顔をさせるものではないな。うん。着替える決心が

ついたので一気に実行しようとして

マリー皇女がまだ目の前にいることに気づいた。

「えーと、恥ずかしいから先に行つててくれない？」

「あつ、ごめんなさい！」

マリー皇女は慌てて隣の部屋に駆けこんでいった。

そんなこんなで俺は幼馴染である柊凜の目の前に居るのだが、かなり不機嫌そうだ。

特に俺と一緒に勇者やらないかと誘った後は眉間にしわまで寄っている。

なぜだろうか？勇者になることは女の子が「将来の夢はお嫁さんになること」と言うくらい一般的なはずだ。どうしたものか。

「凜様私たちの事情を聞いていただけないでしょうか？」

マリー皇女が困ったような顔で聞いてきた。正直、情報も何もない今のままでは判断できない。

「まあしょうがないか。情報がないと判断のしようがないのでどうぞ話してください」

「ありがとうございます。それではお話しいたします」

どうやら話を聞いてもらえるようだ。勇者になっていたただけるように頑張らなくては。

「非常に簡単に今の私たちの状況を説明いたしますと、魔王の侵攻のせいで私たち人類は滅亡の危機にあります。しかも残念なことに今の私たちには魔王の軍勢のすべてを倒すほどの力はありません」

絶望的な状況だ。貴族たちの中にはこのような状況を知らせることなく契約で縛ってしまえというものも多かったが、心から協力するのといいや協力するのではどうしての差が出る。

私たちには心から協力してくれる勇者が必要だ。

「このままでは魔王の侵攻を防ぐだけで精一杯で、長い消耗戦の果てに

私たちは滅ぼされるでしょう。しかし、

そう、しかし、だ。

「あなた方勇者様が魔王さえ倒していただければ、私たちが勝つ可能性が見えてきます」

「なぜだ？魔王を倒したとしても魔王の配下たちの軍勢は残るでしょう？それはどうするの？」

「それはもつともな質問でしょう。しかし、それは心配ありません」「なぜ断言できるの？」

「それは魔王の軍勢がどのようにして生まれているか知っているからです。それを説明しましょう。まず、この世界には魔法や魔術を使う場合に必要な力である魔力があります。

しかし、基本的に魔力は有害で、魔物とは高濃度の魔力にさらされた生き物などが変質したものです。私たち人類であつてもある一定以上の魔力を使うと魔物化してしまいます。

魔物化する場合は基本的に決まった場所の魔力溜まりから発生するか、高い魔力をもつ存在に魔物化させられるかの二通りの場合しかありません。魔王の軍勢は後者にあたり、この場合厄介な問題

が生じます」

「それは何？」

「魔物化する原因と存在の奴隷となることです。もうお分かりのように魔王の軍勢は魔王の魔力によって生まれています。よってそのすべてが、魔王に絶対服従し量産のできる奴隷なのです。」

それによって魔王の軍勢は無尽蔵ともいえる数、たとえこちらが数百万の兵力をつぎ込んだ上で損害比が100対1で全滅するまで戦ったとしてもまだ残る数、の魔物たちを操っています。

しかし魔王さえ倒すことができれば、その時点から新たな軍勢は生み出されなくなり、統制を失った魔王の軍勢を迎撃し続けられ、いずれ勝利が見えてきます」

魔王を倒しただけでは終わらない。しかし、終わらせる目途をつけることができる。

「どうか私たちを助けていただけないでしょうか？いくら余力がないといってもできうる限りのサポートは致しますし、望むならどんな報酬での払います」

「凜、助けてやろうぜ。ここまで頼られて助けられないのは人としてどうかと思うしな？な？」

お前はこんな話を聞かなくても困っている奴がいれば助けるだろう？そして私はお前をこんなにも危険なことに一人で立ち向かわせるつもりはない。ならば答えは決まっているが、

「私たちはちゃんと元の世界に帰ることができるのでしょーうね」

これだけは聞いておかねばならない。最悪こちらの世界で生涯を終えることになるのだ。心構えが必要だ。

「ええ、もちろん帰ることができます。神々に協力してもらおう必要があるので準備に半年から1年ほど時間がかかるかもしれませんが、きちんと召喚された時と同じ時間に体も若返らせて帰すことができます」

「嘘!」「本当です。」

朗報だ。驚くしかないほどの、これでこちらの世界で死なずに魔王を倒せば元の日常に帰ることができる。
これで私の決意も固まった。

「わかったわ。私も勇者として精一杯努力させてもらうわ」

神歴5919年フリートの月26日、魔王との戦いが始まってちょうど八年が経った日、シンディック神殿国家にて二人の勇者が召喚される。

この日から人類は魔王の軍勢に対する最初で最後の大規模な攻勢に向けて動き始めた。

勇者たちの決意（後書き）

お待たせしました。次話でやっと主人公登場です。
ここまでは長いプロローグです。

対魔王戦線（前書き）

遅くなりました。今回から書き方を変えています。ここが読みにくい、誤字があるといったことは遠慮なく書いてください。戦闘描写が難しい。

対魔王戦線

イーリア連合王国 対魔王戦線前線

「そういえば、シンディックのほうで勇者が召喚されたいぜ」

「ああ、聞いてるよ。なんでも絶世の美男と美女が召喚されたいじゃないか」

「だけど、言っちゃ悪いがそんな奴らが魔王に勝てるのかね？魔王にはライフハート団長やギルドのSランク保持者でも勝つのは難しいって言われてるそうじゃないか」

「さあな、勇者様たちの実力は知らないが、なんでも始原神様以外の神々から祝福を受けたそうだからな。元がどんなに弱くても、今じゃ俺たちじゃ手も足も出ないようになってるんじゃないか？」

「七柱！俺が聞いた話じゃ、闇の神と光の神から祝福を受けたと聞いたんだが、まあ、七柱もの神々から祝福を受けたのなら心配する必要はないな。きっとすぐに勇者たちが魔王を倒してくれるさ」

「そうだな、今日は將軍たちも前祝つてことで兵士皆に飲酒許可を出すそうだぜ。めいいっぱい楽しもうや」

といったような噂が兵士たちの間で流れております。ライフハート団長いかがいましょうか？」

報告していた女性士官は恐る恐るといった調子で私に尋ねてきた。

「頭が痛いな。本当に最悪だ。最前線のここで兵士たちに酒宴を許可したばかりか、このような噂まで流れているとなると、今回の防衛戦はかなり厳しいことになるぞ」

ただでさえ熟練兵が減り、新米ばかりだというのに、浮き足立ち二日酔いの兵など肉の盾にもならない。

「私の戦団の様子はどうか？ほかのところと同じで不抜けているか？」

もしそうなら地獄を見せてやらねばなるまい。

「いつ、いえ、いつも通り、いやそれ以上に真剣に鍛錬と任務にあたっております」

「そうか。兵士として最低限の心構えを忘れてはいないようだな。常在戦場。」

この心構えを日常の中でもしとは言わないが、最前線にいるにもかかわらず忘れるようなものは私の戦団には必要ないからな」

それにしても、最悪な状況だ。兵たちの多くがすぐにも勇者がこの戦いを終わらせてくれるものだと思っている。

しかしそんなことはあり得ない。勇者たちがいかに多くの神々の祝福を受け、才気に満ち溢れていたとしても、

この世界での魔術の使い方や魔法の使い方など覚えるしかないことは多い。

これに付け加えて近接戦闘の訓練もすればいかなる天才だったとしても一年はかかるだろう。

仮定に仮定を重ねて勇者たちにすでに近接戦闘の心得もあり、桁外れの記憶力があり一月もすれば魔術と魔法を覚えることができたとしても、

シンディックから魔王の居城までは、魔物にまったく合うことなく馬で行ったとしても二カ月以上かかる。これだけの奇跡が重なっても最低でもあと三カ月は

我々は魔王軍の侵攻をこれ以上後退することも許されない状況の中

で防ぎ続けなければならない。

勇者が召喚されたのが魔王との戦いが始まった八年前だったのならよかったのだが。

ふと目をあげてみると先ほど報告した女性士官が何か言いたそうな目でこちらを見ている。

「どうかしたのか？まだ報告があるなら聞くが？」

「いいえ、なんでもありません。報告は以上です」

「そうか。ならば総司令部に戻ってもらって構わない」

「りよ、了解しました」

ふう、私の前に来る者たちは相変わらすぎこないな。ただ言葉を交わすだけであそこまで緊張されるこちらとしても話にくいのがな。

「兵士たちのあの態度ははどうにかならないものかな副団長」

「難しいと思いますよ。団長はたださえ怖い顔をしているのに、不機嫌になると見ただけで『あつ死んだな』と思うほどに怖い顔になりますから」

我らが副団長は容赦がない。顔つきを変えることはできなくもないが、それをやると私を私だと判断できるものが魔力計で魔力の波長をはかるくらいしかなくなってしまう。

いちいち確認するのに魔力計を持って来るのも面倒だ。

「生まれもった顔に文句をつけられても困る。うちの家系の男は代々こんな顔だ。女に生まれたならばまだましな顔になっただろうが、性別は選べん」

「女の団長というものは想像もできませんが、軽んじられるよりは怖がられたほうがまだいいでしょう。それよりもなんでそんなに不

機嫌なんです？団長がそこまで不機嫌になるということはまた何か無理難題でも押しつけられましたか？」

「よくわかったな」

「わかりますとも。もう二年も副団長をしているのですから。団長が不機嫌になる時はいつもとびっきりの厄介事が起きた時か、王都のほうから手紙が来たときだけです」

そこまでばれているとは、やはり副団長をやっているだけあつてかなりの洞察力だ。まあ今回は私としても珍しいくらい不機嫌だからそこらのスライムにも私の機嫌が悪いことはわかるだろう。総司令部の馬鹿どもは何を考えているのか。ふざけている。

「副団長にも関係のある、というか次の軍議の際に事後報告がされるだろうからすぐに皆も知ることになるが、Sランクのギルド員のリア・エスカティアと魔術教団総帥オービス・カルド・ネが前線を離れることとなった」

やはり、いつも無表情な副団長でも呆然となるか。

「正気ですか！！あの二人が同時に前線を離れるなんて！戦線が崩壊しますよ！」

「私に言われても困る。私が総司令部に居たら絶対に反対したに違いないが、私がこれを知ったのは今日の朝のことだ。昨日私が前線に視察に行っていたときに決められたらしい。私がいたら反対されるのがわかりきっていたからだろうな」

「当然です。あの二人の戦闘力と指揮能力がなくては絶対に魔王軍の攻勢に耐えきれません」

「総司令部の馬鹿どもはそう思っていない。五十万を超える兵力があれば十分にこの戦線を支えきれると思っている」

実際には無理だろう。八年前ならともかく、今は優秀な指揮官の数が兵士の数に対して少なすぎる。いくら兵士がいたとしても、指揮する者が無能では何の役にも立たない。

「あり得ません。あの馬鹿たちは馬鹿ばかりやると思っていました。がこれは限度を超えています。我らが女王に報告して指揮官たちを更迭するように働きかけてもらいましょう」

「それは無理だ」

それができれば一番よかったのだが、

「他の国が賛成している。一時的にこの戦線が弱体化したとしても、勇者が戦力となれば挽回できると考えている。反対しているのは我が国だけでオーライル学術都市とライガート商業都市も賛成に回っている。多数決ではどうやってもこちらが負ける。それに自国の戦線だから鼻息していると騒ぎ立てる我が国の貴族たちが多くてな」

私の言葉の意味を理解した副団長は怒りに顔を真っ赤にした。

「まだ、あの馬鹿どもは十年以上前の遺恨を引きずっているのですか！！」

「そのようだな、我らがイーリア連合国は内戦が絶えない国だったからな。『世界の半分の争いはイーリアで生まれる』と言われていたからな。私も十年前に統一されるまで従軍していたからなよく知っている。飢えた同盟国の民に食料を与えても、『貴様らから施しを受けるくらいなら飢え死にしたほうがましだ。』と言われなかったことはないからな。国民一人一人まで染み込んでいるんだよ『同盟国は敵だ』と貴族どもはそれを利用している」

まったく笑えない。この前線近くでこそ国民たちは過去の遺恨を忘れたようにふるまっているが、実際は忘れてなどいない。だから、少しでも安全な場所になると途端に批判し始める。

内憂外患とはこのことだ。それでも、負けるわけにはいかない。負ければ滅びる、殺したほうが世のためになるような奴らも死ぬだろうが、守るべき無力な国民も死ぬ。

この国に忠誠を誓ったライフハート家の当主として、己の持つすべてを賭けてでも勝たなければならない。

「副団長は他国からの移住者だからこの辺のことは分かり辛いかもしれないが、あと何世代か世代が交代しないことには解決しないだろう。話が逸れたな。そういう訳で二人が前線からいなくなるのは確定事項だ。というより既にシンディックに着いているだろう。代わりにBランクのギルド員二十名が補充されるが指揮ができるような地位のものは者はいないようだったからな。今頃は総司令部で誰が二人の率いていた部隊の指揮をとるか指揮権を無駄に争っているだろう。あの二人の部隊は優秀だからな」

「……………団長何か隠していますね？総司令部が指揮権を巡って無駄に争っているといったあたりから、機嫌がよさそうにしていますよ」

……………本当にすごい洞察力だな。読もうとするだけ無駄と言われた私の表情を読むとは。

「よくわかったな。実は二人から自分たちがいない間部隊の指揮を頼むと委任状を預かっているからな。これを出せば二人の部隊は私の指揮下に入る」

「それならなぜさつさと委任状を総司令部で見せないのですか？そうすれば、無駄な言い争いもなくなり少しですが次の侵攻に対する迎撃作戦について話し合う時間ができます」

「それはないな。総司令部の馬鹿どもは時間さえあれば魔物を倒す

準備ではなく、味方を蹴落とす準備をする奴らだ。そんな奴らの時間は削れてしまったほうがいい」

信用できない味方は、優秀な敵よりたちが悪い。敵は殺せばいいが味方は理由がなければ殺せないからな。

「まあさすがに、そろそろ総司令部に行ったほうがいいだろうな。これ以上放っておくと二つの部隊の指揮官が決まってしまうかもしれないからな。一度決まったものを覆されたときの貴族の怒りはすごいからな」

「お気をつけて」

「私こそが……」 「いや、オーリアの伯爵である私こそが……」 「いや、オーガスの生き残りである我らが……」

まだ指揮官は決まっていないようだ。しかし、よくこんなことで五時間も言い争ってられるな。これも最終意志決定を多数決にした弊害だな。

軍のような組織には強力な権限を持ったトップが必要だ。そうでなければ迅速な行動ができずすぐに敗れることとなる。敵はこちらの事情など気にしてくれないからな。まあいいさつさと終わらせるか。

「皆様、よろしいでしょうか？」

「なんだ？ イーリアの若造が今頃来て何の用だ？」

「そうだ、重要な軍議を何だと思っている」

はあ、この馬鹿どもをの相手をするのも面倒だ。

「リリア様とオービス様の部隊についてですが、私が二人から委任状を預かっておりまして、それによるとお二人の代わりの指揮官は私が勤めるようにということです。異論はありでしょうか？」

一瞬だけ総司令部に沈黙が落ちた。

「ふざけるな！」「何を言っている！」「その委任状とやらを見せる！」

口々にこちらを批判しまつたく收拾がつかない。委任状をみせてさっさと終わらせよう。

「こちらが委任状となります。この通りお二人の署名がなされており、魔術による誓約印まで押されております。異論はありませんね？」

さすがに誓約印まではいった委任状を見せられては黙るしかないようだ。忌々しげな眼でこちらを見ているものが多いが今さらだ。

私は他国の上層部から嫌われているからな。

「さてこれで一つの懸案事項は片付きました。次の議題に移つてはいかがでしょうか？」

「……………そうだな。それでは次の議題に移る。次の議題は勇者たちが魔王を討伐するまでの方針についてだ。何か意見のあるものは？」

議長となっているオーラリアのマステル侯爵がまわりを見回すと我先にと貴族たちが発言しだす。

意見の大半が、勇者の召喚された今こそ反転攻勢に出るべきである、といったものだ。正直に言って正気の沙汰ではない。

魔王の支配領域である魔国内は魔王の意志に汚染された高濃度の魔力が吹き荒れており、普通の兵士では少しでも気を抜いた時点で魔物化が始まってしまう。

そうなると高濃度の魔力にさらされても魔物化しない実力者を少数精鋭で送り込むしかないが、それでは数の暴力に押しつぶされてしまう。

魔国内は魔物の密度が尋常ではない。気がつけば数万の魔物に囲まれていることなどざらにある。

そのことを説明したのだがまるで聞く耳を持たない。私の抵抗も空しく魔国内に侵攻するという作戦が議決されてしまった。

「それでは一ヶ月後に魔国侵攻作戦を行う。各自それに備えて準備をするように。解散」

せめてもの抵抗として食料の準備などを理由に一カ月の準備期間をおいた。これで、一か月以内に魔物たちの侵攻が起きればさすがにこちらからの侵攻作戦は見送られるだろう。

一ヶ月後

そんな考えは途方もなく甘いものであったということを今思い知っている。魔王軍が攻めてきたら侵攻作戦は見送られると予想していたし、実際に魔王軍が侵攻してきた結果侵攻作戦は中止となった。しかし、その侵攻の規模が問題だった。魔王軍はあの軍議の日から一カ月以上にわたって侵攻し続けている。

一日も休むことなくずっとだ。その数にものを言わせて波状攻撃をかけ続けてくる。

最初ころは、普段より数の少ない魔物たちが一日に一度ほど断続的

に攻撃してくるだけだったが、徐々に数が増え一日に攻撃してくる回数が増え続けた。

一ヶ月たった今では一日に四回、十万近くの魔物たちが攻撃を仕掛けてくる。兵士たちの士気は落ち、疲労によってその動きは精彩を欠いている。

王都からの救援が何度か来たが焼け石に水だ。私たちにいま必要なのは数ではなく質だ。

リリカとオービスがいればと何度目になるかもわからない考えが頭をよぎる。

「敵は中央に戦力を集中しています。予備兵力もつき込んでなんとか戦線を維持していますが、いつ戦線が崩壊してもおかしくない状況です。総司令部が危機にさらされています。私たちの指揮下にある二個中隊を中央の防衛に回すべきではないでしょうか？」

「却下する。その二個中隊は左翼と中央の連携のためにはどうしても必要だ。それを中央の防衛に回せば確かに総司令部は守れるかもしれないが戦線そのものが崩壊する」

「しかし、総司令部が攻撃を受ければどの道戦線が崩壊するのではないのでしょうか？」

「問題ない。多少士気が乱れるかもしれないが、指揮権継承順位に従って私が指揮を執る。防衛作戦の中には総司令部が壊滅した場合を想定したものもある」

後で指揮権欲しさに総司令部を見殺しにしたといわれるかもしれないが、中央にある総司令部が壊滅してもその後ろにはまだ後詰の防衛部隊がいる。

しかし、左翼を突破されると背後の街までほぼ障害がない。だから総司令部には犠牲になってもらう。

「つつ、私たちの指揮下の二個中隊が勝手に中央の防衛に向かって

います！」

「元の配置に戻るよう命令しろ」

「命令を拒否されました！総司令部から直接命令が出ているようです」

すでに二千近くの魔物が二個中隊が抜けたことによって生じた間隙にむかって侵攻を始めており、二個中隊が戻るのは間に合わないだろう。

「副団長。今から君が指揮を執れ。私は前線に出る」

私の言葉を聞いた副団長が啞然とした表情を見せる。確かに急かもしれないがやってもらうしかない。

「異論は認めない。今からは君が指揮を執れ。私の全権を委任する。どうせ念話の使えない私は前線に居ながら指揮はとれない」

副団長に背を向け、前線に向かって走り出す。久々の前線だ。腕が鈍っていないといいのだが。

そんな事を思いながら身体強化魔術を使い凄まじい速さで走る。このペースなら魔王軍が到着すると同時にこちらにも到着できるだろう。

「ライフハート団長、後二時間ほどで援軍が到着するそうです。援軍の中にはリリカ様とオービス様、そして勇者たちがいるそうです」

そうか、それならどうにかなるな。勇者たちがどれだけ使えるかは知らないがリリカとオービスは心強い戦力だ。

もう魔物の集団が見えてきた後二十秒ほどで接敵だ。剣を抜き戦闘準備を整える。心の中でカウントする。

…… 3 / 2 / 1 / 0 ! ! !

今まさにこちらの防衛戦に攻撃を仕掛けようとしていた魔物の集団に横から突っ込んだ。スピードを落とさずにすれ違いざまに魔物たちを切り捨てる。

血飛沫が舞う。それを目くらましにさらに魔物たちに接近し切り捨てる。

しかし魔物たちは動揺した様子も見せず。すぐにこちらを包囲するような動きを見せる。かなり統制された動きだ。指揮官となる個体がいる。

さすがに包囲されるとまずい、手ごわいサイクロプスを避けホブゴブリンを切り捨て魔物たちの輪から脱出する。

さらに身体強化魔術により瞬間的に脚力を強化する。魔物たちには私が消えたように見えただろう。瞬間的に音速を超えたことにより衝撃波が発生し魔物たちをなぎ倒す。

空気との摩擦で多少皮膚が焦げたが問題はない。この程度なら回復魔術ですぐに回復する。

私を見失っている魔物を後ろから切り伏せる。そしてまた身体強化魔術で瞬間的に脚力を強化し敵の視界から逃れる。

それを繰り返し魔物の数を減らしていくがいつこうに減った気がしない。やはり物量は力だと感じる。

まあいい、全滅するまでやるだけだ。

「味方の士気が低いわ」

私が団長から指揮権を引き継いですでに四十分ほどしか経っていないが戦況は悪化するばかりだった。

ライフハート団長が二個中隊の穴を埋めんばかりの活躍をしているが、所詮一人だ。団長は広域殲滅魔術が使えないため、

必然的に一匹ずつ殺すしていくしかなく殲滅に時間がかかる。そうして殲滅している間にも、魔王軍は数に任せて広範囲にわたって侵攻してくる。

総司令部は自分たちを守るために各所から戦力を引き抜いたが結局突破され壊滅してしまった。そのせいで戦力の再配置にも手間取っている。

「エリス副団長。さらに魔物の増援が来ました。数は千二百が三つ。ライフハート団長が戦っているところに一、残り二つは戦線が崩壊しかけている中央です」

どうしたらいいの。もうどこにも自由になる戦力はないわ。このまま突破されるのを見ているしかないの？

絶望が身を包む。どうしようもない。どこを動かしても戦線が崩壊する。それほどまでにぎりぎりなのだ。

「困っているようじゃな」

聞こえるはずのない声が聞こえた。

「それにしても凄いわね。これだけの数の魔物を相手にしてさらに総司令部が壊滅したにもかかわらず。ここまで組織的に戦い続けているなんて、さすがレオンの部下といったところね」

幻聴でも空耳でもない。これは現実に聞こえている声だ。オープンチャンネルで念話が放たれる。

「魔術教団総帥オービスⅡカルドーン」「『神剣』リリカⅡエスカティア」「勇者柊凜」「同じく和也Ⅱレイナード」

「『援軍として参戦するー！』『ー』『ー』」

そこからは一方的だった。先ほどまでの苦境が嘘のようだ。オービス様の放つ広域殲滅魔術が数千の単位で魔物たちを消し飛ばし、討ちもらしたもののや強力な魔術耐性のあるものはリリカ様によって切り捨てられる。

二人の勇者たちも初めて戦場に立つ者とは思えない動きで魔術を放ち剣で切り裂く。

そんな勇者たちの活躍を見た兵士たちは奮い立ち、最後の気力と力を振りしぼって攻勢に出る。

戦線は見る間に建て直され、こちらの圧倒的優位に傾く、そこに

「援軍の本隊が到着しました！その数二万」

駄目押しが来た。これでこの場の勝ちが決まった。

あれからどれほど時間が経ったかは分からない。ただひたすら魔物を殺して殺して殺し尽くした。それでもいつこくに数は減らない。さすがにおかしいと思ったが、原因がわからない。確実に四千以上の魔物を殺したはずだ。それでも魔物の群れが途切れることがない、敵の援軍は千二百だったはずだ。わからない。

肉体的な疲労は皆無に近いが、理由もわからず敵が無尽蔵に沸き出て終わりが見えないことは精神的に辛いものがある。

サイクロプスが正面から殴りかかってくる。受け止めることもできるがそうすると動きが止まる。そうなれば数に任せた袋だたきにあってしまう。

だからかわしすれ違いざまに首を刎ねる。オークメイジが魔術を詠唱している。距離が遠い、詠唱を阻止することはできないだろう。

だから他の魔物たちを盾にするように立ちまわり、射線を塞ぎ同士討ちを誘う。

頭の中を数百の思考が同時に流れそのなかから最適なものを選び出し実行する。

これができなければ回復魔術と身体強化魔法しか使えない私が一対多の状況で生き残ることはできない。

なにせ魔術障壁さえ張ることができないのだ。防具も動きを妨げないために籠手と胸当てだけという最小限にしているのも考えると防御力はないに等しい。

一撃あたれば終わる。掠る程度ならいい、しかし、直撃すれば人間である私では即死するだろう。

「魔術教団総帥オービス」カルドーネ」「神剣」リリカ」エスカティア」「勇者柊凜」「同じく和也」レイナード」

「……援軍として参戦する……」

背筋に悪寒が走る。形振りかまわず悪寒から逃れるように飛び退く。まばゆい閃光が目を焼いた。

閃光によって目が見えないが気配をたどって近くの魔物たちを掃討する。

やっと戻ってきた視界に飛び込んだのは赤熱し沸騰する大地だ。あたり一面が真っ赤に染まって生き物の焼けるにおいが立ち込める。何が起ったかは分かっている。あのオービスの糞爺が私を巻き込むのもかまわず広域殲滅魔術を使ったのだ。

しかし、これでこの戦いは我らの勝利で終わることは決定した。早く本陣に戻って、仕事にかからねばならない。

だがその前にあの糞爺を殴り飛ばす。

神歴5919年マケミアの月45日

イーリア連合王国の対魔王戦線にて一カ月に及ぶ防衛戦が終結する。魔物の数に任せた構成により劣勢に立たされていた対魔王連合軍は勇者たち一行により戦線を立て直すことに成功し、続いて到着した援軍本隊との協力し魔物たちの掃討戦に移行した。

勇者たちはその勇名を高め、多くの兵士たちに希望を抱かせた。

しかし、対魔王連合軍は勝利こそしたものの戦力の四割が死亡、残り六割も怪我を負っていない者はいなかった。

勇者参戦（前書き）

お待たせいたしました。今回は勇者たちが前線に来るまでです。

勇者参戦

シンディック神殿国家 フリートの月41日

召喚されたあの日から色々あった。シンディックの神官長（最高権力者）に面会したり、魔術で基礎知識を頭に叩き込まれてその反動で一日寝込んだり、神々が実在することを知ったり、

その神々から能力を強化する祝福を受けたりなど本当に色々あった。そして今日からは魔王を倒すために戦闘訓練を行うそうだ。

私としてはやつとかという思いだ。和也はそのことを聞いた時からやたらとテンションが高くなり鬱陶しいくらいだ。

それにしても、私たちの講師をしてくれる人たちが来るのをこの部屋で待っているのだがいつになったら来るのだろうか？

この世界には私たちの世界ほど正確な時計はないが、すでに相手方が来ると伝えられた時間から一時間以上たっている。

私の隣で和也は落ち着きなくそわそわしているし、マリーはいらいらしていて、勇者様をこんなに待たせるなんて、とぶつぶつ呟いている。

「待たせたようじゃの」「待たせた様ね」

心臓が止まるかと思った。ついさっきまで誰もいなかった目の前に突然老人と妙齢の女性が現れた。周りにいたメイドたちも固まってしまうている。老人のほうはローブに杖とモノクルといういかにも魔法使いという格好だ。

女性のほうは青い髪に緑の瞳の美人だ。

「なんて非常識な！仮にもここはシンディックの中枢なのですよ！そこに転移魔術で転移してくるなど」

二人が当然現れた原因は転移魔術らしい。まあマリーが言っていることもわかる国家の中枢に転移魔術で乗り込んできたらもうそれは宣戦布告と同じだ。

転移魔術を行使した側にその意思がなくても、「お前たちなどいつでも殺せる」と言っているのと同じなのだから。

「さすがに僕でもシンディック以外でこのようなことはせんよ。だが急いでいたのでは」

「一時間以上遅れておいて何を言っていますか！」

「そうは言われても、わしらが勇者の師匠役をやると聞かされたのはほんの半日前じゃからのやつとのことで最低限の引き継だけしてきたからの。帰った時が怖いわい。レオンの坊主に殺されるかもしれない」

ははははっ、ご老人が笑う。笑い事ではないと思うのだが、どうにも話が進まないようだ。

「えーと、すいませんがどちらさまで？私はこのたび勇者として召喚された柊凜です。ほら和也も」「勇者の和也」レイナードです」

「おお、すまんの。僕はオービス」カルドーネ、世界最高の魔術師にして魔術教団の総帥じゃ」

「私はリリカ」エスカティアよ。ギルドのSランク保持者で世界で二番目の剣士よ」

二番目って、お爺さんが一番なんだから、女の人が一番だと思っていたのになんか肩透かしだったわね。

まあ異世界から呼び出されただけの私たちには十分すぎる人なんだと思うけど。

「それじゃあさっそく始めるわよ。私が担当するのは近接戦闘と魔術の組み合わせた戦闘方法についてよ。二人共元の世界で剣術をやっていたらしいから今日はその腕前を見るわ」

「僕は今日は特にないの。じゃが明日からは魔術についての講義を朝からやるぞい」

「「分かりました。」」

「それでは鍛錬場に移動するわよ」

リリアさんはさっさと背を向けて鍛錬場に向かっていった。慌てて着いていく。

「ずいぶん急いでますけど何かあるんですか？」

「うーん、なにかあるわけじゃないんだけどね。やっぱり異世界から召喚されたあなたたちには分からないか」

「何がですか？勝手に納得されても困ります。」

ちよつと声に苛立ちが出てしまった。リリアさんは困ったような顔になっている。

「それはじゃな、私たちの置かれている状況についての認識じゃ」

「認識？魔王に攻められていて滅亡の危機なんじゃないんですか？」

和也がそう言ったが、私の認識もそうだ。何か間違っているのだろうか。

「きっとシンディックから出たことがないからね、この認識の齟齬は」

「そうじゃろつな」

「ちよつと、勝手に納得されても困ります」

シンディックから出たことがないことがそんなにも問題なのだろうか？

「いや、お主たちが悪いわけではないんじゃないよ。シンディックに住んでいるものならばその多くがしておる勘違いじゃからの」

「だからこそ厄介なのよ」

「それもそうじゃが、これについては言うだけではわからんからの。時期を見て実感してもらうかの」

二人の相談が終わったようだ。結局何のことは教えてもらえなかった。

絶望的だった。勝ち目なんて万に一つもありえない。いや何億回繰り返しても私が勝つことなんてできないだろう。

そう思うしかない程の圧倒的な実力差。逃げる意味はない、相手のほうが速いから。打ちかかる意味もない、その圧倒的な技術の差で簡単に受けられるから。

どうしようもないけれど。勝ち目なんて全くないけれど、私は私のできる全力で切りかかった。

完璧な太刀筋、私のすべてをかけた最高の一太刀は予感通りあっけなく受け流されて体制が崩れる。

目の前にまで相手の剣が迫っている。避けることもできず思わず目をつぶってしまった。だがいつまでたっても痛みはやってこない。

「なかなかだな。正直に言う基礎を表面的に教えるだけでも最低で半年かかると思っていたからな。これなら随分と手間が省けそうだな。だが、最後に目をつぶったのはただだけない。どんな状況だろ

うと見ることをやめては勝てるものも勝てなくなる」

リリアさんはどこか嬉しそうにしている。正直ここまで厳しくされるとは思っていなかった。こちらの世界にもあった刀を使って鍛錬しているが、死にそうだ。

実際に一緒に鍛錬をしていた和也はリリカさんの攻撃を受け損ねて気絶して医務室に運ばれていった。

練習内容は朝早くからランニングと素振りをした後、朝食をとりその後オービスさんから魔術を習い昼食をとり、午後は日が暮れるまで剣と魔術の鍛錬をしている。

今やっていたのは鍛錬の最後にする試合だ。まったく勝てる気がしない。リリカさんたちは「当たり前だ。」と言うけれど、仮にも魔王を倒しに行くのだ、

言つては悪いが世界第二位の剣士であるリリカさんを倒せないようでは、魔王に勝てるか不安になる。ここまで強いリリカさんでも勝てない魔王を倒さなければならぬのだ。

「だけど気にする必要はないわ。あなたたちは驚くほどのスピードで実力をつけているから、このまま行けばすぐにこの世界でもトップクラスの實力を持つことができるわ」

「そうじゃの神々から聞いた後も半信半疑じゃったが、高位世界から召喚された者の能力につく補正はすごい、凄すぎるくらいじゃ。それに加えて始原神を除く神々からの祝福もある。これだけあれば生身で魔物に突っ込んでいっても勝てるじゃろうと思えるほどじゃ」

私にそんな実感はないがそんなに凄いのだろうか？正直比べる対象がリリカさんとオービスさん位しかないのでよくわからない。

この二人は私なんかよりよっぽどすごい、特にリリカさんはその歳からは考えられないほどの剣の腕を持っている。

「そうなんですか？私にはよくわかりませんが、私たちが魔王を倒すよりお二人がやったほうがよいのではないのでしょうか？」

「無理だな」「無理じゃな」

即答された。だけどそうになると二人より弱い私たちがどうやって魔王を倒すというのだろう。

「その理由についてはまず、魔王についてだがこいつはいるのはわかっているがどんな奴かは分からない。見たことがあるのはマリー皇女と生き残りの兵士だけだからな情報が少なすぎる。スライム並みに弱いかもしれないし、逆にドラゴンより強いかもしれない。まあ保有している魔力の量からして最低でもドラゴンより強いと思うが、

」

「そんなのと戦わされるんですか、具体的にはわかりませんがその口調だとドラゴンって相当強いんでしょう？」

「成体のドラゴンが暴れれば国が消えるといわれているわね。滅多にないけど」

後で取ってつけたように言われても信用できませんよ。というより国を消すような化け物より強い魔王にどうやって勝てと？

「大丈夫よ。ものによるけどドラゴンは私一人でも倒せるようなものだから、あなたたちもそのうち倒せるようになるわ」

えーと、実感なかったけれど私たちに稽古つけていたリリアさんはやはりすごい人だったらしい。なんといっても国を消すような化け物を一人で倒すことができるのだ。

だけどそうなるとますますリリカさんたちが魔王を倒しに行かない理由がわからない。

「でもそれ以上に厄介なのは、無数にいる魔王の配下の魔物たちよ。一匹一匹は弱いけれど数が揃うととてつもなく厄介よ。いくら私たちが個人として超絶的な実力を誇っているからといっていつまでも戦い続けることができるわけじゃないわ。魔術を使って無理をすれば一週間くらいはどうかかるだろうけれど魔物たちがその数に任せて人海戦術をとつたらいつかは負けるわ。というより魔王の領域である魔国に入る以上常に膨大な数の魔物に囲まれていると考えた方がいいわね」

「それは私たちも一緒なんじゃないでしょうか？」

「それは問題ないわ。あなたたち勇者が魔国に入るのに合わせて、対魔王軍全軍を挙げた大攻勢を仕掛けることになっているから。それによって魔王軍のほとんどは私たちのほうに来るはずよ。後あなたちができる限り迅速に魔王を倒してもらえばいいわ。私たちのような実力者は部隊の指揮をしながら大攻勢に参加しないといけないからどうしても対魔王軍を離れられないからね」

やっとわかった、私たちは代用品なんだ。本来ならばリアさんのような実力者がやることだけれど今回はどうしても手が足りない。だからその代わりとして呼ばれたのが私たち勇者ということだ。このパンゲアでリアさんのような実力者をこれ以上探し出したり育てたりするのは非現実的だと判断したから、

確実にリリカさんたち並みの能力を得ることができる高位世界からの召喚者を代わりにしようとしたんだ。

そんなことを考えて、まあどうでもいいか。それが結論だった。

たとえ私たちが誰かの代用品でも、それで人を助けることになるのには変わらないし、

そもそも、私が勇者になるのを承諾した理由は和也を見捨てられなかったからだ。

だから関係ない。

「なんか考え込んでいるところ悪いけれど、今日の鍛錬はこれで終わりよ。さっさと汗流して夕食にしましょう」

リリアさんと夕食をとっているとマリーと和也が連れ立ってやってきた。

「こんばんわ二人とも。和也はもう具合はいいの？」

「もう大丈夫だ。心配掛けて悪かったな」

顔色を見る限り本当のようだ。正直和也が倒れるなんて考えたことがなかったからかなり心配だったのだがどうやら大丈夫のようだ。

「マリーも和也に付添ってくれてありがとう」

「いえいえ、勇者様たちに無理を言っているのはこちらなのですから、これくらいはしないといけませんわ」

「そう言ってもらうと助かるわ」

そんな話をして四人で談笑していると、勢いよく扉が開いた。何事かと振り向いてみるとオービスさんが荒い息を吐きながら駆けこんでくるところだった。

「リリア！イーリアの最前線の様子を知っておるか！」

「そんなに慌ててどうしたの？夕食くらいゆっくりとらせてよね。」

そんな言葉を聞いたオービスさんの顔が真っ赤に染まる。今にも怒鳴りそうな様子だったがそこはとしの甲か我慢したようだ。

「いいから何か知っておるか！」

それでも叫ぶような声だったが。

「私は何も知らないわ。そんなに慌てて本当にどうしたの？」

「儂としたことがシンディックにいたことで毒された様じゃの、今が戦時じゃということを忘れておった」

その言葉を聞いてリリアさんの様子が変わる。

「前線で何かあったの？」

オービスさんは本当に忌々しそうにうなずいた。

「イーリア連合王国の対魔王戦線が一カ月にわたり攻撃にさらされているそうじゃ」

「何をそんなに驚いているの？今までもそんなものだったでしょう？」

「違うのじゃ。今までは断続的に一カ月にわたり攻撃を仕掛けてくことはあったが、今回は一カ月休むことなく毎日攻撃を仕掛けてきている。しかも回数を重ねることに一日に襲撃してくる回数と規模が拡大しておるようじゃ」

「そんな馬鹿な！私にはそんな報告は一切なかったわ」

リリアさんは愕然としている。私たちが聞いた限り状況は最悪のようだ。一カ月も休みなく戦い続けることなんて誰にもできない。

戦線は崩壊しているか崩壊寸前だろう。

「どこかの馬鹿どもが儂達に情報がいかないように小細工を弄しておったようじゃからの。そいつによると勇者様の鍛錬に全力を注いでもらうためだそうだがいくら勇者を鍛えても戦線が崩壊してはどうにもならぬというのに」

「まったくね。それでいつ出発するの？」

「今からじゃ」

「分かったわ」

目の前で勝手に話が進んでいく、しかし話を聞く限り二人が私たちを鍛えるのはこれで終わりのようだ。

「ちょっと待ってください。勇者様二人の鍛錬はどうするおつもりですか？まさかこのまま放っておくということはありませんよね？」

そんなマリリーの言葉を聞いた二人は驚いたような顔をした後当然のように言った。

「忘れてなんておらんぞ。二人には一緒に最前線に向かってもらう、基礎は教えたからの、あとは実戦で身につけるだけじゃ。今から一時間後に転移魔術でイーリアの王都に転移するからの、それまでに準備を整えてくるんじゃ」

それだけ言って二人は部屋を出て行ってしまった。残っているのは啞然とした私たちだけだ。

その中からマリリーがいち早く我に返った。

「凜、和也、準備にかかりましょう。二人とも勝手がわからないと思いますので最低限これだけは持っていきたいものなどがあつたそれだけ言ってくださいと助かりますわ。後の準備は私がしますので」
「……………ああ、分かった。それじゃあお願いするよ」
「ええ、悪いわね。お願いするわ」

私たちのそんな返事にマリリーは頷いてさっさと部屋を出て行った。取り残された私たち二人。

「さて、食事の続きでもしましょうか。私たちにできることなんてほとんどないと思うし」

「いやそれでも何か手伝えることがないか聞きに行くべきだろう」

和也はそんなことを言っているが、そんなことを言っているうちにも腹の虫が鳴っている。

私も我慢できないほど空腹だ。朝から晩まで鍛錬ばかりやっているからちゃんと食事を摂らないととてもじゃないがまともに動くことすらきつくなる。

だからさつさと夕食をかきこむ。行儀が悪いがそんなことも言ってもらえない。そんな私を見て和也も空腹に耐えられなかったようがかきこむように食べ始めた。

それから一時間後私たちはイーリア連合王国の王都に立っていた。

オービスさんの転移魔術で移動したのだが本当に一瞬だった。普通なら一カ月以上かかる道のりを一瞬で移動した。

といってもオービスさんも五人は同時に転移することのできるぎりぎり人数のようであり疲れた顔をしている。

マリーによると転移魔術は亜神や超越者が使うのが基本の超高位特殊魔術らしい、

オービスさんが使えるのは先祖の神獣に先祖帰りを起こしているからでそうじゃなかったら使えないだろう、とのことだった。

今私たちは王宮に向かっている。前線の詳しい状況と私たち勇者を紹介するからだという。

そう言えば、此処の国の人はシンディックにいたとき誰にも会っていない。そのことを疑問に思ってたマリーに聞いてみたところ、

この国は人材がほとんどいないそう。一応貴族はあるそうだが、もともと内戦ばかりしてきたから統一された今でも隙あらば元他国

の人間を陥れようとするらしい。

この国で信用できるのはエスティナ・イーリア女王と宰相、貴族ではライフハート家とレインハート家だけということだ。しかしライフハート家の当主は前線に出ていて来ることができず。

レインハート家は当主が病に伏せた影響でそれどころではないそう。それで結局イーリア連合王国だけはシンディックに人を送ってこなかったらしい。

それにしてもそこまで腐敗した貴族をどうにかしようとは思わないのだろうか？

と聞いてみたところ。貴族たちは国民にはよき支配者でいるよう。しかし、権力争いになるとそれを一変させるだけで。

だから国家反逆罪とかを犯してくれない限り処断することもできないそう。

「お二人は権力争いに利用するのにぴったりですからかなり熱烈なアプローチを受けることになると思いますので言質を与えるような言動は慎んでくださいね」

目の前に見えてきた王宮がパンデモニウムに見えてきた。嫌だなー。

勇者を歓迎するパーティーらしいものは本当に貴族たちが鬱陶しかった。なににあいつら、お世辞とおべっかばかり言ってこちらに気に入られようとしているのが丸わかりな上に他の貴族を貶すことしか言わない。

しかし、エスティナ女王は何と云うか威厳があつた思わず跪いてしまいそうだった。そんな溢れんばかりのカリスマを持つ妙齡の美女だった。

あれで子供がいるとかとても信じられない。そんなことを思いなが

らパーティー会場を見まわしていると絶世の美少女がいた。

腰まで伸びきらめく金髪と深く澄んだ青い瞳、肌は雪のように白く出るところは出て引つ込むところは引つ込んでいる理想のスタイルまさに非の打ちどころがない。

そんな美少女の隣で和也が貴族と言いつ争っているのが見えた。かなり激しく言い争っているようで、横で美少女がおろおろしているのに全く気づいていない。

あれが和也の新しいハーレム要員かなと思いつながら美少女に近寄っていく。

「いくら勇者だからといつてもあなたに関係のある話ではない！引つ込んでいてもらおうか！」

「あんたが嫌がる女の子に無理やり迫るような奴じゃなかったらそうしてるよ！」

貴族が悪い。こんな美少女に嫌がることをするなんて最低なやつね。そんなことを思っていると言貴族と勇者が決闘することになったらしく中庭のほうに向かっていく。

女王のほうを見てみると身が虫を噛み潰した様な顔になっていた。まあ勇者と自分の国の貴族が決闘なんかしたらそうなるだろう。続々と見物のために人が集まっている。

「和也」レイナード。勇者だ」「カビウス」レインハートだ」

レインハートつてマリーがこの国でも数少ない信用できる貴族だと言つていたところだ。それがアレ？

正直アレを信用するくらいなら詐欺師のほう信用できる。

その時横から凄まじい魔力の波動を感じた。思わず飛び退いてから横を見てみると、見ると石になってしまいそうなの恐怖を秘めた笑顔を浮かべた先ほどの美少女が立っていた。

さっきまであった人ばかりがなくなっている。和也とカビウスという貴族も美少女のほうを見て固まっている。

「よくも人の家の家名を当然のように騙ってくれましたわね。その対価を払う用意はいいでしょうか？」

背筋が凍るような声だ。その見た目とあいあまって怖さが尋常じゃない。そんな中答えを返せたカビウス君はちよつとだけ尊敬に値する。

「家名を騙った？そんなことはないですよ。これから僕とあなたは結婚するのですからにも間違っていないです」

だがそれ以上に馬鹿だ。どうしようもないほどの。

「なるほど死にたいようですわね。ならば殺して差し上げましょう」

膨大な魔力が収束していく、そして何の詠唱もなしに魔術が放たれた。

閃光が目を焼く。凄まじい轟音が響きわたる。

「そこまでじゃな。セリカ」レインハート。さすがにお前に全力で魔術を使われたら王宮の結界に影響が大きすぎる」

いつ間にか二人の間に割り込んでいた女王によって美少女、セリカ「レインハートというらしい、の魔術は防がれたようだ。

その後ろでは呆然としたように座り込んでいたカビウスが立ち上がり勝ち誇ったようなかをして何か言おうとしたがそれが口から出ることはなかった。

女王の手に持った剣がカビウスの胸を貫いている。どう見ても致命

傷だ。本人は何が起こったかわからないような顔をしている。

私にもわからない。なぜ女王がいきなりそんな暴挙に移ったのか。

「カビウス貴様は貴族にふさわしくない。プライベートな場でならまだよかった。しかしここは私が主催する宴だ、そこで主賓である勇者に決闘を挑んだだけではなく、私が最も信頼する貴族の一つであるレインハートの名前を騙るなど万死に値する」

そういつた瞬間カビウスの体が燃え上がった。そしてその後には地面に焦げた跡すら無かった。パーティー会場は静まり返っている。

「さてこんなことが起こった後では宴を続けるわけにもいかん。これにて宴は終了する」

女王はそう宣言した後こちらを振り向いた。

「勇者のお二人にはすまないなこんな不愉快な思いをさせて、後で詫びの品を何か届けさせよう」

そう言っでどこかに立ち去って行った。呆然としていた貴族たちもどこか怯えるようにしながらパーティー会場から立ち去っていく。ひどく気分が悪い。やはり人が死ぬのを目の前で見たからだろう。当然のことだが私と和也は人が殺される瞬間というものを今まで見たことがなかった。和也を見ると顔色がずいぶんと悪くなっている。私もあんな感じになっっているのだろう。

「大丈夫でしょうか勇者様方？」

澄んだきれいな声に振り向くと美少女が心配そうにこちらを見てい

た。

それに気づくと和也は男の意地なのか「大丈夫です。」とか言っていたがどう見ても大丈夫ではない。

「そうですか。では私は大丈夫ではなさそうなおう一人の勇者様を医務室に連れて行きますので」

そう言って私を抱えて歩きだした。あまりの展開に頭が追い付かない。そんな中思わず出てきた言葉は

「ええと、なんでお姫様だっこ？」

そんな言葉だった。

「立っているのも辛そうでしたから。私も初めて人が死ぬのを見たときには似たようなことになりましたし、人を殺した時にはもっと酷いことになりましたから」

笑って言っているが笑い事ではない。こんな美少女が私は人殺しですと宣言しているのだ衝撃的すぎる。

「そちらの勇者様もこの方が心配なら一緒にいかがですか？」

この人絶対に和也がやせ我慢していることに気づいている。和也はちょっと嫌そうな顔をした後「俺も付いて行くよ。」と言ってついてきた。

「自己紹介が遅れましたね。私はセリカ・レインハートと申します。気軽にセリカと呼んでください。よろしくお願いします勇者様方」

「勇者の柊凜よ。凜と呼んで頂戴、よろしくねセリカ」

「同じく勇者の和也」レイナードだ。和也と呼んでくれ、よろしくセリカ」

そのあと私は気を紛らわせるように雑談をしながら医務室へと歩いて行った。

私は医務室についたときそこにいた医療魔術師から苦笑いされてやつとまだお姫様抱っこされていることに気づいて顔を赤くして俯くしかなかった。

そんなことがあった次の日の朝、私たちは王宮内にある広い会議室に集められていた。

そこでは話合っていたことはもちろん前線への救援のことだ。最も救援策はほとんど決まっていたそこに私たちを付け加えるだけだったが。

「そういうことで勇者様方とリリカ様にオービス様を加えた増援を本日より前線に向かわせますが、勇者様方はオービス様の転移魔術で先に最前線に向かっていただけないでしょうか？」

「もとよりそのつもりじゃったからの構わんよ」

「それに付け加えて悪いのですが、こちらのセリカも一緒に転移させていただけませんか？彼女はこう見えてもこの王国で五指に入る魔術の使い手です。オービス様には及びませんが十分な戦力になるはずですよ」

その言葉に対してオービスさんはいかぶしむような顔をして尋ねた。

「そのような戦力がなぜ前線にいままでいかなかったのじゃ？普通はあり得んと思うのじゃが」

「それは彼女が唯一のレインハート家の子孫だからです。彼女が死ねばレインハート家の血筋は途絶えます。それを現当主が許せなかったからです」

「それが今頃になってなぜ前線に出ることに？」

「ご存じないかもしれませんが、レインハート家の現当主は病に伏せております。その結果彼女が当主の代理となっております。その本人の希望です」

オービスさんは少し考え込むように黙った後言った。

「セリ力殿は本当に戦力になるのじゃな？」

「もちろんです」

「ならば構わん。さてこれで方針は固まったの、それでは行くかの」

そういうや否や足元に転移魔術陣が浮かび上がる。

「転移目標、イーリア連合王国対魔王戦線前線後方二百メートル」

まばゆい光に包まれたかと思った瞬間には広い平原に私たちはいた。目の前には多くの兵士たちが魔物と戦っているのが見える。

しかし、その戦況は悪そうだ。どの兵士の顔にも深い疲労が見て取れる。それもそうだ一カ月も戦い続けているのだ。まともに休む暇もなかったのだろう。

念話で何か話していたオービスさんとリリカさんがこちらを向く。

「それでは行くぞい。今から念話のオープンチャンネルで全軍に援軍が来たことを知らせるのじゃが、その時にお主たち勇者二人も名乗りを上げい。お主たちは知名度ならわしたちにも劣らんしの」

ちよっと待つてほしい。それやらないと駄目ですか？

「もちろんじゃ。此処まで下がっている士気を上げるためにも必要じゃ。正直レオン坊主の部下たちがいなかったらとうに崩壊してるわ」

そこまでやばい状況なのかこれは。なら私の羞恥心なんか捨てないといけないだろう。

「魔術教団総帥オービス」カルドーネ」「神剣」リリカ」エスカティア」「勇者柊凛」「同じく和也」レイナード」
「「「「援軍として参戦する！」「」「」

そう思いつきり叫んだあと私たちは前線に向かって走り出した。オービスさんとセリカはその場にとどまったまま魔術を詠唱している。あれは相当大規模なものが来るだろう。巻き添えを食らわないようにしないと。

そんなことを考えているうちにも魔物との距離はどんどん縮まっていく。

今さらになって緊張してきた。もしかしたら今日この場所で私は死ぬかもしれないのだ、そんな考えが頭をよぎる。

隣を走っている和也を見ると私と同じように緊張はしているようだがその顔にははつきりと闘志が出ていた。

ああ、情けないな私は、和也はもう覚悟を決めていたのに私はまだ悩んでいる。

今から引き返そうかなそんな考えも浮かんでくる。しかしその考えを打ち砕くものがあつた。

「勇者様たちが来てくれたぞ！これでこちらの勝ちが決まったようなものだ！」

私達が走ってくるのを見つけた兵士が声を上げる。その声を聞いた兵士がこちらを見てさらに声を上げるその繰り返しだった。

さっきまで低かった士気が嘘のように上がっていく。私たちに数千数万の兵士たちの期待を帯びた視線が降り注ぐ。

私の退路はなくなった。私にだって誇りがある。ここで逃げ出して守れるほどその誇りは安くはない。

腰に差した刀に手をかける。魔物との距離は後10メートルほど、そこにオービスさんとセリカの魔術が降り注いだ。

オービスさんが使った炎の魔術が魔物たちを焼き払い、セリカの風の魔術がその炎をあと威力を増大させる。

それでいて兵士たちには一切影響がない。すごい腕前だ。そして私たちは魔術によって乱れた魔物たちに突撃した。

近くにいる魔物を切るそして襲いかかってくる魔物を殲滅した後、再び苦戦しているようなところや

大きな魔物の集団めがけて魔術を放ち、突撃する。

それを何度も繰り返す。帰り血が気持ち悪いがそんなことに気をとられるわけにはいかない。

本当になんでこんなにいるのかと言いたくなる数の魔物が襲いかかってくる。オービスさんたちの魔術でこっそりと数を減らし続けているからいいけれど、

それがなかったらこの数は絶望的だっただろう。

そんなことを考えているうちに襲いかかってきたオークを切り殺す。もう生き物を切る感覚に慣れてきた気がする。

人間は慣れる生き物なんだなーと実感する。和也と背中合わせで戦っているから後ろの心配はしなくていいし慣れると意外に楽だ。

オービスさんたちが「生身で魔物に突っ込んでいつでも勝てる」と言った意味がよくわかる。

殺しあいの雰囲気慣れるまでは委縮してしまつて満足に動くことができなかったけれど慣れた今では魔物を倒すことなんて簡単なことだ。

私たちがもらった刀は神造武具で血や脂肪で切れ味が鈍ることもないから本当に簡単に魔物が切れる。

「全軍今からマーキングしたポイントから最低でも二十メートルは離れるのじゃ。広域殲滅魔術をたたきこむ」

あちこちに赤いマーカーが出てきた。兵士たちは急いでマーカーから離れようとしている。

そんな中一人だけ魔物と戦い続けている人影があった。尋常じゃない速さで動きながら魔物たちを切り捨てている。

がすぐに魔物が現れる。途切れることもなく表れる魔物にその人物は辟易しているようだ。

「十秒後に魔術を発動する。退避を急ぐのじゃ」

オーガスさんの念話が響き渡る。しかし、あの人物は魔物と戦うことをやめない。

「その人！もうすぐ広域殲滅魔術が発動するわよ。早く退避しなさい」

私が声をかけても全く反応がない。おかしい拡声の魔術を使ったのにまるで聞こえていないようだ。

よく見てみるとその人の周り20メートル四方の結界のようなものが張られているようだ。

その人を助けるために走り出そうとするとリリカさんに腕を掴んで止められた。

「なにするんですか！早くあの人を助けにいかないと！結界みたいなのが張ってあるせいで念話もこちらの声も聞こえていないような

「んですよ！」

「問題ない。あいつは私の知り合いだがこんなことで死ぬような男じゃないからな。それに凜が今から助けに行ってもどうせ間に合わん」

「問題ないってそんな」

私がなおも言い募ろうとしたとき閃光と爆風が体を包んだ。目を開けてみると視界に飛び込んできたのは赤熱し沸騰する大地だ。

これではあの人物は死んでしまっただろう。それでも一縷の希望を込めてあたりを見回すとあの人物が見つかった。

五体満足で凄まじい形相でオービスさんのいる方向をにらんでいる。

「ほらな大丈夫だっただろう？さてこれで戦いは終わりだ」

周りを見えてみると魔物たちが逃げていくのが見えた。

そして私たちの初めての戦いは終わった。

勇者参戦（後書き）

誤字の報告、感想などお待ちしております。
それと活動報告にてお知らせがあります。
ごらんください。

勇者との出会い（前書き）

勇者と出会う話です。

勇者との出会い

イーリア連合王国 対魔王戦線前線

兵士たちは喜びに沸いていた。一カ月に及ぶ激戦を生き抜いた喜びと勇者の強大な力に。

魔王を倒すために召喚された勇者の実力が初めて戦場で証明されたのだ。

その力は圧倒的で強大な魔術は多くの魔物を一撃で葬り去り、その剣技は美しく強かった。

前線にいた誰もが勇者の力を目の当たりにし、「これなら魔王を倒してくれる。」という強い希望を抱くようになっていた。

この日兵士たちは勝利の美酒を酔いつぶれるまで飲み続けた。

しかし、そんな光景の裏では闘いが続いていた。

対魔王戦線野戦病院

手のない者、足のない者、その両方がない者、内臓が飛び出している者。その天幕には血の臭いと怪我人であふれていた。

「いてえよ、いてえよ」「早く手当てをしてくれ」「うううう」

手足をなくし痛みに呻く声、死にたくないと助けを求める声、仲間の死を悲しむ声。

そんな声をかき消すように怒号のような声が響いている。

「早くお湯と清潔な包帯を持ってこい!」「二番の回復薬を二つ!」「頑張ってください!あと少しであの方が来ますからから!」

濃厚な血の臭いが漂う空間で多くの者たちが一人でも多くの命を助けるために動いている。

血に塗れることも厭わずに必死になってけがの治療をしている。

だが圧倒的なまでに人手が足りない。此処の野戦病院の医師と回復魔術師は百人ほどしか居ないというのに、

この野戦病院に居る負傷者の数は優に二千を超える。

この規模の野戦病院が後十数個作られていたがこの野戦病院も深刻な人手不足だった。

怪我人が多すぎる。それがすべての医師と回復魔術師の思いだった。今回の戦いは終結したためしばらくは新しい重傷者は来ないだろうが、それでもすでに数万の重傷者がいる。

その多くが手当てを受けることもなく死んでいくだろう。

「ライフハート様が来たぞ！」

誰かが上げたその声に野戦病院に居たものすべてが喜びの表情を浮かべる。

そして入口のほうを見る。そこにはレオン＝ライフハートがいた。

相変わらず野戦病院は地獄のような状態だ。いつも戦闘の後の野戦病院はこんな具合だが今回はさらにひどい。

やはり一カ月も続いた戦闘のせいで治療に当たる側も疲弊し、医療品も不足気味だからだろう。

「重傷の者を連れてこい。治療を開始する」

つまり私の出番ということだ。私なら医療品がなくても回復魔術で治療できる。

その上魔力が多いから数十万人の治療ができる。私の独壇場ということだ。

そんな事を思いながら治療を続けていくが、一向に負傷者の数が減ったように思えない。

此処で十五個目の野戦病院の天幕だが野戦病院は後十三もある。私の治療が間に合わず死んでいく兵士たちも多いだろう。

やはりあの魔術の改良を急がなければならぬだろう。あれさえ改良できればそんなことはなくなる。

目の前の患者を診る。手足が千切れ、腹からは内臓があふれている。どう見ても致命傷で後は死ぬのを待つばかりといった状態だ。

そんな患者も私が触れて治療魔術を使えば完全に回復する。

千切れた手足が再生し内臓はあるべき位置に戻り失った血液を補充する。ついでに脳にあつた腫瘍も消しておく。

あつという間に健康体になる。この患者は私の治療を受けたことも見たこともなかったのだろう、自分に何が起きたか理解できないでいるようだ。

それを無視して私は次の患者の治療に移る。今日も長い一日になりそうだ。

信じられない。私は死ぬはずだった。手足は千切れ、内臓まではみ出していた。生きていたのは私が少しばかり回復魔術を使えるからにすぎない。

それでも一刻一刻と血は流れだし失血によって死ぬのも時間の問題だった。それなのに今は全くの健康体になっている。

腕も足も問題なく動く、私は茫然として私を治療したのを見ていた。

やっと野戦病院での治療に終わりが見えた。あと一つで最後だ。この二日間治療ばかりやってやっとだ。

戦団のほうの仕事がたまってないか心配だったが、副団長が問題なく処理していると報告してきたのでそのときから気にすることはやめた。

勇者たちが私に会いたがっているそうだが忙しいと言って断れと言っておいた。

事実忙しいから嘘ではない。ただ嫌な予感がするだけだ。勇者たちに会うと絶対によくないことが起こるそんな予感をひしひしと感じる。

まあ何かと理由をつけて会わずに済ませよう。そして会ったとしても短時間で済ませよう。

そんなことを思いながら最後の野戦病院の天幕に入る。二日もたった今では傷口からの腐ったような嫌な臭いが混じった空気がこもっている。

それもここで終わりだ。最善を尽くそう。

私は困り果てていた。一昨日からレオン団長に会いたいと言って勇者様たちがしきりに訪れてくる。絶対に私の居場所を結言うなという団長の命令を守り続けるのにも限界がある。

「申し訳ありませんが本日もレオン団長は多忙の為お会いになることができません。また日を改めてお越しく下さい」

「ふざけているのですか！二日に渡り面会を希望しているにもかかわらず。まったく同じ文言で何度断られたと思っているのです！」

マリー皇女の言うことももっともだ。正直に言ってこの二日のやりようは礼儀を欠くにもほどがある。今まで怒鳴られなかったのが不思議なほどだ。

「最前線であるここでは急な訪問に対応ができないのも考慮してせめて面会の約束でも、と思っていましたがこの対応ではそもそもこちらに会う気がないとしか思えませんわ！」

その通りだ。団長は勇者様方に会う気はない。勇者様方のことを伝えた時の反応でわかつてはいた。しかし、勇者様方のほうがここまですり強く面会を求めることは予想外だった。

普通なら面会しようとも思わなくなるような対応をしたからすぐにあきらめると思ったのだが。だが私は軍人だから命令は絶対だ。

「私としては先ほどの文言を繰り返すしかありません。『申し訳ありませんが本日もレオン団長は多忙の為お会いになることができません。また日を改めてお越しください。』」

マリー皇女の顔が真っ赤に染まる。これは失敗したかな？ そう思っているとなんではこちらの会話を聞いているだけだった女性が割り込んできた。

「私としてもこのままでは埒が明かないと思っています。ですのでこう伝えてもらえませんか『セリカ・レインハートが会いたがっている。』と。それでも駄目だった場合はあきらめますから」

驚いた。彼女があんなセリカ・レインハートなのか。しかし、当主の意向で戦場に出ることのなかった彼女がなぜここにいるのだろうか？ いや、そんなことはどうでもいい。さすがにレオン団長であってもこの言伝を無視することはできないでしょう。

何せイーリアで唯一ライフハート家に並ぶ貴族ですから。

「分かりました。今からレオン団長に連絡をとります」

『レオン団長。緊急連絡です。セリカ・レインハート様が面会を希

望しております。了解した場合は十分以内に戦団の天幕まで来てく
ださい。』

「セリカ」レインハート様の伝言を伝えました。しかし、レオン団
長は念話を使うことができませんので十分程お待ちください。十分
しても団長が来られない場合は申し訳ありませんがお帰りください」

「ふざけ」

「分かりましたわ。それでは待たせてもらいます」

すごい剣幕で怒鳴りかけたマリー皇女の声を遮るようにセリカ様は
了解の返事を言うのと近くにあつた椅子に座られました。

その様子にマリー皇女は勢いをそがれたようであまり息をつくところ
ちにもセリカ様の近くに座られました。

「勇者様方も座ってお待ちください。お茶の一つも出せませんが」

「いえお構いなく」

「気にしないで結構よ」

勇者様方は機嫌が悪いようだ。言葉の端々にとげがある。まあ二日
も門前払いくらい続けられそうなくてもおかしくないが何か違う気
がする。

普通なら二度ほど門前払いを食らえば面会するのを諦めるはずだ。

しかし、今回は諦めていない。そこらへんに理由があるのだろうか？

本当にどんなつもりなんだろうかそのレオンという奴は。この二日
間の対応は礼儀を欠くにもほどがあるものだった。

正直殴り飛ばしたい気分だ。でもセリカの為になんとか我慢してい
る。でもこれ以上ふざけた態度をとられると我慢の限界を超えそう
だ。

そんなことを考えているとオービスさんとリリカさんが天幕にやつ

てきた。

「エリス副団長、レオン団長と会いたいのが時間はあるかな？」
「申し訳ありませんが勇者様方の先約がございます。お急ぎの用件でなければまた後にしていただませんか？」

オービスさんはエリス副団長に言われてはじめて私たちの存在に気がついたようだ。私たちの顔を見て不思議そうな顔をしている。

「なんでお主たちそんなに不機嫌そうなんじゃ？」

「それはですね………」

マリーが口早にこの二日間の対応のひどさをオービスさんたちにまくし立てる。二人は驚いたようにして話を聞いていたが途中から困ったような顔になっていった。

「そうかお主たちは知らないんじゃない。それならその反応も納得がいくわい」

「そうね。事情を知らない者にとっては飛んだ礼儀知らずよね」

「どういうことでしょうか？」

マリーが二人の反応に困惑した声で返す。私としても二人の反応の理由が知りたい。

「まあ単純に言うとな、レオン坊主は治療にあたっておるのじやよ」

「治療ですか？」

「そうじゃな、戦闘の後には当然多くのけが人が出る。レオン坊主はその治療にあたっているのじやよ。」

あ奴は回復魔術と身体強化魔術以外の魔術に全く適性がない代わ

りに、その二つの適性については空前 絶後の適性を持っているからの。」

「この対魔王戦線が維持できているのはレオンのおかげよ彼の回復魔術がなければ当の昔にこの戦線の戦力は枯渇しているわ」

「だから戦闘が終わって二、三日はよほど緊急の用件でない限りあ奴の邪魔をしないことが暗黙の了解になっておるんじゃないよ」

なるほどそうだったのか。はじめはレオン団長のやりようを聞いて驚いていたが、それもこの戦線を維持するためなら仕方ないと考えたからあの反応になったのだろう。

しかしそれを聞いた後だと私たちは命を救うために尽力している人の時間を、たかが面会で削ろうとしている愚かものになるのだろうか？

こちらとしても理由があるのでそれを考慮してほしいものなのだが。

厄介なことになった。勇者たちに会うのに嫌な予感がしていたのはこういうことか。まさかセリカが一緒に来ているとは。

前線に出ることはレインハートの当主が絶対に許さないと思っていたのだが病に冒されて耄碌したのか？

もしくは女王の意向が働いたのか。まあ何にせよ会わないわけにはいかない。

すでに二日も待たせている、今になってやっと言い出したことだから緊急の要件はないだろうが。

そんなことを考えているうちに戦団の天幕が見えてきた。どうやら気配からするとオービスとリリカもいるようだ。

さて糞爺の方はひとまず殴るか。

一瞬の出来事だった。気が付いたらオービスさんが宙を舞っていた。

「オービス殿、常時魔術障壁を張っているのはどうかと思いますよ。殴ったこちらの手のほうが痛いじゃないですか」

「この年寄りを思いつきり殴っておいて何言っておるか」

どこかで見たことのある無表情の青年とオービスさんが睨み合っている。

「これはお礼ですよ。先の私ごと吹き飛ばそうとした援護に対するどこかでいたことがあると思っていたらこの人私が助けようとしてリリカさんに止められたあの人だ。」

「ふん、お主がああ程度で死ぬはずがなかつ。それに警告は念話できちんとした。それを聞いて退避しなかつたお主のほうが悪いじやろつ？」

「退避なんてああ状況でできるはずがないでしょうが。」

「そうじやろつな。しかし、僕の援護は先の戦闘を手早く終わらせるためにはどうしても必要じゃつた」

青年の顔に忌々しいという表情が浮かぶ。

「ええわかっていますよ。これはただの八つ当たりです。私一人の命と戦線そのものだったら戦線を優先するのが当たり前ですし、私もあの程度だったら死にもしないのも事実ですからね」

「分かっておるじゃないか」

「はいはいそこまで」

二人が言い合っているところにリリカさんが割り込んだ。

「レオンもオービスも他の人間放っておいて言い争ってるんじゃないの。凜と和也なんか呆然としてるじゃないの」

二人の眼が私たちのほうに向く。レオンと呼ばれた青年の眼を見た瞬間体が凍りついた。

息が苦しい、息ってどうやってするんだっけ？体が言うことを聞かない。

「大丈夫か？」

無機質な声が耳を打つ。いつの間にか俯いていた顔をあげてみるとレオンという青年の手が差し伸べられていた。

「気分が悪いなら面会は後日に改めて行うが？」

「いえ日は改めなくて結構です。」

気力を振り絞り何とか答える。

「そうか。それでは会談をはじめよう。まず私の自己紹介をさせてもらおう。イーリア連合王国特殊戦団団長レオンⅡライフハートだ。そちらの自己紹介を頼む」

「オーガス帝国第二皇女マリーⅡオーガスよ」

「勇者の柊凜です」

「同じく勇者の和也Ⅱレイナードです」

「自己紹介も済んだ。それでは本題に入ろっか」

勇者との出会い（後書き）

次回恋愛要素を予定。
だが予定は未定。

理想の貴族（前書き）

遅くなりました。鬱です。リアルでも憂鬱な作者ですが、今回の話
もかなり鬱な展開です。ですがこれも主人公の性格からすると仕方
のないことなのです。一応これも恋愛要素になるのかな？

理想の貴族

「ああそうじゃな。今この戦線にいる全軍の指揮を執れる地位の者はお主と儂等二人だけじゃ。それで指揮はどうするのか話し合おうと思つての」

たいした問題じゃなくてよかつた。その問題なら簡単に解決できる方法がある。

「いや話し合う必要はない。総指揮はオービスが、前線での指揮はリリカが執ってください」
「それでいいの？」

リリアが不思議そうに尋ね返してきた。まあ貴族が指揮権を渡すことはそうそうないから仕方ないといえるが

「ええ構いません。どうせ私は念話が使えませんから、前線で戦いながら指揮が取れません」

「その副団長が傍に居ればいいじゃない」

確かにそうすれば私でも戦いながら指揮を執れるが

「そういうわけにもいきません。副団長でも私の戦闘速度についてこれませんから、必然的に私は力を抑えながら戦うことになりま

す。それはまずい」
「それもそうね。『世界最強』の貴方が全力を出せないのは困るわ」

リリカが苦笑しながらつまらない二つ名を口に出した。確かに誰にも負ける気がないのは事実だが、だからと言って『世界最強』を名

乗れるほど強いわけではない。

「そこまで強くはないよ。名乗れるのはせいぜい『人類最強』位までだ」

戦いには相性がある。私は近距離と中距離なら圧倒的な実力を発揮できるが、遠距離の戦いでは攻撃手段がかなり限定されてしまう。その上私は実体のない敵には道具に頼らなくては勝てない。

「そこまで言っても反論できない実力があるんだから多少の誇張くらい見逃したらどう？」

「まあ多少の誇張なら許すが、これは『多少』で済む誇張ではないからな。私が『世界最強』だったならば当の昔に魔王など殺している」

この場に居る全員が呆気にとられたような顔をしている。勇者たちはともかく他の者は私の噂程度聞いたことがあるだろうに、リリカとオービスに至っては何年も共に戦ってきた戦友だというのに私がこういう人物かわかっていいなかったらしい。

「……話が逸れたな。指揮は二人が執ってもらって構わん。私は遊撃とでも考えてくれ、戦線崩れそうなところや強敵が出た時に知らせてもらえれば私が救援に向かおう」

「分かった。そうするのが一番いいじやろうな。わし等からの話は以上じゃ。凜たちの話に移ってもらってもかまわんぞ」

いち早く我に返ったオービスが答えを返す。だが他の者たちはまだ呆気にとられた顔をしている。そこまで意表を突くことを言った覚えはないのだがな。しかし、このまま無為に時間を使うわけにもいかない。

「さてそれではセリカ」レインハートの用件を伺いましょうか」

「……分かりました。私の用件とはこれです」

私の声によつと我に返つたようだが相手の発言にいちいち気を取られていては困るぞセリカ。

そんなことを思いながらセリカが差し出してきた手紙を受け取る。

……封は破られていないようだ。

いちいちレインハート家の者に手紙を運ばせたということはかなりの重要事項と言うことだ。他人のいる場所では見れないが

「確かに受け取りました。それでこれの返事は今すぐしなければならぬようにだろうか？」

「いえ女王様は特にそのようなことは言われませんでした。しかし、かなり重要な内容ですから内容の確認は今直ぐしたほうがいいのではないのでしょうか？」

善意で言っているのはわかるが、重要な内容を他国の人間がいる場所の確認させようとするとは、やはり諜報・防諜方面では役に立たないか。レインハート家の人間なら仕方がないとも思う気持ちがある一方、失望もある。やはり国防は私が担うしかないということか。早めの後継者の育成を終わらせねばならないな。戦場に立っている以上なにが原因で死ぬかわからないからな。

「いや今直ぐ返事が必要ではないのであれば後で確認する。それでは他に用件はあるだろうか？」

「いえ女王様から託された用件はこれだけです。で」

「そうかそれでは私はまだ仕事が残っている。これで失礼する。」

セリカはまだ何か言おうとしていたが無視をしてさっさと椅子から

立ち上がり出口に向かおうとするが勇者のうちの一人　報告書によると柊凜　が立ち塞がった。

「待ちなさい。まだ話は終わっていないわ」

ちっ、セリカが話そうとした用件なんて分かり切っている。そして不毛な会話になることも分かり切っているからさっさと席を立ったというのにこの勇者は。視線が私に集まってきているのが分かる。面白そうな視線はオービスとリリカ、嫌悪の籠った視線はマリー皇女ともう一人の勇者か、立ち塞がっている勇者の方は舌打ちが聞こえてしまったのか顔を真っ赤にして今にも怒鳴ってきそうだ。勇者を押しつけてさっさと天幕を出るといふ手段もあるが勇者を押しつけるのはさすがにまずいな。仕方がない。

「それで話とは何でしょうか？」

私がレオン＝ライフハートに会った時の第一印象は「怖い」だった。そして顔を見たとき「とても怖い」に印象が変わった。どこの修羅でも此処まで怖い顔はしていないだろうという顔つきだった。夜にこの顔を見たら迷わず逃げるだろう。だがそれ以上に纏う雰囲気「怖い」。顔を見なくても雰囲気だけで「怖い」ことが分かる。正直こいつの前に立ち塞がるのにはかなりの勇気が必要だった。それでも私がこいつの前に立ち塞がったのはセリカの為だ。セリカの話聞いていなければそんなことは絶対にしなかった。だけどセリカの話聞いた以上此処で立ち塞がらないという選択肢はなくなっていた。

「待ちなさい。話は終わっていないわ」

「ちっ……………それで話とは何でしょうか？」

舌打ちとは随分なことをしてくれる。思わず怒鳴りそうになったが必死に自分を抑えた。

「セリカの事についてよ。貴方セリカの婚約者のくせに8年間も放っておいたそうね」

あらかじめ話を聞いていた私たちとあいつ以外のみんなはなにを言っているかわからないといった顔をしている。私も自分が言っていないことは、セリカとレオン「ライフハートが『婚約者』』ということは。まさに美女と野獣だ。全く似合っていない婚約者同士だ。しかも野獣のほうは全く気遣いというものができていない。

「魔王との戦争が始まって8年間一度も手紙の一つも出さず、セリカの出した手紙には返事の一つも出さず。『会いたい』と言ってもすべて『忙しいから』と言って断った。8年間全く気遣いというものをしなかったことについてよ」

この話を聞いて啞然とした。それもそうだろう此処までの行いをしておいて婚約はまだ破棄されていないというのだから。

「ねえその話って本当なの？」

今まで黙って話を聞いているだけだったリリカさんが聞いてきたが、
「本当です。セリカから直接聞きましたから。セリカが前線に来たのはこのことを解決するためでもあるんですよ」

リリカさんは呆れた様な表情になった後あいつのほうに向き直って

いい放った。

「レオン一応確認しておくけど凜はああ言っているけど本当なのね？」

「そうだな全くもってその通りだ」

あいつは憎らしいほど平然として答えた。

「しかし別に問題になるようなことではないだろう。8年間私は『忙しかった』それこそ手紙を出す暇もないほどにな」

しかも全く反省の色はないようだ。正直人間性を疑う。こんなことしておいて良心が痛まないなんて人間じゃないと思う。

「しかもセリカにはそうなる可能性があることをあらかじめ言っておいたはずだ。私は『貴族』としての責務を最優先すると。その可能性が現実になったにすぎない、セリカが『平民』ならば『レインハート家のものでない』ならばこのことに反発するのは構わん。しかし現実としてセリカは『貴族』であり『レインハート家のもの』だ。『貴族』であるのならばまずその『責務』を果たせ。果たすことのできない者には何の権利も認められはしない」

「ふざけんじやないぞ！8年間もセリカを無視しておいてその言い訳は何なんだ！」

あいつの言葉を聞いた和也がキレた。座っていた椅子を蹴飛ばすように立ち上がるとあいつに向かって突進していく。これは止めないとまずい、この世界に来て身体能力は劇手的に増加している。あの勢いで相手を殴りつけると死人が出かねない。それはさすがにまずい。そう思っただけで私も立ち上がりかけて信じられないものを目にする。あいつは座ったまま和也の渾身の力がこもった拳を受け止

めていた。今の私たちのパンチは鉄板に穴をあけるほどの威力があるはずだ。それをあかも簡単に受け止められるものなのか？

「言い訳ではない。権利を得るためには義務を果たさなければならぬ、という当たり前の常識だ。私たち貴族は統治者から徴税権や参政権などの権利を与えられているがそれは国を守るという責務に対する報酬だ。そして私は国民から徴収した税によって育った。既に権利による恩恵を受けている。ならば責務を果たすのは当然のことだ」

あいつの言っていることは正論だ。正論だがそれを実行するにしても限度というものがあるだろう！

「と言っても我がライフハート家がかなり特殊なのは事実だがな。まあそれはともかく勇者お前は予想以上に弱いな。今まで全く戦ったことがなかったにしてはなかなかの戦闘能力を持っているがこれでは使い物にならないな」

「その暴言は見逃せません！撤回してもらいましょうか」

あいつの言葉にマリーが怒鳴るようにして発言の撤回を求めた。

「事実だ。相手の実力も見抜くこともできず感情に任せて特攻するような奴が使い物になるとは思えない。こういう奴が下手に影響力のある地位に就くと手に負えん。無駄死にが増えるからな」

「神々が選んだ勇者が不適格だとも言うつもりですか！」

「私が勇者に求める役割は魔王を殺すことだけだ。しかし相手の実力も見極められないようであれば魔王と戦う前に犬死するだろうか。召喚された目的を果たせないのならそれは不適格者ということだろう？」

「貴方は」

「マリーちよつとストップ。今はそういう話じゃなくてセリカのことについてだから、後にしてもらえるかな？ 貴方もわざと挑発するようなことは言わないでもらえるかな？」

このまま放っておくと際限なく争いが広がって行きそうだったからマリーの言葉を途中で遮らせてもらった。それにしてもこいつさつさと話を終わらせたいというのがありありとわかる。さっきの暴言もそうだがこちらにも神経を逆なですて怒らせてこちらから出て行ってもらおうとしているようだ。

「で話を戻すけど、貴方はセリカにこのことで謝るつもりは全くない？」

「もちろんだなぜ私が謝らなければならない？ 平時ならともかく今は戦時だ。勝つことが国を守ることが最も優先される」

話し合う余地はないようだ。こいつは本当に『貴族』だ。『人間』じゃなく国を守るための『貴族』という装置。人としての感情なんて貴族の責務の前では塵芥に等しい。

「セリカからは何か言うことない？」

今まで口をはさんでこなかったセリカのほうに向きなおりながら問いかける。

「私が聞きたかったことのほとんどはもう聞くことができました。しかしどうしても聞きたいことがあります。レオン答えてくれますか？」

「内容によるな。先に質問を言うといい」

その時のセリカの表情は諦観と悲しみ、そして喜びに満ちていた。

まるでその質問の答えがわかりきっているかのように。

「レオン、貴方は私を愛していますか？なにがあらうと私を守ってくれますか？」

「私はお前を愛している。お前を守るためになら神すら敵に回してもかまわない。しかし、私は自分の信念を変えるつもりはない。『貴族としての責務』とお前の命を天秤にかけた場合は『貴族としての責務』を優先する。お前を殺さねば国が守れないというのならためらわずお前の首を刎ねるだろう」

「そうですね。私もあなたを愛しています。しかし、私たちが結婚することはもうないでしょう。セリカ＝レインハートの名において申し込みます。婚約を破棄しましょう」

「その申し込みを受けよう。家には私が連絡しておく。もろもろの手続きはそちらで進めてくれ」

「分かりましたわ。それでは『さようなら』」

セリカは椅子から立ち上がると天幕から出て行った。声を上げる者は誰もいない。天幕の外の喧騒がかすかに聞こえるだけだ。その沈黙を破ったのはやはりあいつだった。

「それではこれで勇者の方々の用件は終わりかな？そうならば私も仕事がある。これで失礼させてもらうが」

こんな結果に終わらせるつもりではなかった。せいぜい8年間も婚約者を放っておいた大馬鹿に説教して終わりだと思っていた。だが現実はどうだ。愛し合っているにもかかわらず二人は別れた。誰も幸福にならないバットエンドだ。そして私にはそれを覆すことはできない。これはセリカが悩み抜いた末に選んだことだ。その苦悩を理解できても実感できない私に口をはさむ権利はないだろう。

「……ええ、私たちの用件はこれだけです」
「そうか、ならば私はこれで失礼する」

そう言つてレオン「ライフハート」が天幕から出ていく。
後味の悪すぎる結果だ。

私はどんな顔をしてセリカに会えばいいのだろうか？

これから

こうなる予感はしていた。

レオンは会ったときから変わっていない。まるであの人の時間だけが止まっているかのようなのだ。不思議に思っただけに聞いたこともあった。

その時返ってきた答えは「ライフハート家の者だからだ。」というものだった。幼かった私はちょっと変な理由だなと思いつつも納得したけれど、今になってあれほど核心をついた説明はないと思いついた。

「ライフハート家の者だから」この言葉だけでレオンたちライフハート家の者の異常は済まされてしまう。不思議に思っただけで似て言葉を失った。

ライフハート家の子供達は洗脳されて育てられる。物ごとくをつく前から貴族の義務を教え込まれ、義務を果たさない人間には生きる価値などないと教えられる。

子供は純粹だ。教えられたことが正しいと思いついたということはない。教えたのが親ならなおさらだ。そして『貴族』になる。

代が変わるごとに他の貴族たちが忘れていった『貴族』としての義務を果たすことを至上命題とした人間ではない存在に。

私がレオンと会った時レオンはまだ十二歳だったはずだ。それなのに子供心にもおかしいと思えるほど人間的なものがなかった。そしてそれが心地よかった。

レインハート家の関心を買おうと七歳の私に近づいてくる有象無象どもと違って泣きたくなるほどの正論で私を間違いを指摘するレオンと共にいるのは楽しかった。

そして気がついたら恋をしていた。

レオンの事を考えると幸せな気分になり顔が赤くなった。レオンが傍に居ないと無性に寂しさを感じるようになった。病気になったんじゃないかと心配になってお母様に話したらそれは恋だと教えられた。初めての恋に浮かれていつもより積極的に行って失敗して、意外にレオンは感情豊かだと気がついた。そのことをレオンに言う

「私だって感情がないわけじゃないよ。ただ理性が強いだけだ」

笑いながらそんな答えが返ってきた。

レオンが日頃隠している感情を私にだけ見せてくれるのがうれしくて、不意に見せられた笑顔に顔が赤くなるのが分かった。

そうやって私たちは愛情を積み重ねていった。

不可能かとも思える国内最大規模の貴族であるレインハート家とライフハート家の婚約も何とか王家の了承を得ることができ私たちの間には何の障害もなくなった。これからは婚約者として隠すこともなくレオンと一緒に居られると思っていたときに魔王との戦いが始まった。

一晩にしてオーガス帝国が滅亡し生き残った人々も魔物に国を追われ難民となった。

王都のわずかな生き残りと言民たちの話を分析し魔王の存在を突き止めた時にはすでに魔王の軍勢が国境付近に押し寄せてきていた。

イーリア連合王国の国防の中心を担うライフハート家は当主自ら前線に立ち、レオンも前線に行くことになった。

十五歳という若さで。別れの挨拶もすることができず。そしてそれっきり8年間何の連絡もとることができなかった。こちらから手紙を出しても無視され、王都に帰ってくることは一度もなかった。

私はレインハート家の血筋を絶やすことのないようにといった名目で前線に行くことはできなかった。

レオンの事は何でも知っているつもりだった。だけどそれは私の思い込みに過ぎなかったらしい。

いや、私の前では普通の人間と同じように感情を出すようになっていたレオンばかりを見ていてレオンの本質を忘れていたのだろう。『貴族』としてのレオンはレオン。ライフハートの根底にあるものだ生まれ変わりでもしない限りそれが変わることなどない。

国の為には最愛の人すら殺せるように育てられるライフハート家の教育を甘く見ていた。

レオンは全線で魔王軍と休むことなく戦い続けているようだった。そんなことしか分らない。

父親が戦死した後はレオンが特殊戦団の団長に就任しわずか十八歳にしてイーリア連合王国から派遣している軍勢の最高指揮官になったということもレウィリアから聞いて初めて知った。

愛しているが故に辛かった。

これがただの政略結婚ならばレオンと会えなくても大して気にならなかっただろう。けれど私はレオンを愛していた。だからレオンと会えず何の連絡も取れない日々が辛くてたまらなかった。そんな日々が終わらせるためにお父様が病に倒れ私がレインハート家の当主代理となったときに女王に直談判した。

「前線に行かせてください」

意外なことに女王は「しかたないな」と苦笑いして認めて下さった。婚約の件といい女王には頭が上がらない。

そしてやってきた前線でレオンと八年ぶりの再会を果たし、そして終わりを迎えた。

レオンが8年間何の連絡もしなかったことを謝罪してくれれば私はためらわず婚約を続けただろう。

当主代理となった今ならば前線のレオンの傍に居ることができるから寂しくもないのだから。

けれど心のどこかで思っていたようにレオンが謝罪することはなかった。

これ以上耐えることはできなかった。私にもレインハート家としてのプライドがある。八年間何の連絡もなかったうえにそれに対する謝罪もないのならばレインハート家として婚約を破棄するしかない。『するしかない』のだ。

だからどうかこの胸の痛みよ消えてほしい。

貴族として生まれなければよかった。

このとき初めて私はそう思った。

予想できた結末だった。

天幕から出た私は先ほどのやり取りを思い返しなから思った。

私は八年間の間一度もセリカに連絡を取ることはなかった。セリカからの連絡も無視した。

レインハート家当主からの戦争遂行にかかわる内容には返事をしながらもセリカの事となるとこれも無視した。

礼儀知らずにもほどがある態度だ。

それにもかかわらず八年間も婚約は破棄されることのなかった。

一度決まった婚約を早々と破棄することはできないという貴族としての見栄など簡単に無視することができるとの無礼を働いたのに婚約が破棄されなかったのは、自惚れではなくセリカが私を愛していてくれたからであろう。

それを私は裏切った。

人として最低なことだと思う、だが思うだけだ。

私は後悔も反省も全くしていない。

ライフハート家当主として国を護るためにはいかなる犠牲も払わねばならない、それが私の考えだ。

私がセリカに連絡を取らず、また連絡を無視したのは単純に忙しかったからだ。

天幕内で言った言葉に偽りはない。私はこの八年間一睡もすることなく魔王軍に勝つために働いてきた。その膨大な物量に対抗するための戦術を確立し、戦線を支え続けるための戦略を組み立てそして戦い続けた私に魔王軍に勝つための情報以外を処理する暇はなかった。

私としても暇があればセリカに連絡を取っただろう。

しかし現実にはそんな暇はなかった。ただそれだけのことだ。

愛する者と別れなければならないことは辛い、しかし物語のように胸が引き裂かれたような痛みが身体を襲い我慢できないというほどではないようだ。確かに胸は痛むがまだ我慢できる範囲だ。それにしてもここまでひどい胸の痛みは初めてだ。

「なんとも嫌な結果になったわね」

リリカさんの言うとおりだ。小説ならここで仲直りしてハッピーエンドになるはずだ。だが現実ではそうはならなかった。当人たちの意志を地位と立場が邪魔をした。いやレオンという奴の方は自分の意志だと言っていたから同情の余地はないか。だがセリカの方は可哀そうでたまらないあれだけ愛しているのにそれを無視された揚句振られたのだから。

「レオンに貴方達の実戦訓練を頼もうと思っていたのだけれどこれはやめた方がいいわね。多分レオンは気にしないでしょうけれど貴方達は気にしてしまうでしょうし、それで刃傷沙汰になんてなったまま らないわ」

……殴りかかった前例があるだけに否定はできない。

あんな奴に教えてもらうなんて御免だ。

「リリカさん質問があるんですが、あのレオンという人はどれくらい強いんでしょうか？ 和也のパンチを座ったままで受け止めることができるくらい身体能力が高いことはわかりましたがそれ以外の事は知りませんから」

「先ほどの私とレオンの会話でも言っていたけれど『世界最強』と言っているほどの力があると私は思っているわ」

本人は否定したけど。と肩をすくめてリリカさんは言った。凜の質問にリリカさんはあっさりと答えた。あいつにそこまでの実力があるのか？確かに俺のパンチを座ったままで受け止めたことはすごい、リリカさんも同じことくらいできても不思議じゃないのになあ、いつか『世界最強』？

「納得できない、といった顔をしているけれど事実よ。少なくとも遠距離 最低でも2キロ以上離れた超遠距離 での戦いでなければあいつに勝てる存在はそれこそ神々くらいしか居ないでしょうね」

あり得ない。2キロといえばほぼすべての標準的な魔法と魔術の有効射程外だ。その距離で有効なものは狙撃用の魔術か戦術・戦略級の魔法と魔術だけだ。

「あいつは回復魔術と身体強化魔術しか使えない代わりに、その二つについては桁外れの才能を持っているわ。あいつが今までに生み出した魔術は回復魔術と身体強化魔術合わせて二千種類を超えているし、あいつはそれこそ即死でもしない限り継戦能力を失わない。強化されたその身体能力は魔術で補強された要塞を吹き飛ばし、2キロを二秒とかからず駆けることができるのが確認されているわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言葉が出ない。何だそれは本当に人間か？それでは他の魔術が使えないことなんか何のハンデにもなりはしない。

「正直に言つて私でも遠距離戦でなければ勝てないわね。私が自己紹介したとき『世界で2番目の剣士よ』と言つたと思うけれど一番は間違いなくレオンよ。高々23年しか生きていないのに私の50年を超える修練を超えていくんだから天才とはああいう奴の事を言つのねと思つたわね。だけどそれ以上にあいつは努力する人間よ。5歳から今まで毎日鍛錬を続けているわ。そしてそれを何の苦にも思つていない」

あいつが休まず鍛錬を？あの傲慢な態度からは想像もできない気もするが、逆に納得できるような気もする。きっとセリカとの婚約を破棄したときのように『貴族としての義務だから』と言つて淡々と鍛錬をしているのだろう。

「まあそれだけに魔王を倒すのに勇者に頼らなければいけないのがかなり気に入らないようだけれど。実際問題として勇者がいなければどうしようもないことも分かつているからよほどの無茶でなければこっちの言うことも聞いてくれるはずよ」

あいつに頼み事なんてしなければいけないような状況にならないように気をつけようあいつに頭を下げるなんてまっぴらごめんだ。

「まあレオンの話はここまでにしておいて、これからの方針について考えましょうか。」

そうだなあいつの事なんか考えているよりその方がよっぽど有意義

だ。

「本来ならばここで魔物との実戦をしてもらって戦いの経験を積んでもらう予定だったけれど、今回の戦いで生憎そこまでの余裕がなくなってしまったわ。だからギルドに登録してそこで依頼を受けて経験を 積んでもらうことにしたわ。」

「やっぱり被害はひどいんですか？」

俺の質問にリリカさんは少し考えた後

「他言は厳禁よ。分かった？」

そう聞いてきた。俺と凜が頷いたのを確認した後

「今回の戦いが始まる前まで50万以上いた兵力のうち今も戦い続けられるものは、10万と少しくらい ね。レオンの治療によってかなりの数が戦力として復帰するでしょうけれど今はまだ療養中よ。回復魔術で急速に回復させても体に不具合が残る場合があるからレオンもある程度までしか回復させないから ね」

戦闘前の5分の1まで戦力が減っているのか。ならおれたちがここに残って戦えばその不利も多少はましになると思うのだが、そう思っ
て言ってみたのだが

「まあそう考えるのもわかるけれど、私たちがあなたに求めるのは魔王を倒してくれることであって戦線を支えることじゃないからね。というより元の世界で軍人でもやってなかった限り前線じゃ働けないわ よ。なにせ仲間を見捨てることも作戦のうちなんてことがしょっちゅうあるんだから」

嘘だ。そんな言葉が口から出そうになった。けれどリリカさんの目を見てその言葉を飲み込んだ。その眼は何とも形容しがたい感情が渦巻いていた。

「あなたたちにこんな愚痴を言っても意味なんかないわね。それで話を戻すけれど、貴方達にはギルドに登録するためライガート商業都市に行ってもらわ」

そこは確かギルドの本拠地があるところだったはずだ。けれど登録するのにいちいち本拠地まで行く必要があるのか？近くの大きな町で十分だと思うのだがそう思っていると凜が質問してくれた。

「近くの街じゃだめなんですか？登録くらいならそれで十分な気がするんですが」

「登録くらいならそれで充分なんでしょうけど、今回はあなたたちと一緒に魔王討伐に向かってもらう仲間たちと合流してもらうから一番交通の便がよいライガートを集合場所に行っているのよ」

「魔王討伐に行くのは俺たち勇者だけじゃなかったんですか？」

俺がそんな質問をするとリリカさんが呆れたような顔をして答えを帰してきた。

「そんなわけないだろう。ただでさえ困難な魔王討伐を何のサポートも無しに勇者だけで行かせるなんてことするわけがない。マリー皇女とゴドー・サルナージ、シンシア・レックアートそれとセリカ・レインハートが同行することになっている。」

「セリカとマリー王女ですか？大丈夫なんですか？対魔王戦線を支えるのに精一杯でその戦力不足を補うために私と和也を召喚したのに魔王討伐に同行させられるくらい優秀な人たちを私たちに同行させ　て」

凜のそんな質問も気にした様子を見せずにリリカさんはあつさり

「大丈夫だ、問題ない」

と答えた。

「マリィ皇女は政治の問題で前線で戦ってもらうことは難しいし、他の二人についても才能はあるがまだまだ未熟な者たちばかりだ。むしろあなたたちと一緒にいることで互いに高めあうことができるならそちらのほうがいいわ。セリカ「レインハート」についてはイリアのほうから強硬な推薦があつたからよ。セリカにも昨日すでに話してある」

予想外だなマリィとセリカも一緒に魔王討伐に行くことになるなんて、ただ二人ともかなり強いことが分かっていいるから心強い。

「それでさっそくで悪いけど、今日の夕方には出発してもらうことになるわ。何か荷物があるなら急いでまとめてちょうだい」

「今日の夕方！！ずいぶんいきなりですわね」

マリィと同じく俺も驚いている。あと数時間しかない。

「申し訳ないが時間が押しているのよ。今日の夕方を逃すと次の輸送隊は1週間後になるわ。今の前線に1週間いてもろくな鍛錬もできず時間の無駄になる。転移魔術陣が利用できれば問題なかったのだけれど今回の戦闘で壊れたまままだ修復ができていない。オービスもいまは忙しくてあなたたちを転移させることができないからね」

「……………分かりました急いで準備しますわ」

そうして俺たちは前線を離れて一路ライガート商業都市に向かうこととなった。

これから（後書き）

しばらく勇者たちの出番はない予定です。

いまさらですがこの作品は主人公最強物です。

ただし相性的にどうしても勝てない敵というものは存在します。
たとえば魔王とか

反撃にむけて 前編

勇者が召喚されてはやくも3カ月が過ぎようとしている。その間に勇者たちはずいぶんと功績をあげた。

例えばライガートに魔王軍が奇襲攻撃をかけたときは都市を守るため前線で戦い敵の指揮官を打ち取った。オーライル学術都市では封印書庫の最深部から魔王のような存在に対抗するための武器の作り方を書いた書物を手に入れた。

そして1番の功績はオーラリア帝国において、国の中枢を担う貴族に魔王の手下たちが成り代ろうとした事件の解決にも貢献したらしい。

よくもこれだけ短期間でこれだけのことをやったなと言いたくなるようなことばかりだ。

世界各国で勇者たちの名声は高まり今最も有名な人物と言えば誰もが「勇者様」と答えるほどになった。

勇者たちだけでなく同行しているマリーやセリカ、ライガートで合流したゴドー＝サルナージとシンシア＝レッカートもずいぶんと腕を上げた様だ。

「勇者様たちの成長スピードも異常なくらい早いですが、同行している人たちの成長スピードも異常なくらい早いですね」

「勇者たちの才能に引ッ張られているんだろう。才能がある者と才能がある者が一緒に鍛錬を積むときにたまにあることだ。互いに相手に負けないように切磋琢磨し、結果として異常なスピードで実力をつける」

だがそれにしてもこれは異常だ。たった3カ月程度で勇者たちは世界でも最高レベルの実力をつけた。

ギルドでも登録してたったの2カ月でSランクに到達した者などこ

れまで存在しなかった。

多少勇者たちに箔をつけるためにランク付けに政治的な意図が働いていたとしても普通ならSランクになんてなることはない。なぜならSランクへの昇格だけはギルド長の独断で決まる。あの人がギルドの最高戦力であることを示すSランクへの昇格を政治的な意図で決めることはあり得ない。

ということは勇者たちはギルド最高戦力を名乗るだけの力を既に得ているということになる。

勇者たちの才能もあるだろう。

だがそれ以上に重要なのは勇者たちがこの世界に召喚された際に受けた神々の祝福だ。

神々の祝福はただでさえ強力な効果を持つ。それを合計7つも受けたのならそれはもう人ではなく亜神に近いということだろう。

亜神は人の限界を超え圧倒的な力を持つ。

神々を信仰していない者を亜神と呼ぶことに問題があるかもしれないが、神に選ばれたという上では亜神の定義に背かないだろう。

まあ魔王を倒すだけならば勇者がどれだけ力を持っていたとしても関係ないがその力に溺れてイーリアに牙をむいた時は死んでもらうことにしよう。

その時出る犠牲を思うとそんなことにはなってほしくないが現実には常に無情だからな備えるに越したことはない。

対魔王戦線 イーリア連合王国前線 司令部

「それでは皆報告書は読んだじやろうから早速今回の本題に入らせてもらおうかの。今回の議題は勇者たちの魔国侵入の囫となる大規模反攻作戦に使う物資の補給についてじゃ。詳しいことはレオンか

ら説明してもらったのか」

オービスのその言葉を合図に私は立ち上がり説明を始めた。

「それでは今回の作戦の説明を行う。今回の補給作戦の目的は今才ービス司令長官からあったように勇者たちの魔国侵入の囃となる大規模反攻作戦に使う物資の補給のためだ。この反攻作戦では魔国内に侵攻し魔王の占領下にある要塞や都市を奪還するというものである。この作戦の性質上敵地に深く侵攻することとなるが侵攻すればするほど補給線の維持が困難となる。それを解決するために大規模な物資運搬用の転移魔術陣を作ることとなった。しかし大規模な魔術陣を作成する際に必要となる魔力だまりだが、今回作成する規模の転移魔術陣を維持するために必要な魔力量を補えるものは、現在他の用途に使っているものばかりで使用できるものが対魔王連合国内には存在しない。よってここから近くの森にある魔力だまりを新たに確保し使うこととなった。今回の作戦はこの魔力だまりの確保が目的だ。使用する戦力は」

「ちよつと待ってくれ!!」

私が説明しているとそれを遮るように声をあげる者がいた。確かオルガ・ロコナートだったか？防衛戦が得意でなかなか有能なやつだったと思うが

「なにか質問でもあるのか？」

「質問でもあるか？じゃない！ここから近い森と言えばあの『聖域』だろう！あそこにはただの森じゃない。ドラゴンがうじゃうじゃいる上によりによってエンシェントドラゴンもいるんだぞ！そんなところをどうやって確保するというんだ！」

まあ普通あの森を知っているイーリアの人間ならそう言いたくもな

るだろう。一番弱いドラゴンでも兵士100人分の戦闘力があるというのにエンシェントドラゴンとなれば亜神や超越者クラスの戦闘力を持っている。そんな奴らと戦うなんて確かに正気の沙汰じゃない。

「それについては作戦を説明する中で言及する質問は全ての説明が終わってからにしてくれ」

そう言ってロコナートをにらみつけることで黙らせた。

「さて話が中断したが、作戦の説明に戻る。使用する戦力は私の特殊戦団と2個魔術大隊だけだ。だがエンシェントドラゴンと戦闘になった場合を考慮してオービス司令長官率いる戦略魔術連隊の一部を予備兵力として使用する。そのため一時的に前線の遠距離迎撃能力が低下することとなる。諸君の任務は遠距離迎撃能力低下中に魔王軍が攻めてきたときにその軍勢を援軍が来るまで足止めし、できるなら撃退することだ」

「まあいつもやっていることは大して差はないのじゃが今回の作戦には儂とレオン戦団長の両方が参加することとなるからこの前線に残るのはリリカ様だけとなる。そのことを心に留め置くのじゃ」

「基本的には知性のある竜種には話し合いによる説得を行い、知性のないものは討伐することになる。エンシェントドラゴンと戦闘になった場合は私とオービス殿が協力して対処する。以上だ」

作戦の説明が終わった途端騒がしくなる。各々が隣の者との作戦についての自分の考えや疑問点を話し合っている。しばらく待っていると大体の話が終わったようだ。1人が質問の許可をもらうため手を上げる。

「質問を許可する。なんじゃ？」

「使用する2個魔術大隊ですが、どこの魔術大隊を使用するつもりだろうか？うちの隊は先の戦闘で失った人材の穴を埋めることすら困難な状況なのだが？」

「1個大隊は儂の隊から出す。もう1つは新たに魔術教団から派遣される3個大隊の内から選ぶことになっておる。他に質問はあるかの？」

その言葉にまた別の者が手を上げる。

「質問を許可する」

「今回の作戦が実施されている間の指揮はやはりリリ力様が総指揮を執るということでもいいのでしょうか？」

「その通りじゃ今回の作戦が終了し、儂が前線に戻ってくるまでリリ力様には総指揮をとってもらうことになるの」

その後も細々とした質問は出たが作戦の実施に反対する声はなかった。

俺はイーリア連合王国特殊戦団に所属している名も無き一兵士だ。普通の部隊ならエースと呼ばれてもおかしくない実力を持っていると思っているが

この戦団では下から数えたほうが早い程度の実力でしかない。高い給料につられてここに転属願を出したのだが失敗したと思っている。

なにせ死傷率だ半端ない。戦闘のたびに戦団の半分が死にけるよなところだ。ライフハート団長の治療を真っ先に受けられるおかげで死者こそ少ないが、この戦団で四肢が欠損したことがない者はいないだろう。別に俺たちが弱いわけじゃない。さっきも行ったが実力じゃ下から数えたほうが早い俺でも普通ならエースと呼ばれる

ほどの力を持っている。それでも死傷率が高いのは出撃する戦場が圧倒的な劣勢に立たされたの戦場だからだ。

敵とこちらの戦力比が5対1なんてこともざらにある。最初のころは死に行くようなもんだと思っていたしいまでもそう思うが人間慣れるものだ。

どこに行くとも聞いても「そうかそうか」と流して最善を尽くすことを考えるようになっていった。

しかし今回は行き先を聞いて何かの間違いじゃないかと5度も聞き返して伝令に殴られちゃった。

だが俺は悪くない。行き先を聞いたほかに奴らも啞然とした後聞き返していたからな。

平然としていたのは副団長くらいだ。

「それでは皆出発の準備にかかれ明日の朝には出発することになる」

副団長も命令を聞いて、さすがに今回は死んだかな。そんなことを思いながら出発の準備に取り掛かった。

聖域への道中では特に問題はなかったせいぜいゴブリンやオークが2、3匹いただけだ。

だが聖域に着いた途端問題が多発した。まず情報にはなかったが竜たちが繁殖期に入っているらしい。普段より凶暴性が増しているようだ。

この時点で撤退し繁殖期が終わって再度作戦を実施することも考えたが、竜の繁殖期は最低でも10年近く続くことがオービスの話によって判明したことで作戦を強行することが決まった。

さて被害を最小限にするために知恵を絞るか。

「こちら第2小隊、2時方向にレッサ ドラゴン13匹魔術大隊制圧攻撃をお願いします！」

「こちら魔術大隊ただいま手一杯で援護できない後30分ほど持ちこたえてくれ」

「ちよつ、ふざけんな！！1、2匹ならともかく13匹も相手に30分も持つわけないだろう！こっちは20人しかいないんだぞ！」

「こちらはレッドドラゴン3匹にホワイトドラゴン5匹その他もろもろ300匹ほどと交戦中だ。代わるか？」

「……………い、いやいいできるだけ急いで援護してくれ」

ふざけんな！レッドドラゴン一匹でも1個大隊程度の戦闘能力があるのにそれが3匹！しかもホワイトドラゴンも5匹いる。そんな戦いは死ぬためにやるようなもんだ。そんな奴らと戦うくらいならレッサ ドラゴンと1対1で戦っているほうが当然ましだ。少なくともこいつらには知性がないからな。

「魔術大隊は交戦中で援護できないそうだ！俺たちは20人であるトカゲどもの相手をしなけりゃならん。だが臆することはない！俺たちはあのイーリア連合王国特殊戦団だ！トカゲの20や30位さつさと血祭りにあげるぞ！！」

「うおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

やってやる、やってやるさ！

俺はディフェンダーとしてレッサ ドラゴンの注意をひきつける。畜生硬てえなこいつら。やつぱり最下位でも竜種だけある。鱗を傷つけるのも一苦労だ。だが俺が無理に倒す必要はない。

ディフェンダーの俺が注意をひきつけている間にアタッカーのやつらが倒せばいい。

「準備完了。斉射する射線から離れろ」

風を引き裂くような音がした後体のすぐ横を光の矢が通り過ぎていく。

光の矢はレッサ ドラゴンどもにあたると突き刺さり、次の瞬間突き刺さった部分が爆発した。

「糞！危ねえじゃねえか！あと少しで俺がミンチになるところだったぞー！！」

「フン！さっさと離れないほうが間抜けなだけだろう」

「後でぶつ殺してやる」

「やってみろ」

「お前らふざけてないでさっさと他のトカゲどもの相手をしろー！！」

ちっ、あいつのせいで怒られちゃった。まあさすがにこれ以上しゃべっていると後で小隊長に殺されちゃう。他のトカゲどもの相手をするとし

「死ね虫けらども」

駆けだそうとした体を必死に押しとどめて転がるようにして近くの岩陰に飛び込む。

その瞬間に猛烈な爆風が吹き付ける。

「ちくしょう」

体中が痛え、視界も真っ赤に染まって周りの様子も確認できない。

だが何が起こったかは分かっている。

「我が名はドレッドノート。我が縄張りをよくもここまで荒らしてくれたものだ。覚悟はできているのだろうか？」

よりにも寄って、糞！

「こちら第2小队！エンシェントドラゴン『ドレッドノート』と遭遇！至急増援を請う！繰り返す！こちら………はははははは、あれは無理だわ。」

「どうした！」

「空見てみる。あんな規模の魔術なんて見た事ねえよ」
「つつ………」

相手の息を飲む声が聞こえる俺の視界を埋め尽くしているのは複雑に術式が絡み合った巨大な魔術式だった。

「あれはどう考えても戦略級魔術だろう？あんなもん撃たれたらどうしようもねえよ！」

絶望しかない。あんなもんを単体で打てる存在に勝てるはずがないだろう！畜生俺もここで死ぬんだ。魔術効果範囲が広すぎて逃げる時間もありやしない。

「糞！もう駄目だ逃げましょうよ」

隣にいた奴もそう言っている。もう逃げてもいいよな？逃げられる可能性なんてほとんどないけどあんな化け物に向かっていくよりましだ。よし逃げよう！

「よし！に・・・・・・・・・・・・・・・・」

爆発音が遠くから鳴り響く。振り向いてみると魔術大隊がいるほうから空にいるレッドドラゴンたちに向かって対空砲火が行われている。しかし強力な魔術障壁に阻まれてちつとも効いているようには見えない。それなのにレッドドラゴンたちの攻撃は次々と空から降り注いでいる。30分待つていると言ったあいつも死んじゃうな。その光景を見て決心がついた。

「よし野郎ども！！今からこの糞でかいトカゲ野郎の足止めを行うぞ！！」

周りのやつらは啞然としている。俺の正気を疑うような目で見ている奴もいる。自分でもバカげたことを言っていると分かつてはいる。ついさっきまで逃げる気満々だった俺自身も驚いている。だが俺の心にはさっきまで有った怯えはなくなっていた。

「ふざけてんのか！あんな化け物に勝てるはずがないだろう？！！」

「ふざけてんのはお前だ！今ここで逃げてどうする。逃げて良いことでもあんのか？！どうせおれたちの位置からじゃ効果範囲の外にでる時間がないんだ。それでも俺たちがこいつの足止めをすれば他のやつらが逃げる時間を稼げる。俺は臆病者としてなんか死にたくない！」

「ははっ・・・・・・・・・・そうだな。逃げても何にもならんよな。それに生き延びても団長に殺されちまう」

「ああ、そのとおりだ。あのトカゲに目に物見せてやろう！！」

そうして俺たちは絶望的な戦い始まった。

拘束魔術を放ち奴の動きを拘束しようとしたが易々と拘束を引き千

切られ、少しでも傷をつけようと魔術を放つても魔術障壁によって霧散させられる。打つ手などなかった。こちらの攻撃は効かず、相手の攻撃は掠ただけでもこちらにとつては致命傷だ。しかし、奴の注意をこちらに引くことはできた。紡いでいる戦略級魔術もこちらを中心に照準を合わせているこれなら他の隊への被害も少しは下がるだろう。

「ふん、お前たちは羽虫のように群がってきて目障りなことこの上ないな。大した力も無いくせに効かぬ魔術ばかり放つてきおって」
「はっ！トカゲ野郎の分際で一丁前にひとさまの言葉を使つてんじやねえよ。そんなもんはもうちょっとと進化してからにしろ！」

言つてやったぜ！どうせ死ぬんだ。言いたいことを言わなきゃ損だぜ。隊の他の奴らもトカゲ野郎に向かって言いたいように言っている。トカゲ野郎の機嫌がどんどん悪くなっているのがわかる。これはもう命乞いしても絶対助けてもらえないな。する気もないが。

「人間風情がよくもそう言いたい放題に言つてくれたな。もはや許すことなどありえぬ！己が暴言を悔やむがいい！！」

「後悔するのはお前だ『ドレッドノート』」

エンシエントドラゴンが俺たちに魔術を放とうとした瞬間空から隕石が降ってきて奴の頭をぶつたいた。いや隕石に見えたのは

「中途半端に無視して私の部下をさっさと殺さないからこうなる。」
「貴様！！」

「おや？不意打ちが卑怯とでも言うつもりか？いやいや戦場で戦略級魔術を紡いでいるのに攻撃されないと思つてほうがおかしい。そういうことだトカゲ。お前が妙に余裕ぶっているからこうして私の救援が間に合った。」

我らがライフハート団長だった。

「ほざけ！！貴様一人が来たところでどうにもならんわ！！！」

普通ならそうだ。だがライフハート団長なら違う！

「貴様こそ馬鹿を言うな。私がトカゲ1匹程度に手間取るはずがないだろう？」

そこからは一方的な展開だった。言うまでもなく団長が圧勝した。ドラゴンのあらゆる攻撃は発動しようとした瞬間に団長の攻撃によって集中を乱され失敗し、団長の攻撃は魔術障壁もドラゴンの硬いうるこも存在しないかのように奴の体をえぐった。俺たちが手も足も出なかったのが嘘のようだ。

瞬く間に奴の体が血に染まっていく。

「ありえぬ！人風情がなぜこれほどの力を持っている！」

「人間だからだ。」

決着はついた。団長の振りぬいた剣が奴の首を刎ねる。降り注ぐ血潮の中団長は目を背けたくなるような笑みを浮かべて立っていた。いやいや人間は普通そこまで強くありませんよ団長。

反撃にむけて 後編

戦闘はあらかた終わった。このまま何もなければ魔術陣を描くための作業に入るつもりだったがやはりそう簡単にはいかないようだ。

「こちらに向かってくる大きな反応があります！速い！」

頭上を大きな黒い影が通過していった。だが攻撃の意志はないようだ。もしあつたならこの程度の衝撃波ではないだろう。

「我の名はレイティシア、人の軍勢よ、話し合いに来た」

「歓迎しよう。私はレオン＝ライフハートだ」

「さて、挨拶はこの程度にして本題に入ろう。私たちの目的はここに大規模な転移魔術陣を作ることだ。その邪魔をするならいかなる存在でも排除する」

「私たちの要求は貴様たちがこの森を出ていくことだ。我の息子であるドレッドノートを殺した貴様たちに譲歩するつもりはない」

この竜は長くは生きているが交渉事をしたことがないのだろう。もしくは自分より強い存在と交渉したことがないのか。やり方が拙すぎる。これではまとまる交渉もまとまらないだろうな。だがこういう手合いが交渉するときが一番厄介だ。普通なら守る交渉のマナーを平然と無視するからな。まあ『交渉するとき』はだが

「譲歩するつもりがないならば話はこれで終わりだ。邪魔するなら強制的に排除する。総員に告ぐ魔術陣の作成にはいれ邪魔する者はこちらで殲滅する」

「なっ！貴様！我が言ったことが聞こえなかったのか！！」

竜が何か言っているが無視する。部下たちにさっさと仕事をするように指示を出す。

「おい！聞いているのかレオン！！ライフハート！我は貴様たちにこの森を出て行けと言ったのだぞ！」

鬱陶しいな。このトカゲは

「私も言っただ。『私たちの目的はここに大規模な転移魔術陣を作ることだ。その邪魔をするならいかなる存在でも排除する』と貴様の要求も程度によってはかなえてやることもできたが貴様は交渉そのものをしないと云ってきた。ならこちらは強硬手段にでるだけだ。いちいち貴様を交渉のテーブルに着けるような労力をかけている時間はないのでな。念の為もう一度言っておく『邪魔をするならば殺す』」

さてこいつはどう出てくるか。こいつがこちらを恐れているのはわかってる。なにせ息子を殺されたのにこちらに求めたのはこの森を出ていくことだけだからな。普通なら自分の息子を殺した人間を引き渡せくらいは言うだろう。それがなかったのは自分の実力とこちらの戦力を測りにかけて勝ち目は万が一にもないと感じたからだろう。

「・・・・・・・・・・どの程度の範囲を使うつもりだ？」

よし折れたな。こちらの要求が通ったことを前提に話を始めている。やはり力による恫喝を一度も受けたことがないからかそう言ったことに対する耐性がないようだな。

「此処から200メートルほど行ったところにある魔力だまりを囲

い込むように半径100メートルほど魔術陣を描きその維持のため常駐する人間の住居物資を集積する倉庫群などを作ることになる。よって面積にして10平方キロメートル程度を使うことになるか」

「ふざけるな！そんな事をすれば数え切れないほどの同胞が住みかを失うことになる！」

「貴方達エンシェンとドラゴンは数も数えられないのか？10平方キロメートルを使う程度なら、住みかを失うドラゴンはせいぜい34匹だ。その程度なら問題ないだろう？」

さてどこまで要求したら再び交渉を打ち切ってくるか、その見極めが大切だ。おそらく次に交渉が決裂した瞬間に殺し合いになるだろうからな。さっきはああ言ったがやはりエンシェントドラゴンを相手にすればかなりの被害が出る。出来る限り被害は抑えたいからな。

「……我ら竜種が繁殖することのできる環境は限られている。此処の他はコーグ山脈や海南島など世界で5、6カ所しかない。今が繁殖期でなかったならばまだ使わせてやる余地があったが、今我らは繁殖期の真っ最中だ。それにもかかわらず10平方キロという広大な範囲を貴様たちに使わせてやる余裕はない」

やはりタイミングが悪かったということか、今が繁殖期でさえなければおそらく私たちと戦うことを恐れたこの竜は私が行ったままの範囲の土地をこちらに使わせただろう。

まあ10平方キロというのは将来を見据えたものだから今回予定している規模の侵攻ならば2、3平方キロ程度の土地があれば十分だ。

「それではどの程度なら許容できる？」

「……せいぜい4平方キロ程度だ。それも貴様たちがこちらに悪影響が出ないように極力努めた場合でだ。そうでなければ

「ば我がいくら言ったところで他の者たちはお主たちを排除するために攻撃を始めるだろう」

4平方キロか、当面はそれだけあれば十分だが、問題は竜たちにできるだけ悪影響を与えないようにしなければならないところだ。4平方キロというのは魔術陣を作成し物資を集積する倉庫群を建てるのに必要な土地の面積であり、それとは別にこの魔術陣まで物資を運ぶ道を作らねばならない。そのためには大規模に森を開拓する必要がある。これはどう考えても竜たちに悪影響を与えるだろう。

やはりこいつらを排除するか？

「どの程度の範囲を使うつもりだ？」

我は目の前の男が恐ろしくてたまらない。

このレオンという男の前に立っているだけで今まで感じたことがないような怖気が背筋を走る。

それゆえか我はいつの間にか男の言葉を認めるかのような発言をしてしまっていた。

「此処から200メートルほど行ったところにある魔力だまりを囲い込むように半径100メートルほど魔術陣を描きその維持のため常駐する人間の住居物資を集積する倉庫群などを作ることになる。よって面積にして10平方キロメートル程度を使うことになるか」

ふざけているのか！繁殖期に入った今我らにそのように広範囲にわ

たつて土地を使わせてやる余裕はない。

「ふざけるな！そんな事をすれば数え切れないほどの同胞が住みかを失うことになる！」

「貴方達エンシェンとドラゴンは数も数えられないのか？10平方キロメートルを使う程度なら、住みかを失うドラゴンはせいぜい34匹だ。その程度なら問題ないだろう？」

我の怒りに満ちた怒声を聞いても男は平然とし、拳句こちら挑発するような言動を繰り返す。

その自信はどこからきている？

確かにお前が強いことはわかるがそこまでの余裕を持てるほどではないはずだ。

まさかこいつ以上の強者が来ているということか？

確かにこ奴の他にもかなり強い魔力反応があった。あれがそうなのか？

「我ら竜種が繁殖することのできる環境は限られている。此処の他はコーグ山脈や海南島など世界で5、6カ所しかない。今が繁殖期でなかったならばまだ使わせてやる余地があつたが、今我らは繁殖期の真つ最中だ。それにもかかわらず10平方キロという広大な範囲を貴様たちに使わせてやる余裕はない」

我の言葉に男は何やら考え込んでいる。どうするこの男以上の強者がいるのなら我だけでは到底勝つことは不可能だろう。しかし他の竜たちに助けを求めるようなことはできぬ。我以外の者のほとんどは卵を守るために巣から動くことができぬからな。説得するのは不可能だろう。

「……………それではどの程度なら許容できる？」

此処から200メートルほどのところの魔力だまりならば最大6平方キロほどなら他の竜種たちには多少影響が出る程度で済むだろう。しかしそれ以上は巢にこもって卵を守っているエンシェントドラゴンを刺激するだろう。そうなることを防ぐためにも多少狭い範囲を言っておくか。

「せいぜい4平方キロ程度だ。それも貴様たちがこちらに悪影響が出ないように極力努めた場合でだ。そうでなければ我がいくら言ったところで他の者たちはお主たちを排除するために攻撃を始めるだろう」

我はそう言った直後失敗を悟った。男の雰囲気が違う。これはどう考えても戦闘態勢に入っている。

こちらの嘘を見破ったか？

いやそれはないはずだ。この男に竜たちがどこに住んでいるかの詳しい情報はないはずだ。

ならばなぜだ？

なぜ急に戦闘態勢に入ろうとしている？

こちらへの脅しか？

なぜだ？

なぜだ？

なぜだ？

思考がまとまらない。

どうしたらいい？

「そこまでしておくのじゃ、レオン」

やれやれ危ないところじゃったわい。あのままいくと間違いなく戦闘が始まっておった。
全くレオン坊主は！

「何だオービス。今はどうすべきか思考しているだけだ。別に何もしてはいない」

「そこまであからさまに戦闘態勢に入っておるのにその言い訳は通らんと思うぞい」

実際無理じゃろ。エンシェントドラゴンのほうもレオン坊主が戦闘態勢に入っただけを受けて戦闘態勢に入ろうとしておるし、このままだけに戦闘になること間違いなしじゃ。

「お前は何者だ？」

いかんの、自己紹介を忘れておった。

「オービス＝カルドーンと申します。偉大なエンシェントドラゴン殿」

「ふむ、その者と違って礼儀をわきまえてるようだな。我の名はレイティシア、この森に棲む竜たちの代表だ」

「さて早速となりますが、レイティシア殿は4平方キロまでなら土地を提供してもよいそうですね？」

「……ああ、もちろんこちらに悪影響がないように配慮したうえでだが」

「分かりましたそれでは4平方キロの提供で結構です。ご協力感謝します。よし帰るぞい、レオン」

レオン坊主が何か言いたそうにしているが無視じゃ無視。

これ以上ここにいてもいいことなんて一つもないわい！

そう思い足早に歩いていく、その後ろからはレオン坊主が黙々とついてくる。

後で説明を求められるじやろうから今の内に考えを整理しておかんといいかの。

「ここまで来れば大丈夫だろう。オービスなぜあんな条件で交渉を成立させた？あのまま私に任せてもらえばもつといい条件で交渉を終わらせることができた」

「……ふう、簡単なことじゃ。あのままお主に交渉を任せておれば確かにより良い条件で交渉を終えることはできたじやろうが、その代わり竜たちはこちらに対してかなりの不信感を抱いたじやろう。場合によってはこちらの都市を襲うものたちも出たかもしれん。そんな結果をもたらず可能性が高い交渉を見過ごすことはできん」

「その程度なら私も考えていた。心配せずともこの森の竜たちを殲滅するくらいのことをして10年は抑え込める自信があったからやっていったんだ」

信じられんの。そんなことをしたら間違いなく竜たちはこちらと敵対する。竜王自身が出張ってくる全面戦争もあり得るじやろう。

「信じがたいの。その根拠は何じゃ？」

「ライフハート家には竜王に何でもいいから一つ願い事をかなえてもらう権利があるからだ」

言葉が出んの。そのような権利を竜王から貰うとはいったい何をしたんじゃ？

「いったい何をしたんじゃ？そこまでの権利を貰うなど、よほどの

ことをしなければ不可能じゃと思うんじゃないが」

「私が直接何かしたわけではない。ただ私の先祖の一人が、昔大量の竜の卵が盗まれるという事件が起こった時それを解決したというだけだ。今生きているエンシェントドラゴンのうち3匹に1匹はその時助けた卵から生まれた奴のはずだ」

予想外じゃ。こやつの家にとこれまでのことをした奴がおるとは、一応こ奴のことを調べたときに家のことも少し調べたがこれは改めて調査したほうがいいじゃろうな。

「お主がちゃんと考えていたことはわかったが、なぜその権利を今回の作戦のためにあらかじめ使わなかったのじゃ？ いやそうでなくともお主が竜王に魔王との戦いに参加するように願うだけで多くの竜族がこちらに味方したのではないか？」

「そう言われると耳が痛いはこちらにも事情がある。魔王との戦いはただ勝つだけではだめだと判断したのでな。詳しい事情は言えん」

「

ふざけておるのか！！と怒鳴りつけたところであるが、レオン坊主の眼を見る限りそうしても効果は薄いじゃろう。

「分かった詳しいことは聞かん。じゃが今後は魔王軍に勝つためにより一層の働きを期待するぞい」

「イーリアの国益に反さない限りは」

神歴5919年ゴレーの月49日

連合軍が通称『聖域』と呼ばれる森に転移魔術陣の作成を始める。森の確保にはイーリア連合王国特殊戦団と魔術教団の部隊が参加し、邪魔をしたエンシェントドラゴン『ドレッドノート』を殺すなどし

て森の確保を行った。ドラゴン側との軋轢を生んだこの作戦がのちにどのような影響を与えるのかは誰も知らない。

勇者達の成長（前書き）

久しぶりの更新です。お待たせしてすみません。

勇者達の成長

私はひたすら地下道を走っていた。

「はあ、はあ、はあ」

息が整わない。ここまで体を酷使したのは久しぶりね。この頃は私も強くなったからと油断していたようで不意を打たれた挙句、和也達と分断されてしまった。しかも私の後ろからは50を超える魔物が追いかけてくる。普通の魔物ならとうに追いかけるのを諦めるはずだけど、やはりこいつらは魔王の手下なのだろう私を執拗に追いかけてくる。

正直体力も限界が近づいている。力尽きる前に魔物たちを迎え撃ちたいが、場所が悪い。

此处では狭すぎてまともに魔法が使えない。下手をすれば一瞬で生き埋めになる。

狭いことを逆手にとって1匹ずつ片付けようとしても、距離を置いて弓を使う個体が攻撃してくる。

一人ではどうしようもない。魔術の威力が高過ぎることを嘆く時が来るなんて思っていなかった。

焦りだけがどんどん増していく。5方向に分かれた分岐路があるのが見える。この地下道には分岐が多い。元が要塞の地下水路だからしょうがないとも思うが、マッピングに慣れていない私は逃げるのに必死で道なんて覚えていない。逃げ切ってもそこからが大変だと思つとますます焦りが増す。

「……いや後のことを考えててもしょうがない。今どうするかを考えないと」

んっ、今見えたのは……

入ろうとしていた左端の道から道を変更し、急いで右端の道に入る。

半分だけ開いた扉が見えてくる。

よしっ！見間違いないじゃなかった！！

開いている隙間から中に入る。大きな広間のような場所に出たどう考えても自然にできたものじゃない。

そこかしこに人や動物の骨が散乱しているのが見える。嫌な予感が走ったが無視する。

そんなことよりここが広いことが重要だ。ここなら建造物に被害を与えることなしに魔術を使い、魔物たちを殲滅できる。

立ち止り息を整える。魔物たちが来るまであと1、2分はあるだろうから準備する時間は十分ある。

建物に被害を与えず魔物だけを殺すには貫通力の高い魔術は使えない。

それに古い建物だから急に熱したり、冷やしたりしても危ないだろうから除外する。となると使える魔術はかなり限られてくる。けどオービスさんに叩き込まれた魔術の知識は伊達じゃない。

この状況で使える魔術なんでダース単位で用意できる。この魔術が良さそうかな。

よし使う魔術は決まった。あとは使うだけだけど、念の為詠唱して精度を上げておこうかな。

できる用心はしておかないとどんな後悔をすることになるかわからない、これから使うのはかなりいろんな意味で物騒な魔術だしね。

入口と自分に二重に魔術障壁を展開する。

「集え風、瞬きの間に集まりて敵を打ち払う刃とならん」

周りから詠唱に従って風が集まり風の刃を形成していく。

よし魔物たちの集団が広間の入口にやってきた。ナイスタイミングよ。

今唱えているのは劣化版ウィンドカッターだ。普通のウィンドカッターは魔力で少しだけ圧縮した空気を覆って敵に向けて撃つが、こ

れは魔力で徹底的に圧縮した空気を敵に撃つ。もちろん魔力で空気を覆った普通のもののほうが切れ味は大きいが、この劣化版ウィンドカッターの真価は切れ味ではない。

私は風の刃を魔物たちに向かって放つことなくどこまでも風を集め刃に圧縮する。

広間の中は風が吹き荒れている。入口のあたりは風が吹いていないが、魔術障壁がなかったら飛んでくる骨であちこちにあざを作ることになっているだろう。魔物たちは魔術障壁に邪魔されて広間に入ることができずにいる。けれどそこまで強力な魔術障壁は張っていないからすぐに破られるだろう。けれどあの障壁を作った理由は魔物の足止めではない。ついに魔術障壁を破った魔物たちが広間に足を踏み入れる。

破裂する魔物たち。

一瞬で40匹以上が破裂して死んだ。生き残っているのは広間に入らなかった15匹程度だ。そのうちの何匹かは腕や足が破裂して戦えないだろう。魔物たちは何が起こったか分からずに混乱している。よし勝ったわ!!

「ウィンドカッター!!」

満を持してウィンドカッターを放つ。

ウィンドカッターが放たれたことが分かった魔物たちが通路を逃げて行こうとする。

けど逃がさないわよ。

箱のような形で入口に張っていた魔術障壁の入口側の一枚を解除する。

その瞬間通路から魔物たちが吸い出されて入口の魔術障壁に当たる。逃げて行ったすべての魔物が通路から吸い出されたのに数秒置いて

ウインドカッターが炸裂した。

「……………本当にあれは炸裂したと言ったほうがいい。知識として知っていたがここまでの威力があるのか。」

劣化版ウインドカッターは魔物たちに当たった瞬間、その圧縮されていた空気を魔物たちの方向に開放した。この広い広間のほとんどの空気を圧縮した風の刃だ。それが解放された時の風速は時速200キロを超えるだろう。その風に押しつぶされて魔物たちは壁のシミになってしまった。

魔術の詠唱を止めたから風は収まってきているが……………
・失敗したな。建物に被害がいかないような魔術を選んだつもりだったのに炸裂した風の影響で、幾つかの柱が吹き飛んでしまった。天井からパラパラと小石が落ちてくる。

急いで出口まで走るが天井からはかなりの大きさの石が落ちてくるようになってきた。

出口が遠い。なけなしの体力を振り絞って走っているがなかなか出口にたどり着けない。

落ちている石に足をとられる。

転ぶ！

その瞬間に一気に天井が崩壊した。

「くそ！凜は無事なのか！？」

地下道で凜とはぐれてからずっと和也はこの調子です。マリーやゴドー、シンシアもかなり動揺しているのがわかります。そういう私も凜なら大丈夫と信じながらも不安をぬぐい去ることができません。やはり魔王の配下と思われる魔物たちが出たからでしょう。

私たちは魔王の大きな策略を何度も邪魔しています。

その私たちを排除する気なら、かなりの強さの魔物を放ってくることが予想されるだけに凜が一人になったことが悔やまれます。だが立ち止ってはいただけません。魔王の配下たちにまた見つかる前にこの要塞跡に棲む魔物を倒さなければなりません。此処の魔物が魔王の配下に加わるとかなり厄介なことになるでしょう。

凜の搜索と魔物の討伐どちらを優先するべきでしょうか？

「……………いえよく考えたらどちらか片方を選ぶ必要はないでしょう。」

「皆さん、このままここにいてもしょうがありません。もと来た道を戻っても魔王の配下とは合わせるだけだと思いますので、この道をこのまま進んで要塞内を探索して依頼の魔物を見つけましょう。はぐれた凜も私たちが要塞跡を目指していることは知っていますから、地下道を通って要塞跡を目指しているはずです。事前に知らべた情報にもあったように地下道から要塞跡に至る道はいくつかあります。その道のどれかを通して凜もこの要塞跡に来ていてもおかしくはありません。魔物の搜索と凜の搜索どちらも一緒にやりましょう。」

この私の提案を受け入れてくれるでしょうか？これが受け入れられないとかなり困るのですが、

「そうね。セリカの言う通りにしましょうか」

「そうだな。俺もセリカの意見に賛成だ。此処でじつとしてても何にもならねえ」

さすがにゴドーとシンシアは経験を積んでいるだけあって判断が早いですね。後は残りの二人が賛成してくれるかが問題ですが

「……………私もそれで構いませんわ。凜なら大丈夫

だと信じています」

「・・・・・・・・・・・・・・・・俺もセリカの意見に賛成する」

よかった全員賛成してくれて、下手に意見が割れると魔物の討伐の凜の搜索もできなくなってしまうかねなかつたでしょうから。方針が決まり皆が動き出しました。

「そうと決まったらなら急いで凜を探そう！」

和也も凜が心配なのがセリフに出ていますがうじうじ悩んでいるより、とりあえず動いているほうが和也らしいですから。

凜が心配だ。

地下道で魔王の配下に不意打ちを受けたときにはぐれてしまつてからもう3時間は経つ。

念話を使おうにもなぜかノイズだらけで近くにいるマリーたちに使つてもかなり聞き取りにくい。

これでは離れた場所にいる凜に念話が届くことはないだろう。それでも一縷の望みをかけて念話を凜に飛ばしているがやはり何の反応もない。

最悪の場合が頭をよぎってはそれを振り払う。要塞跡を探索している間中それを繰り返している。

みんなに心配をかけないように空元気を振り絞っているけど自分でも戦闘に集中できていないのがわかる。おかげで普段なら防げたであろう行で気を受けそうになってひやりとした場面もかなりあった。

「和也、ぼーっとしてないでしっかり私を守ってよ。私は接近戦はぜんぜんだめなんだから」

「ごめんマリィ。次からはちゃんと集中するから」

「さっきも和也そんなこと言ってなかったっけ？」

マリィも変わったなあ。前は体面気にして猫被っていたけど、今ではこんなだ。

「マリィ、そのくらいにしておきなさい。和也君にかまってほしいのはわかるけどそんなにツンツンしてたら愛想尽かされるわよ」

「わっ、私は和也にかまってほしくなんか」

「ない？」

「……ええっと、ないわけでもないというかかまってほしいというか」

最後のあたりは何と言っているか分からなかったが、凜とはぐれてから落ち込んでいたマリィもからかわれて少し元気が出た様だ。さすがシンシアさん122年も生きているエルフなだけある。大人だ。いろんな意味で

「なーんか和也君が失礼なこと考えているような気がするけどまあいいか」

「……女の勘は怖いな。心読むとかどんだけだよ。」

「そうだな和也、女性をなめたらいけない。女の感は未来予知かと思える精度で的中するからな」

「ゴドーお前も俺の心読むなよ」

お前は女じゃねえだろうが。

「俺は男の心なんて読めん！・・・・・・・・女心はもつと読めんが」

それはわかる。女心はミレニウム懸賞問題より複雑で難しい。

「ただ和也は顔に出やすいからな。顔見れば何考えているか大体分かる」

・・・・・・・・そうか俺はわかりやすいか。

「まあ腹に一物持っている野郎どもよりよっぽど好感を持てるから気にするな」

「ありがとうよ慰めてくれて」

そんなやり取りをしているうちに俺の心の焦りは晴れていった。

やっぱり仲間っていいな。そんじゃ気合い入れなおして探索するか！

そんなことを思いながら探索を続けていたが、何の成果も上がらない。
い。

依頼の魔物どころか普通にいるはずの魔物すら1匹も見つからないとはどういうことだ？

見つかるのは大量の白骨死体だけだ。

5年前にこの砦が魔王軍によって陥落してから放っておかれたのだろう。俺たちではどうしようもない量だ。せいぜい心の中で冥福を祈ることくらいしかできない。

「みんな気をつけろ」

先頭を歩いていたゴドーが注意を促す。

「どうかしたのか？」

「この先の扉からかなり嫌な気配がする。たぶん依頼の魔物か此処に来ている魔王の配下のボスだろうな」

「それは見逃せないな、俺とゴドーが突入するから魔術で援護してくれ」

「分かったわ」

「分かりました」

「私に任せなさい」

シンシア、セリカ、マリーの準備も終わったようだ。よし突入するか。

「行くぞ、ゴドー！」

「おう行くぜ！」

二人で扉を蹴破り突入する。

扉が木っ端微塵に砕けながら吹き飛んでいく。

扉の破片にあたって吹き飛ぶ魔物もいるが、行動が早い！

もうこちらに気づいて状況を把握し、態勢の立て直しを図っている。今回の魔王軍のボスもやはり優秀だ。

「勇者たちだ！！ディフェンダー前に出る！おい、マクガスお前は増援をよこせここでもなくらいでも大丈夫だろう？」

「そうだなそれが私がここにいた理由の一つだからな。死体がいくらでもあるここならば私のネクロマンシ も絶大な効果を発揮する」

「ネクロマンシーだと！セリカ、マリー、シンシア後ろに気をつけろ！今まで見てきた白骨死体がネクロマンシ でスケルトンとして

操られる可能性が高い！」

畜生、依頼を受けた時にもらった情報の中に『ネクロマンシ』を使える可能性がある』と書かれていたのに何で忘れていた！こうなったら速攻で終わらせるしかない。

持久戦になつたらこつちが物量で押しつぶされる！

「ゴドー、和也！大魔術を使ってさっさと終わらせるわ。時間稼ぎをして！」

「「わかった」」

「セリカは魔術障壁で壁と天井を覆って頂戴。私の使う魔術の余波で崩れたら生き埋めになちやうかもしれないからね、シンシアは後ろの警戒をお願い、詠唱中に後ろから襲われちゃたまらないわ」

「分かりました」

「任せて頂戴」

よし、しばらくこいつらを抑えていれば、マリーの大魔術で一掃できる。

こちらに切りかかってきたゴブリンの剣を受け流し、袈裟掛けに切り捨てる。剣を振りぬいた勢いを利用して体を回転させ、横から迫ってきていたオーク2匹を真つ二つに切り裂く。

悪寒が走る！

咄嗟に体を前にころがす。耳元を唸るように音を立てて大きなハンマーが通過していく、糞！いつの間に回り込まれた！？こんなでかいハンマーを使う奴なら最低でも身長は5メートルはあるはずだ。だがそんなでかい図体を見逃すなんてありえないだろ！

転がり続けて距離を離し、立ち上がり振り向くとそこにいたのは骨だった。

正確に言うとも骨になったサイクロプスだ。

骨だけのくせして冗談のようにでかいハンマーを易々と振り回して

いる。

「愚かものどもめ！我がネクロマンシ は人の死体だけでなく魔物の死体をも操る！今まで貴様が倒した魔物どももがネクロマンシで蘇らせてくれるわ！」

マクガスとかいう奴が勝ち誇ったような顔をして言っただけだ！

「畜生どうする和也。俺たちがいくら倒そうとこいつら次々と復活してくるぞ！」

「ああほんとにうんざりだな。きりがなかったらありやしない」

「ほら前衛の二人愚痴愚痴言っただけでちゃんと魔物を防いで頂戴よ。あと少しで魔術も完成するからそれまでの辛抱よ」

「言われなくてもやってるよ、シンシア。多少の愚痴くらい許せ」

「はいはい。完成したわ。二人とも巻き込まれないように射線あけて！」

よし完成したか！

「ゴドー下がるぞ！」

「分かってるよ！俺だって巻き添えで死にたくねえ！」

俺たちは急いで後退する魔物たちが鬱陶しいが今は多少の傷を覚悟で後退することを優先する。

「よしもう大丈夫だ！撃つていいぞマリー」

「了解つと、焼き尽くし蹂躪せよファイヤートルネード」

マリーそれを室内で普通撃つか？しかもその魔術は広域破壊魔術だから射線あけた意味ないだろ。

炎が広間を蹂躪する。室内にもかかわらず魔術によって引き起こされた竜巻が炎を纏い、敵を吸い寄せ焼き尽くす。

というか熱風が吹きつけて暑いな。汗が止まらない。魔術障壁である程度軽減されているからこの程度で済んでいるんだろうが、それにしても暑い。

やっとマリーアの魔術の効果が見える。さてもう全滅したと思うが一応気を抜かないようにしておかないとな。

「やれやれこれで終わっただろう。和也疲れたな今回は」

「ああ、そう「気をつけて二人ともまだ終わってない！」

なに！煙が晴れてきているが確かに何か動いている影がある。糞アレを受けてまだ生きているのか！？

「危なかったですね。やはりあなたたちの非常識な魔力に対する対抗策を用意してきて正解でしたね」

「なに！」

「その割には死にかけのように見えるが？」

魔王の配下のやつは口調こそ偉そうだが全身に火傷を負いどう見ても瀕死の重傷だ。

「ええ、私は死ぬでしょう。ですが私の代わりにマクガスは生き残ります。あなたたちは終わりです」

「マクガスとやらが一人で何ができる！」

いくらマクガスという奴が強くて1対5だ。負けるはずがない。

「言ったはずだ。俺はネクロマンシが使える。あの程度の炎では肉は焼けても、骨までは焼けない」

周りを見渡すと次々と立ち上がるスケルトンたち。まずい勝ったと思つて気を緩めたせいで後衛のマリーたちを守るのが間に合わない！

「糞！邪魔だどけ！」

「前衛の足を止める！そのうちに後衛を殺す」

畜生俺は守れないのか。スケルトンたちの一部がマリーたちのところに到達する。

その瞬間、体を浮遊感が襲う。

なっ、床が抜けるだど！なぜか知らないが一気に広間の床が崩壊していく。咄嗟に残った床の一部にしがみつかなければ俺もスケルトンどもと一緒に落ちていく羽目になつただろう。

「マリー、シンシア、セリカ、ゴドー無事か！？」

「大丈夫よ」

「問題ないわ」

「大丈夫だ」

良かった落ちた奴はいないみたいだ。周りを見渡すと俺達の他には誰もいない。

「あいつらは下に落ちたのか？」

「ああ全員下まで真つ逆さまだ」

ということはこれで本当に片付いたと言うことか？いや気は抜けない。さつきはそれでひどい目にあつた。

「気を抜かないでくれ。奴らの死体を確認するまで嚴重に警戒しよう」

さて、死体を確認するためには下に降りなければいけないがどうやって降りたものか。

・・・・・・・・・・・・・・・・無難に飛行魔術で降りればいいか。

「俺とゴドーが下に飛行魔術で降りるから、援護お願い」

「「分かったわ」」

「ゴドーいくぞ」

「いつでもこい」

ゴドーとタイミングを合わせて飛び降りる。着地し周りを警戒するが動くものはいない。

「ゴドー動いている奴はいるか？」

「いや全員死んでる。おっ、こいつはマクガスとかいう奴じゃないか？」

ゴドーに言われた死体を見てみると確かにあのマクガスとか言われてたやつの死体だ。

よしこれでいきなり死体が動き出して不意打ちを受けることはなくなった。

さて後はあの魔王の配下のやつを見つければ残りは雑魚だけだ。

そう思っただけで周りを探そうかと思っただけでとすぐ近くに瓦礫に押しつぶされたそいつが見つかった。

よし、周りにはもう動いている奴もいないようだしもう大丈夫だな。そう思い上に残った3人に声をかけようとしていると

「和也！そこからまっすぐ5メートルくらい進んでみて！なんか人が倒れてるみたいだから」

マリーが念話で人を見つけたと言ってきた。こんなところに人が？とも思ったが、もしかすると凜かもしれないと思って急いで言われた方向に進むが瓦礫が多くて進みにくいかといって、飛行魔法使うような距離でもないしな。

・・・何とか苦労したが言われた場所までたどり着いた。

「マリーどこらへんだ？」

「和也のすぐ右の瓦礫のところです」

すぐ右ってここか？おっ、いた。凜だ！急いで怪我の有無を確認する。

「マリー、凜を見つけた。気絶しているみたいだが特に目立った怪我はないよ」

「よかったですわ。みなさん凜が見つかりましたわ」

その報告に皆が念話で歓声を上げている。本当によかった。瓦礫に押し潰されてもおかしくなつたのに全く怪我がないなん本当に運が良かった。

「皆魔物も討伐したし、凜も無事見つけた。帰ろうか、今回は結構疲れた」

俺の提案に皆が賛成の意思を伝えてくる。よしまたあの長い地下道を凜を背負いながら進むことになるのを考えると少し気が滅入るがもう少しだけ頑張るか。少し役得もあるし。

そうして街まで帰ってきたそうさ。やっと起きた私にそうセリ力が説明してくれた。

「ずいぶん心配かけたみたいでごめんね」

「本当に心配したんですよ。凜なら大抵のことが起きても無事だとも思っていました。がそれでも心配なものは心配なんですから」

「心配したのよ」

「今度から気をつけなさいよね」

「本当にごめん！」

ほんと謝り倒すしかない。

「ああでも、和也とゴドーには謝らなくて結構ですよ。あの二人背負ったあなたの胸の感触を楽しんでいたみたいですから」

「ほんとデレデレしちゃってさ。腹立つたらありやしないわ！」

ほほう、あの二人そんなだったんだ。此処まで運んでくれたことを感謝しようと思っていたけどこれは

OHANASHI、しなきゃいけないわね。

「その二人はどこに行ってるの？」

自分でもちよつと声が怖くなっているのがわかる。

「凜、声がかなり怖いわよ。あの二人はギルドに今回の依頼の報告に言っているはずよ」

マリーがちよつと引いてる。他の二人見ていると苦笑されていた。シンシアは年上の余裕だと納得できるが、同じ18のセリ力に苦笑

されるのは納得いかない。

「そじゃ今度は凜の話聞かせて、私たちと離れた後何があったの？」

シンシアが聞いてきたので私ははぐれた後あったことを話したけど、魔物を倒すために劣化版ウィンドカッターを使ったといったら怒られてしまった。

「なんてもの使っているんですか！ あれは室内で使うようなものじゃないでしょう！」

「それ言うなら室内でファイヤートルネード使ったマリーも相当なものだと思うんだけど」

「口答えしない！ あれは私がみんなの防御をしつかりしていたから使えたのであつて、そうじゃなかったら使えなかったわ！」

「いやでも、あの魔法一応効果範囲を限定するのが楽だから大丈夫だと思っただけど……」

あれ？　なんか頭抱えられてる。

「……和也や凜が非常識だと思っていましたかこれほどまでとは思いませんでしたね」

「えーと、私はその魔術を知らないからよく分かんないから説明してほしいんだけど」

「そうですね、それでは説明しますわ。凜が言っていた劣化版ウィンドカッターこの正式名称は「エアディバイド」と言います。この魔術はウィンドカッターから派生したものではありませんがその殺傷能力、効果範囲はともに元となったウィンドカッターの比ではありません。この魔術はウィンドカッターとはちがい空気を圧縮して風の刃を作りますが切れ味は普通のウィンドカッターのほうが数段

優れています。しかしこの魔術の真価は切れ味ではありません」

「切れ味ではないなら何なの爆発でもするの？」

「それかもしれませんがそれでもありません。この魔術の真価は空気を集めるということです」

「・・・爆発はするんだ。けど空気を集めるのに何の意味があるの？」

「マリー空気を集める意味がわからないのか納得できないようだ。だが私にはその意味がわかる。元の世界ならだれでも知っていると思うが、空気がなければ陸上の生き物のほとんどは生きることができない。」

「生き物は空気を吸うことができれば生きることができません。マリーも息を止めたまま生きることができないでしょう？」

「そうね。そんなことはできないわ。でもそれが何の関係があるの？ 凜は魔物を窒息させたのではなくて破裂させて殺したのよ」

「それはですね。凜が魔術障壁で空間を限定し、その中から徹底的に空気を集めたからです。世界中の空気を集めることは凜にも無理でしょうけど、限定した空間内の空気を集めることはできます。そして魔術障壁の中から完全に空気を失くすこともできる」

「それが何なの？ 空気がなくても破裂することなんてないでしょう？」

「科学が発達していないこの世界ではマリーの言う様な事が普通だ。しかし向こうで高校程度の理科なら習っている私はそうじゃないことを知っている。」

「いえ完全に空気がない状態にした空間に生き物が入り込むとよほど強固な魔術障壁を張っていない限り、抵抗する間もなく入った生き物は破裂します。原因はわかっていますませんがそんなことが起こる

ことはわかっています」

「じゃあ魔物が破裂したのは凜が空気を失くした空間に魔物が入ったから？」

「そうなりますね。その後撃った空気の塊はおまけみたいなものです。その空気をない空間を維持するための薄い魔術障壁はかなり繊細な制御を必要とし、失敗した場合自分もその空間めがけて吸い込まれてしまい最悪死んでしまいますから使う人間はそういない魔術ですが、それでもその殺傷能力と隠匿性は格別です。なにせ空気がなくなるだけでその他の変化はありませんから、慎重に魔力探知でもしない限り気づけません」

「ずいぶん凶悪な魔術を使ったわね」

「全くもってそうですね」

あのマリー、セリカ、二人ともそんな呆れたような目はやめてもらえないかな。かなり心に響くんだけど。

「なるほど、やっぱり凜も非常識なのね。……………」
たのしい旅になりそう」

そしてシンシアの言葉にとどめを刺された。

作戦前夜（前書き）

急展開。批判は覚悟しています。が元々の予定を達成するためには
これが必要でした。

作戦前夜

いよいよ明日だ。明日勇者たちの魔王領侵入を援護するための大規模反攻作戦『レ・コンキスタ』が行われる。この作戦のために集められた兵力は200万を超え、その兵力を問題なく維持するために使われる資金はイーリアの国家予算の10倍近くにもなる。これだけの兵力と資金を動員する作戦はそう何度も行えない。国の財政が崩壊することを厭わないならばあと一回程度なら行うことができるだろうが、それでは魔王を倒したとしても深刻な国家危機が待っているだけだ。

だが私たちが行うのは陽動にすぎない。

これだけの規模の作戦にも関わらず所詮は陽動なのだ。

いくらこの侵攻作戦が順調に進もうと勇者たちが魔王を倒すことができなければ結局じりじりと押し戻されることになる。

しかも勇者の敗北により兵たちの指揮は下がるところまで下がるだろう。そんな中の撤退戦を行うことになる。

甚大な被害が出ることは想像に難くない。

私たちが最善を尽くすことはもちろん必要だが、私たちが最善を尽くしたところで勇者たちが敗北すれば結局は負ける。

人類の命運はたった5人に任されている。今ほど自分に魔術の才能がないことを呪ったことはないだろう。私に一般の兵士ほどでもないから回復魔術と身体強化魔術以外の魔術を使う才能があったら私自ら魔王討伐に行くことができたのに。

まあ所詮願望にすぎない。

現実として私には才能がないし、魔王討伐に向かったのは勇者とその仲間たちの合わせてたったの5人だ。いかな。ずいぶんとネガティブになっている。最悪を考えることは指揮官の役目だが、そのあまり悲観的になりすぎるのは害にしかない。

「レオンハート団長、エリス」コールライトです。少しお時間をよろしいですか？」

「副団長か、構わん入れ」

「失礼します」

ふむ、さすがに副団長でも緊張しているようだ。動きが少々硬い、これだけ大規模な作戦が行われる前夜だから仕方がないともいえるが、それでも士官ならそれを他人に悟らせないようにすることが必要だ。指揮官の動揺はたやすく兵たちに伝染する。

「用件は何だ」

「明日の作戦の準備すべて滞りなく終了しました。あとは明日を待つだけです」

「了解した。よくあの量の物資を無事に輸送してくれた。他には何か報告することはあるか？」

一番心配だった物資の輸送が無事に終了した。これで後は作戦を無事に遂行すればいいだけになったな。

「いえ報告は以上です。……………ですが団長少しよろしいですか？」

「何だ」

ずいぶんと思い詰めたような顔をしているな。こんな顔をするとは相当深刻な悩みかそれとも罪の懺悔か、それくらいしか思い浮かばないな。しかし、副団長が明日の作戦において精神的に不安定なのはよくないな。まあ、部下のメンタルケアも上司の仕事の内だからな。できる限りのことはしてやろう。

「ええっ、その、何というか」

「いつもの団長らしくなくはつきりとしないな。大抵のことなら怒らん言ってみろ」

そう私が言ってもなかなか話を切り出そうとしない。

いやこれは切り出せないのか？となると精神に干渉する類の魔術が使用されているのか？

私は自分の精神干渉は解呪できても他の人間に行われている干渉は解くことはできない。

困ったな。どうすべきか。そんなことを考えて時間を潰しているとどうやら副団長の心の準備ができた様だ。

「言う決意ができました。聞いてもらえますか？」

「ああ」

「私、エリス」コールライトはレオン」ライフハートを愛しています」

これはまた予想外な告白だ。私とエリス副団長の付き合いは2年程度しかない。その間に優しくしたこともなかったはずだ。というよりプライベートの話をエリス副団長に聞かれたのはあのセリカとの婚約を破棄したときだけだ。仕事ではいつも一緒にいたが、プライベートでは何の接点もなかったはずだ。

それなのになぜだ。

何か裏があるのか？

しかし身辺調査は副団長に就任させるときに徹底的に行った。極秘裏に記憶を覗くなんて違法行為もやって調べた。その結果潔白だったから副団長にしたんだが、就任した後に弱みでも握られたのか？それともイーリア国内において強大な権勢を誇るライフハート家の権力に惹かれた？

言葉どおりの意味ならそれに越したことはない。

別に今は婚約者もないし、今度の戦いで死ぬことになるかもしれ

ないから家にいる養子の子供が成人するまでの間、代理当主にして
もいい。

副団長には我がライフハート家の当主を一時的になら担う素質がある。あくまで一時的にはだが。あまり長いと精神と体が持たないと思うが。だが全くプライベートでも接点がなく今までそんなそぶりも見せなかった副団長が、突然私を愛していると言ってくるなど不審すぎる。

信じられる要素が見当たらない。結論として

「当然そんな事を言い出すなんて、精神操作でもされてるのか？」

と思うしかないさつき戯れに考えていたことが一番現実的とはどう
いうことだ。

「精神操作なんてされていません！ 私は自分の意志で貴方のことを愛しているんです！」

これまた情熱的だな。しかし、徹底した精神操作は操作された本人に何の違和感も与えることなく本人を操ることができる。本人がどう思っているかなんて関係がないのだ。もっともそれを言い出したらきりがないのである程度のところではこれは本人の意志だろうと納得するしかないのだが、どうしたものか。

「……」 本心では副団長の告白は本当に心から出たものだとかっている。だが俺はいまだにセリ力を愛している。俺とセリ力が復縁することはあり得ないだろうが、それでも俺はセリ力を愛している。

いつになったら諦めがつくのかは分からないが、諦めがつくまで政略結婚でなければ結婚するつもりはなかった。

さてどうするか。この告白を承諾するメリットとしては明日の作戦において副団長の精神が安定するだろう。また私が戦死したとして

この反応だと断られると思っていたのだろうな。

「……………ほっ、本当ですか？」

ずいぶんと弱々しい声を出すな。普段の様子からは考えられない。

「本当ですよ。さすがにこんなことで嘘はつきません」

実際は時と場合によりますけどね。

「ありがとうございます！」

泣き崩れてしまったか。此処まで嬉しがられるとメリットとかデメリットを考えて告白を受けることにした自分がひどく愚かに思える。こんな私を愛したことを後悔しないといいのだが。

「さて、今晚はもう遅いですから、明日に備えて天幕に戻ってください。明日寝不足で全力が発揮できないなんてことがあつてはなりませんから」

「……………はい、分かりました。それでは失礼します。」

さて恋人となった以上は少々のリップサービスも必要でしょう。

「これからは2人きりの時はレオンと呼んで構いませんよ。一応恋人になったわけですし、それではお休み、エリス」

「おっ、おやすみなさい、レオン！」

名前を呼ばれたくらいであそこまで動揺するとは、副団長は恋愛経験がないんでしょうね。

それを考えると彼女の心を計算してよりこちらに心酔するようにし

むけようとしている自分の醜さを見せつけられる思いだな。

さて彼女を幸せにすることを状況が許せばいいんだが、厳しいだろうな。

まあライフハート家に生まれたものとライフハート家の者に恋したもののたちの宿命だろうこれは、我が家系には今まで幸せな結婚をした者はほとんどいないからな。

今回もその例に漏れないだろう。

さて私も明日の作戦を成功させるために最悪の状況の想定と作戦の見直しを続けるか。

そうして決戦前夜の夜は更けていく。

作戰開始

「全軍に通達じゃ。現時刻を持って大規模反攻作戦『レ・コンキスタ』を発動する。進撃じゃ！」

オービスの念話が全軍に響き渡る。

遂に作戦が始まった。

人類の未来を賭けた決戦だ。

負けることは許されない。

この作戦が失敗すれば、たとえ勇者たちが魔王を倒しても魔王軍の残党を直ぐに討伐する余裕がなくなり、その間に新たな指揮系統が完成するだろう。

そうしなければまた泥沼の殲滅戦に逆戻りとなる。故に負けられない。

負けることは許されない。

「イーリア特殊戦団団員に告ぐ！ この作戦に失敗は許されない。」

失敗すれば我ら人類に勝利はない。

護るべき者を思い浮かべろ！ 死してなお消えぬ信念を抱け！ そ

死なずにただ敵を殺し続ける。お前たちが捧げた命

「は世界を救う道しるべとなる！」

「「「「「うおおおおおおおおおおお
 おおおおお「「「「

戦意高揚の激励はこれで十分だろう。さてこれからはあまり大きな声も出せん、大声で作戦指揮などしていたら、直ぐに私が指揮官だとばれるからな。故に

「エリス副団長、事前に言っていた通り私の持つ指揮権の全てを預

ける。存分に指揮しろ」

「了解しました！」

緊張しすぎてはいないが気が緩んでいるわけでもない。多少の興奮はあるようだが熱狂しているわけでもない、か。どうやらエリスはベストコンディションでこの作戦に臨んでいるようだ。これなら任せて安心だろう。

「私は単独で出陣する。援護が必要な場合は念話で一方的に言ってくれ」

「分かりました。武運を祈ります」

さて、あと少しで魔国内に入る。やはり先陣を切るものたちの死傷率が一番高いからな。私が先陣を切ることでは少しはそれが下がればいいのだが、まあ私が今の状況でできることは先陣を切り、いかに多くの敵を殺すか、しかないからな。

思う存分に殺すでしょう。

今日の天気は晴れ時々雨になるだろうな。

雨具はないから濡れんようにしないといけないな。

「はい、指揮権の移譲は問題なく終わりました。問題なく行動を起こせます。はい、何の問題もありません。後は決行するだけです。わかりました。それでは作戦『パラサイトワーム』を発動します」

数が多いな。まだ接敵して戦闘が始まってから1時間と経っていないはずだそれなのに殺した魔物の数はゆうに5000を超える。魔国内が魔物の巣窟だということはわかっていたつもりだが、まだ認識が甘かったようだ。これは魔物が敷き詰められていると言ったほうが適切な魔物の密度だな。

1発の魔術や魔法でもまとめて5、6匹が吹き飛ばせるのはいいが、尋常じゃない数の魔術や魔法を味方が撃っているのに数が減ったように思えん。

このままでは支援している大砲の砲弾はあと2時間程度で底をつき魔術・魔法戦力も4、5時間ですべての者が魔力切れとなるだろう。まさに『数は力』を体现するものたちだな。能力の高い個体は数が比較的少ないことが救いだが、それでも10万単位で存在するのに比べてこちらで精鋭と呼べる戦力は2万程度しかない。

兵士の平均的な質でも、数でも負けている。これで勝とうなど正気の沙汰ではないが、こちらには魔王軍側にはないアドバンテージもある。

「前線の部隊、赤い戦術マーカーから300メートル以上離れてください。1分後に戦術級魔術を掃射します！」

それが技術だ。私たち人類の技術は魔王軍を圧倒している。魔王軍との戦い続けた8年の間に多くの魔術が生み出され新たな兵器が作られた。これもその1つだ。前方10メートルほどの位置に赤い戦術マーカーが現れる。やれやれ人使いが荒いな。約300メートルを1分で離れるとは強化魔術を使わなければ無理だぞ。緊急でなければ2分ほど時間を取れ。そうすれば退避のためだけに強化魔術を使う必要はなくなるというのに。まあどうせ今は伝える方法がない今日の夜に行われる軍議で言うておくか。今はさっさと動けない者を連れて退避しよう。

「おいその兵士たちその2人の負傷者を貸せ。お前たちのスピードでは時間までに退避できん。私が担いで連れて行く」

「えっ、おっ、おいお前」

それだけ言っただけで強引に兵士から負傷兵2人を奪い担ぐとさつさと退避を始めた。後ろで兵士がぶつぶつ言っているのが聞こえるが無視して、時間に間に合う速さで退避しつつ担いでいる兵士の治療を行う。幸い大した怪我ではないようだから治療が終わればすぐに戦線に復帰できるだろう。よし此処まで来れば大丈夫だ。担いでいた兵士たちを下し、戦術マーカーを見るとちょうど魔術が着弾するところだった。

あれはファイヤーストームだな。これはまた派手な魔術を使っているな。

確かにファイヤーストームなら超広範囲に文字通り『炎の嵐』を巻き起こすから、密集し数が多い魔物たちには甚大な被害が出るだろう。だがファイヤーストームでは魔術が終了してもしばらくは融けた地面が発する熱とそれによって引き起こされる火災旋風で進軍できなくなる。

まあ同じように魔王軍のほとんどの魔物も進軍できなくなるから、態勢を立て直す時間を稼ぐために司令部のオービスたちは使用を決意したのだろうが、進軍できなくなるのはほとんどの魔物ですべての魔物じゃない。1000度を超える温度の中を平然と動ける魔物もかなりの種類がいる。今日の前にいるサラマンダもその1つだ。しかもサラマンダは体温が高くなるほど能力が増す。普通なら500度まで体温が上がればいいほうだが、今は周りが1000度以上の高温だ。体温も最低で1000度はあるだろう。温度に戦闘能力が比例するとすれば、最低でも普通の2倍の戦闘力になる。

それがここから見えるだけでも2000匹はいる。兵士たちもなまじサラマンダは熱いほど強くなるという知識があるだけに動揺している。

『レオン戦団長聞こえるかの？ 兵士の動揺を抑えるためサラマンドを殲滅してもらうぞい』

やはりそうなるか。敵の強大さに動揺しているならそいつを倒せることを見せれば動揺は収まる。

だが今回はリリカかオービス本人がやってほしかった。

「オービスはボケでもしたのか？ 私はサラマンドを倒すことはできても1000度の高温に耐える魔術障壁は張ることはできないんだぞ」

愚痴の1つも言いたくなる。だが命令は命令だ。幸い1000度程度なら私の体は炭化する程度で蒸発する様な温度じゃない。それなら回復魔術を使い続ければ何とかなるだろう。戦闘に備え目を閉じ、剣を抜く。

「おいあんた！ 何してんだ！ あんなところに突っ込んだら黒焦げになっちまうぞ！」

「オービス司令長官から直々にサラマンドを倒せと命令されたからな。命令拒否はできん」

私はそう言つて、サラマンドに向かって踏み込んだ。熱せられた空気が肌を焼く、息を吸えば肺も焼かれるだろう。目を閉じているから気配を読むしか敵の位置を把握する手段はないが、まあこいつらには気配を消すほどの知能はないから問題ないだろう。

1番近くにいるサラマンドを切り捨てる。そして2匹目を切ろうとしたが外した。

融けた地面では足場が安定しないな。思うように剣が振れない。もう一度踏み込みなおして切り損ねたサラマンドを切り捨てる。

背後に気配を感じたので咄嗟に横に飛びのき回避行動をとる。
体のすぐ横を通り過ぎていく火炎弾が体を焦がす。

思っている以上に動きにくい。

融けた地面は粘性が高く、ただ足を上げることさえ普段の2倍以上の力が必要になる。

しかも火炎弾が着弾した際に融けた地面が飛び散り顔にかかった。
肉の焼ける匂いと神の焼ける嫌な臭いがする。

それでも動きを止めず近くにいたサラマンダ 目掛けて踏み込み切り捨てる。

さて火傷を回復させ続けるのも面倒だできる限り早く殲滅したいものだな。

「オイオイマジかよ。あいつ何もんだ？ というよりあれは人間か？
新種の魔物と言われても驚かんぞ俺は」

俺たちはその光景を呆気にとられたままだ見ていた。俺の部隊の同僚2人を戦術魔術の安全圏まで運んだ男はあろうことかまだ余波が収まっていなかった。灼熱の大地に魔術障壁も張らずに突っ込んでいきやがった。普通ならそれで死ぬ。なのに目の前には体中を焼け爛らせながらも次々とサラマンダ を切り捨てている奴がいる。

「あいつは何者だ。誰か知っているか？」

あんなことができる奴はそうそういねえ。絶対誰かは知っているはずだ。

「……………あれはたぶんイーリア連合王国特殊戦団レオン」ライフ
ハート団長じゃないのか？」

「そんな馬鹿な。そいつは亜神のリリカ様に勝った奴のことだろう

？ そんな奴が魔術障壁も張れないなんてはずがあるもんか！

「だがレオン＝ライフハートは魔術が使えないと聞くぞ」

「しかし、」

ああでもないこうでもない話し始める同僚たち。だが違うだろ。

俺たちがやることはそうじゃない。

「もう温度は700度くらいまで下がったか？」

「ああ大体そのくらいになったな」

それならいけるだろう。

「よし野郎ども行くぞ」

周りの同僚たちは啞然としている。正気じゃないという目で見てくる奴もいる。だが譲るつもりはない。

「おい、お前たち。お前らは助けてくれた恩人が目の前で戦っているときにそいつを見捨てるような玉無しか？ もしそうならお前らはそこでつつ立って見てろ。俺は行く」

「おいおい正気じゃないぞお前！ そんな灼熱地獄に突っ込んだら黒焦げになっちまう！」

「大丈夫だ。もう温度は700度にまで下がっている。魔術障壁を重ねがけすれば十分耐えられる。それでも行きたくねえ奴は知ったことかどこにでも行きやがれ。俺の部隊に臆病者はいらねえ！」

「ふざけんな。俺らは臆病者じゃねえ！」

俺の罵倒のおかげで火がついたみたいだな。正直この数に俺だけで立ち向かうのは無理だったから助かるぜ。それになんだかんだ言ってもこいつらは恩人を見捨てられるような奴らじゃねえ。

「よし行くぞ野郎ども!!!!」

「「「「「おう!!!!!!!!!!!!」」」」」

そうして俺たちは灼熱の地獄に突っ込んだ。

そして後悔した。

「邪魔だ」

なにせあのレオン＝ライフハートらしき奴はこつちとの連携なんぞ考えもしなかったようだからな！

おかげでこっちはフレンドリーファイヤにまで気をつけて戦わなければならなくなった。

正直やってられん。

他の同僚たちの顔を見ても俺と同意見のようだが、あれだけの啖呵を切った以上意地でも退けないから必死に灼熱の中を魔術障壁を張って戦っている。しかし、実際問題として俺たちが手を出す必要はなかったみたいだな。俺達6人が連携してサラマンダを1匹殺している間にあいつは3、4匹のサラマンダを殺している。こいつほんとに人か？と思えるような強さだ。まあぐだぐだ言ってもしょうがねえ。さっさと終わらせて休もう。

助けた小隊のやつらが意外なことに加勢してきたおかげでフレンドリーファイヤしないように手加減したからか、いくぶん最初の予定よりも遅くなったが、無事にサラマンダの殲滅は終わった。戦闘中に負った傷も火傷もすでに回復魔術で回復している。

今日の報告と明日の予定の修正を兼ねた軍議もすでに終わり後は戦団の仕事をすればいいだけだ。

その戦団だが予想以上に被害がひどい。

こちらを殊更脅威に感じたのか戦団の戦っている戦場に限って繰り返し援軍が差し向けられること実に15回。死者は100人を超え負傷者はその数倍に上る。

それでも損害比は1対500を超えているから十分過ぎるほど役目を果たしたと言ってもいいのだが、このペースで襲撃が続けば1週間もしないうちに特殊戦団の戦力は消滅する。この後はその負傷者たちを治療しなければならぬ。その後で敵の戦術・戦力分析を行い戦術単位での改善と改良を行うつもりだが、劇的な被害の防止は見込めないだろう。

物量に対抗するには連携と個々の実力を上げればいいが、どちらもすぐに上げられるものではない。他には装備品の質を上げるという方法もあるが、強力な装備は基本的に癖が強い物が多くて連携に使うには難がある。数少ない癖のない物はもう他の使用者が戦場で使っているから、買い上げることもできん。

うまい解決策が思い浮かばないな。

根を詰めて考えても仕方ない、他の仕事の合間にも考えるか。

「レ、レオン少しいいですか？」

そんなことを考えながら戦団の天幕まで歩いていたが問題が発生した。

エリスだ。周りに人が居なかったからよかったものの居たらどうするつもりだったんだ副団長は。

副団長を戦団に引きとめるために付き合うことにしたのは失敗だったか？

「エリス副団長何か用か？」

心の内では冷ややかに副団長を見ていたがそんなことは欠片も出さずに優しい声が出せたようだ。副団長は名前で呼ばれなかったことが不服そうだがそれ以上の不満や不安は見えない。

「いえ、レオンがよければこの後一緒に私の天幕で話をしませんか？」

「プライベートでということか？」

これに頷くなら前にした一時的にでもライフハート家の当主代理になる素質があるという言葉は撤回しなければならぬが。

「もちろんそうです」

頷いたか。私の人を見る目も大したことがないな。それともこれが恋は盲目ということか？あの副団長が此処まで墮落するとは、恐ろしいな恋は。

今団長が戦団からいなくなるのは困るが、この作戦が終わったら別にいなくなっても構わん、別れるか？後任に誰を据えるかを今から考えておく必要が出てきたな。

「すまん、これから負傷者たちを治療しなければならない。副団長と話す時間はないな」

「……………そうですか」

かなりショックを受けた様でうなだれている。この姿を見た人は同情して前言を撤回するだろうな。それだけの後ろめたさを相手に感じさせる姿だ。

「そういうことだ。他に何かあるか？」

まあ私は感じても無視するが。

「……………いえ、なにもありません」

「そうかそれでは私はこれから野戦病院に行くようがある時はそこを訪ねるか、緊急の場合は念話で連絡をとってくれ」

「……………分かりました」

元氣のない暗い声だ。副団長と付き合うことにしたのは本当に失敗だったな。これなら振っていたほうがまだましな結果になっていただろう。

勝つために（前書き）

個人の武勇などに期待しなくても勝てる。それが理想の軍隊です。
人の側も勝つために一線を越えました。

勝つために

作戦が始まって既に1週間が経った。魔物との交戦頻度は減るところか次第に増えている。既に元々は200万以上いた兵力の内15万以上の死傷者が出ている。このままではあつという間に兵力が尽きるだろう。

「レオン団長、今日の作戦予定はどうなっているのですか？ 私は全く聞いていないのですが？」

やはり聞いてきたか。だが今日の作戦は話すわけにはいかない。話せば私でも指揮権を剥奪されて後方に強制送還されるだろう。正気なら実行しないような内容だ。相手が魔物で作戦区域に民間人が1人もいないからこそ実行できる。そんな類のものだ。

「話していないからな。今日の作戦はこの戦線の指揮階級の者の中では私、オービス、リリカしか知らない。そして実行する直前まで一切の情報は出さないことが決まっている」

一瞬不満そうな表情をしたがすぐに消したな。それでいい、団長と副団長が不仲だと兵士たちに思われれば、いらない動揺が出てくる。

「……………分かりました。それでは私たちはこのままコザートル砦まで進軍すればいいんですね？」

「そうだ」

その後の数時間私たちの間に会話はなく、ただ黙々と進軍を続ける。と言っても魔物はひっきりなしに襲いかかって来ているからいつもどこからか戦闘音が聞こえてくる。私の戦団は大丈夫のようだが、

他の部隊ではノイローゼになる兵士が増えているようだ。魔王軍との戦いと8年間の戦いの中でも最大の戦いとなるこの戦いで、兵士たちにかかるプレッシャーは凄まじいものとなっている。なににより、本当に心からの休息をとることができない環境は兵士たちの精神を摩耗させる。そのための対策は色々としていくがこのままでは最悪麻薬を使い一時的にでも士気を向上させる必要が出てくるだろう。継戦能力の維持と兵士の質の維持の観点から考えると最悪だが、今ここで負けるよりはましだ。

「レオン団長、コザートル砦が見えてきました。この砦はオーガスの国境を守る最大規模の砦であり難攻不落と呼ばれたほどの物です。またともに攻めては甚大な被害が出ますし、包囲して兵糧攻めにしても相手が魔物ではあまり効果はありません。私たちはどのようにしてこの要塞を攻略するのですか？ そろそろ作戦を教えてもらえませんか？」

副団長の言うことももっともだが、詳細まで言わないでおこう。見れば分かる。いや、見なければ信じられないようなことだからな。だから作戦の骨子だけを言おう。

「今回の作戦はとても分かりやすいものだ。砦を破壊するただそれだけだ」

副団長は私の言葉に対して納得がいていないようだ。だが本当に今日の作戦はそれだけだ。

「どういうことですか？ ただそれだけの作戦ならば、ここまで嚴重に情報が秘匿されるはずがありません」

「もつともな事だが今回の作戦は砦を破壊するだけだ。これ以上の説明は必要ない後は見ていれば分かる」

『総司令部のオービスじゃ。現時刻を持ってコザートル砦攻略作戦を行う。全軍進撃を停止し魔術障壁を張るのじゃ』

副団長と話しているうちに作戦決行の時間が来たようだ。

「副団長、作戦が始まる。個人でも魔術障壁を張るように皆に命令を伝えてくれ」

「……了解しました」

『イーリア特殊戦団、魔術障壁を展開しなさい』

念話で命令が発せられるとすぐに皆魔術障壁を展開した。中々の反応速度だ。よい兵たちだ。その兵士たちの顔は驚愕に染まっている。その顔が向いている方向には空を覆い尽くさんばかりの大きさの魔術陣が展開され詠唱が行われている。漏れ出てくる魔力だけでも発動しようとしている魔術が強大なものとわかる。

「団長あれは……」

「戦略級魔術『トルネード』だ。基本的な効果は突風で敵を吹き飛ばす『ウインド』と変わらない。効果範囲と威力を上げただけの代物だ」

「それは国際条約で使用が禁止されている禁術のはずです！ それを使うなど何を考えているのですか！」

副団長の言うことも一理あるが見落としていることがある。

「あれは確かに国際条約で戦争においての使用が禁止されているが、この『戦争』が指すのは『人類同士の』と条件が付く、国際条約を批准している国々の上層部はそう判断した」

つまり魔物に対してはどんな魔術を使おうとお咎めなしということ

だ。

「尤も、長期間にわたって影響が残る魔術の使用はさすがに認められなかったが、それでも多くの戦略級魔術がこの作戦では使われることになるだろう」

詠唱が終わり、魔術が完成したようだ。私も戦略級魔術が使われるのを見るのは久しぶりだ。だがその威力を忘れたことはない。コザートル砦の攻略は終わった。

「『トルネード』！！！！！！」

空から大きな竜巻が2本地上に向かって降りてくる。その影響で魔術障壁を張って砦から10キロほど離れた位置にいる私たちにも強い風が吹いている。

竜巻の先端が砦に接触する。

砦の魔術障壁が竜巻を防ごうと展開されているが10秒も持たずに崩壊した。

そして2つの竜巻に飲み込まれて消えた。

既に巻き上げられる土や草で視界はほとんどない状況になっている。砦の状況やその周囲の街や陣地の状況が分かるのは『トルネード』の効果が終わってからになるだろう。

10分ほど経って『トルネード』の効果が切れた。吹き荒れていた風は徐々に収まり視界がしだいに戻っていく。

しかし視界に映る物は何もなかった。有った筈のコザートル砦もその周辺の陣地も何もなかった。

「……………何なんですかこれは」

副団長の言葉がこの場にいる兵士たちの心情を最もよく表したものだろう。兵士たちはただ呆然と目の前の光景を見ている。いやほじめて戦略級魔術を見た者たちがと言ったほうが正確だな。その証拠に私の戦団の団員たちは多少は動揺しているが落ち着いている者がほとんどだ。

「さっきも言ったと思うが戦略級魔術『トルネード』だ」

「そんなことを聞きたいんじゃない！ どうしてこんな魔術を使ったかを聞いているんです！」

「副団長口のきき方に気をつける。私は君の上官だ」

やはり付き合ったのは間違いだったな。公私の区別すらあやふやになっている。

「……………なぜ今回の作戦で戦略級魔術を使用したのですか？」

「

理由は2つある。1つ目は正攻法で攻めれば被害が大きくなりすぎる。今回の作戦で最終目的地までにある砦・要塞・都市を正攻法で攻めれば甚大な被害が出る上にそもそも、それを実行するには兵力が1桁ほど足りない。2つ目は時間が掛かり過ぎるということだ。一々包囲して攻略していたら相手の増援に囲まれてしまう。それに物資はあらかじめ作っておいた転移魔法陣で運べばそれだけの時間が掛かる。魔物の発生するスピードと兵士の戦力化にはかなりの時間を比べると圧倒的に魔物の発生するスピードのほうが早い。つまり時間を掛ければ掛けるほど私たちは不利になるからだ」

副団長は私の言葉に納得がいかないようだ。

「戦略級魔術の使用によって戦後の復興は大きく遅れるでしょう。それはどうするつもりですか？」

「私たちが優先するべきなのは来るかもわからない戦後より魔王軍に勝つことだ。魔王軍に勝てなければ戦後は来ない。それに荒廃するのはイーリアではない」

「っ！」

私の言葉に絶句して言葉が出ないようだ。自分でも酷いことを言ったと思うがこれが私の本心だ。他国の心配は母国の安全が確保できてからで十分だ。

「副団長、戦団員達に他の部隊の者でも呆然としている者がいれば正気に戻すように言ってくれ」

「.....」

何の反応もない。

「副団長！！」

「はっ、はい！ 何でしょうか！？」

聞いてなかったか。私の言葉がそれほど衝撃的だったのか？ まあそれはどうでもいい。

「戦団員達に他の部隊の者でも呆然としている者がいれば正気に戻すように言ってくれ」

「りよっ、了解しました」

『戦団員に告げる。他の部隊であっても正気を失っている者がいたら正気に戻すように』

副団長の念話を聞いた団員達が近くの部隊の者たちに声をかけてい

く。これで多少は動揺は収まるだろう。

「私たちの部隊の者たちは他の部隊の者たちに比べて動揺している者が少ないようですが、なぜなのでしょう？」

そういえば副団長はイーリア出身ではなかったな。イーリア出身の者ならば戦略級魔術を見たところでここまで動揺しないか。

「皆戦略級魔術を見慣れているからな」
「はっ？」

私の言ったことが理解できないようだ。まあ普通はそうだ。戦争での使用が禁止されている戦略級魔術を見慣れている方がおかしい。しかし、内戦をしていた頃のイーリア連合王国はもとおかしかった。

「イーリアが内戦をしていたころは土地に長期間にわたって悪影響の残る汚染魔術でも何でも勝つためだと言えば使用が許可されていたからな。そのおかげで今でも人が足を踏み入れれば1分と持たず死ぬような土地が国内には何か所もある」

まったくもって愚かなことだ。そんな魔術を使えば勝ったとしても碌に得るものなどなくなるだろうに、勝つためと言って使用する奴らが絶えなかった。私もその一人だが

「団長も使用していたのですか？」

「私は使っていない。使おうにもその才能がなかったからな。しかし、使うように命令を出したことなら何度もある。最低限長期間にわたって影響の残るものは使わないようにしたが、町や都市の民間人ごと薙ぎ払ったこともある。そんな地獄そのものだった時代を生

き延びた者ならば戦略級魔術の1つや2つ見ていない方が稀だ」

そんな時代を生き延びた者たちの精神は強い。諦めれば死ぬと知っているから諦めない。努力なくして生きられないと知っているから不断の努力を怠らない。あの時代、絶望した者から死んでいったかな。

「今回の作戦の最大の問題は敵の兵力に対してこちらの兵力が少なすぎることであった。しかし、今回と同じ方法をとればこちらの損害を抑えながら敵の殲滅を行える」

さすがに戦略級魔術は連射できないから、通常の戦闘がなくなることはないだろうが、それでも被害は正攻法で攻めるよりも被害は格段に低くなる。

「勝つための手段を選ぶ余裕など今の人類には存在しない」

作戦開始から2カ月、私たちは立ち塞がる砦などは戦略級魔術で消滅させながら進軍を続けた。

遭遇戦や奇襲でかなりの被害を受けたが、それでも当初の予想を下回る80万程度の被害で今回の作戦の最終目的地であるグラナダ要塞都市に着いた。

此処からが正念場だ。

押し上げた対魔王戦線を維持するためにはこの要塞都市だけは戦略魔術で消滅させることはできない。

しかも、敵の増援が無尽蔵に出てくることを考えると時間をかけて包囲し攻略することもできない。

結果として力で押す強硬策をとることになる。

今までの戦闘が天国に見えるほどの激戦になるだろう。

私の戦団で生きて故郷の土を踏める者はいないかもしれない。

しかし、此処で負ければ撤退しようにも魔国の領域を抜ける前に魔王軍に追い付かれて一方的に虐殺されるだろう。

負けたら死ぬ。

例外はない。

「諸君、勝つぞ。ただひたすらに死力を尽くせ」

私から団員達に言えることはそれだけだ。

『全運に通達じゃ。これよりグラナダ要塞都市の攻略を始める』

そして地獄の釜は開いた。

勝つために（後書き）

副団長の反応がこの世界では普通です。慣れている主人公やイーリアの国民のほうがおかしい。

グラナダ要塞攻略戦1

「グラナダ要塞の防御魔術障壁は戦略級魔術でも数発なら防ぐことができるほどの強度を持つておる。今回はそれを利用するのじゃ」

軍議でオービスが言っていたことだ。グラナダを完全に破壊して廃墟にしてはならない。しかし、グラナダの魔術障壁の強度なら戦略級魔術を1、2発撃つても要塞そのものが無くなるような事態にはなることはない。

それならばグラナダの防御を弱体化させるためにも、戦略級魔術を撃ちこんで魔術障壁を削るという作戦が取られた。

今回使われたのは『ノヴァストライク』か、この戦略級魔術は指向性を持った爆発を起こす魔術である『バースト』の威力を大幅に上げたものだ。普通の爆発では衝撃波は球状に広がり、標的にダメージを与えるのは衝撃波の一部でしかないが、この魔術は魔術障壁によつて爆発の衝撃波を特定の方に集中させることにより強力な障壁貫通効果を持たせたものである。

その破壊力は凄まじくたとえエンシェントドラゴンが張った魔術障壁であっても紙のように貫き、その鱗を穿ち絶命させる。

強大な防御力を持ったものに対して有効な魔術である。

しかし、この魔術は古くから存在するためのその対抗法も数多くある。もちろんこのグラナダ要塞にもこの魔術に対する対抗策は備えられているだろう。だがそれで構わない。

どうせグラナダを廃墟にすることはできないのだから貫通しないことが分かっている、なおかつ、ある程度の被害を与えられるこの魔術は今回の作戦にちょうどいい。

対抗策が施されていることを考えて3発の『ノヴァストライク』が同時に撃ちこまれたようだ。凄まじい閃光で目を開けていられないが、爆風や熱は全くと言っていいほどこちらに來ない。

「さすがオービスが直々に鍛えた魔術師たちだな。爆風の集束を完璧に行っている。おかげで爆心地からたった1キロしか離れていないここでも全く影響がない」

「団長、此処道のりで数多くの戦略級魔術が発動されるのを見てきましたがどれも人が使うには強力過ぎる力です。あんなものを使つて勝つたとしてもそれに意味はあるのでしょうか？」

この頃の副団長はおかしいな。

「『勝つたところで意味はあるのか』だと？ ずいぶんふざけたことを副団長は言うな。戦いは勝たなければ意味はないぞ。負ければそれまでの全てが無意味になる」

敗北は許されない。勝たねば何の意味もない。自分のできる最善を尽くしたとしても結果として負けたのならそれは自己満足でしかない。

「魔王との戦い散つていった数多の命に、お前たちの犠牲は無駄ではなかったと言つたためには勝つしかない。負ければそれらがすべて無駄死となる」

無駄話が過ぎたな。本当にこの作戦が始まつてからの副団長はおかしい。作戦前の聡明さと決断力をどこかに置き忘れてきた様なありさまだ。グラナダの攻略が終わり今回の作戦が終了したら原因の追及と解決をしなければいけない。その原因が私と付き合うことになったからだつた場合は解決は簡単なのだがおそらく違つたろう。はじめはそれが原因だと思つていたがな。まあそれは置いておいて

「それでは我が戦団はこれよりグラナダの正門を突破すべく門に対して集中攻撃をかける部隊の護衛を行う。優先することは味方部隊の護衛だ。自分の体を盾にしても守り抜け」

「『『『『『了解しました！！！！！！』』』』』」

「出撃する」

そうして私と戦団は地獄に足を踏み入れた。

グラナダから撃ち込まれる魔術の数は近づけば近づくほど激しくなり今では視界を埋め尽くす数の魔術がこちらに撃ちこまれている。幸い団員達が協力して張っている魔術障壁のおかげでこちらに被害は出ていないが団員達の魔力の消費量は無視できないものとなりつつある。

正門までの距離はあと500メートルほど、あと200メートルほど進めば敵の防御陣地があるから同士討ちを恐れてグラナダから撃ちこまれる魔術の数は極端に減るだろうが今度は防御陣地に籠った魔物たちを相手にしなければならぬ。

そうなれば正面だけでなく側面と後方にも戦力を割かなければならなくなり、厳しい戦いになるだろう。

「副団長、皆に通達してくれ。防御陣地までの距離が100メートルを切った瞬間に私が先行して防御陣地の一部を破壊するから、そこを目掛けて走るようにと」

「分かりました」

『通達です。防御陣地までの距離が100メートルを切った瞬間団長が先行し防御陣地の一部を破壊します。そこを目指して前進するように』

さて後50メートルほど進めば100メートルを切る。体の調子は万全だ。緊張しすぎず、油断もしていない。後は最善を尽くすだけだ。

いまだにグラナダからは視界を埋め尽くすほどの魔術による攻撃が行われている。避けることは不可能だろう。なにせ避ける隙間がない。魔術を撃つ者たちが交代するためか10秒ほど攻撃が止むこともあるがそのタイミングがランダムなためその時を狙って防御陣地に突っ込むことは難しいだろう。

となれば私がとれる方法は1つだけだ。

すなわち攻撃を受けることを承知で突撃することだ！

身体能力を魔術で強化して一気に加速する。

体を前傾姿勢に保ち被弾面積を抑えることで当たる攻撃の数を減らす。

それでも既に10発を超える魔術を被弾している。幸い致命的な部分は何とか守っているから走ることに問題はないが、早くしないと回復魔術が追い付かなくなる可能性もある。

そう思いさらに速度を上げる。

空気との摩擦で皮膚が焦げるのが分かるがそれも回復魔術で瞬時に回復する。

防御陣地まであと10メートルを切ったところでグラナダからの攻撃が止んだ。

開けた視界に映ったのはひしめく魔物たちだった。

防御陣地内にそんなにいては身動きできないのではないかと思える数の魔物たちがいる。

魔物たちもこちらに気がついたようだ。

雄叫びが上がり魔物たちがこちらに殺到してくる。

先頭にいるのはゴブリンなど比較的弱い魔物だけだ。これなら剣を振れば切れる。

先頭のゴブリン達を剣の一振りであたき切る。

横からワーウルフが飛びかかってくるがそれをさらに加速して回避して、防御陣地に近づく。

むやみやたらと魔物の相手をしていては時間が掛かり過ぎる。

ここは魔物を無視して陣地の破壊を優先しよう。

そう思い防御陣地に侵入したが、やはり魔物の数が多すぎる。

10歩も歩けば2、3匹の魔物と遭遇する。

そしてその魔物たちとの戦闘音にひかれて新たな魔物たちが現れる。その繰り返しでは殆ど前に進めない。既に100近い魔物を切り捨てているが最初に見た防御陣地内にいる魔物の数を考えれば微々たるものだ。

それに私の目的は魔物を殺すことではなく防御陣地の破壊だ。先頭の余波で多少壊れているが、多少壊れたところで元々が頑丈にできているから防御能力がなくなるわけではない。

魔物さえいなければ陣地の破壊に集中できるのだが、今の状況で陣地の破壊を優先しようものなら、後ろから襲われるだろう。

本当に魔術障壁すら張ることのできない自分に腹が立つ。

魔術障壁さえ張れば魔物たちなど無視して陣地の破壊に専念できるというのに。

..... まあ愚痴ばかり言ってもしょうがない。

最悪陣地の破壊ができなくても陣地内の魔物の注意をこちらに引くことができれば、十分な援護になるだろう。

そう考えている間も絶えることなく魔物たちが襲ってくる。

ちっ、さすがにミスリルゴーレムは硬いな。普段使っている剣では一撃で叩き切るできなかっただろう。

だが今日使っている武具『オールインワン』は私が持つ武具の中でも最高の物だ。

これで切れないものはない。

ミスリルゴーレムの腕が唸りを上げて体のすぐ横を通り過ぎる。

危ないな、身体強化魔術で強化した体でも当たれば骨折では済まない。

避けた先ではさら別のミスリルゴーレムが殴りかかってくる。

それを避けようと後ろに飛び退こうとしたが、視界の端にゴブリンシャーマンが逃げ道を塞ぐ様にファイヤーボールを連射しているのが見えた。咄嗟に飛び退くことを止めたが、そのせいで体が硬直してすぐには次の回避行動に移れない。目の前には唸りを上げこちらを叩き潰そうとする巨大な腕が迫っている。

しょうがない、ここは受け止めるしかないか。

身体強化魔術で体をさらに強化して腕を受け止める。かなり強化したにもかかわらず体が軋む、これ以上の強化は魔力の消費が劇的に上がる上に体にも悪影響が出るから止めておきたかったがそうも言ってられないようだ。このままだと腕を受け止めて動けないところを他の魔物たちに攻撃される。さらに魔力を流し込み身体能力を上げる。よしこれならいけるか。

そして私はミスリルゴーレムの腕を両手で掴み持ち上げた。既にすぐ近くまで魔物たちが迫っている。

方向はこっちで合っていると思うから後は投げるだけだ。

そして私はミスリルゴーレムを全力で投げつけた。

団長が敵陣に突撃してからもう5分ほど経つ、それなのに防御陣地には大きな損壊が見られない。信じ難いことだった。あの団長が突撃したにもかかわらずあの陣地はまだ崩壊していない。

それほどまでに強い敵があそこにいたのか？

俺たち団員の胸には言いようのない不安が込みあがってきていた。

この頃は団長と副団長の雰囲気も悪い。俺たちは団長と副団長を信頼しているがそれでも上官たちの仲が悪ければどうしても不安なる。

『あと2分待つて防御陣地が破壊されなければ、敵の注意をできる限り引かないようにして団長を囿にして正門まで接近する』

『『『『『『『『了解しました』』』』』』』』

副団長は団長を囿にすることにしたようだ。俺もそれが正解だと思う。団長なら放っておいても死ぬことはないだろうし、あの団長を無視してこちらの足止めをするような判断ができるやつは少ないだろう。つまりかなりの確率で俺たちは戦闘を行わずに正門までいけるということだ。

そんなことを考えているうちにもう時間まで30秒を切った。これは副団長の言った作戦になるかな。そう思った時だった。防御陣地の一部が吹き飛びなにやら大きな塊が飛び出してきた。

『全員回避！』

副団長の命令に従ってその塊を回避する。地面に激突して止まったそれはどう見てもミスリルゴーレムだった。この大きさならいくら軽い無スリルで体ができているからといって3トンはあるだろうそれをあんな速さで吹き飛ばせる存在を俺は団長以外に見たことがない。

『全員道が開けた！　これより防御陣地を突破し正門へと向かう！』

副団長の命令が聞こえた瞬間には体が動いていた。本当に訓練は裏切らないな。余計なことを考えていても無意識に防御陣地に突撃する準備をしていたようだ。他の団員達もそれは変わらないようで、俺たちイーリア特殊戦団の地獄の訓練を受けていない魔術師部隊が少しで遅れてしまったほどだ咄嗟に置いて行かないように速度を落とさねばならなかった。

防御陣地に突撃して見えたのは全方向を魔物に囲まれているにもかかわらず傷一つ負わず魔物を切り捨てている団長の姿だった。相変わらず出鱈目だなうちの団長は。

しかしその団長でも魔物の数の多さには対応しきれないらしく、こちらに気づいた50匹ほどの魔物が団長を無視してこちらに向かってくる。

だがその程度の数なら問題ない。俺たちは2人1組でコンビを組み1人が魔物の注意をひきつけているうちに、残りの1人が気配を消し後ろから切り捨てることで迅速かつ被害を出さずに50匹の魔物を殲滅した。

この程度ならおれたちイーリア特殊戦団の敵じゃねえ。

そんなことを考えたのが間違いだったのだろう。その時俺たちは間違いなく油断していた。

戦場のだ真ん中にも関わらずだ。そしてその代償を払うことになった。

『グラナダから魔力反応多数！ 攻撃が来ます防御を！』

咄嗟に魔術障壁を展開できた俺は無事だった。しかし、グラナダから放たれた攻撃は魔物たちをも巻き込みながら、俺たちが護衛していた部隊の大半を消し飛ばした。

俺たちの護衛作戦は失敗した。

俺たちだけではグラナダの正門を破るだけの破壊力が出せない。

他の部隊が無事にたどり着けば問題ないが他の部隊もダメだった場合、此处から自軍の陣地まで引き返すのは困難を極めるだろう。

『こちらイーリア戦団第2中隊、護衛部隊の殆どが先ほどの攻撃で戦死した！ 指示を請う』

『こちら副団長、団長から命令だ。私たちはこれより撤退する残っている護衛部隊を守りながら撤退するように』

『イーリア戦団第2中隊、了解しました。これより撤退します』

『諸君の無事を祈る。私は団長の撤退を支援する。お前たちは先に撤退するように』

おいおいマジかよ。この魔物の海の中をたった2人で撤退する気が？ 正気沙汰じゃないぞ！

『副団長、俺たちも援護します許可を』

『必要ない。あまりに数が多いと逆に撤退しづらい。先に撤退するように』

本当に大丈夫なのか？ 副団長が言っていることが強がりじゃなければ俺たちが行くことは邪魔にしかない。ただでさえ負傷者がいるのにさらに敵陣に近づくなんて自殺行為でしかない。だが強がりだった場合を考えるとこのまま撤退して団長たちを見捨てることもできない。糞、俺はどうするべきだ？

『第2中隊、返事はどうした！』

思考に埋没していた俺は副団長からの念話で現実に戻された。

『さっさと撤退しろ貴様が迷えば部隊の者たちがさらに無駄死にするだけだぞ！！』

迷いは消えた。

俺たちも団長を助けよう。

『その命令は承服できません。俺もこれより団長の撤退支援に向かいます』

『おっ、おい、なにを』

副団長が何か言っていたが念話を切る。

「さて野郎ども今聞いていた通りだ。俺は今から団長の支援に向かう。だがこれは自殺行為と変わりがない。行きたくない者は前に出てくれ。負傷者たちと一緒に撤退させる。……護衛していた部隊の者はすまないが負傷者を連れて独自に撤退してくれ。こちらで魔物をひきつけるから少しは楽になるだろう」

前に出るやつはいなかった。団長たちも慕われてんなあ。

「それではこれより団長の支援に向かう！」

意気揚々と駆けだそうとした俺に声をかけるやつがいた。

「中隊長、団長の場所は分かっているんですか？」

そんなものは聞いていないし知らない。だが

「派手に魔物が死んでいるところに向かうだけだ。そこに団長はいる」

俺の言葉に部下たちは苦笑いしているが、本当のことだ。団長は派手な魔術は使えないが殺し方はずいぶん派手だ。これだけ混沌とした戦場でも大体の居場所は当たりはつく。今も何の魔術も使われた痕跡もなく魔物たちが吹き飛んでいる個所がある。たぶんあそこだろう。

「さて行くぞ！」

そして俺たちは再び地獄に向かって全力で突撃した。

グラナダ要塞攻略戦2

部下達の動きが変わったか？

念話が使えないから詳しい状況は分からないが、魔物の動きを見れば近くの状況くらいなら想像がつく。これは陽動を行っているのか？

護衛をしていた部下たちが陽動を行っているとしたら、それは護衛部隊が壊滅したということだが、解せんな。

護衛していた部隊が壊滅したにもかかわらず部下たちが無事なのはなぜだ？

それになぜ副団長は連絡してこない。

………考えるのは後だ。今はやるべきことをやるだけだ。

部下たちがどうなっているようにと正門は破壊しなければならない。部下たちが無事だろうとなかろうと私が正門に向かわなければならないのは変わりがない。

部下たちが陽動しているおかげで私が正門まで行くのが少しは楽になるだろう。

あくまで『少しは』だがならないよりましだ。

それにしてもやり辛いな。サイクロプスは筋肉と骨でできているような魔物だから斬り難い上に攻撃のリーチも長い。その上、周りから魔術攻撃で支援されているとやり辛さは5割増といったところか。こういうときは本当に自分が遠距離攻撃魔術が使えないのが恨めしくなる。

………愚痴っけていても仕方がないな。正門へ向かうのを急ぐでしょう。

ゴブリンシャーマンやガーゴイルが放つ攻撃魔術を避けながらサイクロプスに接近するが、攻撃魔術のせいで接近するルートが限定されていたためにハンマーでカウンターを合わせられた！
これは避けないな。

だがここでミンチになるわけにはいかない。

間合いが離れるが仕方ない。

体から態と力を抜き脱力する。

そしてサイクロプスの攻撃が当たる瞬間に合わせて後ろに飛ぶことで衝撃を殺す。

それでもハンマーを受けた腕が痺れているがその程度で済んでよかった。

骨が折れても回復魔術を使えばすぐに回復できるが、無駄に魔術を使わないにこしたことはない。

ここは魔国内だ。魔力が切れればすぐに魔物化して魔王の配下になってしまうだろう。

周りを見回し状況を把握する。

ゴブリン50匹にサイクロプス10匹、ゴブリンシャーマンとガーゴイルが合わせて100匹ほど、個人が1度に相手にできる数を超えている。しかし、勝たねばならない。私はこんなところで死ぬわけにはいかない。私が死ぬのは国を守りきった後か、役目を終えた時だ。

それまでは死ねない。

身体強化魔術をさらに自分に重ねがけをする。

無理な強化は破滅につながる。

今までしていた強化だけでも普通の人間なら体が耐えきれずに、5分と持たずに再起不能になるようなものだったが、それをさらに強化する。

これでいいだろう。

やることは1つだけだ。

近づいて、斬る！

強化した脚力にものを言わせて敵が反応できない速さで剣の間合いに入る。

筋肉と骨に邪魔されて斬り難いサイクロプスを力任せに叩き斬る。

これもこの『オールインワン』の強度があつてはじめて可能になる

ことだ。他の剣ならすぐに剣自体が使い物にならなくなる。

魔物たちはまだこちらに反応できていない。

続けざまに残り7匹のサイクロプスを叩き斬り、ゴブリンを無視して他の魔物の殲滅に移る。

100匹以上の遠距離攻撃魔術を使える魔物がいれば弾幕射撃で、避ける空間がない攻撃ができる。

放っておくわけにはいかないし、前衛の要であるサイクロプスを殲滅した今なら楽に殲滅できる。

こいつらは動きが鈍くて全くとっていいほど接近戦ができないかな。

オールインワンで10匹以上をまとめて叩き斬る。

魔物たちがようやく私が接近して切りつけていることに気づいたようだが、既に遅い。

残っているゴブリン数匹を斬り伏せた。

殲滅完了

しかし、体の負担が酷いな。回復魔術で無理やり回復させているが何度もしたいことではない。

さて、少しは休みたいがこのままじっとしているとまた魔物たちが押し寄せてくる。

さつさと正門に向かうとしよう。あまりやりたくなかったがこの際は仕方がない。巻き込まれる範囲に味方がいないことを祈るか。

「身体強化魔術発動。強化倍率80倍」

そして私の世界から音が消えた。

それは突然だった。
団長が居ると思われる場所まで行こうとしていた俺たちに突然衝撃波が襲いかかった。
魔術障壁を張るのも間に合わずに吹き飛ばされる部下達。
吹き飛んできた魔物たちに押し潰される者もいた。

「なにが起こった！」

周囲にいた魔物たちが一掃されている。こちらにも被害は出たがそれでも周囲の魔物たちを自力で殲滅していた場合よりも被害は軽微だろう。しかし、これが敵の魔術か何かなら今から俺たちは地獄を見ることになる。これまでの行動からして魔物たちは味方ごと攻撃することを厭わないみたいだからな

「分かりません！ ただ何かが高速で動いたようです。あそこを見てください」

部下の1人が指す方向を見ると地面が深く抉れてできた線が一直線に正門のほうに向かって伸びていた。

「あれはおそらく何かが高速で動いた後です。先ほどの衝撃波はその余波でしょう」

部下の声は喜色に溢れていた。俺も興奮で胸が震えている。

「こんなことができ、それかつ今正門へ向かうような人を私はあの
人しか知りません」

ああ、俺もそうだ。

「総員聞け！　どうやら俺たちの団長は正門の破壊を諦めていないらしい。よって俺たちはこれから団長の正門攻撃の援護に向かう。………まあ俺たちが着くころには撤退の援護になっているかも知れんがな」

俺の言葉に部下たちも笑う。よし団長が健在なら俺たちは大丈夫だ。

「行くぞ！」

「……………おう……………！！！！！！」

魔物は無視した。一々相手にしていると時間が掛かり過ぎる。戦っているのが私1人ならそれでもいいが今は時間を無駄にすればするだけ無駄に兵たちが死ぬ。最短の時間で正門を破壊する。

音速の3倍以上で走っているせいで殆どの魔物がこちらに気づき反応することはない何が起こったかもわからず。衝撃波で吹き飛ばされている。反応できたわずかな魔物も私に追いつくことはできずにいる。

しかし、私のことは報告しているのだろう。

私と正門までの間にミスリルゴーレムの大群とロックドラゴンが立ち塞がっている。

衝突すれば柔らかいこっちが潰れるな。かといって速度を落とせば囲まれて足止めされるだろう。

ロックドラゴンは大きいから対処は簡単だ。問題はミスリルゴーレムなんだが、対処法はある。

腰に差していた『オールインワン』を抜く。

こんなところで使いたくなかったが他に方法がない。

「『オールインワン』、形状変化『シールド』、強度『オリハルコン』」

魔力がごっそりと『オールインワン』に吸い取られていく感覚がする。

ずいぶんと吸い取る魔力の量が多いな。やはり高速で移動している分、強度を高める必要があるからか？ 『オールインワン』の形状が剣から私の体を覆い尽くすほどの大きさの盾に変わる。

よしこれでいい。この盾なら奴らより硬い。

盾を正面に構え、速度を落とすことなくミスリルゴーレムを盾で弾き飛ばしながら正門に向かって走り続ける。ロックドラゴンは無視してその足の間をすり抜ける。

尾でこちらを吹き飛ばそうとしたがそれよりもこちらが走り抜けるほうが早い。

よし突破した！

後はすぐそこに見える正門を壊すだけだ。

「『オールインワン』、形状変化『ハンマー』、強度『アダマンタイト』」

また『オールインワン』の形が変化し、今度は巨大なハンマーになる。

その上重量が飛躍的に上昇する。正直持っているのがやつの重さだ。体が軋んでいるのが分かる。

さすが『アダマンタイト』なだけある。しかし今はこの重さも必要だ。だがこのままではまずい。

「身体強化魔術発動。強化倍率100倍」

軋んでいた体の感覚が無くなる。全く自分の体の感覚がない。理論的に80倍が身体強化魔術で人を強化できる限度だ。それ以上はどう足掻いても発動した瞬間に体が崩壊する。

しかし私はその限界を超えた。

回復魔術を併用し崩壊する体を繋ぎ止めるよう努力しているが次第に体が崩壊していくのが分かる。

このままでは正門の破壊まで体が持たない。

仕方ない、やりたくなかったがあれをやるか。

魔力を体の中で暴走させる。

激痛と共に体が変わっていくのが分かる。

まるで夢を見ているような感覚だ。

現実感がない。

痛みすら遠く感じる。

今やろうとしているのは、人としてやってはならない禁忌の1つだ。だがこうしなければ私がこの正門を破壊するほどの攻撃を放つことはできない。

正門にたどり着く。

ハンマーの間合いまで近づいた瞬間一気に速度を落とす。ブレーキをかけた足の骨が砕けるがすぐに回復魔術で回復し、速度をそのままハンマーに乗せる。

「吹き飛ばせ!!!」

音速を遥かに超えた速さでハンマーが正門にぶつかった。

その時起きた破壊は壮絶だった。

正門が弾け飛ぶ。

門を支えていた両脇の防壁がその破壊力を支えきれず崩壊し、グラナダ内部に向かって飛んでいく。

門と防壁の破片が魔物たちを容赦なく薙ぎ倒す。

そして遅れて門を叩いた大音響と衝撃波が私と周囲を襲った。

おかげで50メートル近く吹き飛んだ。

身体強化魔術の倍率を20倍まで下げ、回復魔術を発動する。

門を叩いた反作用で腕は千切れ、体中の骨が砕けている。今の俺は文字通り骨なし状態に近い。

おかげで立ち上がることもできない。

早くしなければ魔物たちが近づいてきてなぶり殺しにされてしまう。10秒ほど経って下半身の骨の再生が終わる。上半身も何とか姿勢を維持できる程度には再生が終わった。魔力もだいぶ消費した。早めに本陣に帰って休息をとらねばまずいな。

まあその前にこの周りを囲んでいる魔物たちをどうにかしなければならぬ。

サイクロプスにオーガ、ゴーレム各種にレッドドラゴンにブラックドラゴンその他諸々の魔物が見渡す限りにいる。今の私が1人でやるには少し辛いな。

「どうやらナイスタイミングのようですね団長」

聞きなれた声が聞こえた瞬間に包囲していた魔物たちの一部が焼き尽くされる。

「ずいぶんとボロボロになっているようですが、大丈夫ですか？」

「ああ問題ない。しかし、よく来てくれた副団長」

本当によく来てくれた。見る限り1人でここまで来たようだ。傷1つ負っていない。

……傷1つ負っていない？

私でもここまで来るまでにかなり負傷したというのか？

防具に傷が付いていないから回復魔術で回復したという訳でもない

だろう。

そこまでの実力が副団長に有ったか？

「副団長、よくここまで無傷でこれたな。今までは実力を隠していたのか？」

「ええ、そうですよ。今までは使う機会がありませんでしたから。ですがそれだけではないんですよ」

それだけではないとはどういうことだ？　ここまで無傷で来るのに実力以外に必要なことはないはずだが、まずい、さっきの衝撃のせいでまだ頭が働かない。

「どういうことだ？」

「こういうことです」

油断していた。

そう言うしかないだろう。魔王との戦いがこういうものか失念していた。

「がはっ」

腹を貫いて黒い剣が突き出している。急激に体の力が抜けていく。

「やっとです。この日を1年も待ち続けましたよ団長」

剣を突き刺しているのは副団長だった。殺気も何もなく突然突き刺してきた。回復魔術と身体強化魔術を使い剣を抜き、距離を離そうとするがどちらも発動しない。

「無駄ですよ。この剣には魔力と気の吸収能力があります。これが

刺さっている限りいかなる魔術も魔法も使えません」

殺気も何もない攻撃、突然の裏切り、私はこれを知っている。

「魔物化したか副団長」

魔王の魔力で魔物化したものがそくだ。魔物化したことを悟らせないように元々の人物の記憶を使い擬態し、最悪のタイミングで裏切る。過去に何度も私たちが苦しめられた魔王の戦術だ。

「ええ、そうですよ。1年前に魔物化しました。その日から団長を殺そうとしていましたがなかなか機会がありませんでしたよ。本当に団長は油断しなさすぎです。寝込みを襲おうとしても返り討ちにされるイメージしか浮かびませんでしたから。私からの恋の告白はどうでしたか？ 少しでも油断してもらおうと思ってしたのですが、一応魔物化する前のこの身体を持ち主が実際に抱いていた気持ちでしたから、嘘ではないんですよ」

優越感に浸って油断しているうちに、なんとかしてこの剣を抜くしかない。

「団長、どう足掻いても無駄ですよ。この剣が刺さってしまえばそれで終わりです。団長は驚異的な魔力と気の量を誇っていますが、それでもあと10秒もあればその全てを奪い取れます。そうすれば団長も魔王の配下の仲間入りですよ」

好きに言っていればいい。私は魔物化して魔王の配下などには絶対にならない。

それを私は知っている。災い転じて福となす、今の状況はまさにそれだ。

あときは仕方なくやったことが今私の窮地を救う。せいぜい今の内に勝ち誇っている。

「ぐっ、体が」

「やっと全て吸い尽くせましたか。それにしても非常識な魔力と気の量です。正門の破壊で消耗していなかったらこの剣の吸収能力を超えていたかもしれませんね。どうです？ 体が作り変わっていく感覚というものは、それが終われば団長も私たちの仲間ですよ」

体の力がさらに抜ける。やばいな、失血量がかなり致命的だ。このままでは魔物化せずとも失血死する。

「ふむ、もう完全に体が作り変わりましたかね？ まあ魔力も気ももうないはずなので剣を抜いても大丈夫でしょう」

剣が腹から抜かれる。

「今は魔力と気を急激に吸収された影響で体に力が入らないと思いますが、周りの魔力を適当に取り込んでみて、魔物化した今ならそれで魔力を回復できるはずよ」

いいことを聞いた。周りの魔力を手当たり次第に掻き集める。

底を突いていた魔力が瞬く間に回復していく。

本当に魔物の体は便利だな。

だいぶ魔力も戻った。そろそろ立つか。

回復魔術で体を回復させ立ち上がり副団長のほうを向く。

「ようこそ魔王軍へ、歓迎」

副団長が何か言っているが知ったことではない。

「裏切り者には死を」

『オールインワン』で裏切り者を殴り飛ばす。骨が碎ける感触が伝わってきた。魔物化しているだけあって即死こそしていないが致命傷だろう。

「なっ、なぜ」

なぜだと？ そんなものは決まっている。

「人類を裏切った貴様には死んでもらうそれだけだ」

「なぜ私を攻撃する！ 魔王の配下となったお前は私の仲間なのだぞ！」

勘違いした馬鹿は扱いやすくいい。私は魔物化しているが魔王の配下などにはなっていない。

「まさか、魔力を吸い尽くしたのに魔物化しなかったとも言つか？」

うるさいな。まあ冥土の土産に教えてやろう。副団長への土産だ。

「魔物化はしている。ただ私が魔物化したのは正門を破壊する時だ。正門を破壊するだけの破壊力を出すためには人の体では不可能だったからな。自分の魔力を暴走させて自分自身を魔物化させた。どうやら1度魔物化したものはもう魔物化しない。あの時は苦肉の策でしかなかったが、意外なことで役に立った」

「そんな」

信じられないという顔をしている。まあそんなことをした前例は私でも1つしか知らない。それにしたって長い準備期間をかけて準備した上で行ったことだ。私のような無茶はしていない。それに自らを魔物化させたことが人に知られれば問答無用で『世界の敵』として抹殺されることになる。

「それでは死ね」

『オールインワン』を振りおろし副団長だったものを叩き潰す。さて、少々予想外なことで時間をとったが撤退するか。

「団長！ 無事でしたか」

そう思った瞬間またも来客だ。

「ああ無事だ。そちらはどうだ」

「こちらは俺と他4人しかいません。生きて本陣まで戻るのは無理ですね」

そんなことを言っているができる限り、生きて帰還させる。私の戦団はすでに副団長の裏切りで致命的な被害を受けているだろうが、これ以上も被害は出させない。やり方は無茶苦茶だがこの方法ならここから本陣まで撤退するよりも多少は可能性がある。

「諦めるな。私についてこい。もしかしたら1、2人くらいなら生きて戻れるかもしれないぞ」

そして私は正門に向かって走り始めた。こちらなら門を破壊された影響でまだ魔物がいない。

このまま突入して攪乱を行い、味方が来るまで潜伏するか。

幸いグラナダは要塞都市だけあって隠れる場所には事欠かない。

「正門の破壊を確認しました！」

管制官の言葉にワシは耳を疑った。正門に向かった部隊はグラナダからの攻撃ですべて壊滅したはずじゃ。残っている部隊に正門を破壊できるような力は………有る！

そうじゃ！ あの護衛部隊にはレオンがある。あやつならば正門の破壊ができてもおかしくはない。

『全軍に通達する。正門の破壊に成功した。これよりグラナダに突入するために総攻撃をかける。その為の砲撃を10分後に行う。赤いマーカーから距離をとるのじゃ。魔術部隊と共に僕も魔術による砲撃を行う。その間の指揮権はリリカに渡しておく。僕が指揮に復帰するまではそちらの指揮に従うのじゃ。』

こうしてはおれん、急いで準備をせねば。正門といえば防御が最も硬い箇所じゃ。そこにたどり着くまでイーリア特殊戦団には甚大な被害が出ておろう。この作戦の英雄たちを一人でも多く帰還させるためにも迅速な行動をせねばならん。

「団長、オービス総司令官から全軍に向けて念話が行われました。正門を破壊したことを受けて総攻撃をかけるそうです。その為の砲

撃が来ます」

そうか、対応が早いな。さすが、オービスだ。しかしそうなるこのまま屋外に出ているのはまずいな。砲撃で吹き飛びかねん。

「砲撃に備えて屋内へ隠れる。ついて来い」
「了解しました」

近くにあった扉を蹴破ると同時に部屋の中に飛び込み敵がいなかった室内を調査する。

どうやら敵はいないようだ。それにしても奇妙なまでに敵との遭遇率が低いな。外にあれだけの数の魔物がいたから要塞内にも膨大な数の魔物がいることを覚悟していたのだが、いやな予感がするな。しかし、今はこのまま進むしかない。

このまま何もないといいのだが……………無理だろうな。

こういう時の嫌な予感の外れたことがない。心構えだけでもしておくか。

「団長、隣の部屋にも敵は見当たりません。周囲を探索魔術で探してもみましたが敵の反応はありません。このあたり一帯は安全なようです」

「そうか、御苦労。それでは簡易トラップを仕掛けてから休息に入れ。味方の砲撃が終わるまでここに隠れておくからな」

「了解しました」

部下達の顔色を見る限りまだ戦えると思うが魔力量の管理はいつも以上にしっかりと行わせなければならない。この状況で魔物化する者が出れば全滅は確実だ。

さて今の内に副団長のことはどうするかを考えておこうか。

副団長の地位からしてかなりの数の機密が魔王側に漏れたと考えていいだろう。

それを警告する上では皆に副団長が魔物化していたことを話すのは有効だが、そうすれば必ず私の責任を追及する声が出るだろう。オービスとリリカだけに話してこの戦いが終結するまで他の者には隠すか？

あの2人ならば私が戦線を離脱する可能性があるこのことを話さないでいてくれるとも思うが確信はない。2人とも自分の意志だけでなく組織の意向を受けて行動しているからな。本人たちがよくても組織ときには駄目なこともあるだろう。

まあ、話すか話さないかの最も重要な要素は勇者が魔王討伐に成功するかしないかにかかっているのだがな。成功すれば副団長が魔物化していたことを話して、私が責任を追及されても別にかまわない。魔王亡き後の殲滅戦なら、必ずしも私がいなくてもどうにかなるだろうからな。

しかし、失敗していた場合を考えると離すことは躊躇われるな。というより失敗している可能性のほうが遥かに高い。なにせ副団長はこの作戦が勇者の魔国潜入のための罠だと知っているからな。

それを魔王側に話されただけで勇者が行うのは奇襲ではなく強襲になる。

出る損害は奇襲の比ではないだろう。最悪魔国内に侵入してすぐ敵の大部隊に囲まれる可能性すらある。

そんなことを考えているうちに砲撃が始まったようだ。地下のここにも地震の様な振動が部屋を揺らしている。これなら地上は火の雨が降っているだろうな。

地下道を使っているよかった。

地上の施設に避難していても施設ごと吹き飛ばされていたかもしれない。

それにしてもオービスはグラナダの要塞機能を完全に破壊してはならないということをしつかりと覚えているのか？ この振動から考

えて地上の施設を一掃する勢いで砲撃しているようだが。
振動が止む。

終わったか？ 砲撃は激しいが短時間しか行わなかったようだな。
既に十分な効果を得たからか？

それとも砲撃をしているような場合ではなくなったからか？
できれば前者であって欲しいものだ。

グラナダ要塞攻略戦2（後書き）

主人公の武器『オールインワン』の説明

形状、強度、重量、切れ味などを魔力を使い持ち主のイメージ通り若しくは自動的に対象にダメージを与えるように設定できる武器。盾でも剣でも弓でも甲冑でも何でもアリ

切れ味もこの世に切れないものはないということまで上げることできるし、逆に切れる物が無いほど切れ味を落とすこともできる。そんなある種理想の武器だが欠点も存在する。

1つ目は霊体などの実態の無いものや概念も斬ることができるが消費する魔力の量がすさまじく実用性に欠ける。

例えば最下級のゴースト、光に当たれば死ぬ、程度でも実態の無いものならば最低でも戦略級魔術を撃つと同じくらいの魔力を消費する。

2つ目は効果が永続的ではないこと。

例えばオールインワンを使って鉄を切ったとしても実際に鉄を切り裂く切れ味を維持しているのはせいぜい10分ほどでその後は急速に切れ味が劣化していくため頻繁に魔力を消費することになること。3つ目は魔力を注ぎ込むのではなくオールインワンが魔力を吸収するという構造になっていること。

つまり、鉄を切り裂く場合それに必要な魔力を注ぎ込むのではなく、強制的にオールインワンに吸収されるため魔力を使い切ってしまうこともある。

しかも魔力が足りないならば、気を、それでも足りないならば魂まで奪っていくため間違つて実態の無いものを切ろうものならばほぼ確実に魔物化するか死ぬ。

よって膨大な魔力がある者しか安心して使うことはできないが、オールインワンを使えるほどの魔力があるならば普通に魔術や魔法を

使ったほうが手っ取り早くかつ安全で強力なため、使う者は余程の魔術の才能がないものだけ。

といったところです。魔力さえあればできないことはほとんどないオールインワンですが燃費の悪さやうつかりすると自滅しかねないその仕様により呪われた武器扱いされる様な武器です。

主人公がオールインワンで魔王を倒すことはありません。

オールインワン的にはできますが魔力が足りません。

数十万人規模で人々の魂まで生贄に捧げてもお魔力が足りません。

作戦終了

どうやらオービスたちは無事にグラナダを占領しているようだ。部下が念話を傍受したところによると既グラナダ内のに残敵の討伐に移っているようだ。

私たちもさっさと地上に出て味方と合流したいものだがここにきて急に魔物と遭遇する頻度が上がった。

まるで何かを守っているような配置と数だ。部下が傍受した念話には敵の司令官を打ち取ったという報告はなかった。もしかすると私たちの近くに司令官が居るのかもしれないと思い、オービスにその旨を報告して探索が続いているが嫌な予感だけが膨れ上がっていく。急がなければならない何かを私たちは見落としている。

そんな予感がするが具体的に何をどうすればよいかが思い浮かばない。

「団長！ この壁の向こうに強力な魔力反応があります！ エンシエントドラゴン級です！」

見つけた！ 私の勘がそう叫ぶ。

「軍曹そこをどけ、壁を撃ち抜く」

身体強化魔術を発動し壁から少し距離をとる。そして助走をつけ、蹴り抜く。

轟音と共に壁が散弾のように吹き飛ぶ。これで中に魔物がいたとしてもあらかた片付けることができただろう。粉塵が収まるのを待たず部屋の中に侵入し残敵の搜索を行う。

「ライティングアロー」

咄嗟に床に伏せる。さっきまで私の頭があつた場所を雷の矢が通り過ぎていく、まずいな近くに遮蔽物が見当たらない。動き回って回避し続けながら近づくしかない。

「軍曹！ 私が敵に接近するための援護を頼む」
「了解！」

軍曹たちが壊した壁に隠れながら魔術で敵を牽制している。部屋中に魔力が充満していて気配察知などが使いづらいが敵の数は6、奥の離れたところにいる魔族の魔力が1番強いからあいつがリーダーだろう。まずそいつを潰したいが他の魔族がうまい具合にこっちが接近するルートを潰している。私が壁を蹴破ってからまだ30秒と経っていない、それにもかかわらずここまでの隊形を組むとは手強い敵のようだな。

「身体強化魔法発動、強化倍率10倍」

敵の攻撃を掻い潜りながら接近しようとするが、回避するルートを制限されてこちらが敵の十字砲火に追いつまされそうになる。屋内での戦闘だ、長引かせると天井などが崩落して生き埋めになる可能性がある。さっさと討ち取りたいのだがそうはさせてくれないようだな。

「団長！ 分かり難かったです、エンシェントドラゴン級の魔力を発しているのは奥の魔族じゃありません！ 床に描かれている魔術陣です！ この魔力の集まり具合からすると直に発動します！」

部下に言われて見て始めて気がついたが床に魔術陣が書かれていた。しかもこれは将官なら誰でも知っている有名なものだ。

「軍曹！ 地上にいる味方部隊に念話で緊急通信だ！ 緊急コードは2219、内容は『要塞地下にて自爆用魔法陣の発動準備が行われている。急ぎ退避するように』以上だ！」

「りよ、了解しました！ 『緊急コード2219、こちらイーリア特殊戦団、要塞地下にて自爆用魔法陣の発動準備が行われている。急ぎ退避するように。繰り返す、こちら……………』」

よし、これで地上では退避が始まるはずだ。後私たちがやるべきことは魔術陣を壊してできるだけ発動を遅らせることと、こいつらを捕縛して情報を引きずりだすことだ。

「軍曹たちは他にこのことと同じ魔術陣が書かれている部屋がないか探しつけ次第破壊しろ！」

「了解！」

私たちがここまで殆ど魔物と遭遇しなかったのは自爆に巻き込まれないようにほとんどの魔物が退避したからだと考えるのが妥当だ。それにこの魔術陣は1つ2つが発動しても大した破壊力が出るものじゃない。数百の魔術陣が同時に発動してこそ真価を発揮するものだ。だとすると護衛に残った魔物たちもかなり分散することになる。そうであれば自爆用の魔術陣の護衛はこのことと同じかもしれないものも多いただろう。

だが逆に言うと、1つ2つ壊したところで大して結果は変わらない。少なくとも全体の3分の1程度は破壊しなければ威力の劇的な減少はないだろう。発動までの間にどれだけ破壊できるかが問題だ。

「エリスは貴様を仲間に取り入れるのに失敗したか。となれば既にあいつは死んだか。まあ元々大して期待はしていなかったがな」

どうやらこいつは魔王の配下の中でもかなりの高位にいる魔族のようだ。自爆用の魔術陣の発動権限を持っていることでもかなり高位だとはわかつてはいたが、敵軍に潜入しているスパイの情報まで持っているとはいいい知らせだ。こいつから情報を引き出すことができれば計り知れない恩恵がある。

「まあ、人間風情に負ける屑は私も必要としていないから問題ないが、貴様にこの魔術陣を破壊することはできません。貴様程度では私に勝てんからな」

魔族としての圧倒的な力によって油断しているな。これならばやりやすい。適当に苦戦する振りでもして近づいてきたら一気にやるか。避けられる攻撃でもわざと体を掠めさせ小さな傷を作って血を流し、いかにもボロボロになっているように見えるようにしていく。出血で多少動きが鈍るが回復魔法で造血し失血した分を取り戻す。傷口を塞がないままだから出血は止まらないがやられた振りをするためには必要なことだ。

「やはり所詮は人間この程度か」

徐々に失血で動きが鈍ってきたと思わせるために少しずつ動きを鈍らせ受ける傷を大きくしていく。

匙加減が難しいな。

一撃で死ぬような致命傷を受けるわけにはいかんが完全に回避するわけにもいかない。

こいつを捕縛するつもりでなければ、さっさと殺して終わりにできるのだが、生け捕りにするのは本当に面倒だ。

「詰まらんなこれで終わりにしてやろう」

どうやらあちらがとどめに入るようだ。これを食らって何とか生きていると言った感じで呻き声でもあげればいいだろう。

「焼き尽くせ、バーンスプレッド」

床から火柱が立ち上がり体を焼く、死にたくなるような痛みが体を襲うが炎が体を焼くスピードより私の回復魔術が体を癒すスピードのほうが早い、このまま火柱の中にいても死ぬことはないだろうが、逆にこの火柱の中にいて生きていけばさっきまでいいようにやられていた私の演技がばれるかもしれない。一応咄嗟に飛び退いたように装うか。

「フン、あっけなかったな。他の者たちがレオン＝ライフハートには気をつけると言っていたが所詮は人間にすぎなかったか」

焼け焦げた私の体を見て奴が何か言っている。死体を検分に近づいてきてくれるといいんだが、離れたまま頭を吹き飛ばされてはかなわない。

だがそんな不安は杞憂だったようだ。こちらに近づいてくる足音がある。

「確かこいつは敵軍の中でもかなり有名だったな。こいつの死体を飾れば敵の士気を砕くこともできるだろう。面倒だが死体を持つていくか」

知恵が回る敵だったことに感謝する。あと少しだ。

「汚いな。部下たちが無事なら部下に運ばせたのだがこいつのせいで残り6体しかない」

手が私の体に伸びてくる、よし今だ！

こちらに伸びてきていた手を掴みながら立ち上がる。相手が驚いて反応できないうちに近づいてきていた敵指揮官を羽交い絞めにし残り6体の部下達からの攻撃の盾とする。

「貴様！ 生きていたのか！」

「死んだ振りをするのも楽じゃなかったけどね」

「ふん、それがどうしたどうせあそこまでの怪我を」

何か言っているが無視して魔術を組み上げる。部下たちに他の場所に行ってもらっていて正解だったな。この術式は術式を知っているだけでも終身刑にされる様な禁術だ。見せることはできない。

「奪い尽くせ、プランダー」

敵の頭に手を当て魔術を発動させる。

「うががぐえじゃ g i s j え r j げ g あ k j g g g まあづぎえぐじ
やえkげえろへq j へくい h ばえ@ベ t r げ r j j g g j くえ g j え
い g j え k m m s g g ぶお d l r k g q r g け r g b れおいげ w p g
p j れ」

聞くに堪えない悲鳴だな。まあこの魔術を受けた以上仕方がないが、

「貴様、ライナート様を離せ！」

残っていた魔物たちが襲いかかってきた。

しかし決断が遅かったな。もうこちらがやりたいことは既に終わった。後は遠慮なく殺せる。

私の位置から1番近い壁までは15メートル、一番遠い敵までは1

8メートルほか、これなら1歩踏み込めば一振りで終わらせることができるな。

「『オールインワン』、全長『15メートル』、形状『剣』」

掴んでいた魔族を床に放り出し、一気に4メートルほど踏み込み剣を振り抜く。

何の手応えもない。それほど呆気なく魔族たちを両断していた。

やはりこのオールインワンはあまり使いたくないものだな。

持ち主の技量も何も関係なく、振れば切れる。

これでは使えば使うほど技量が落ちるだろう。

「貴様」

声がしたほうに顔を向ける。そこには上半身と下半身が分断されながらも生きる魔族の姿があった。

「よくも、よくも！ ライナー様にあのようなことをしてくれたな！」

「そんな姿になっても生きているのか魔族はやはり頑丈だな」

人間なら確実にショック死している。

「うるさい！ 貴様だけ必ず殺す！」

まあ生きているならちょうどいい、こいつからもプランダーで情報を奪っておくか。

何か役に立つ情報を得ることができるかもしれない。

なにやらまだ喚いている魔族に近づき頭に手で触れる。

「何をする！ まさか！？ やめ「奪い尽くせ、プランダー」うち
ゆ g t h が h ぐ え r : h n b n k w r j n 「 p 」お b h n m t h n
q t j h q b の 0 y 8 5 g m b h h j 4 5 ふ 5 4 h 9 8 h b n b 8
9 4 h b h h 5 h y g n 3 5 9 8 h 5 b b 8 9 ひゆ 4 5 h b
」

ふむあまり役に立ちそうな情報はなかったな。それにしてもやはり
魔族でもプランダーを使われれば発狂するか。この副作用さえなけ
れば禁術に指定されることもなかっただろうに

「許さんぞ」

声がした。

「許しはせんぞ！ キスカにしたその仕打ち、我が身に受けたこの
苦しみ！ 決して許すものか」

地獄の底から聞こえてくるような背筋が凍る声だ。
声には恨み、憎悪、怒り負の感情しか籠っていない。

「驚いたな、プランダーを使われて発狂したにもかかわらず正気に
戻るとは」

「我が伴侶であるキスカとその胎内に宿った我らの子を殺した貴様
を許しはせん！ 貴様を殺せるなら地獄の底からでも蘇って見せる」

これは失敗したな。倒れたままで立ち上がれないようだが、やはり
感情というものは厄介だ。

普通ならあり得ないような現象を引き起こす。

ライナートから奪った記憶にキスカが妻であるという記憶もあつた
が、愛とは偉大だな。

プランダーによる発狂からすら正気に戻すとは、だが

「お前は所詮後衛型の魔族だ。ここまで接近されている以上お前に勝ち目はない」

これも奪った記憶から得た情報だ。こいつと私の距離は5メートルもない上にこいつは立ち上がることができないようだ。こいつが何かするより私が殺す方が早い。

「死ね」

オールインワンの長さを1メートル程にし、頭目掛けて振りおろす。

「魔術障壁展開！！」

魔術障壁に逸らされる。
しかし無駄な足掻きだ。
逸らされたオールインワンを無理やり胸に目掛けて進路を変え心臓を切り裂く。

「ぐふっ」

「これで終わりだ」

さて、他の場所にある魔術陣の破壊に行くか。
死体に背を向け部屋を出ようとしたときだった。

「我だけでは終わらん。貴様も道連れだ」

「なに！？」

まだ生きていたのか！

「ははははは、どうだ！？ 貴様も我の死んだ振りにだまされたであろう？ 魔族の頑丈さを甘く見たな」

振り向いた私の目に飛び込んできたのは発光する魔術陣と血に塗れながら笑う魔族の姿だった。

間一髪じゃった。

レオン達からの警告が後1分でも遅れておれば、主力部隊の半数以上がグラナダ要塞の自爆に巻き込まれて消滅しておったじやろう。レオン達が帰ってきおったら、礼を言わねばならんの。

「オービス、これではレオン達は……………」

リリカの言うことも分かる。グラナダの自爆の中心部にいたじやろうレオン達が生きて戻ってくる可能性はほとんどないじやろう。しかし

「リリカ、お主の言いたいことは分かる。しかし、レオン坊主はどんな絶望的な状況からでも帰還してきたそれを信じることにしようではないか」

そう信じるしかないのじゃ。搜索隊は出してやれん。グラナダ要塞が無くなった以上急ぎ防衛のために防御陣地を作らねばならんし、勇者たちが魔王討伐に成功したのかの調査も行わねばならん。人手を割けんからの

「そうだな。私もレオンを信じて待つとしよう」

信じておるぞレオン。

必ず生きて帰ってくるのじゃ。

神歴5919年ルーナの月23日

勇者が魔国内に侵入するため囃となる大規模反攻作戦『レ・コンキスタ』がグラナダ要塞都市を陥落させ終了する。

作戦はほぼ成功し將軍級の魔族500体以上を討伐し、魔王軍四天王であるゴードンの討伐にも成功する。

しかし、総死者数は100万を超え、人類最高戦力の1人であるレオン・ライフハートが行方不明となるなど被害も決して小さくはなかった。

作戦終了（後書き）

主人公が悪人で魔族のほうで主人公みたいになってしまいました。
次は勇者達のお話です。

魔王討伐

ここで負けるわけにはいかない。

ここまで来るために犠牲になったセリカの為にも絶対に負けられない！

「その程度か勇者ども？ それでは私を倒すなど夢のまた夢でしかないぞ」

けれど、魔王の振るう力は絶対的だった。

こちらの攻撃はまるで未来を読まれているかのようにかわされ、掠ることすらできない。

逆に魔王の攻撃は面白いようにこちらに当たり、魔術障壁すら容易く貫通してくる。

打つ手がなかった。

私たちもこの4ヶ月必死に努力してきた。

日々欠かさず鍛錬し魔物との戦闘で経験を積み、魔王を倒すために伝説と呼ばれるほどの武器を手に入れた。

それでも魔王アルフレイアには勝てる気がしなかった。

エレクの日15日 オーラリア帝国 アハード山脈 森林部

きつい。

私たち勇者の一行の心境を一言で表すならばその言葉が相応しいだろう。

対魔王連合軍が大規模反攻作戦『レ・コンキスタ』を発動してから今日で2日が経つ。

その作戦に引き寄せられているのか此処までは殆ど魔物に会うこともなく来れた。

この地域を見張っていたオーリアの兵士たちも今回の大規模反攻作戦が始まってからは目に見えて魔物の数が減ったと言っていた。しかし、ここアハード山脈には魔王の配下ではない魔物が大量に住みついている。

それらの魔物はこちらが人間というだけで私たちに牙をむくため結局、戦いに戦いを重ねて進まなければならなかった。

「本当に、ここが、魔国に、侵入、する、1番、楽な、場所なんでしょうか」

セリカの意見に私も大賛成だ。

頻繁に魔物に襲われる上に標高が高いせいで空気が薄く直ぐに息が上がる。

接近戦を主体としている私や和也、ゴドーは息も絶え絶えだ。

マリーやセリカも後衛の魔術師なため比較的体力が低く、疲れているのが一目見て分かる。

そんな中でシンシアだけがいつも通り飄々とした表情で足取りも軽やかに先頭を歩いている。

「ほら、ほら、こんなところでへばってちゃ、魔王なところまでたどり着けないぞ？」

「なっ、なんで、シンシアは、そんなに、元気なんですか!？」

正直信じられない。シンシアもかなり激しく動いていたはずなのに1人だけ疲れた様子も見せていない。

「まあ私も普通ならあなたたちみたいにはばってたでしょうけど、この山の森は魔力に溢れているからね。エルフの私は森から魔力を

貰って使えるから、ここ見たいに魔力に溢れた森では無尽蔵の魔力と体力を発揮できるというわけよ」

「羨ましいわね」

本当に羨ましい。

少し激しく動いただけで息が上がるこの環境では魔物と出会ったとき咄嗟に反応できないかもしれないし、連戦になった場合は疲れで動きが鈍る。

「早く目的の、洞窟にたどり着きたいわね」

「そうですね。随分歩きましたから、そろそろ着くと思いますが」

息も整ってきたし、後はちゃんと洞窟を見つけることができるかどうか問題ね。

私たちは近くにあるはずの洞窟を探しながら慎重に進む、皆話すのを止め黙々と洞窟を探しているから少しの物音でも大きく響く。私は近くの茂みが少し動いただけでも、咄嗟に魔術で吹き飛ばしてしまいそうなほど緊張していた。こんなに遮蔽物が多い場所では警戒し続けられないといつ不意打ちを受けるか分からない上に、密かに潜入しなければいけない私たちは逆探知される可能性のある探知魔術が使えない。

五感と今まで培った経験に頼るしかない。

「見つけたぞ！」

だからいきなり大声を出したゴドーに向けて咄嗟に魔術を撃った私は悪くない。何とか直撃しないようにぎりぎり狙いも外したし

「んなわけあるか！」

当然怒鳴られた。

正直普段は軽薄な感じのゴドーが起こるとギャップで結構怖く感じる。

「ごめん！ だけどいきなり大声出したゴドーも悪いでしょ。周り警戒して緊張感バリバリの私が茂みが少し動いただけで魔術撃ちそうな感じだったのは見てたでしょう？」

「それはそうだがまさか少し大きな声出ただけで確認もせず撃たれるとは思わんだろう？」

まあそれはそうだ。

「だから謝ったでしょう」

私がそう言った後もなんだかぶつぶつ言っていたが

「それで何を見つけたんですか？」

セリカの声をかけられると途端に上機嫌になって張り切って話し始めた。分かりやすすぎるよゴドー

「ああ、目的の洞窟らしきものを見つけたんですよセリカ。入口近くに目印にするように言われた大きな木もあるし多分間違いありませんよ。ただ」

「魔物がいるな。それもおそらく魔王の配下だ」

ゴドーのセリフを和也が取った。ゴドーは何とも言い難い顔で和也を見ている。和也、空気読みなよ。ゴドーが必死にセリカにアピールしてるんだからさ。

「その可能性が高いですね。ですがそれゆえにここが目的の洞窟という可能性が高いです。魔物たちを倒して侵入しましょう」

セリカもゴドーのアピールに気が付いてないみたいだし、がんばれゴドー応援してるわよ。

「……………っ、……………ん、凜！」

「えっ、なっ、何！」

目の前ではマリーたちが何やら怒ったような顔をしているがどうかしたのだろうか？

「『何！』じゃないわよ。これから魔物倒して洞窟に入るけど準備いい？ ちゃんと話聞いてた？」

「ごめん！ たぶん聞き逃したと思う」

ううう、そんな目で見ないでほしいな。さすがに魔国に侵入していると中にもかかわらず、あんなこと考えていた私がいけないかもしれないけど、そのなんか呆れたような目はやめて。

マリーから再度魔物を排除するための作戦を聞き私たちは行動に移った。

今回の作戦のポイントはいかに素早く魔物を倒し仲間に連絡をとらせないかということ。

その為には魔物たちに攻撃を受けていることを悟らせてはいけなないので全ての魔物をほぼ同時に倒す必要がある。

まず魔物の総数の把握と位置の特定を隠密行動が得意なシンシアがやって、シンシアの指示に基づいてセリカが魔術で精密同時狙撃を

する。残りの私たちはセリカが撃ち漏らした魔物や、もしも把握していなかった魔物がいた場合は殲滅すること。

『こちらシンシアよ。魔物の位置と数を把握したわ。洞窟から50メートル以内にいる魔王の配下と思われる魔物の数は120体ほどよ。位置はここよ』

シンシアから魔物の位置情報が送られてくるが、大丈夫なのこれ。

『こちら凜、シンシア、これ大丈夫なの？　こんな探知魔術使ったら逆探知されない？』

『大丈夫よ。これは森に協力してもらってやってることだから探知されることはないわ。これやってる間動けないから護衛は頼んだわよ』

『分かったわ』

『こちらセリカ、狙撃の準備ができましたよ。皆さんも用意はできましたか？』

『こちら和也、準備はできている』

『こちらシンシア、準備オーケーよ』

『こちらゴドー、いつでもいいぞ』

『マリーよ、こっちも準備いいわよ』

皆準備ができているようね。

私？

『こちら凜よ、いつでも行けるわ』

『それでは作戦開始だ』

和也の号令で皆が動いた。

300を超える魔術が一斉にセリカから放たれ魔物たちに殺到する。

魔物たちは慌てて防御したり逃げたりしようとするが実行に移す前に魔術によって殲滅された。

『目標の殲滅を確認したわ』

『さすがセリカ』

周りの警戒はシンシアに任せ、私たちはひたすら洞窟まで走る。

『洞窟から何か出てくるみたいよ。たぶん新手の魔物よ』

「皆！ やっぱり洞窟内にも敵が居たみたい。さっきの魔術攻撃の音に引かれて出てくるからこれも一気に倒すわよ」

「「「「了解！！！！！！」」」」

ようやく森の木々が途切れて洞窟の入口が見えてくると同時に魔物の一団が出てきた。

「撃ち爆ぜよ、ファイヤーボム」

人の頭ほどの火球を魔物の一団目掛けて放つ。しかしこの魔物の一団はこれまで戦った魔物よりも統率がとれていた。リーダーのゴブリンキングが指示を出しすぐさまファイヤーボムの射線上から離れる。

素早い指示だけれど、それだけじゃ私の撃ったファイヤボムは避けないわ。

「爆破！」

私の合図でファイヤーボムが爆発を起こす。

だがこの爆発自体には大して威力は無い。

近くにいたゴブリンを2匹倒せたけれど他のゴブリン達は無傷だ。

だけどこの魔術は魔物たちを倒すために撃つたものじゃない。

その爆発と音で一時的に混乱させるために撃つたものだ。その役目はきちんと果たしている。

近くで炸裂した爆発音でフラフラになったゴブリン達を私たちは容易く倒していく。

「俺とゴドーでゴブリンキングの相手をする！」

確かにあいっただけファイヤーボムの効きが悪いみたいだしお願いしたほうがいいわね。

「分かったわ！ さっさと片付けなさいよね！」

こちらに気づいて反撃しようとする個体もいるが、平衡感覚がやられた状態ではまともに攻撃もできず全く見当違いの方向に武器を振っている。私とマリーでゴブリンの討伐が大体終わったところで

「うぐうぐうぐうぐうぐおおおおお」

突然近くで雄叫びが炸裂した。

あまりの大音響に体が硬直し、三半規管がシェイクされる。

やばいわ！ 今襲われたらひとたまりもないわ！

雄叫びのしたほうに顔を向けると血に塗れたゴブリンキングが出鱈目にその手に持ったメイスを振りまわしているのが見えた。

ゴドーと和也が2人がかりで相手をしていたがまだ倒せていなかったようだ。

傷は追わせているようだが決定的な攻撃が通っていないようだ。

体のあちらこちらに傷はあるのにその身に纏っている鎧と兜には傷がない。

私が見ている間にも和也達の攻撃が鎧や兜をとらえるが少し傷がつ

くだけでそれ以上のダメージがない。

あれは相当頑丈な様ね。だけどやりようはいくらでもあるわ。近くの和也達を巻き込まなくて確実にあいつを殺せる魔術は『ライティング』がちょうどいいでしょう。

いくら鎧と兜があっても金属なら電気は通すでしょうからこれを撃てば終了よ。

「走れ雷光、ライトニング」

5本の稲妻がゴブリンキングに向かって殺到する。

動きが鈍いゴブリンキングがこれを避けれる筈がないわ。これで終わりよ。

そう思っていただけにライトニングが着弾する寸前に呆気なく掻き消えたのには目を疑った。

「凜、こいつの鎧と兜には魔力を使った攻撃を無効化する能力がある！ 生半可な魔術じゃ意味がない。その上に異様に硬くて攻撃が通らない」

「分かったわ。何とかするから、もうちょっと持ち堪えて」

そんな能力でもなければ和也がさっさと魔術で倒しているはずよね。

『マリー達何かいい案ある？ さっさと終わらせないと周りから魔物たちが集まってきて手がつけられなくなるわ』

『無効化能力を上回る魔術をぶつけるというのが一番簡単ですけど、そのレベルの魔術を使うと今までこっそり潜入してきた意味が無くなりますね』

そうしたものか、と私たちが悩んでいると

『私に案があるわ』

シンシアから念話で提案があった。

『何？ 言ってみてシンシア』

『私が弓で狙撃するわ』

確かに物理攻撃なら無効化はされない。しかしそれでは

『さすがに弓じゃ和也達の攻撃を弾く防具を撃ち抜けないと思うんだけど？』

どうしても破壊力が足りない。

『任せなさい。それに対する対策はちゃんと考えてるわよ。だから一瞬でいいわ、あいつの動きを止めてちょうだい』

シンシアのことを信じよう。

『和也、ゴドー、聞いてたわね。一瞬でいいからそいつ動きを止めて、そうすればシンシアが何とかしてくれるそうよ』

『分かった！』

『頼んだぞ！』

『任せなさい』

和也がゴブリンキングの注意をひきゴドーが死角に回ろうと動く。ゴブリンキングもゴドーを見失わないように位置取りを行っているが和也達のほうが一枚上手だった。

わずかな隙を突きゴドーがゴブリンキングの死角に入り相手の膝を剣で強打する。

その攻撃も防具によって防がれたが衝撃までは殺しきれなかったようだ。

動きが止まる。

『ナイスよ2人とも』

1条のきらめきがシンシアからゴブリンキング目掛けて空をかける。

そしてそれは寸分の狂いもなくゴブリンキングの眼を射抜き絶命させた。

凄いわねこれは、兜をかぶっていたゴブリンキングの眼を射るなんて神業としか言いようがないわ。

『……………凄いわね』

『……………全くだ。さすがエルフの弓使いだな』

私たちは皆で褒め称えたが

『そんなに褒めないでよ。さすがに照れるわ』

照れたシンシアのそんな言葉で褒めるのを止め洞窟に侵入した。

それから後は何もなかった。

本当に何もなかった。ただ魔王のいるオーガス帝国の帝都まで歩き続けただけの旅だった。

魔王の配下と遭遇する可能性が高くなるため村や町を避けて移動し

たから、野宿ばかりで不便だったがそれだけだったわ。
陽動がそんなにうまくいつているのかそれとも単に運がいいのかは
分からないが作戦がうまくいつている分には問題ないでしょう。
そんな道程だったからきつと油断していたのだろう。
私たちはその報いを受けることになった。

それは突然だった。

何の前触れもなく湧き出た魔物たち。
瞬く間に包囲され逃げ道は塞がれた。
私たちが互いに連携がとり難い地形な上に地上だけでなく空にさえ
敵がいる、完璧な待ち伏せだった。

「さて勇者達、短い夢は見れたかな？ 君たちはとうとう気がつか
なかったが私たちは君たちがシンディックに召喚されたすぐ後から
監視を続けていたんだよ」

1人だけいた魔族の指揮官が言った言葉は信じられないような内容
だった。魔国に侵入したときからではなく、こちらに召喚された時
から私たちは見張られていた。それは人類の中枢部にも多くの魔族
が入り込んでいることを意味する。
それならば私たちが潜入する場所すらも筒抜けだろう。

「君たちは神々の祝福を受けた強大な存在だ。監視しないわけには
いかなかった。おかげで他のことに対するスパイ活動にも支障が出
てとんだ被害を受けることになったよ。まあそれも君たちをここで
捕えることができれば問題ない。君たちをこちらがとらえれば人は
指揮を打ち碎かれ、私たちに降伏するだろう。それで戦争は終わる。

私たちにも感情がないわけではない。こちらに抵抗する人間はともかく無抵抗な者たちまで殺そうとは思わない。どうか降伏してもらえないだろうか？」

なぜこちらを捕えることに執着しているんだこいつは、この状況なら私たちを容易く殺せるはずだ。一々捕まえるよりも殺したほうが後々の管理は楽なはずなのになぜだ？

「降伏なんてできるか！ お前たちのせいで数え切れない人たちが故郷を追われ、殺されているんだぞ！ いまさら何を言っている！」

和也の言うことも尤もだ。今まで魔王軍のしてきたことを見る限り無抵抗なものには手を出さないという約束が守られるとは思えない。

「皆さん、私から提案があります」

「なにセリカ、この包囲を抜ける良い解決法を思いついたの？」

もしそうだとしたら凄過ぎる。私は全くこの包囲を抜けるイメージができないのに

「そうです。ちなみにこれはスピードが勝負なので、私が魔術で敵を吹き飛ばして包囲に無理やり穴を開けたら脇目も振らずに急いで包囲を抜けてください。少しでも立ち止まると失敗します」

「信じてるよセリカ」

「任せてください皆さんを無事に包囲から脱出させてあげます。カウントを取ります。0になったら走ってください。5 / 4 / 3 / 2 / 1 / 0！」

セリカが強力な貫通力を持った魔術『ホーリーランス』で包囲の一

部に強引に穴を開ける。

私たちはすかさずそこに走り出すがこのままでは魔物たちが穴を塞ぐほうが早い！

「平伏せ、グラビティー」

「ナイス、セリカ！」

穴を埋めようと動いていた魔物たちの動きが急激に鈍る。『グラビティー』によって普通の3倍近い重力をかけられたせいで動くことすらままならない状況になっている。

私たちは効果範囲の中に入らないように効果範囲を制御しているようだ。

元々は無差別に効果範囲内に重量倍化をかけるこの魔術をイレギュラーな形にもかかわらずここまで制御するなんて凄過ぎるよセリカ！

「よし！ 皆無事か！？」

「私は無事よ」

「こつちも問題ないわ」

「無事だぜ」

「大丈夫よ」

セリカの返事だけが聞こえない。

「皆さん無事そうですね。それでは皆さんは先に進んで魔王を倒してください。ここは私が引き受けます」

セリカの声に後ろを振り向くとそこにはたった1人で魔物たちの追撃路を塞いでいるセリカの姿があった。

「何言っているのセリカ！ それなら私たちも戦うわ！ 私達6人が居ればどんな敵にだって勝てる！ 包囲を抜けた以上そんな奴らなんて敵じゃないわ！」

「そうですね包囲を抜けていたらこんなやつらは私たちの敵じゃありません」

「えっ」

その言い方はまるでまだ私たちが敵の包囲網を抜けていないような言い方だ。

「私なら念には念を入れて、包囲を突破された時の為に後詰の部隊を用意します。戦いでは最悪を想定するべきです。だから私はここですべての魔族をひきつけます。その間に魔王を倒してください。タイムリミットは1時間ですよ。それ以上掛かっていると私が追い付いてしまいますから。頼みましたよ、私達人類の未来はあなた達にかかっているのですから」

内部からの脱出も外部からの侵入もできないように魔術障壁が張られる。この魔術障壁は念話すら通さないようだ。もうセリカと話すことはできない。

さっきの強がり最後の言葉にさせはしない！

2時間以内に魔王を倒してセリカの救援に駆けつける！

そしてセリカを「馬鹿」と言って怒鳴りつけてやるんだ。

「1人で死ぬなんて許さないわよ」

聞こえないはずの私の声にセリカが「もちろん」と答えてくれた気がした。

「行くわよみんな。さっさと魔王なんか倒してセリカを叱りつけに

戻ってくるわよ！」

「もちろんよ」

「覚悟してもらっわ」

「これはきちんと怒らないとな」

「死なないでくれよ」

それぞれの言葉を吐いて私たちは前へ走り出した。
もう止まっている暇なんてない。

そして話は冒頭に戻る。

あれから後私たちは立ち塞がる魔物と魔族を鎧袖一触で薙ぎ払い、
魔王のいる玉座の間まで来た。

そして魔王の圧倒的な力の前になすすべもなく敗れた。

私たちの決意も何もかも魔王に勝つためには何の役にも立たなかった。

一方的な戦い、いや、戦いとは到底呼べないものだった。

私たちに勝ち目はなく、ただいたぶられる様に体力をすり減らしま
た1人また1人と脱落していき残っているのは、もうまともに動く
こともできない私と和也だけ。

有るのは絶望、逃げることもできずただやられるのを待つだけの私
たち。

「詰まらん。これが勇者の一行の実力だとも言うのか？ これ
ならまだ対魔王戦線とやらがやっている大規模反攻作戦『レ・コン

キスタ』とやらを潰しに行ったほうが余程楽しめたかもしれんな。そうは思わんか？ ライナー」

魔王がすぐ後ろに控えていたフードを被った魔族に声をかける。この魔族はとうとう魔王に加勢することもなかった。その必要もなかったのだろうが。

「ライナー？ もしや、ライナーお兄様ですか！？」

お兄様？ マリーの肉親は全て魔王が生まれた事件の時に死んでいくはずだ。

それが魔族となって生きていたということなの？

「久しぶりだなマリー。見ないうちに随分綺麗になった」

「お兄様が生きていらっしゃるということはお父様やお母様、他の姉上方と兄上方も生きていらっしゃるのですか！？」

マリーだめだ。生きていってと言っても彼らは既に魔王の配下の魔族なんだぞ。辛くなるだけだ。

「いや生き残っているのは僕だけだ。他の皆は僕が喰った」
「えっ」

こいつは今何と言った？

「魔力の多い王族は特別に美味くてね。勿体無いからじっくり、じっくり、食べて一昨日ようやく全員を食べきったんだ。本当に美味しくて今でも思い出すと涎が垂れてしまいそうだよ」

人じゃない。

人の形をしているがこれは断じて、『人』じゃない。
肉親を食らいそれを美味しかったと語るような生き物が『人』であ
ってたまるものか！

「嘘ですよね？ お兄様。あの優しかったお兄様が父上たちを食べ
たなど、嘘ですよね？ お願いですそうだと言ってください」

言っているマリーもあいつが言っていることが真実だとわかってい
る。それでも愛おしい家族の形をしたものが嬉々として家族を食ら
ったなどということを信じたくないだけなのに、

「今からまたあの味が味わえるのかと思うとまた涎が垂れそうにな
るよ。そうだろマリー？」

その顔は醜惡な笑みを浮かべマリーを見ていた。

「いややややあああああ！！！！！！」

「はははははははははははははは！！！！！！！！！！」

外道だ。マリーの泣き叫ぶ姿を見て嬉々として嗤っている。見るに
堪えない目を逸らしたくなる醜惡な笑顔だ。

嘲笑が突然止む。

先ほどまで醜い笑みを浮かべていた顔は凍りついていた。

「なんだと？」

先ほどまでの嘲笑が嘘のような平坦な声、何の感情も感じられない。
虚ろな音だ。

「魔王様報告です」

「なんだ？ 何か面白いことでもあったのか？」

「対魔王戦線が取っている基本戦術のことです。今までは全く掴めていませんでしたが今判明しました」

「それがどうした？ 生半な戦術では我らの領地を10キロと進めんぞ？」

肉親を食ったことを嬉々として話していた。あいつの顔が青ざめているとはいったいどんな戦術をとっているんだろうか？

「敵は戦略級魔術で砦や要塞などを悉く消滅させながら進軍しています。既に消滅した砦などは50を超え、魔物たちの奇襲も怪しげな森ごと吹き飛ばすという荒技で対処しています。こちらも数に任せた断続的な攻撃で損害を与えているようですが、敵がこのままの戦術をとり続ければ間違いなく、この帝都にも戦略級魔術の雨が降ることになります」

今日はあり得ないようなことばかり聞こえる日だ。

戦略級魔術？

そんなものを使ったら勝ったとしても残るのは何もかもが死に絶えた荒野だけだ！

勝つ意味などない。

「はははははははははは！！ 凄いな人は！ 形振り構わなくなればここまでするのか。それでは私などよりよっぽど魔王らしいではないか！」

「既に敵はグラナダ要塞都市にまで迫っているようです。私も要塞防衛のため出陣します」

「お前自ら行くのか？ 敵が戦略魔術を連射してくるならばお前が行ったところでもならんと思っただがな」

「その心配はありません。敵の今作戦の最終目的地がグラナダです。敵はグラナダを占領する事で我ら魔国領内に橋頭保を確保しようという心積もりのようですから、グラナダに対しては戦略級魔術を使い、消滅させるようなことはないでしょう」

「そうか、なら頼んだぞ。グラナダが落ちればいよいよここが戦場となる。こちらから好きな時に戦闘を仕掛けるのは面白いが、敵に好きな時に戦闘を仕掛けられるのは面白くない」

「御意に」

次の瞬間奴は転移魔術で消えていた。

「さて、それではこの勇者たちをどうしたものか。人間を拷問するのにも飽きたし、こんな弱い人間では肩慣らしもできない。困った使い道がないぞ」

行っていることはふざけている。敵である私たちを前にして腕を組んでよそ見しながら考え事をするなんて正気の沙汰じゃない。ただどそれだけあからさまに隙を作られていても、私たちは動けなかった。

体が委縮し、震え全く言うことを効かない。私だけでなくゴドーも和也もそうだ。

マリーはまだ兄だったものとの会話のショックから復帰できていない。

「そつだ！ いいことを思いついた。こちららも魔族にしよう。元々の器が良いんだ少しは面白いやつになるだろう」

魔王はその顔に満面の普通なら見惚れるだろう笑顔を浮かべていたが、正直こちらは怖気しか感じない。

「私も良いことを思いました。それはあなたが死んでハッピーエンドということです！ 光り輝け、シャイニングレイ」

魔王に向けて横から強烈な閃光が襲いかかった。

吹き飛ばされ壁に激突する魔王、それを私たちは呆然と見ていた。

「凜たちも何ボーとしているんですかさっさと立ってください！逃げますよ」

「えええつ！」

ちっ
きと言
ってる
ことが
違う。

「その女、嘘はよくないぞ嘘は」

吹きつける殺気、荒れ狂う魔力、室内にもかかわらず玉座の間はまるで台風の中のように風が吹き荒れている。

「嘘は行ってませんよ、嘘は。ただいまは倒せそうにないから戦略的撤退をしましょうというだけです」

「させると思うのか？」

魔王の殺氣に当てられてもなおセリ力は平然と言い返す。

「貴方の事など知ったことはありません。私たちは撤退」するのであって、『させてもらっ』のではないんですから」

「はははははははははは……！！！！！！　よくぞ言つた。貴様を殺すのは楽しめそうだ！」

魔王は歓喜の表情を浮かべその魔力を開放する。部屋中に満ちるあまりに濃密な魔力に吐き気がする。

『凜、和也、ゴドー、マリー、シンシア、手ひどくやられているようです。あまりに迎えに来るのが遅いのでこっちから来ちゃいましたよ』

『セリカ……』

別れ際のあのセリフ強がりなんかじゃなかったんだ。

『ですが本当にこれは予想外です。魔王がここまでの存在だとは思いませんでした。予想を遥かに超えています。ですからここは撤退しますよ』

私たちを転移魔術の魔術陣が囲む。

「逃がさん」

魔王が逃がすものかとこちらに攻撃を仕掛けてくるが

「そこでじつとしていてください。集え雷光、『ライティングサークル』」

雷の檻に囚われ出ることができない。力づくで強行突破しようとしたが魔術障壁ごと腕を焼き切られたところで断念したようだ。

魔王の圧倒的な回避力も周りを完全に囲まれてしまえば意味をなさない。

「なんだ？ このままこの雷光の輪を狭めていつて私を殺すのかと思っただらそうじゃないのか？」

「魔王の貴女がこの程度で殺せるとは思っていませんから。貴女こそなんでさっさとこの檻を突破しないんです？」

「それはあれだ。このまま突破しないほうが私にとって面白いことになるからだよ」

「分かっていて乗ってくれるような人物でよかったです」

「私が楽しめればそれでいいんだよ」

他の皆は2人が何を言っているか分からないようだが、私はいい加減分かった。

私に2度の同じ手が通用すると思わないことねセリカ！

立ち上がり転移魔術陣から出ようとするが体が動かない！

「凜、じつとしてください。動かれると無駄に魔力を使います」

「セリカ！ あんた私にバインドかけて」

「それでは皆さん次に向けて頑張ってください。それとレオンに伝えてください。『レオンはレオンの意志を貫くように、私を捨ててまで選んだ意志です。途中で投げ出すのは許しません』と」

私の言葉を遮りセリカが転移魔術を実行した。光が溢れ、体が浮くような感覚に襲われる。それが終わり目を開けた時に見えたのは懐かしい光景、私たちが勇者として召喚された部屋だった。

神歴5919年ルーナの月20日

シンディックの神殿に敗北した勇者達が転移してくる。その中にセリカ＝レインハートの姿はなかった。

もたらされる魔王討伐失敗という凶報に対魔王連合軍上層部はその事実の一時隠蔽を決意する。

この事実が前線に知らされるのはグラナダ要塞都市の攻略後となる。そしてこの凶報により対魔王連合軍上層部は人類と魔王との最終決戦を目的とした作戦『ギヤザリング・フォース』の決行を決定する。その作戦はまさに人類の総力を賭けたものであり、負ければ滅びる

しかない。

それでも既に人類はその作戦でしか魔王に勝つ手段は残されていなかった。

魔王討伐（後書き）

勇者敗北。

生還（前書き）

お待たせしました。

生還

魔王に負け、セリカを犠牲にして逃げ帰ってからもう2週間がたつ。だが私たちはいまだに立ち直れずにいた。

対魔王連合軍が行った『レ・コンキスタ』成功していた。

最終目的地のグラナダ要塞都市が自爆によって失われたが、塹壕を掘り木を切り倒して柵を作り、岩を運んで防壁を作る作業が日夜を問わず行われているようだ。

それによって今ではかなりの防御力を持った陣地が形成されつつあるらしい。

だがそれを聞いても私たちの心は一向に張れなかった。

私たちが勝たねば『レ・コンキスタ』が成功しても何の意味もない。いずれ魔物の数に押されて後退することになることが嫌というほど分かっている。

所詮今行っている陣地作りは滅亡の時を引き延ばすためのものになんない。

私はこの世界に住む人たちの信頼を裏切った。

あれだけ期待され送りだされたのに結局魔王を倒せなかった。

期待は反転し失望に変わっているだろう。

いや憎悪にすらなっているかもしれない。

「貴様たちさえいなければまだ勝てたのかもしれないのに」

そう言われているかもしれない。

そう考えると体が竦んで私は2週間1歩も部屋を出ることができなかった。

マリー達は「あなた達には元々関係ない戦いでした」と言って慰めてくれるが、この世界で人々の運命を背負って戦うと決めたのは私だ。断ることもできたのにそうしなかったのは私だ。

きつと心のどこかで思っていたのだろう。

私ならきつと魔王にでも勝てると、勇者として呼ばれたんだから勝てるはずだと。

その慢心の結果魔王になすすべもなく負けた上にセリカまで死なせてしまった。

そのこととセリカの遺言をレオンに直接言おうと思ったが、マリー達の話によるとレオンも今回の作戦でグラナダの自爆に巻き込まれて行方不明だという。爆心地のすぐ近くにいたことが確認されている上にレオン＝ライフハートは魔術障壁も張ることができないため生存が絶望的だということも。

魔王は倒せず、セリカを守れず、さらにはその遺言すら伝えることができなかった。

今までのことが何もかも夢だったらいいのに。

そんなことを思っていた時もあった。

魔王に負けた直後の私は本当に動揺して落ち込んで世界がすべて敵の様な気がしてた。

だけどそうじゃないことに気づかせてくれた仲間がいた。

毎日毎日お兄さんのことで自分も辛いだろうに尋ねてきて励ましてくれたマリー！。

塞ぎこんでいる私と和也を言葉巧みに、もしくは強引に外に連れ出してくれたシンシアとゴドー！。

オービスさんやリリカさんも激務の間を縫ってよく会いに来てくれた。

そんな皆の協力で私は立ち直ることができた。

次は必ず魔王を倒す。

その為に半年後の「ギャザリングフォース」作戦まで必死に鍛錬をするんだ！

「勇者達の様子はとうじゃ」

「もう持ち直した様よ。帰ってきた時は本当にひどい有り様だったけど、今は信じられないくらい生き生きとして半年後に備えて鍛錬をしているわ」

「そうか」

よかったのう。本当に勇者達の帰ってきた直後の有り様はひどいものじゃったから、心配しておったのじゃが持ち直したか。これでやっと数多ある問題のうち1つが無くなったの。じゃがせいぜい1つじゃ。勇者達の問題が大きなものであったことは確かじゃが、それと同じくらいの問題も発生しておる。例えば、イーリア特殊戦団じゃ。あれは元々ライフハート家の私兵部隊じゃった。ライフハート家の当主が常に魔王との戦いの最前線におったから、殆どの者は知らんじやろうがそれでも元々はそうじゃった。おかげで厄介な問題が起きておる。

「勇者達の件はもう片付いたと思ってよさそうじゃな。それでは話を変えるが、イーリア特殊戦団の件はどうなっておる。かなり交渉が難航しておったと思うが」

儂の言葉を聞いたりリリカは途端に渋面になってしまった。これはろくな進展が期待できないのじやろうな。

「交渉は全く進んでいないわ。こつちがいくら半年後の作戦にイーリア特殊戦団が必要だと言っても全く聞く耳を持たないわ。全くレオンさえいたらこんなことで悩まされることもないのに！」

「そうじゃな、レオン坊主さえ生きておればこんな無駄な交渉をせずに済んだじやろう。あの部隊は当主の護衛が目的で作られておるからの。当主が前線に居れば当然部隊も前線で戦うじやろうが、今

の当主はイーリア本国に居るレオンの養子じゃからの。そっちの護衛が優先なのじゃろう」

「それは分かるわ。けどそれなら当主を前線に連れてくるくらいしてほしいものよね。まあレオンが帰ってきたらこの問題も片付くでしょうけど」

「お主はまだレオン坊主が死んでいないと考えておるのか？ あの状況で生き延びることなど無理じゃろう」

爆心地で要塞を吹き飛ばす自爆魔術を受けたのじゃ。肉片一つ残らなかったじゃろう。

「あら、逆に聞くけどあのレオンが死ぬと光景があなたには想像できるの？ 私には無理よ」

確かに儂もレオンの死ぬ光景など想像もできん。しかしそれとこれとは別じゃ。

「それは儂も想像できんが実際問題としてレオン坊主は行方不明じゃ。あやつが生きておればどんな手段を使っても帰還するじゃろう。そうでない以上あやつが生きていると考えて行動することは自殺行為じゃ」

「まあ、それも道理よね。ほんとあの馬鹿は何をしているのかしら」「生きているなら、さっさと帰ってきなさい（来るのじゃ）」「」

それが儂達の共通見解じゃな。

部下達の献身のおかげで私は生きている。

グラナダ要塞都市の自爆に巻き込まれた時さすがに私でも死んだと思った。

しかし、その考えは部下達によって覆された。

残っていた部下の内2人が魔術障壁を張り時間を稼ぎ、残りの者たちが転移魔術を発動した。咄嗟に発動させた転移魔術は座標指定もままならない。最悪岩の中や遙か上空に転移することすらある。それでもグラナダの自爆に巻き込まれるよりは、まだ生き延びる可能性があった。部下たちはとっさにそう考え実行に移した。そして私は一か八かの賭けに勝ちこうして生きている。

だが、何も見えない。

1

センチ前にある自分の手すら全く見えないほどの暗闇に私はいた。グラナダ要塞の自爆に巻き込まれてからどれだけ経ったかは分からない。

気絶していたせいで体内時間も狂い、全く時間の経過を感じさせるものが見えないこの空間では時間の経過を観測できない。大声を出し、その反響でこの空間の様子を把握しようとしたがほぼ反響がなかったことから、途方もなく広い空間だということくらいしか分らなかった。

食べ物も水もないこの空間で生きることができたのは私が魔族になっていたからに他ならなかった。どうやら魔族は魔力を吸収するだけで生きていけるようだ。随分長い間歩きまわっても喉が渴かなかった上に空腹も覚えなかったことから推測したことだがおそらく間違っではないだろう。

幸い脱出する当てはまだ1つある。

歩き回っていて分かったことだが、この空間は魔力の分布がかなり不自然だ。普通こういった閉鎖空間では魔力の濃度は均一になるはずなのにある方向に進むと魔力の濃度が異様に濃くなり、ある方向に進むと今度は魔力そのものが存在しなくなる。魔力は多かれ少なかれ力ならず存在しているものだから、魔力が存在しない方向には何らかの魔力を消費する装置があるはずだ。

だからそちらへ向かえば脱出の何らかの手がかりがあるはずだと思うが、それには重大な問題がある。

それは魔力がないということだ。水も何もない空間で私が生きていられるのは魔力があるからだ。それがない方向に行くということはまともに動けるのはせいぜい1週間、それ以上は急速に身体機能が低下していくことだ。魔力がない空間に入った直後ならまだ引き返すことはできる。しかし魔力の無い空間に入りしばらく進んだ場合、なんの目印もないこの空間では元の方角に戻れるという保証はない。行くとしたら命懸けになる。

そう思い魔力のある空間の探索を行っていたがこちらは何の進展もなかった。

いよいよ覚悟を決める時なのだろう。

周囲から無理やり魔力を掻き集め身体強化魔法を発動する。

倍率は200倍、魔族になったことで限界が大きく跳ね上がった。

これなら短時間でかなりの距離を踏破できる。

さて行くか。

そう思いながら全速力で駆け出した。

音速を超える速度で駆けだしてから既に2日以上経った。

しかし何も見つからない。床も奇妙なほど平らでなんの凹みも落とし穴もない。

魔力がある空間の場合、ある程度したら床が途切れて何もない空間が広がっていいのだが 危うく落ちるところだった

こちらはまだまだ床が続いている。正直何の変化もないことに飽き始めていた。

「んっ、これは」

変化が現れたのはさらにそれから1日経った後だった。

さっきまでは『魔力がない空間』だったのに『魔力を吸い取られる空間』に変わった。

本格的にまずいな、これは。

いよいよ後戻りができなくなった。

しかし、魔力を吸い取られる感覚が強くなる方向に行けば、何かしらの人工物があることは確実だ。

それがこの空間から出る手掛かりとなると信じてその方向に向かうしかない。

そう思い進んでいたが、これは辛いな。

進むにつれて魔力を吸い取る力は強くなり、今では1秒毎に初級魔術を使った時程度の魔力が吸い出されている。幸い、吸い出された魔力が進んでいる方向に向かっていく途中で一部を再び吸収することができているが、それがなかったら私の魔力量でも既に魔力が尽きていただろう。

そんな思いをしながら進んで既に9日が経った。

そしてやっと希望の見えなかったこの探索に終わりが現れた。

当然開ける視界降り注ぐ光、長い間光がない空間にいたせいで目が光りに焼かれて真っ白に染まった。

まずい！

咄嗟に目を閉じ、戦闘態勢に入る。

感覚を研ぎ澄ませ、わずかな空気の流れも見逃さないように呼吸すら止める。

およそ1分ほどそうしていただろうか、徐々に視界が戻ってくる。それでもまだぼやけている視界に映ったのは巨大なクリスタルとそこに閉じ込められて干乾びたドラゴンだった。

さっさとクリスタルを調べたいが、念の為周囲の探索も行っておく。光があるため部屋の隅々まで調査できる。

その結果分かったのは、この空間に出口がないこととこの空間が濃

密な魔力に満ちていることだ。

魔力の濃度は常人ならこの部屋に入った直後に魔物化してしまうほど濃い。幸いと言っていいのか、私は既に魔物化しているから大して影響もなくむしろ心地いいくらいだが、普通ここまでの魔力が何か所に集中することはない。何かしらの意志が働いていることは確実だ。

出口がないことは本当に一目見て分かった。なにせ壁には継ぎ目一つもない、ということは私は気付かないうちに転移魔術陣を作動させてしまった結果ここに来たということだ。

致死性のトラップでなかったことを喜ぶべきなのだろうが、どう考えてもこのクリスタルとドラゴンは厄介事の種にしか思えない。

だが私に選択権はない。

何もしなければ、このままここで死ぬだけだ。

意を決してクリスタルの調査を始める。

一見するとただ大きいだけのクリスタルだが中にはドラゴンの干物が入っている時点でただのクリスタルな訳がない。

実際、注意深く見ていくと所々で違和感がある。違和感のあった場所を視覚を強化して注意深く見てみると細かい文字が刻みこまれているのが分かった。

刻まれている内容は封印魔術と魔力吸引魔術とその説明のようだ。

それによると、クリスタルの中にあるドラゴンの干物はかつて竜王の座を巡って争ったエンシェントドラゴンらしい。

竜王の座を得ることのできなかったこのドラゴンは怒り狂い、同族を皆殺しにしようとしたようだが竜王によって死闘の末封印されたようだ。

殺すのではなく封印したのは、もしも未来において竜種存亡の危機が起きた場合その力を利用するためのようだ。その場合に利用しやすいように魔力を極限まで吸い取り、生命活動を低下させ仮死状態にした上で封印している。確かにこの状態なら封印が解かれても何もしないだろうし、長期間に渡ってそんな状態に置かれていたら

当然魔術に対する耐性も下がる。強制的に従属させる契約魔術もかけやすくなるだろう。この部屋に満ちている魔力はこのドラゴンから吸い取られたもののようだ。

……ここを出る見通しができたな。このドラゴンを従えて転移魔術で適当なところに私を転移させれば出ることが出来るだろう。竜王が怒り狂うかもしれないが今は脱出することが優先だ。

部屋に満ちている魔力を吸収し、失っていた魔力を完全に回復する。

「身体強化魔術発動、強化倍率20倍」

元々の身体能力も上がっているから体の強化はこの程度で大丈夫だろう。

後は

「オールインワン、形状『剣』」

オールインワンで叩き切るだけだ。材質はただのクリスタルだと調べて分かっているし、特に外側からの衝撃などに対する強化もされていないことは確認している。大した手間もなく壊せるだろう。

オールインワンを振り上げ、力を加減しながら振り下ろす。

硬い手応え、予想以上に硬度が高い。魔力が吸い取られる脱力感が体を包むがこの程度ならまだ大丈夫だ。中のドラゴンを傷つけないように加減していたがそれを止め力を込める。

瞬く間に罅がクリスタルを覆っていき、砕けた。

干乾びたドラゴンが床に落下する。受け止めたほうがよかっただろうが、生憎大き過ぎる。重量的には受け止められるだろうが、大きな的には無理だ。床に横たわっているドラゴンに近づき、生きているかの確認をしたが、何とか生きている。10分に1回ほどしか心臓は動いていないし、呼吸も10分に10回に満たない回数しかしていない仮死状態だが生きてはいる。それにこの状態のほうが私に

とっても都合がいい。

「肉体改変魔術発動、原料『ドラゴン』」

この魔術は完全に条約違反なものだ。この魔術を使えば十分な魔力さえ用意できれば、ほぼありとあらゆる生物を自分に絶対服従する奴隷に変化させることができる。

もちろん人間も例外じゃない。

この魔術が出回れば階級としての『奴隷』ではなく、生き物としての『奴隷』が誕生することになる。誰もが欲望のままに奴隷を得ようと奴隷を使い暴虐に走るだろう。なにせ魔力さえ用意できれば、1国の姫だろうが傾向の美女だろうが自分の思うままになる奴隷とできる。それが可能な魔術だ。できれば使いたくない魔術だが背に腹は代えられない。

ゆっくりとだがドラゴンの体が作りかえられていく、このスピードなら後1時間ほどかかるだろう。魔術が完了するまでこのまま眠っていてくれるといいのだが。

暖かい、長い間寒さしか感じなかった感覚に当然現れた感覚に戸惑った。はじめはそれが暖かさとすら気づくことができなかったくらい、暖かさを感じたのは昔のことだ。ぼうつとした頭では何か考えようとしてもろくに考えることもできない。それなのに『思い出せ』と心がそう叫ぶ、体はまだろくに動かないのに心だけは『急げ』と急ぎ立てる、ただもどかしい時間が過ぎていく。

どれくらいの時間が経ったかは分からない、しかし体には感覚が戻りようやく動かせるようになった。近くに何かちつぽけな気配があるが、この程度なら邪魔にならないだろう、邪魔になれば殺せばいいだけだ。

それにしても何も見えないな。そろそろ視覚も回復していいと思うのだが……………ふむ、馬鹿だな我は瞼を開き忘れておった。これでは見えんのも当たり前だ。

ゆつくりと瞼を開くと見えてきたのは何もない空間に1人人間がおりるだけのようだ。

まあこの人間に聞くか、

「おいその人間、我の問いに答えよ。ここはどこで、なぜ我はここに居る」

「……………」

無礼なことこの人間は我の言葉を無視しおった。竜王の我の声をかけてもらうなどたかが人間にはあり得ないほどの幸運だというのに、少し身の程を分かせてやらねばならんな。

「我の言葉を無視するとはいい度胸だな」

少しばかりの殺気を人間に当てる。人間にはこの程度の殺気で十分だろう、そう思って当てた殺気にその人間は何の反応もなかった。あまりに反応がないので、もしかやつ死んでおるのか、と思い魔術で調べてみたが普通に生きておる。となるとこやつはとことん鈍感なのじゃろう。昔も異様に気配に疎いやつはたまにいたものじゃ。まあそうなるや殺さんように加減するのが面倒じゃが、力づくで礼儀を叩きこんでやるしかないようじゃな。

死なんように加減せんといかんから前足で撫でるくらいでちょうど

「私の名はレオン＝ライフハート、お前の主だ。私に服従することを誓えば、この責め苦も終わらせてやるう」

「ふざけるな！ 我を誰だと思っておる！ 全ての竜の頂点に君臨し支配する者、バハムートであるぞ！ 貴様などに従うものか！」

我には誇りがある。全ての生き物の頂点たるドラゴンの中でも至高の存在であるという誇りが！

それがこのような者などに従うなどありえない。

「そうか、ではお前が『私はレオン様の奴隷です』と言うまで鬨り続けるでしょう」

さすがはドラゴンと言ったところか、人間なら10分もしないうちに根を上げる私の拷問に2時間近く粘ったのだからな。

だが結局は拷問に屈した。

私の回復魔術や様々な身体干渉魔術を組み合わせた拷問は肉体がある以上耐えきることは不可能だ。

少なくともこれまで数十万の者たちを拷問してきたが耐えきれた者はいない。

屈服したバハムートに基本的を守るべきことを命令し、いよいよ本命の命令を下した。

「さて、バハムート、私をここから出せ」

目の前で震えているドラゴンに命令するが、反応がない。

「また拷問されたいのなら構わんが、残り時間は10秒だ」

「待ってくれ！ 我もこの空間から出る方法など知らん！ そもそもこの空間自体が我を閉じ込めるために作られたものだ。我がその出方を知っているはずがないだろう！」

それはその通りだ。しかし、出る方法ならある。私は実行できないがな。

「出る方法は簡単だ。転移魔術で転移すればいい」

「この座標も分からないのに転移するなど自殺行為だ！ 正気ではない」

「『命令する』転移魔術で私をここから出せ。転移する座標はここから上に向かって20キロだ」

「何を言つて、なに！？ 身体が！？」

私の命令によって強制的に体が動いているのに戸惑っているようだが、抵抗することはできないだろう。既に拷問で十分に私に反抗する意志は折った。私の奴隷となっている以上、心の底から命令を拒否しても少しの抵抗をすることさえ困難なのに、すでに心が折れている今の状態では少しの抵抗もできないだろう。既に転移魔術は組みあがり、発動を待つばかりだ。

「バハムート、転移魔術を発動させろ」

視界が一瞬暗くなり薄闇に変わる。

下にも横にも見える物は何もない。いや、上を向けば見える物があった。

星だ。

数え切れないほどの数の星が輝いている。

吹き付ける風は凍えるほど冷たい。

転移した先は地面すら視認できないほどの遙か上空、空も飛べない

私は落ちていくことしかできない。

バハムートに命令しようにも、既に距離が離れ過ぎていて声は届かない。

それでも予めしておいた『できる限り私の命を守れ』という命令に従い、こちらを助けようとしているようだが、自分が飛行することで精一杯のようだ。

まあ、万単位で封印されていたのなら飛び方を忘れることもあるのだろう。だが、それはこの状況で私を助けることができる者が居ないことを意味する。このままでは私は地面に激突し、挽肉となるだろう。せつかく脱出したのにそんな死に方はご免だ。

それに空を飛べない私でも出来ることはある。

まず姿勢を制御し落下する位置の調整を図る。落ちる場所はあるだけ平坦な所が良い、そのほうが着地の時に衝撃が逃がしやすい。逆に水の上などに落ちればろくに衝撃も逃せず、助かる術が無くなる。

星明かりだけではなかなか地面の状況が分かり難いが、それでも強化した視覚は僅かな光を増幅し、地面の様子を見せてくれる。懸命に地面に目を凝らし着地に適した場所を探す。

んっ、あれは焚き火か？

見た限り焚き火の近くは平坦な地面をしているようだ。あそこなら丁度いいだろう。運が悪ければあそこで焚き火を囲んでいるうちの誰かを押しつぶしてしまうかもしれないが、こちらには相手に警告を発するすべはない。近くまで落ちてきたら一応警告だけでもするが、それに反応できる者は少ないだろう。

さて既に地面との距離は1キロを切った。そろそろやるか。

『『オールインワン』、形状変化『ビッグシールド』、強度『オリハルコン』』

巨大な盾の形をとったオールインワンを頭の上に掲げる。

強烈な空気抵抗が盾にかかる。手首から先が千切れそうだ。だがその痛みを代価に私の落下スピードは大幅に落ちる。だがそれでも私を挽肉にするには十分な速度が出ている。

地上まであと約100メートル、タイミングを間違えるわけにはいかない。

頭上に掲げていた盾を素早く足の下に潜り込ませる。

あと50メートル、空気抵抗で不安定に揺れる盾の上で何とかバランスをとる。

あと10メートル、身体強化魔術で身体の強度を含む、ありとあらゆる能力を引き上げる。

「下にいる者たちは急いで焚き火から離れる！」

あと1メートル！ 盾を思いっきり蹴飛ばしその反動で落下速度をさらに落とす。

宙を舞う身体、一瞬の浮遊感が身体を襲うが姿勢を制御し足から落ちるように細心の注意を払う。

着地！ ここまで努力したが当然落下速度は殺し切れていない、着地した衝撃で足の骨が粉碎されるが回復魔術を使い強引に再生する。おかげで関節の位置も筋肉の位置も出鱈目になったが、身体が倒れて頭を地面にぶつけることは防げた。

.....何とか私は生きている。足は使い物にならなくなり、速過ぎた落下速度のせいで地面に突き刺さっているが生きてはいる。

感触的には人を潰した感触がなかったので、焚き火の近くにいた人間は無事に避難したのだろう。素晴らしい回避能力だ。

視界は私が落下した時の衝撃で舞い上がった粉塵で塞がれている。

ここで焚き火をしていた者たちが私に友好的とは限らない

むしろ、空から落ちてきてテントなどを破壊したこちらに敵対心を持っている可能性のほうが高い

ので急いで足の再生をやり

直す。強化した腕力にものを言わせて足の骨を粉碎し筋肉を叩き潰す。そして回復魔術で再生する。自傷行為は好きじゃないのだがこうでもしなければ綺麗に再生できんからな。

足の再生が終わるころには舞い上がっていた粉塵も晴れ、周りの様子が見えるようになってきた。

「大丈夫ですか!？」

どこかで聞いたことのある声だ。どこで聞いたのだったか……………
………そうか思い出した。この声は

「勇者か」

「えっ」

勇者を見るのは久しぶりだ。前線でセリカと別れた時以来か？

だが、此処で勇者に会えるとは都合がいい。魔王討伐の正確な結果を聞くことができる上に、失敗していた場合は現在対魔王連合軍がとっている戦略を聞くことができる。まあ、魔王討伐に失敗していた場合にとる戦略は決まり切っているからその進捗状況を聞ければいいが、こちらを見て驚いているのは確か凜とかいう勇者だったか？ 後ろに見えるのもう1人の勇者の和也、勇者の1行であるゴドー、リリカ、シンシア、マリーだな。セリカの姿が見えないが、どうしたのだろうか。

「まさか、レオン＝ライフハート!？」

私の姿を見た勇者たちが騒いでいるのが鬱陶しい、そこまで騒ぐようなことでは……………あるな。考えてみれば私は先の作戦から今まで行方不明だ。イーリアの大貴族で対魔王戦線を支えていた戦力の

1人である私の生存を確認したのだから。

どうやら総司令部にも私の生存を知らせる連絡を行っているようだ。さてオービスたちに色々と言われるのを覚悟しておかないといけない。

「そうだ、それでお前たちに聞きたいことが2つある、1つ目は魔王討伐の結果について、2つ目は魔王討伐が失敗していた場合、現在対魔王連合軍がとっている戦略についてだ」

勇者達は黙り込んだまま答えない。さっきまで騒いでいたのが嘘のようだ。無為に時間だけが過ぎていく、セリカが居ればこんな無駄な時間を作らずさっさと説明を始めただろうに

「おい、黙ったままでは何も分からない。さっさと喋るんだ」

私が語気を強めていってもまだ勇者たちは反応しない。苛々する、いかな、情報がない事がここまでストレスになっているとは思ってもいなかったな。今の私は冷静じゃない。

「……………なさい」

何か勇者が行ったようだが聞こえない。妙に震えていて、鼻にかかったような声になっているがもしや泣いているのか？
だがなぜだ？

泣いているとすれば先の言葉は『ごめんなさい』か？

まあそれはどうでもいい。さっさと私の聞いたことに答えてほしいものだ。

「聞こえん、もっとはっきりと伝えてくれ」

「ごめんなさい！」

はつきりとは聞こえたが私の聞きたい答えではない。なんに対する謝罪かも分からんのに謝罪されても迷惑だ。

「なんに対する謝罪かは分からんが、そんなことよりさっさと私の質問に答えてくれ。時間の無駄だ」

「あんたね！ 凜がせっかく……………そうか、そうよね。こいつは知らないのか」

声を荒げてこちらを怒鳴りつけようとしたマリー皇女は突然俯きなにか言っているが、鬱陶しいな。

「いい加減怒るぞ。そこに居るお前達でもいい、さっさと質問に答えろ」

後ろでこっちを見ているだけのシンシアたちに声をかけるとシンシアが口を開いた。

「貴方が聞いた1つ目の質問に対する答えだけれど、私たちは魔王討伐に失敗したわ。……………そして、敗走する私たちを逃がすためにセリカが犠牲になった」

「そうか、では対魔王連合軍の今とろうとしている作戦は『ギャザリング・フォース』だな？」

「……………ええそうよ。それにしても凜達から聞いた話や噂は本当だったみたいね。愛する人間が死んだと聞いても真っ先に気にするのが作戦についてだなんて、人間性を疑うわ」

これでも理性で顔や仕草に出ないように抑え込んでいるだけで悲しんでいるのだから。別れた時を遥かに上回る感情の荒れ具合だ。前までの私だったら感情を抑えきれず勇者達を殺しにかかっていたか

もしれない。

しかし、今は違う。

私は既に自信を魔物化するという禁忌を犯し、さらなる禁忌を犯すことを決めている。

この戦いが終われば私は処刑される可能性が高い、だから今できることをやっておかねければならない。私が居なくなつた後もイーリアの平和が保たれるように。

「そうか、ではお前たちはここで何をしている。鍛錬か？」

「それもあるけれど主目的は違うわ。このイルフリード霊峰にいる竜王に魔王討伐の協力をお願いしに行くのよ」

竜王、か。それはまずいな、私は竜王が封印していたバハムートを開放している上に、先の作戦で補給線確保するためにかなり無茶な要求をエンシェントドラゴンにした。どちらか1つなら我がライフハート家に伝わっている竜王に願いを叶えてもらう権利で許してもらうことができるだろう。しかし2つとなると違う。確実にどちらかのことで竜たちとの交渉が拗れる。そもそもバハムートを開放したことが許されないという可能性すらある。竜達は誇り高く約束は守るが、自分達に不利なことばかりを行う者との約束を律儀に守るほど純朴ではない。

不味いな。

それでもどうにかしてバハムートのことを隠し切れればよかったのだが、既に無理な様だ。

空から戦闘音が響いてくる。

随分こちらに来るのが遅いと思っていたが何をやっている！

東の空で2匹の竜が戦っている。1匹は1度でも見たことがある者ならば見間違えようもない竜王で、もう1匹がバハムートだ。さてどうしたものか。

帰還と（前書き）

お待たせしました。

帰還と

何とか2匹の戦いを無事に止めることができた。

勇者達はぼろぼろで、今は回復魔術のおかげで私に目立った怪我こそないが、何度も上半身と下半身が分断される様な攻撃を受けた。私に絶対服従なはずのバハムートすら、種族として持っている膨大な魔力と荒れ狂う怒りにより命令にレジストし抵抗し続けた。それでも完全にレジストはできないバハムートに何度も何度の命令を重ねがけし、動きを鈍らせた後頭を思いっきり殴って気絶させ、その後で竜王を何とか落ち着かせて話し合いをするように説得した。疲れた、疲労感が尋常ではない。

しかし、いまだに気を抜くことはできない。いつバハムートが起きるか分からない上に、目の前に居る竜王も戦闘こそ止めたが戦闘態勢そのものは解いていない。こちらが不審な動きをするだけですぐにでも戦闘を再開するだろう。

「竜王、こちらに交戦の意志はない。ただ交渉に來ただけだ。話を聞いてもらえるか？」

「こちらこそこちらの事情を把握したい。簡潔に話せ」

話は聞いてもらえるようだ。ここで問答無用などと言うような性格を竜王がしていなくてよかった。あとは勇者達に任せればいい。

「勇者達、竜王が話を聞いてくれるそうだ。さっさと交渉をしろ。竜王、そこで気絶しているドラゴンの話は勇者達の話が終わってから私がする。先に勇者達と交渉をやってくれ」

「……………傲慢な人間だと思っていたが、なるほどこの魔力の波長はライフハート家の者か。それなら我からも話があるのでなあとでゆっくりとしよう」

嫌な話し合いになりそうだ。竜王と勇者達が交渉している間に逃げることも考えたがおそらく勇者達の交渉内容は『ギャザリング・フオース』にドラゴンたちも協力してくれというものだ。ここで逃げれば確実にドラゴンとの関係が致命的なまでに悪化　逃げなくともそうなるかもしれんが、まだ努力の余地はある　する。まあいざとなれば、私が生贄になればいいだけの話だが最善を目指すことに越したことはない。

突然始まった交渉だが予想外に順調に交渉は終わった。竜王が対魔王戦線に参加するために私たちに言った条件は『私たちは私たちの判断で戦い人の命令は受けない』というものだけだった。あまりにも簡単に交渉が終わったので疑問に思っていると竜王が説明してくれた。

それによると、『レ・コンキスタ』の時レオン＝ライフハートを恨むドラゴンたちが魔王側について参戦したが、グラナダ要塞の自爆によって皆殺しになったそうだ。しかも魔王側からそれについての謝罪も何もなく。その上死体は魔物たちの餌になったということで、エンシエントドラゴン達は怒り狂っているらしい。竜王がこんなところに居たのも人間達に自分たちも魔王の討伐に協力するということとを伝えるために飛び立ったところ、あのバハムートというドラゴンが襲いかかってきて、やむを得ず交戦することになったそうだ。なんというか、私たちがここまで相当苦労してきたのはほとんど無駄だったようだ。

勇者達の話の間に打開策を考えようとしていたが、勇者達の話は10分も経たずに終わったようだ。断片的にしか聞こえなかったが、

どうも勇者達が求めたものを元々ドラゴン側は提供するつもりだったらしい。まあそれならこんなにも早く交渉が終わるのも分かるが、私としてはもつと長引いてほしかった。そうすれば、何かこの事態を打開する妙案が思いついたのかもしれないというのに。

「レオン」ライフハート、こちらの話は終わった。次は我と貴様の話をする時間だ」

「そうですね。それで話とは何でしょうか？」

「幾つかあるが、まずは半年前に行われた『レ・コンキスタ』の補給線を維持するため同族を森から追い出したことについてだ。何か弁明はあるか？」

今聞いたことは聞き間違えか？

私の空耳でないのなら『レ・コンキスタ』が行われたのが半年前と聞こえたのだが。

「すまないが聞いても良いか？　今は何年の何月何日だ？」

私の質問の意図が分からないのか竜王は困惑していたがきちんと答えてくれた。それによると今はマケミアの月の10日だそうだ。どういうことだ？

あのバハムートが封印されていた空間は時間の流れが狂っていたのか？

そんな馬鹿な考えが思い浮かんだが、その直後に思い当たることがあった。

思い出すのは暗闇で気絶から目覚めた時のことだ。そうか、眠らずに無理を続けて働き続けた反動があの時出たのか。それにして期間が半年という短期間で済んだのは僥倖としか言いようがないな。私の予想では年単位で眠り続ける可能性のほうが高かったというのに。疑問は解けたので話を戻すか。

「話の腰を折つてすまないな。それで貴方が言つた件についてだが、弁明するつもりはない。あの時あの森に補給用の転移魔術陣を設置しなければ『レ・コンキスタ』そのものが失敗していただろうことは明らかだ。それは貴方達ドラゴンにも悪影響を与えることになつただろう、それに森を追い出されたドラゴンたちについてもオービスがきちんと次の住処の面倒を見たはずだ」

「そうだな、我としてもこの質問は大して重要なものではなかった。この件でお主に反発していた者たちはグラナダの自爆に巻き込まれてほとんど死んでおるからな。だが次の問いには生半な答えでは納得せんぞ。なぜそれとお主と一緒に居る？ 場合によってはお主を殺さねばならない」

竜王がバハムートを見ながら問いかけてきたが、その質問に正直に答えることはできないな。バハムートを連れている理由は誰にも言えない、言えば私の行動の自由が無くなり魔王との戦いに参戦できなくなる。だから適当に誤魔化すしかないのだが、下手なことを言えば竜王と戦いになるな。どうしたものか……

……よし切り抜ける方法は
思い出した。

「その質問には答えない」

「……………力づくで聞きだされたいということか、
そうかいいだろう。我の力を思い知らせてやろう！」

魔力が収束し10を超える魔術が同時に放たれようとしていた。
この距離では避けることは至難の技だろう。
だが避けられる。

しかし、私は避けられても勇者たちは避けられるか分らない。こんなことで勇者達が負傷して決戦に参加できないなんてことになっ

たら最悪だ。やはり切り札を切るしかないか。

「貴方は忘れているようだが、私の家には代々ある権利が伝わっている。それは『1度だけ竜王に願いを叶えてもらう』ということだ。私は今その権利を発動する。内容は『バハムートを私が従えることを認める』ということだ」

「.....」

長い沈黙だ。

誇り高いドラゴンの竜王なら約束を破ることは..... ほぼないはずだ。それこそ約束を守ることがドラゴン全体に強い悪影響でも与えない限り。..... まずいな。どう考えても

過去に竜王の座を巡って争ったドラゴンが野放しになるということはドラゴンに悪影響しか与えそうにない。竜王が約束を破る条件を完璧に満たしている。

適当に誤魔化したほうがいいか？

しかし、それがばればそれこそ信頼関係なんてものは欠片もなくなり、完全に敵と認定されるだろう。

どうするべきだ？

我としては私の妹であるバハムートの処遇が心配で質問したつもりだったが、どうやら相手はそうはとらなかったようだ。まあバハムートについての情報があの封印施設にあるものだけならその判断が普通だ。我とバハムートが竜王の座を争った切っ掛けが『ただの姉妹喧嘩』だったなどと知っているドラゴンは、もう我ら2人しかおらんのだからな。癪癪を起して制止しようとしたドラゴンまで殺してしまったので他のドラゴンたちの強い要望によって封印することになったのだが、今では我に残っている唯一の肉親だ。できる限り

平穩に暮らしてほしいのだが妹のほうは今でもあの時の争いを気にしているようだしここは少し寛容なところを見せて機嫌でも取っておくか。

それにしてもライフハート家に与えた権利まで使って隠そうとする目的のためにバハムートを利用するということは必然的に我が妹を危険にさらすことになる。ここは脅してバハムートの身柄をこちらに引き渡すように言うか？

だが、あのライフハート家が少し脅しただけで戦闘態勢に移行しようとしていた。脅してこちらの言うことを聞かせることはおそらくできないだろう。むしろ、殺しあいになるだろうな。それはまずい。

勝つのは我だろうが、我の負う怪我が魔王と戦うことができる程度の怪我で済むかどうか分からない。なにせライフハート家の者だからな、勝つためには何をしてくるか分からない。

ここはバハムートを連れていく事を認めるべきだろうな。いざとなったらバハムートも逃げるだろうし。

「その願いを聞き届けよう。我の妹をよろしく頼む」
「感謝します」

私の思考を中断したのは竜王の了承の返事だった。咄嗟に礼の言葉を言ったが、今の竜王の発言からするとバハムートは竜王の妹なのか、竜王の座を巡って争ったと書いてあったから相当な能力を持っているかと思っていたが、それなら確実に亜神に近いかそれ以上の魔力と能力を持つはずだ。これは予想以上の拾いものだ。まあ膨大な魔力さえ持っていてくれればいいから、あまり戦闘能力には期待していなかったが、それなら戦闘でも使ったほうがいいな。

よし、これで交渉は終わった。さっさと対魔王連合軍総司令部に行くとするか、

「勇者達、こちらの話は終わった。対魔王連合軍総司令部まで案内してくれるか？」

「構わないわ。私たちの用事も終わったし、あとは帰るだけだったから」

「感謝する。半年も時間が経っていたのでは司令部の位置も変わってしまっているだろうからな」

さて、急ぎ帰還して半年前のものだが四天王の1人から奪い取った情報を伝えなくてはならないな。それに今の戦況についても聞きだして戦団の指揮の引き継ぎもしなければならぬ。やるべきことは山積みだ。

「起きろバハムート」

いまだに気絶しているバハムートを蹴り飛ばして強制的に目覚めさせ、その背に乗る。

「貴様！我を「黙れ。身の程をわきまえろ。いいな？」……………」

聞きわけはいいようだ。これ以上反抗するようなら、躰をしなければいけないところだ。勇者達は竜王の背中に乗っていくようだ。

竜王が何か言いたげにバハムートを見ているが無視させる。バハムートは命令で何重にも縛らなければ今にも竜王に襲いかかりそうな雰囲気だ。司令部で暴れられるわけにもいかない。さらに命令を強化しておく。

竜王が飛び立ったのでそれについて行くようにバハムートに命令を出す。エンシェントドラゴンの飛行速度は速い。それほど時間も掛からず着くだろう。

予想外じゃった。半年の間何の連絡もなく、さすがにもう生きていることはないだろうと思ひ始めておった儂達の目の前にこやつは居る。レオン＝ライフハート、半年前の大規模反攻作戦『レ・コンキスタ』終盤のグラナダ要塞攻略に置いてグラナダの自爆に巻き込まれ死んだと思われていた人類最高戦力の1人。その生還はまぎれもなく吉報じゃった。しかも勇者達もドラゴンたちの協力を取り付けることができておる。これで儂達の戦力が大幅に増強されたのは間違いない。

なのに儂の心中から不安が消えることはなかった。むしろ増したと言ってもよい。原因は分かっておる、レオン坊主のせいじゃ。あやつはセリカの戦死にも眉一つ動かさずに、ギャザリングフォースの準備に移った。半年の間に着任したイーリアの指揮官を更迭し、戦団の練度を高めるために朝から晩まで訓練に明け暮れておる。それをセリカの戦死を考えないようにするために、態と休む間もなく働いておると見ることもできるじゃろう。いやそう見る者たちのほうが多かった。しかし儂にはそうは思えんかった。いうなれば生き急いでいる。それが儂がレオン坊主に感じたことじゃった。訓練にしても事務仕事にしてもレオン坊主が死んだ後のことを想定して教えておることが多い。まるで自分が次の作戦で死ぬことが分かっておるような行動じゃ。しかし、自分たちが魔王に負けることはないと確信しておる様でもあった。不審に思いレオン坊主を問い詰めても、のらりくらりとはぐらかされ続けておった。後から思えばこの時徹底的に問い詰めておくべきじゃった。そうすれば魔王との戦いが終わった後にあれほど後味の悪い思いをせずに済んだじゃろう。しかし、後悔とは後になってから悔やむから後悔というのじゃ。その時の儂はそれ以上問い詰めるということをしなかった。

疲れる。

それが私の思いだった。私が行方不明になり戦死したと思われる半年の間に、イーリアから派遣されている戦力の指揮系統がかなり変わっていた。

いつの間にかライフハート家の私兵であり、対魔王戦線派遣時に便宜上、国軍としての名称を付けただけのイーリア特殊戦団が正式に国軍として取り込まれていたり、イーリアから派遣された軍勢の内部の争いが原因で指揮系統が分裂状態になっていたり、と何なんだこれかと思うようなことが多々あった。それを解決しながら兵たちの練度を上げるために訓練を行い、イーリア特殊戦団の者には次の戦いでは最低でも死ぬことになる、ということ伝え後方に戻るように伝えるなどしながら過ごしていたが、予想外の収穫がいくつかあった。

1つ目は勇者達の成長だ。

彼らは半年前とは比べ物にならないほどの戦闘能力を持つまでに至っていた。帰ってきて初めて勇者達の戦闘訓練を見たとき目を疑った。オービスに匹敵する精度と威力で放たれる魔術群、リリカと互角に戦う剣術、仲間との一糸乱れぬ連携、どれをとっても素晴らしなものだ。とても半年で至るような境地ではない。改めて勇者という存在の規格外さを実感した。私たちが長い年月をかけてつけた実力にたった半年で到達する。まさに勇者と呼ぶに相応しいものだった。

2つ目はギャザリングフォースの進捗状況についてだ。

私としてはいまだに各国の指導者たちが自分達の利害を巡って言い争っているものだと思っていたが、すでに話し合いは終わり、各国が全力で作戦の支援に当たっているようだ。

その理由は勇者の敗北だ。各国の指導者たちは勇者が魔王を倒してすべてが終わると思っていた。しかし現実としては勇者達は魔王に敗北してしまった。

混乱した指導者たちは神々にその理由を尋ねた。

返ってきた答えは「勇者といっても元はただの人間であり、あくま

で魔王を倒す可能性が高いものというだけでしかない。的確なサポートと鍛錬がない限りその力を十分に発揮することは難しい」というものだった。確かに勇者達に優秀な人間をつけて訓練をした。しかし、それはせいぜい1カ月の間のことでしかなかった。たったそれだけの時間で勇者たちはあり得ないと思えるほどの成長を遂げたが、どう考えても訓練の時間が短すぎる。しかもその後はろくな支援もせずに勇者達が自力で成長するに任せていた。そんな状況でも勇者達が成果を出してしまっていたが故に気づいた人間が居なかったが、どう考えても無理があり過ぎる。結果として勇者達は自分達の潜在能力を全て生かすことができない状態で魔王に挑み、敗北した。

そのことを踏まえて今回の作戦では勇者達に最高のサポートを行うことが決まり、そのためにはギャザリングフォースが1番やりやすいということ満場一致で決まったそうだ。

私も勇者達に成長に驚いていて、勇者達は魔王を倒すのもう十分な実力をつけたと錯覚していたが、今思えばたった1カ月で魔王を倒せるだけの力と基礎能力をつけられるはずがない。

私も勇者という存在を過信していたということだ。……………

……………そしてそのせいでセリ力を失った。死亡こそ確認されていないが、生存している可能性はないだろう。生きているとしても……………

……………いや考えるのはやめておこう。憂鬱になるだけだ。

最後の収穫は人材が育っていたということだ。

イーリア本国で訓練を行っていて、私が帰還したのと同時に前線に到着したイーリア特殊戦団の新兵たちの練度が非常に高かった。魔王軍との本格的な戦闘こそ経験していないが、繰り返し魔物との戦闘を行い実戦経験を積み、繰り返し行う訓練によって基礎能力を充実させる。それを2年に渡って繰り返ししてきた彼らの実力は私の想像以上だった。これならば私の行う作戦行動にも十分についてくることができだろう。ただそれだけに次の作戦で彼らを死なせてし

まうことが惜しくなる。次の作戦では私の指揮下にある戦団員は必ず死ぬ。

例外はない。

だから私が直々に選抜した者を除き、他の者の指揮下に移ることを勧めているのだが殆ど私の勧めに従ったものはいない。私としては助かるが、複雑な気分だ。

そんな予想外の収穫はあったが、戦況は相変わらずこちらが圧倒的に不利だ。戦略・戦術・質、などの要因は色々とあるが、結局のところ1番の問題は魔王軍の『数』だ。圧倒的な数の暴力の前では戦術も戦術も個人の武勇も何の役にも立ちはない。先の『レ・コンキスタ』の時のように戦略級魔術を連発する戦術はもちろん取るが、それでも魔王軍の戦力を削りきることは不可能だ。必ず先にこちらの魔力が尽きる。そうなれば後は長い消耗戦の果てにこちらの兵力が擦り切れるのを待つだけとなる。予想される魔王軍の数をこちらの兵力で割った場合、1人当たり1000近い魔物を殺さねば全滅させることはできない。もちろん集団戦術でこのキルレシオに近づけることはできる。しかし、それでもこちらに甚大な被害が出ることに変わりがない上に、そもそも兵力の3割が戦闘不能になれば残りの者たちも組織だった戦闘は困難となる。

もちろんそれに対する対抗策として私の奥の手を使うということがある。成功すれば魔王軍がどれだけいようと問題なくそのすべてを殲滅できるだろう。

問題としては奥の手の発動に必要な魔力が膨大でイメージトレーニングでしか練習が行えないこと、つまり発動が成功するかはぶっつけ本番となる。

その上奥の手を使っている間は私はほとんど動けなくなる。そこを敵に狙われたら為す術もなく殺されるか、奥の手を使うのを止めるしかなくなる。そして1度発動を止めた場合は2度目を発動させる魔力はない。

そしてだめ押しに、私の使う奥の手は神々が直々に禁じた禁術だ。

魔王との戦いが終われば確実に神々が私を殺しに来る。私だけならよいが最悪私の国が地図から消えることにすらなりかねない。いざとなれば使うことをためらうつもりはないし、おそらく使うことになるだろうが、できれば勇者達が魔王を何もさせずに倒してくれることを願っている。

神歴5920年マケミアの月30日

対魔王連合軍と魔王軍の最後の戦いが始まる。

決戦の始まり

見渡す限り広がる隊列、わずかな乱れさえ存在しない兵たちの練度と指揮官の力量を証明する見事なものだ。それが延々と地平線の彼方に届こうとかというまでに広がっている。この決戦の為に人類側が投入した兵力は実に500万。兵站を1ヶ月維持しようとするだけで1つの国が破産する規模の軍勢だ。人類の総力を結集した軍勢がグラナダ要塞都市に集結している。

「団長、我らの準備も完了しました。いつでも行けます」

「分かった」

いよいよだ。私が生還してから1ヶ月しかたっていないが、今日神歴5920年マケミアの月30日、我々人類の命運をかけた戦いが始まる。さすがの私でもこの規模の戦いは初めてだ。少し緊張しているがこの程度なら戦っているうちにいい感じになるだろう。作戦の見直しと修正も入念に行った。後は全力を尽くし魔王軍を殺し尽くすだけだ。

『諸君』

オービスの演説が始まったか。

『諸君、諸君、この戦いに退路はない。諸君が退けば無辜の民が死ぬだけじゃ。諸君、この戦いに名誉はない。ただ殺し殺される原始の闘争があるだけじゃ。この戦いで負けたのなら諸君らの守りたいものも！理想も！名誉も！何もかも魔王に蹂躪されて人類の歴史そのものが消えゆくじゃろう。戦え、命のある限り、ただ戦い続けるのじゃ。諦めることは許さん。逃げることなど論外じゃ。儂

[illegible]

なにせ戦略級魔術で露払いが行われる。戦闘で進軍する部隊の司令官と斥候部隊も司令官くらいしかまともな作戦行動はとらないだろうから、他の指揮官が本格的な作戦行動をとるのはオーガス帝国の帝都に近づいてからになるだろう。

285

このような戦術をとることもできる。戦略級魔術を使うならば敵が1万いようが10万いようが大して手間は変わらない。せいぜい使用する魔力量が5パーセント程度前後するだけだ。私達としてはできる限り多くの魔物を消し飛ばしたい。だが、ある一定以上の敵が居れば決戦に備えて兵力を温存するために戦略級魔術を使うと決断しなければならぬ。魔王軍側としてみれば帝都の決戦で戦略級魔術を連発できないようにし、その上できる限り自分達の損害を減らすためにこの戦略を考えたのだろう。

私たちが考え付くような戦略ではないし、考えついても実行できない戦略だ。確かに私たちは魔王軍に損害を与えているが、それは敵が元から全滅させるために送り込んだ兵力を倒しているだけだ。しかし、そんなことは私たちにとって大した問題ではない。

もうすぐ帝都が見える位置に来るが、此処までの敵の動きから判断すると敵も帝都付近で決戦を挑んでくるだろう。私たちは敵を殲滅しつつ勇者達が帝都に侵入することを助けなければならない。

勇者達の帝都侵入は勇者達の実力とそれを援護する戦力を考えれば問題ないだろう。そこは作戦の根本に関わる部分なだけに十分練り込んでいる。私たちの戦いも作戦が順調にいけば十分敵を殲滅できる。確かに敵の数は多いがそれでも十分勝てる。全ての問題は魔王を倒した直後だ。そこさえ何事もなく過ぎればこの戦いは私たちの勝利で終わる。

『前方に敵陣見ゆ、敵の兵力測定不能最低でもこちらの10倍以上』
斥候からの念話が届いた。

不確かな報告だ。

断定的な情報が敵が前に居るということしか分からない。だが、次第に見えてきたその光景を見てそれかもしれないかと思ってしまう。

見渡す限りに広がる魔物の群れ、地面は魔物に覆い尽くされ見るこ

ともできない。この数の魔物を数えようとするのは無駄というものだ。それに地平線の向こう側に居る魔物は数えようがない。

圧倒的な数の差を目にして軍全体に動揺が広がっている。

ざわめき、隣の戦友たちと不安そうな顔で何かとしゃべり続けている。確かにこれだけの規模の魔物は先の『レ・コンキスタ』でも見ることはなかったから不安になるのも分かるが、戦う前から委縮されても困る。

オービスたち総司令部に居る人間も同じことを考えたのだろう、2発の戦略級魔術が敵に向かって放たれる。

光の尾を引いて正面から敵陣に命中しようとした1発目の戦略級魔術が正面に展開された巨大な魔術障壁によって防がれる。

戦略級魔術は激しい閃光をまきちらしながら徐々に受け流されていく。

防いだ！

敵はそう思っているだろうがオービスたちは敵を過小評価していない。今まで隠すこともなく何度も使ってきた魔術だ。いずれ対策を練られ防がれるようになるのは目に見えていた。だから1発目が防がれても問題がないように2発目を放っているのだ。

もう少しで1発目が受け流されるといところで2発目が命中する。ただし真上からだ。

戦略級魔術を防ぐような障壁を要塞などの補助なしに展開する場合、障壁の強度を維持するためにはどうしても障壁を張る方向を限定しなければならぬ。その弱点を突くのは当然だ。人類が戦略級魔術を国際条約で規制する前の戦場ではよく見られた光景だから、戦略魔術の運用方法と防御方法の資料は山ほど残っている。たった半年で要塞などの補助なしに戦略魔術を防ぐ障壁を使えるようになった魔王軍の潜在能力の高さは驚きだが、その程度では私たち人類の流血の歴史は越えられない。

1発目の着弾した閃光に隠れていて発見し辛い状態だったにもかかわらず、障壁が張られていない真上からの攻撃にも魔王軍は辛うじ

て反応した。正面と比べて著しく強度は低いがそれでもかなり強力な魔術障壁を頭上に展開したようだ。だがその判断は間違いだ。

真上の攻撃を防ぐために魔術障壁を張ったせいで正面の障壁の強度が下がってしまった。さつきまで順調に受け流されていた正面の戦略級魔術が障壁を穿ち始める。

「敵は必死に戦略級魔術を防ごうとしているようだが無駄な足掻きではない」

そう多くの者が思っただろう。

私もそう思っていた。

障壁を展開する魔王軍の部隊の後ろに戦略級魔術の魔術陣が浮かんでいるのを見るまでは。

『全軍！ 緊急魔術障壁を展開するのじゃ！』

魔王軍の魔術障壁を撃ち抜こうとしていた戦略級魔術に向けて放たれた戦略級魔術は2つの戦略級魔術を相殺し、強烈な爆風と閃光を撒き散らした。

既に展開されていた魔術障壁のおかげで随分と軽減されているが、それでも目を焼く閃光が障壁を通り抜けてくる。こちらの2つの戦略級魔術を敵はたった1発で相殺したことを考えると戦略級魔術の打ち合いはこちらに分が悪いな。

爆風と閃光で塞がれていた視界が次第に戻ってきたとき、まず視界に移ったのはこちらに向かつて突撃して来る魔物の群れだった。

どうやら魔王軍はあの爆風と閃光の中に突撃し、距離を詰めるという戦術をとったようだ。魔物で構成されている軍勢だからこそできる戦術だ。頑丈で突撃力のある魔物を先頭に立たせて盾にすることで、そこまで防御力の高くない魔物を守っている。

既に魔物とこちらの距離は500メートルほどしかない。

私の戦団が先陣を切ることになっている。敵の突撃を止め、敵の前衛に穴を開けるのが私たちの役目だ。敵との距離はあと300メートルほど、装備の最終点検は終わった。団員達も準備ができた様だ。

「近接戦闘用意！ 殺し尽くすぞ！」

はじめは駆け足程度の速さで、しかし徐々にスピードを上げていく。敵との距離が残り100メートルを切ったところにはこちらのスピードは100キロを超えていた。

スピードを落とさないまま敵と交戦に入る。

相対速度は200キロ近くになるから攻撃の機会チャンスは1秒もあればいいほうだ。だが私の戦団員達はこのスピードでの戦闘に慣れている。問題なく魔物を切り伏せ、魔術で吹き飛ばし、一撃離脱を繰り返しながら敵を翻弄する。こちらは数で圧倒的に負けている。止まってい立ち塞がる魔物を殺したただ敵の前衛を混乱させることに専念するつもりだったが、予想以上に敵陣に踏み込んでしまっていたようだ。ゴブリンメイジやオークメイジなどどう考えても前衛ではなく後衛の魔物がそこらじゅうに居る。

「現在位置は！」

「魔王軍の前線から800メートルほどの位置です！ 突出し過ぎています。一旦退きましよう！」

部下によると、ここは敵陣に800メートルも踏み込んだ位置らしい。確かに突出し過ぎているな一旦退いて、他の部隊と連携をとって再び突撃するか。

「よし味方の部隊と連携するためにも一旦退くぞ！ 遅れるなよ！」

部下に進行方向の指示任せて、私は目の前の敵を殺すことに専念する。やはり私に指揮官は向いていないな。念話が使えない以上、即応性に無理がでてしまう。遊撃として独自の判断で動くことが一番やりやすいのだが、部下達を放っておくわけにはいかない。

全滅されたら私の計画に支障が出る。

弾幕となって降り注ぐ魔術の中を駆け抜ける。

止まれば一瞬でハチの巣になるだろうが、ゴブリンメイジとオークメイジは接近すればただの木偶と変わりがない。こちらを殺すために味方ごと魔術で撃ち抜いてくるから注意が必要だが、それも油断しなければ十分対処できる。

「総司令部より命令です！ 前線の指揮を執っているとみられる魔物を確認、至急討伐に向かうようにとのことです！ 方角は北、距離は900メートルです」

「了解した。これより目的を撤退から敵指揮官の殺害に切り替える」

90度近くの急速な方向転換をスピードを落とさずに行い、敵指揮官の元へと向かう。さすがに指揮官の周囲は守りが硬くスピードを落とさなければならなかったが、後10メートル程で目的地まで着く。

既に敵指揮官の姿は確認している。見た目から判断するならばあれはオーガの亜種だろう。普通のオーガならば赤い皮膚に2本の角が生えているだけだが、指揮官のオーガは茶色の皮膚に1本の角が生えている上に5メートル近い巨軀を誇っている。近くのサイクロプスと大して大きさが変わらないとはオーガのくせにふざけた巨大さだ。

それが何やら私たちでは理解できない叫び声　おそらく魔物にだけ理解できる言語　で周りの魔物たちに指示を出してこちらの迎撃をさせているようだ。

数が多い上に統率された動きでこちらを殲滅しに来ているからやり難いことこの上ない。

サイクロプスとゴブリンメイジを的確に連携させる戦術のおかげで既に私が直接率いている部下にも3人の死者が出ていて、怪我人になると2桁に達する数だ。やはり指揮をする魔物が居るだけでこちらの被害は段違いに増えるな。ならばやることは1つだけだ。

「指揮官を潰す！ その間周りの魔物の注意をひきつける」

部下達に周りの魔物の対処を任せ、私は単身指揮官に向けて突撃する。私の進路を塞ごうとサイクロプスやゴブリン達が押し寄せてくるが、部下達が私に意識を向けた魔物を魔術で吹き飛ばす。指揮官のオーガも部下に私を止めさせようとするのは無駄だと判断したのだろう、自分の手で私を殺すべく戦闘態勢に入った。

亜種とは言えオーガということは接近戦が得意なはずだ。その証拠に刃の部分だけで3メートルはあるつかという大きな剣を構えている。剣の表面には禍々しい文様が浮かび上がり、血の色を想像させる深紅の光を放っているその大剣はおそらく魔剣の類のものだろう。オールインワンならば打ちあつて勝てるが、下手にあの剣に触れないほうがいいだろう。魔剣ならどのような特殊効果が付与されているか知れたものではない。グラナダの時のように魔力吸収能力がついていたらこの後の戦闘に支障が出る。

「がああああああああああああ！！！！！！！！！！」

殆ど衝撃波と変わらない咆哮をオーガは放ちながらこちらに突進してくる。動きこそ直線的だがそれを補って有り余るほどの速さだ。見た目に惑わされると痛い目を見るだろう。上から振り下ろされる剣を大きく距離をとって避ける。紙一重でも剣自体は回避できたがああ剣の能力が分からないうちは少し大げさに回避するようにして

おこつ。反撃の機会は減るが安全性は増す。オーガは剣の勢いを緩めることなく地面に剣を叩きつけ、その反動を利用し身体の向きを変え、再び私に向かって剣を振り抜く。

横薙ぎの軌道の為確実にかわすには後ろに大きく飛び退くしかない。しかしそうすれば敵が態勢を整えた後に私は攻撃するしかなくなる。やはり戦闘において情報は重要だな。魔剣の能力が分からなければまともな接近戦を仕掛けることすら危険過ぎる。

回避できるぎりぎりの距離まで迫っていた魔剣を大きく飛び退くことで再び回避し、懷に隠し持っていたスローイングナイフを投擲することで敵の追撃の足を止める。スローイングナイフは呆気なく魔術障壁で防がれたが、追撃の足を止めるという目的は果たせた。

魔剣の能力を見極めるには能力が発動する瞬間を見ることができれば一番いいが味方で試し切りさせるわけにもいかない。魔物を投げつけて魔剣で迎撃させてもその時に魔剣の能力を使うとは限らない。しかし、魔物を投げつけることはやっておいてもこちらが不利になることはない。

やるだけやっておくか。

幸い、大きく二度も飛び退いたおかげで5メートルほど後方に魔物が居る。オーガをスローイングナイフで牽制しながら、じりじりと後退し手が届く範囲に入った1匹のオーガを掴みオーガに向かって思いっきり投げつける。

思いっきり投げつけたと言っても鎧などで武装し総重量100キロ近いオークでは、避けるのも簡単だ。オーガは慌てることもなく少し横にずれるだけでオークを回避し、私との距離を詰めようとしてくる、が、前に1歩踏み出そうとしたオーガに向かってゴブリンを投げつける。さっきのオークと違いゴブリンは武装込みでせいぜい50キロ程度の重量しかない。十分な速さでオーガに向かっていくゴブリンを避けることができないとオーガは判断したのだろう。魔剣でゴブリンを切り捨てた。綺麗に真っ二つに叩き切れ血も出さず地面に落ちるゴブリンの死体。

血も出さずに？

おかしい、真つ二つに切られたのだ。血が飛び散るのが普通なはずだ。

なのにそれがないということは血液を吸い取ることが敵の魔剣の能力か？

確かに血液を吸い取るということは敵の持久力を落とし、長期戦において自分を有利にするものであるが、魔剣の能力がただそれだけというのは考えにくい。多くの魔剣は何かを奪うことによってその能力を発揮する。奪う対象はその魔剣の持ち主でも敵からでも構わないが何かを奪うことが能力発動の条件であり、基本的に奪ったものに関連する能力を発揮する。例外的に何かを奪うことのみを目的としたものや奪ったものと全く違う能力を発揮するものもあるが、そんなものはほんの一握りだから思考からは除外する。血液から連想するものは第一に生命だ。血は命を支える液体であり血液を糧とするヴァンパイアなど魔族も存在する。

だとするとあの魔剣の能力は負った傷の回復といったところか？

この血に溢れた戦場でその能力は厄介過ぎる。

ほぼ無尽蔵に回復できるだけでなく戦っている相手を傷つけた際に敵の弱体化と自分の回復を両立できるというのは大きな脅威だ。

回復魔術で失った血液を補充できる私でも急激な失血は意識の混濁を引き起こし、致命的な隙を作りかねない。ということは私は掠り傷すら負わずにこのオーガを倒さなければならぬということだ。

後々のために魔力を温存しなければならず、全力を発揮できない現状では厳しい戦いになるが、できないとは決して言えない。

頭を叩き割るように振り下ろされた魔剣を右手に持った剣だけで受け流し、身体に異常が出ないことを確認しながら2本のスローイングナイフを敵の胸に向かって投擲する。力を十分に込めて振り下ろした魔剣を受け流されたせいで満足に迎撃のできないオーガだが、投げられたスローイングナイフを気にすることなく次の攻撃態勢に移ろうとしている。

狙い通りに胸に突き刺さったスローイングナイフは魔剣の能力によって再生する肉の圧力によって胸から抜け落ちてしまった。

やはりこちらの予想通り魔剣の能力は血を条件とした肉体再生のようだ。

元々から高いオーガのタフネスがさらに跳ね上がっていることになるが、いくらなんでも首を刎ねれば死ぬだろう。

力任せ振るわれる魔剣によって剣の暴風が吹き荒れているが、そんな技術も何もない攻撃に当たるほど私は弱くない。

避け続ける私に苛立ったのか次第にオーガの攻撃が大振りになってくる。今まで私が攻勢に移らなかったのは暴風のように振り回される剣の射程内に自ら踏み込んだ場合、さすがに無傷でいられる自信がなかったからだ。だが手数より一撃の威力を重視した大振りの攻撃となれば無傷でオーガを射程にとらえることができる。振り下ろされる魔剣の背を剣で叩き、軌道をずらしながら剣速を加速させ地面に魔剣をめり込ませる。予想以上に地面に食い込んだ魔剣引き抜くのにオーガが手間取っているうちに踏み込み、オーガを剣の間合いにとらえ剣を振り抜こうとしたとき、悪寒が走った。

剣を振り抜けばオーガが殺せるそんな状況だ。

しかし悪寒は止まらない。

私の直感は告げているのは「このまま剣を振れば私が死ぬ」ということだ。

こんなところで死ぬわけにはいかない。口惜しいが一旦ここは飛び退くか。剣を振り抜こうとしていた身体を無理やり押しとどめ、脚力を強化し後方に向かって10メートルを超える跳躍をする。オーガから急速に遠ざかる私の目に見えたのは魔術『アースグレイブ』により地面から突き出る石の槍とその真上から降り注ぐ『ストーンアロー』だった。

「フン！ これを避けるか人間」

指揮官をしているということ。このオーガの知能が高いということは分かっていたはずだ。ならば魔術を使えるかもしれないということくらい想像しておくべきだったな。おかげで危うく死にかけた。

「まあいい。歯応えのある人間が居なくて俺も退屈していたところだ。今の攻撃を避けた貴様なら多少の暇つぶしにはなるだろう。これから俺も本気で行くぞ。せいぜい楽しませろよ人間」

なにやらオーガが言っているが無視だ。
さっさと殺す。

1時間近く戦い続けているが一向に決着がつかない。

「フン！ 人のくせになかなかやる奴だ。だが俺には勝てん！ く
らえ『ロツクレイン』」

『ロツクレイン』により生成された拳ほどの大きさの石の雨が私の頭上から降り注ぐ。かなりの広範囲に魔術を展開しているようで咄嗟に避けることができる距離より魔術の効果範囲のほうが大きい。ならば打開策は1つだ。

術師の懷に踏み込む、それだけだ。

オーガに向かって踏み込み、斬りかかるが足場としている地面を魔術で崩され、わずかにオーガまで届かない。

どうやらこのオーガは土系統の魔術が得意なようだ。使ってくるのが『アースグレイブ』、『ロツクレイン』などその系統に偏っている。

魔術で地面を操作しこちらの足場を崩しながら、斬りかかってくるおかげで私は全力で攻撃できないが、相手は足場を自分の都合のいい様に組み替えてベストの状態で攻撃してくる。

私には遠距離での攻撃手段がほとんどない上に距離をとればこのオーガだけでなく、その指揮下の魔物たちまで魔術で攻撃してくるだろうから足場を崩され不利になるのが接近戦を挑むしかない。

随分と私と相性の悪い魔物だ。

私が上段から振り下ろした剣が受け止められる。強化魔術も使っているおかげで私のほうが膂力がある。じりじりとオーガに魔剣を押しこむが、あと一歩というところで足場を魔術で崩され、剣に込める力が緩んだところで押し返されて間合いを開けられてしまう。

何とかロツクレインの効果範囲まで押し返されるのは防いだが、このままでは埒が明かない。できれば魔力はまだまだ温存していたかったがこれ以上時間を掛ければ自軍の被害が増えるだけだろう。

「身体強化魔術発動、倍率10倍」

今まで自分にかけていた強化魔術の倍率は5倍。
そのさらに倍だ。

これだけ強化すれば十分だろう。

踏み込み、ただ剣を振り抜いた。

先までの私の戦闘速度に慣れた目では今の私を追い切れなかった様だ。全く反応できずにいるオーガの首を容易く切ることができた。今まで苦戦していたのが馬鹿らしくなるほど容易く決着がついた。

「駄目だな。魔力を温存することに意識を集中し過ぎて、過度に魔力を節約していたようだ」

このオーガを倒すのにかかった1時間とその間に出た兵士たちの犠牲は、私がいつも通り戦っていたら必要なかった。

指揮を執っていたオーガが討伐された影響が早くも出始め、魔物の隊列が崩れ始めている。

その隙について今まで温存されていた予備戦力が投入されているよ

うだ。これで敵のこの防衛線は攻略できるだろう。私たちは次の防衛線を破るためにまた先行することにしよう。

次の防衛線が帝都を守る最後の防衛線だ。魔王軍の中でも強力な魔物たちが守りについていいるだろうが、勇者達がそれを突破し、帝都に突入することは簡単だろう。

なにせ十分過ぎるほどの援護があるからな。

非情なる運命（前書き）

グロ注意

非情なる運命

対魔王連合軍総司令部　ある代理司令官

勇者達帝都突入組は順調に作戦を遂行しているようだ。

まあそうでなければ困る。なにせ人類が誇る最高戦力5人と勇者達を1つの部隊として運用する、という過剰なまでの戦力の集中を行うのがギャザリングフォースの骨子だ。

そこまでやつても作戦が順調に進まなかった場合、人類側に打つ手はない。

「敵の第3陣が左翼の第1防衛線に到着し攻勢をかけてきています！」

「防衛線を1つ下げ第2防衛線に部隊を下げる。それと敵の攻勢が弱い中央から戦力を2個中隊引き抜き後退の支援をさせろ」

「了解しました！」

戦況はややこちらに不利といったところだが、この調子ならまだ2週間は戦線は持つ。

尤も、それほど待たなくても今日中に勇者達が魔王を討伐するだろう。

できれば勇者達のほうに強力な魔物たちが集中してくれるとこちらの被害が少なくていいのだが、やはりそうはいかないようだ。

「上空にワイバーンとダークドラゴンの大飛行軍団が出現！　こちらに向かっています！」

「エンシェントドラゴン達に優先して空を飛んでいるものを落とすように伝えなさい。それと魔術部隊と弓兵部隊に司令部と物資集積地に対空砲火が張れるように配置を変えるように命令を出しなさい」

さてこれでひとまずの今回の空からの攻撃は凌げるでしょう。

しかし、こちらには航空戦力が少ない。

各国が持つ飛竜部隊は数が少なく、その上今日までの戦闘で消耗が激しいからあまり戦力として当てにできない。

そしてそれを除くと自力で空を飛ぶすべを持たない人類側に航空戦力はないと言ってもいい。

結果としてエンシェントドラゴン達に上空の防御の大部分を任せるしかないわけだが、そのエンシェントドラゴンにしても辛うじて戦域をカバーできる数しかない。

つまり長期戦になれば、疲労によりエンシェントドラゴン達の戦闘能力は低下するということだ。

私の見立てでは後1週間ほどしか満足な対空防御態勢を維持できないだろう。

その後は空からの敵は地上からのちまちまとした魔術と矢による対空砲火で対抗するしかなく、地獄のような撤退戦になるだろう。

できればそれまでに勇者達に魔王を倒してほしいのだが、ぎりぎりといったところになるだろうな。

そんな思考にふけりながら戦域の情報を見ていた私に気になるものが映った。

「敵陣に魔力溜まりがあるようだがなんだ？」

「原因は不明です。戦闘が始まってから徐々に魔力濃度が上昇しているのは把握していますが、なぜなのかは詳細な観測が困難なため分かりません。魔力濃度の上昇速度からして戦略級魔術ではないとは思いますが……………」

まあそれはそうだろう。私が言った魔力溜まりは敵陣のご真ん中にある。地上から近づこうとするのは無謀極まりないし、上空も敵に覆われていて同様だ。

自然現象とは思えないが敵陣のご真ん中にあるせいで敵の防御障壁

に何重にも囲まれていて妨害のしようもない。

嫌な予感がするが放っておくことにしよう。

戦略級魔術でないのならは一撃でこちらに致命傷を与えることはできないだろうからな。

それより逆に魔力濃度がなくなっている地点に攻撃を撃ち込むことにしよう。

「魔術部隊と砲兵に命令だ。今から指定する場所に攻撃を撃ち込め」
『了解しました。攻撃開始します』

後方から私の頭上を越えて砲弾と魔術が飛んでいく。着弾地点が遠過ぎて視認することも着弾音を聞くこともできないが、おそらく攻撃は成功したのだろう。

敵の魔術攻撃の密度が急激に衰えた。

やはり敵には戦術に習熟した存在が少ないのだろうな。一ヶ所で魔術を使い続ければ当然ながら近くの魔力濃度が低下し、敵から位置を特定されるということを理解していないようだ。

まあ、魔術を使える魔物を大量に抱えているから使い捨てにしている可能性も捨てきれない。

なにせ敵の魔術部隊を壊滅させてから10分ほどしか経っていないのに衰えていた攻撃が以前と同じ水準まで戻りはじめている。

本当に無限にいるんじゃないかと思える物量だな。

敵の圧倒的な物量を見せつけられている司令部のオペレーターたちの表情も硬い。

将兵たちにどうやって絶望感を抱かせずに戦わせられるかが勝負になるな。

前線 とある部隊

厄介過ぎる！

それが部隊にいる全員の思いだった。

昼、戦いが始まったころは敵はゴブリンやコボルト、強くてもホブゴブリン程度の魔物しかいなかったから倒すのは簡単だった。

1匹倒すのに10秒も掛からない。

しかし時間が経ち日が傾き始め、敵陣に少し踏み込んだところに来ると、味方を肉の盾にして攻めてくるようになり1匹を倒すのにかかる時間が次第に増え始めた。

それでも俺達の実力なら殆ど問題もなかった。

問題が起きたのはその後だった。

前方100メートルほどのところに魔術陣が浮かび上がり、その直後に地獄が始まった。

「隊長！ あれを見てください！」

部下の示した方向に見えた光景に俺が思わずこうつぶやいてしまったのは仕方ないだろう。

「ははははは、そりやないだろ」

一倒したはずの魔物が起き上がっている《・・・・・・・・・・・・・・・・》

腕がないもの。内臓が飛び出しているもの。

拳句の果てには首がないもの。

どう考えても致命傷を負い、立つことすらできないはずの魔物たちが立ち上がり俺たちを殺すべくこちらに向かってきている。元々こちらの何十倍もの物量を持っている癖に。

魔王軍め！

まさかこんなものまで使うか！

「総員気をつけろ！ 敵は屍操術ネクロマンシを使ってくるぞ！」

息絶えた屍に疑似的に命を吹き込み術者の意のままに操る禁術屍操ネクロマ
ンシー術。

当然のごとく条約で使用を禁止されたものだが魔王軍にはそんなことは関係ないか！？

この術の厄介なところは、この術をかけられた死体を殺すことはほぼ不可能ということだ。

殺すには肉片はおるか血の一滴すら残らないレベルにまで焼き尽くすくらいのことをしない限りしぶとく動き続ける。

特に血はこちらの足に絡みつき動きを阻害してくる上に体内に入るうものなら体の内側から食い破ってくる最悪な代物だ。

だから俺たちが取るべき最善の方法は敵を無視して術者を殺すということなんだが、術者までたどり着くには俺達の目の前にいる数百匹の魔物を突破しなきゃならない。

当然ながらこいつらも致命傷を負った瞬間、屍操術にかけられて何度でも襲いかかってくるからたまったものじゃない。

という訳で冒頭の感想になるわけだ。

俺たちは頑張った。

立ち塞がる魔物を切り飛ばし、足を絡め取ろうとする血液を魔術で焼き尽くしながら術者の見える位置まで進んだ。

そして絶望に出会った。

屍操術を使っているのは間違いなくそいつだった。

問題はそいつが魔人だったことだ。

俺が予想していたのはせいぜい魔術が使える魔物が何十匹が集まって屍操術を使っているというものだった。

それなら何匹かその魔物を殺せば術の行使は止められるし、それほど危険な訳でもない。

だが魔人となればそうはいかない。

なぜなら魔人は人の知性を持ちながら、人を遥かに超える身体能力と魔力を持っているからだ。

つまり戦闘に必要な基礎能力に圧倒的な差がある。もちろん技術でそれを補うこともできるが、魔人となれるというような資質を持った者は人間だったころから高い技術を持っているのが殆どだし、もし持っていなかったとしても魔人になった後に学ぶことができる。ならば、努力する天才に凡人が万に一つも勝てるわけがないのと同じように俺たちがこいつに勝てるはずがない。

そして俺たちは蹂躪された。

屍操術を行使しながら同時に数十の魔術を連射してくる。

1つの魔術を避けても別の魔術が襲いかかり、魔術障壁で防いでも終わらない魔術の連射に遂には障壁を撃ち抜かれる。

おかげでもう腕は2本とも吹き飛ばされているのが見える。

足も吹き飛ばされたみたいで頬が地面に当たっている。

失血で意識が飛びそうだ。

あまりに大怪我過ぎて痛覚が飛んでるのか痛みもない。

「呆気ないですね。やはり人間といってもこの程度ですか。私のもとになった人間の記憶には化け物そのものの戦闘能力を持った人間がいましたがやはりそれは例外のようですね」

俺をそんなふうにしやがった元凶が目の前でなんか戯言を言っているから殺してやろうと思つて魔術を詠唱しようとしたが声が出ない。おかしいな口はきちんと動いているはずなのだが、そう思い何か体に異常があるのか確認しようとしたが今度は首が動かない。魔術が近くに着弾する。

爆風で吹き飛ばされ宙に舞った俺が見たのは首から上が綺麗になくなった俺の体だった。

ああ、道理で声が出ないはずだ。

それが俺の最後の思考だった。

「敵に魔人あり、屍操術も使う模様、至急増援を請う」

その念話を受け取ったのは、最終防衛線を突破する勇者達の支援のために魔人部隊1000人を切り殺している最中だった。

魔人達は中々の強敵だったが、魔物化し身体強化魔法を使った私には多少倒すのに手間が掛かる程度の敵でしかなかった。

オービスたちが相手取っている四天王級の魔人達は同じ魔人とは思えないほどの実力を持っていたようだが、最悪でも足止めをして勇者達の帝都突入を助ける程度のことはオービスたちならやってのけるだろう。

なら私は少し司令部の方まで戻ってこの念話の魔人の相手をするでしょう。

「司令部に魔人の詳しい位置を問い合わせる私達で救援に行くぞ！」

「了解！ 位置詳細分かりました。案内しますからついてきてください！」

先頭にたって走り出した部下の支援をすべく、その少し後ろに張り付くようにして走りながら部下に襲いかかる魔物たちを切り捨てる。それにしても屍操術を使う魔物が出てきたか。

正直物量で圧倒している敵にはそんなものを使う必要はないと思うのだが、なぜ今になってそんなものを使っただんだ？

そんなものに魔力を使うより直接攻撃に使ったほうがずいぶんと効率が良いはずなんだが、どうしても守りたいものがそこにあるのか？

それなら戦力の補充をする隙を少なくできるから多少は屍操術を使う意味があるのだが、そこまでして守りたいのならいちいち危険な前線まで持つてこないで、普段は帝都の中に設置しておいて必要な時に必要な場所に転移させて発動すればいい。

数百キロも離れていたらそんなことはできないがこの戦場から帝都まではせいぜい1キロ程度しか離れていない。

そうしない理由が見当たらないのだがな。

まあ分からないものをこれ以上グダグダ考えても仕方がない。
気になることとして心の片隅に止めておくことにしよう。

「目標まであと500メートル！ そろそろ敵の屍操術の効果範囲に入ります。警戒を強めてください！」

もうそこまで目標に近づいていたのか、考え事に集中し過ぎていたな。

気をつけなければならぬ。戦場で気を抜くなど自殺行為だ。
それにしても何か嫌な予感がする。

ただの予感でしかないが、此処まで嫌な予感は初めてだ。いつもに増して警戒するようにしよう。

右側から襲いかかってきたゴブリンを蹴って屍操術の効果範囲外に吹き飛ばす。

魔術が使えない私では屍操術の効果範囲内で敵を殺しきることはできない。それを解決する方法が今やったように術の効果範囲内から敵を無理やり弾き出しながら殺すという方法だ。

今蹴り飛ばしたゴブリンは効果範囲外に落下して味方のゴブリンなどを巻き込みながら地面のシミになるだろう。

部下達も完全に殺しきることよりもこちらを攻撃できなくするのに重点を置いているようで、足を切り飛ばすことでこちらに追いつけないようにしているようだ。

そうやって一応の対策は取っているが敵の妨害を完全になくすことはできない。

どうしたって血は飛び散り、飛び散った血はこちらの足を絡め取り、隙あらば体内に入ろうとしてくる。

部下達は身体に着いた血はは炎の魔術で焼き尽くして対処しているから問題ないが、無駄な魔力を使っていることに変わりはない。

この後は術者の魔人との戦いがあるからできるだけ魔力は温存して

おいてもらいたいが、そうもいかないようだ。

「目標視認！ 数2人！」

先頭を走り私達を目標まで案内していた部下を追い抜き、私が先頭に出る。

そして私は見たくもないものを見ることになった。

部下の言ったとおり2人いた魔人。

そのうち1人はとてもよく知っている顔で、こんな場所では絶対に再会したくない顔だった。

「久しぶりですね、レオン。今の気分はどうですか？」

「これが夢だったらいいのにと心から思うよ、セリカ」

そこにいたのはセリカ「レインハート、半年前に魔王を討伐するために勇者と共に帝都に突入し、魔王に敗北した勇者達を逃がすために犠牲となったはずの私の元婚約者だ。

セリカが死んだのではなく魔族となり、魔王の部下になっているという可能性も考えてはいた。

だが実際にその可能性が現実になった今、私の心はかつてないほど動揺していた。

そのはずなのに身体は動く、目の前の『敵』を殺すために。

気づけば私は袈裟切りに剣を振りおろしていた。

そしてセリカはそれを何事もないかのように魔術障壁で防ぎきった。逆に切りつけた剣が砕け、それによって生じた隙に魔術を撃ち込んでくる。

正面から8、左右から5ずつの妙に遅いファイヤーボールが撃ちこまれてくる。

遅いと言ってもこの至近距離では新たに剣を手取る時間はない。大きく飛び左後方に退くことでファイヤーボールの射線から逃れるが、私の眼に移ったのは軌道を変え、私に再び向かってくるファイヤーボールだった。追尾能力があるのか！咄嗟に近くに転がっていた死体を放り投げ、ファイヤーボールを誘爆させる。さてどうやって殺すか。

思考が二つに分かれているのが自分でもわかる。

この戦場でセリカとの再会に驚き絶望している『人』としての自分。いつも通りイーリアの為に敵はすべて殺すと考えている『貴族』としての自分だ。

そして分かっているのは、思考の大半を占めているのは『貴族』としての自分だ。

身体が動く。

感情がどれだけ嫌だと泣き叫ぼうが関係なく。

「殺す」

イーリアの敵ならばたとえ愛するものであっても殺し尽くすと、理性が感情を弾圧する。近くに突き刺さっていた剣を引き抜く。

「身体能力強化、倍率50倍」

この倍率の強化をすると振る剣の速度は音速を超え、衝撃波だけで人を殺せるものになるのだが、魔人となったセリカにはただそれだけでは通用しないようだ。

速さだけの攻撃は魔術障壁で防いでいるし、障壁を破ろうと連撃をしようとすれば即座にファイヤーボールなどの魔術を撃って連撃の妨害をしてくる。

後衛型の相手に前衛型の私が接近できた時点で普通なら私の勝ちが決まったも同然なのだが、セリカ相手にはそう簡単にいかないようだ。

そこそこの力を込めるにとどめた突きを放つ、予想通り呆気なく魔術障壁に防がれるが障壁の大体の強度は把握できた。

後は隙について障壁の強度を越える攻撃を撃てばいいはずなのだが

「相変わらず化け物ですね。もちろん実力のことじゃありませんよ？ 貴方のその愛する人間にも躊躇いなく剣を振り下ろす性格のことを言っているんです」

「黙れ」

普通なら無視するはずの敵の言葉にも反応してしまう。

しかしそれでも体の動きは鈍りもしないのが私の業の深さを物語っているがな。

「魔物に落ちぶれて、人類に牙を向けるようになった貴様よりはましだ」

「あらあら、戦争なんて人間もやってるじゃありませんか。それに私なんかより貴方のほうが余程多くの人間を殺しているでしょう？」

全くもってその通りだ。

私が殺した人間の数に比べれば、セリカの殺した人間の数などその10分の1にも満たない。

おそらく今生きている存在の中で 神を除いて 最も多くの人間を殺したのが私だ。

「殺した数など問題ではない。殺した目的が全てを正当化する。故に国を護り、民を護る為に殺し続けた私は正義であると正当化され、人を滅ぼすために殺す貴様は悪であるとみなされる。ただそれだけのことだ」

「魔王側の私からすれば魔王軍のものを殺す貴方は悪なのだけれど、貴方は「知ったことか」とでも言うのでしょうかね」

失笑しながらそう言われたが、全くもってその通りだ。

私は私の考えを優先する。人から何と言われようが知ったことではない。

それにしても急に隙が消えた。少し前までいくらでも剣を打ち込む隙があったのだが、会話の途中で突然隙が消えた。

構えが変わったなどという目に見える変化はないのが不気味だ。

ただ心構えを変えるだけで隙が消せるはずがない。

何か私に隙が無くなったと思わせるようになった、まだ気づいていない原因があるはずだ。

だがそれが何だか分からない。

ただ、今不用意に打ち込めば手痛い反撃を受けるという予感がするだけだ。

だからだろう自然と私の攻撃は慎重なものになり手数も減少した。

そしてそれは当然戦いに変化をもたらす。

「どうしました？ 急に動きが鈍りましたね。まさか私の言葉に罪悪感にでも苛まれてるわけでもないでしょうに」

ファイヤーボールなどの詠唱が短い魔術しか使ってこなかったセリカが私の攻撃が緩んだせいで、フレアボムなど広範囲を爆炎で攻撃ができる詠唱が長い魔術の使用が増えてきた。

眼前で発動したフレアボムを避けるためには大きく飛び退くしかないが、そうするとセリ力はさらに魔術を詠唱する時間を得られる。そしてさらに強力で広範囲に効果が及ぶ魔術を放ち、私はそれを回避するたまにさらに頻繁に回避行動をとらざるを得なくなる。

そんな悪循環が発生している。

そうは言ってもまだ十分に対処できる程度のものでしかないし、この悪循環も私の対応能力を超えるまでには発展しないだろう。

このまま現状を維持して、セリ力の集中力が切れるのを待つのも1つの手なのだが

『全軍に通達、勇者達のご一行が無事に帝都に突入。各自戦線を崩さないことを最優先に戦ってください』

魔王軍にも聞こえるようにわざと放たれた広域通信がその選択肢を奪った。

勇者が帝都に突入したということは魔王が討伐されるのも時間の問題ということだ。

魔王討伐までにセリ力を殺しておかなければまずいことになる。

多少無理してでも決着をつけねばなるまい。

セリ力が放ったフレアボムを無視して突撃する。

当然のことながら身体のうちらこちらに酷い火傷を負い、同時に放たれていたファイヤーボールが腕を吹き飛ばすなどかなりの怪我を負わせてくるが、回復魔術で無理やり回復を行いながら突き進む。

人間だったころは身体の強度の関係でここまで無理なゴリ押しはできなかったが、魔人となった今なら十分に可能だ。

それに至近距離での戦闘になればセリ力は自分に被害がでない為に威力を抑えることや効果範囲を抑えるなどのことをしなければなら

ないから、かなりの無茶ができるはずだ。

今までに離されてしまった間合いを詰めると同時に右側から袈裟切りに剣を振り下ろす。

当然のごとく障壁に弾かれるが問題はない。

剣を弾かれて隙のできた私にファイヤーボールが直撃する。顔に向かってきたものは左腕を犠牲にして防ぎ、他は防御すらすることなく次の攻撃に専念する。

予想通り爆発は私の方向に集束されているようでセリカには何の影響もないようだ、いささかうまく集束し過ぎているな。

当たった腹部には拳大の穴が複数あいているがそれ以上の被害はない。

それにその穴も既に回復魔術でほとんど塞がり始めている。

吹き飛んだ左腕はまだ再生が終わっていないが、片腕でも十分連撃はつなげられる。

魔術の第2射が来るまでに剣を何度も振り下ろすが、それも全て弾かれる。

「正気じゃありませんね。こんなことして何になるんですか？ 貴方では私の障壁は打ち破れませんし、それ以前にこんなことしていたらすぐに死にますよ？」

そして第2射によって今度は右足が吹き飛ばされる。

おかげで腕の力だけで剣を振ることになり大して力の籠っていない攻撃になったが問題ない。

攻撃を障壁に当てるということが重要なんだ。

右足の再生に魔力を集中し、瞬く間に再生を終わらせて次の攻撃に移る。

ただひたすら攻撃することだけに専念する。

相変わらず障壁が破れる気配はないし、セリカの攻撃で酷い怪我を負っているが私の目的は達成できている。

「鬱陶しいですね全く！ いい加減諦めて死になさい！」

「死ぬのは貴様だ」

そう死ぬのはセリ力だ。

私がこの最低限の防御しかない無茶苦茶な攻撃を始めたときに既に私の勝利は決まったも同然だ。

魔人となつて身体能力もかなり上昇したセリ力だが、その程度では私に接近戦で勝つことはできないだけでなく接近戦を持ち込まれた場合に間合いを離すことすらできない。

この戦いの序盤に私が間合いを開けたのはできるだけ消耗を抑えて勝とうとしたからにすぎない。

消耗を厭わなければ今のようなことも十分にできた。

そしてセリ力の勝機は私がいかに消耗を抑えて勝つかを考えていた序盤の間しかなかった。

その間に私の回避能力を超える力の魔術を撃ち込んで防御せざるを得ない状況に追い込み、それによつて時間を確保し、空間ごと殲滅する大規模な魔術を使って跡形もなく消し飛ばす。

そうすればさすがの私でも死んだはずだ。

だがセリ力はそうできなかった。

だからこの後は私もひどい怪我を負うだろうが必ず勝つ。

「死にぞこないが何を言っているの！」

無視して剣を振り下ろす。

腕は千切れかけていて、炭化した皮膚が体を覆い元の肌の色など全く分からないありさまで、一見すると私が不利に見えるがそれは違う。

はじめのうちはセリ力の魔術1発につき私の放てた攻撃は1発未満しか放てていなかった。

それが今ではセリ力の魔術1発につき20発近い攻撃を放っている。その理由は簡単だ。私は攻撃の他にしていることと言ったら回復魔術を使うことくらいだ。

だがセリ力は違う。

セリ力の攻撃手段は魔術であり魔術を使うには呪文を詠唱する必要がある。

セリ力ほどの魔術師ともなれば口に出して詠唱するのではなく無詠唱で多くの魔術が使えるだろうが、どうしても使う魔術のことを考える時間が生まれる。

そういくら鍛錬を積んだとしても無意識には魔術は使えない。

だが私はそうではない。

私の積み重ねた鍛錬は無意識のうちに剣を振ることができるレベルにまで達している。

その分だけ私の攻撃はセリ力より早い上に、セリ力はこちらの攻撃を防ぐために魔術障壁を張っている。

その障壁は強固でとても一撃で敗れるような物ではないが、私の連撃を無尽蔵に受け続けることができるほど強固な訳ではない。

つまり私の手数が増えるほどセリ力は障壁を張りなおす回数が増える。

そうなれば当然攻撃に意識は薄くならざるを得ず、結果としてさらに私の攻撃が激しくなり、それに対処するためにさらに魔術障壁に意識を割かなければならないという悪循環が発生する。

最初とは逆の構図だ。

そして私はこの構図を変えさせることなく押しきる！

振り下ろした剣が遂にセリ力の障壁を打ち砕きその腕を切り裂く。致命傷にこそならなかったが、此処までくればもうすぐこの戦いは終わる。

障壁を張りなおす暇など与えない！

右からの袈裟切りから切り上げに繋げ、セリ力が退いた分だけ踏み

込み、逃がさないことにだけ気をつけながらひたすら剣を振る。魔人の身体能力のおかげで辛うじてセリ力は避けることができていたが、既に体には十を超える切り傷が刻まれ血が滴っている。

「人風情に私が負けるものですか！」

言葉など無意味だ。

いくら自分を鼓舞しようがこの状況は覆らない。

セリ力のはなってきたアイスニードルの内顔に向かってきたものだけを叩き落とし、攻撃を続けようとするが急速に体の動きが鈍る。

身体が動かない！？

原因はすぐに分かった。

腹に突き刺さったアイスニードルを中心に身体が凍りつき始めている。

だがアイスニードルにこんな効果はなかったはずだ。

「掛かりましたね！ アイスニードルの中に液体酸素を詰めたものです！ これで死になさい！」

回復魔術で体の代謝機能を引き上げ、体温を強制的に上昇させる。

これで身体が凍りつくということはないはずだが問題は液体酸素だ。以前氷結系の魔術が得意な魔術師と模擬戦をしたことがあるが、その中でも液体酸素は凶悪な代物だった。

なにせ触れれば問答無用で凍りつかせられる上に、強力な酸として働くから体温を上げて凍りつくことを防いでも身体は融ける。

そして最後に液体は気体になる時にその体積を爆発的に上昇させる。

つまり

「ぐっ！」

体温の上昇により気化した体内の液体酸素が身体を破裂させようとするということだ。

内臓が圧迫され体中の穴という穴から血が噴き出す。
視界が赤く染まり碌に見えない。

不味い、このままだと確実にあれが来る！

必死に体を動かそうとするが傷口が完全に解凍できていないせいでまだ回復が終わっていない。

「死になさい！ 『ファイヤーストーム』！」

炎の嵐が放たれた。

私を中心に50メートル近い範囲が炎に包まれる。

元々から鉄をも溶かす高熱が秘められたその魔術は気化した液体酸素を酸化に使い爆発的な燃焼を引き起こした。

高濃度の酸素が存在する環境下では鉄すらも燃える。

人体など言うまでもない。

元々魔術障壁の張れない私では防ぎようがない攻撃だ。食らった最低でも重傷を負う、だからこの類の広範囲攻撃はそもそも撃たせないようにしていた。

撃たれた以上避けるしかないがそれすらもできないようにして放たれたこの一撃はセリカにとって私を殺す必殺の一手だったのだろう。

だから油断した。

セリカは私が魔術障壁を張れないことを知っている。

故にこの攻撃を受ければいくら回復魔術を使っても私が死ぬと思っ
てしまった。

中途半端な情報は時に情報がないことよりもたちが悪い。

なぜならセリカが持つ私の情報は私が人間だった時のものだからだ。

確かに人間だった時の私ならこの攻撃で死んでいた。
しかし今の私は魔人であり、その生命力は人間などとは比べ物にならない。

だから歩く。

炎も嵐の中を1歩ずつ。

身体をなめる炎の熱さを感じるどころか、感覚そのものが既にないがそれでも歩くことはできる。

眼球は炎の熱で白濁し弾ける。

視覚はなくなつたがセリカの気配は感じ取れるから問題ない。

炎の嵐を抜ける。

セリカが驚愕する気配が伝わってくる。

チャンスは今しかない。

なけなしの魔力を振り絞り右目と足を再生する。

半分だけ戻った視界に移つたのは驚愕から立ち直りこちらに魔術を放とうとするセリカの姿だ。

足に力を込め走り出す。

距離はせいぜい10メートル、それならセリカが魔術を撃つより私がセリカにたどり着く方が早い。

生憎と両腕は肩から焼け落ちていて、いまだに再生できていないから使えるのは足技だけだ。

頭を蹴り碎けば殺せるが両腕もないこの状況では転倒するだけだろう。

ならば狙うのは足だ。

ローキックでセリカの両膝を砕くが、魔術で反撃され片足を吹き飛ばされた上に間合いが離れる。

私はまともな移動手段が無くなった上に、吹き飛ばされたせいでセリカに攻撃できない。

しかしセリカは魔術を使えば私を一方的に殺すことができる。

詰んだかこれは？

膝を碎かれ地面に倒れていながらも勝利を確信した笑みがセリカの顔に浮かんでいる。

「驚かせてくれましたが私の勝ちです！ 『ファイヤーボール』！」

.....
魔術が発動していない？

「なっ、なぜ魔術が発動しないの！？」

セリカは訳も分からず驚愕しているが私には原因が分かった。

現実として起きることはほぼあり得ないと思っていたが、このタイミングで起きるとは全くもって私にとって都合が良過ぎる。

だがこれで私に勝ち目が出てきた。

両腕と片足のない状態だが、それでも這って進むくらいのことはできる。

体をくねらせ少しずつセリカに近づいていく。

「『ファイヤーボール』！ 『ファイヤーボール』！！ 『ファイヤーボール』！！！！ 『ファイヤーボール』！！！！ 『ファイヤーボール』！！！！！！」

無駄だよセリカ。

魔術が発動しない原因は魔力の枯渇だ。

私が回復魔術で常に大量の魔力を使っていたし、お前もかなりの魔力を込めた魔術を連射していた。

その結果、私達の体内にある魔力と周囲に存在する魔力が異常に低下している。

だから魔力を周囲から補給できずに魔術は発動しない。

尤も私にもそれは言えていて、さっきから全く回復魔術が発動して

いないおかげで酷い痛みを味わっている。
幸いと言ってもいいのか、傷口の殆どが炭化するレベルまで焼かれているので失血死することはないだろう。

「そうか魔力の枯渇！ 焦って損をしました。それなら問題はありませぬね。どう考えても腕を1本再生するのに必要な魔力量より、ファイヤーボールを1発放つ方が必要とする魔力量は少ないですから、私の勝利は揺るぎません」

セリカも魔術が使えない原因に気がついたようだが、結論が間違っている。

確かに私が腕を再生するよりセリカがファイヤーボールを撃てるようになる方が早いだろう。

だが、私の攻撃手段は他にもある。

たとえ両手がなく、魔術が使えなかったとしても使えるものはある。

「違うな勝つのは私だ」

「何を言って……………まさか」

信じられないものを見る表情だがお前は知っていたはずだ。

レオン＝ライフハートという存在がどんなものなのかを。

私とセリカの距離はもうないに等しい。ちよつと首を動かせばキスもできそうなほどだ。

だから私はちよつとばかり首を動かして、

セリカの首を喰いちぎった。

「ぎゃあああつあつあつあああ！……！！！」

随分と耳障りな悲鳴だ。さつさと黙らせよう。

喰い千切った首の肉を飲み込み、さらに喰らいつき首を喰い千切る。骨を噛み砕くのが少しばかり大変だったが何とかなったな。

耳障りな悲鳴はなくなり、空気が漏れる音だけが僅かに聞こえる。喰らった肉から僅かながら魔力を吸収し、右腕の再生を始める。

喰いちぎられて転がった首を見てみるとまだ目が動いてこちらを見ている。まだ生きてはいるようだがそのうち死ぬだろう。

それより問題は私の傷ついた体をいかに迅速に再生するかだ。

尤もどうすればいいかは既に考えている。

再生が終わった右腕を使いセリカの体から左腕をもぎ取り、焼け焦げた私の肩に押し当て回復魔術を発動させる。

腕を一から再生するより元からあるものをくつつける方が格段に魔力の消費は少ない。

生憎、腕の長さを調整することができるような余分な魔力はないから左右で腕の長さが10センチ近く違うが、そんなものは後でいくらでも修正できる。

同じようにセリカの足を千切り取り、吹き飛ばされた脚の断面と合わせ回復魔術を発動させる。

.....よし、うまく接合できた様だな。

身体の具合を確認するために立ち上がったが、これは早めに調整をしなければならんな。

足の長さも腕の長さも左右で違うせいでうまくバランスが取れない。少しでも気を抜こうものならすぐさま転倒してしまうだろう。

んっ？

そっいえば左目を回復させるのを忘れていたな。

『あああああああああああああああああああああ
あっっ！！』

足元に転がっていたセリカの顔から左目を抉り出し、自分の眼窩に

収める。

耳障りな念話が響いたが、よしこれでいい。

視界も戻り、後は手足の長さを調整できる程度まで魔力が回復するのを待てばいい。

周りの魔物たちは部下が押さえてくれているから安心して休むことができる。

イーリア特殊戦団 とある団員

俺たちは信じられないものを見ていた。

半年前、勇者達を逃がすために殿となり帰ってこなかったセリカⅡ
レインハート様と団長の戦いだ。

聞くところによると2人は婚約者で相思相愛の仲だったらしい。

それなのに今俺達の目の前で2人は本気で殺しあっている。

魔物化したセリカ様が躊躇なく団長を殺しにかかるのは分かる。

だが団長が躊躇なくセリカ様を殺しにかかったのには目を疑った。

仮にも愛した者に対してどうしてそこまで躊躇することなく剣を振ることができなのか全く理解できなかった。

戦いは無茶苦茶な展開だった。

はじめのうちは回避に専念していた団長が一転回避を考えない突撃に移り回復魔術に支えられたそのタフネスを頼りに肉薄しようとしていたが身体中が焼け爛れ見るに堪えないありさまだ。それにもか
かわらずセリカ様の両膝を砕いたのは驚愕に値した。

しかし、それと同時に足を吹き飛ばされ少しだけ間合いを離された
レオン様は絶体絶命の危機に陥った。

なにせ団長には碌な遠距離攻撃手段がない。

両手が使えないあの状況では皆無だ。

俺たちが助けにいくのも間に合わない。

だが、天は団長に味方をしたようだ。

周囲の魔力が枯渇した上に自分自身の魔力もなくなったセリカ様は魔術が使えなかった。

これで俺たちが団長を助けに行くのが間に合う。俺たちはそう思い、団長のもとに急いでいたが、団長はこちらに見向きもせずにセリカ様のほうに這い寄って行っていた。

何をするつもりかは全く予想できなかった。

あの状態でできることなど何もないだろうに。そんな思いは次に団長のしたことで吹き飛んだ。

団長はセリカ様の首を食い千切った。

俺達だけではなく魔物たちの動きすら止まった。

それだけそれは信じられない光景で、人としてやってはいけない行為だった。

人が人を喰らうそれはどうしようもないほどの嫌悪感を伴う禁忌だ。それを自分がするなんて御免だし、そんなことをしている人間を見たら躊躇なく警察に突き出すか殺す。

そんな行為を団長は平然と行い。

あろうことかセリカ様の腕と足を引き千切り、再生できていなかった自分の腕と足にしてしまったばかりか目を抉り出し自分の眼窩に収めた。

そうして身体の調子を確かめる団長の後ろに1つの火球が現れた。

大きさは拳ほどで大した威力はないだろう。

だが魔術障壁を張っておらず魔力も碌にない団長の頭を吹き飛ばすのには十分な威力はある。

「団長避けて下さい！」

必死に声をかけたが自分でも分かっていた。
あの至近距離では避けることなど至難の業であり、身体のバランスが狂っている今の団長では不可能なことだと。

『死ね』

セリ力様の念話が頭の中に響いた。
その瞬間団長は後ろを振り向くことすらせずに躊躇なく、その足をセリ力様の頭に振り下ろした。
頭蓋骨の碎ける鈍い音だけが響き、団長の後ろにあった火球は消滅した。

人のできる所業ではない。
人がやっていい所業ではない。
そんなことができる者は人ではない。

「さて諸君、魔王軍の殲滅を続けるぞ」

得体のしれないものを見る恐怖だけが俺の中にあつた。

勇者達の戦い

帝都への突入作戦は驚くほど順調に進んでいた。

さまざまな魔物の亜種、魔物を合成して作られたキメラ、召喚者が生きている限り無限に復活するアンデットをはじめとする魔物たちに加え、魔王軍内でも特に強力な戦闘能力を誇る魔人達1000人に魔王軍を統括する四天王の内の3人までいた。

それなのに私たち勇者一行は誰1人欠けることなく帝都の正門近くまで来ている。

これは別に私達の実力が上がったからというだけではない。

ひとえに私達の帝都突入を支援してくれた人たちがすさまじく強かったからだ。

オービスさんやリリカさんは言うに及ばず、このギャザリングフォースの為に集められた5人の世界最高戦力は十二分に力を発揮し、私達をここまで導いた。

私達の後ろでは押し寄せる魔物の群れを迎撃するためにオービスさんの放つ魔術の雨が降り注いでいるし、その雨を抜けてもリリカさんの剣に切り捨てられるだけだ。他の3人は四天王と魔人隊の相手に奮戦しているようでここにも戦いの衝撃と閃光が届く。

「全く世界最高戦力とはこれほどまでに馬鹿げたものですね。

凜もそう思いませんか？」

「全くだ」

全面的にマリーの言葉に賛成する。けれど私達も既にその世界最高戦力に数えられているという事実も考えると私達も他人から見れば似たようなものだろう。

「マリー、凜もう無駄話をする余裕はないぞ。帝都に突入する！」

「了解！……」

前を見るともう帝都の正門まで500メートルほどしかない。
このままいけば後1分もしないうちに正門に着く。

「正門を打ち破ります！ 撃ち抜け！ 『フォトンバスター』」

閃光が走る。

マリーから一直線に帝都の正門まで膨大な魔力を秘めた閃光が放たれ、周囲の魔物ごと正門を跡形もなく消し飛ばした。

……マリーもずいぶん人間やめてるなあ。

一応あの正門はミスリルで作られていたはずなのにそれを一瞬で消滅させるなんて、ほんとに人間業じゃない。

まあ私も人のことは言えないんだけど。

「行くぞ！」

まあいいか。

そんなこと考えるより先頭切って突っ込んでいった和也と一緒に魔王を倒すことにしよう。

そうすればこんな血生臭い戦いも終わるんだから。

正門を突破した後は拍子抜けするほど簡単に進むことができた。

魔王のいる玉座の間まで碌な妨害も存在せず。ただ走り抜けるだけでよかった。

あまりの妨害の無さにさすがに不安になったがだからと言って私たちにできることは何もない。

魔王の魔力反応は相変わらず玉座の間から動いていないし、それが偽物である可能性は限りなく低かった。

私達が走りながら意見を出し合った結果では、私たちなんて半年前と同じく鎧袖一触で簡単に倒せると油断しているからかもしれない、というのが一番有力なものだった。

もしそうなら少しは魔王討伐が楽になるだろうけれど、一度負けている私達の心に油断も慢心もない。

心はいい感じに緊張し、集中力も高まっている。

まさに精神的にベストコンディションであり、身体的にも殆ど魔力と体力の消耗がなく万全だ。

この状態で魔王に勝てなかったのならそれは私達の半年間の訓練が足りなかったということだろうが、そんなことは絶対にあり得ない。少なくとも私はそう信じている。

.....あの地獄の鍛錬を乗り越えても勝てない存在なんているはずがない。

「皆止まってくれ」

突然、先頭を走っていた和也が立ち止った。

和也の向こう側には大きな扉がそびえたっている。

この扉は見たことがある。

これは玉座の間に通じる最後の扉だ。この扉を抜ければ魔王がいる。

「みんな、半年前は俺たちは魔王に手も足も出なかった。だが今は違う！ 凜、マリー、シンシア、ゴドー！ この半年の地獄のような鍛錬の成果を見せるぞ！」

「.....おーーーーー！！！！」

.....なんか敵地で暢気にこんなことやってる自分に違和感があるけど気合いは入ったしいいか。

気分も乗ってきたからちよつと派手にやろうかな。

「皆どいて！ 焼き尽くせ『ダークフレア』！」

闇より遙かに黒い炎が扉を覆い、次の瞬間玉座の間の扉が跡形もなく燃え尽きた。

灰すら残っていない圧倒的な火力なんだけど、私はこれだけじゃ終わらせないわ！

「くらいなさい、魔王！ 『ダークアロー』」

焼け落ちた扉の向こうに見える魔王に漆黒の魔力の矢が殺到する。その数実に200本。

小学校の体育館程度の広さがある玉座の間でもその大部分を吹き飛ばすのに十分な数だ。

しかも今撃ったダークアローは魔王の魔力反応を追跡するようにしているから、魔王に当たるまで延々と追いかけて続けるのよ！

追尾能力を強化した分発動に使う魔力は多いけれど当たるまで延々と追いかけるこのダークアローなら魔王に必ず命中させられるわ。

半年前のようにこちらの攻撃が全くあたらない、なんてことはないはず。

まあ、この程度の魔術が魔王の魔術障壁を撃ち抜けるはずがないのだけだ。

ダークアローは200本すべてが魔王に着弾したが、予想通り魔王の魔術障壁を撃ち抜くことはできなかった。

「ちよつ、り、凜！ いきなり何やって「いいから行くわよ！ マリー、半年間の鍛錬で嫌というほど叩き込まれたでしょう？ 先手

必勝、勝つためなら手段を選ばなつて」それはそうなんでしょうけれど……」

「行くわよ！」

「ふはははははははははは！！　また来たのか勇者達。今回は
どんなふうに楽しませてくれるか楽しみだが、扉を焼きつくした礼
をしてやらねばなるまい。」イレイサー」

今まで私がいた場所が跡形もなく消え去り綺麗な球状の穴があいて
いる。

対処法は避けるしかないが、相変わらず魔王の魔術は非常識だ。

このイレイサーにしたって、普通なら詠唱に5分近く掛かって戦闘じゃ仲間と連携しなければ使い道なんてないもののに、魔王は無詠唱で連発してくる。

あの魔術の連射を止めなきゃね。

「和也、私が魔王の注意をひきつけるからその間にどうにかして接近してちょうだい！」

「任せてくれ！」

「なんか今の凜かなり攻撃的よね」

「そうだな、正直ついて行けるか不安なほどだ」

「まあ言っていることは正しいから問題はないけど」

和也以外の皆にはなにか言われているけどこのくらいやらないと不安でしょうがないのよ！

一度負けている相手と戦うことになって、しかもこれで負ければ人類絶滅なんだから！

「そんなこと言っていないで皆も手伝ってよ！ 平伏せ『グラビティ』」

魔王を中心に半径3メートル圏内の重力を数倍にしたが魔王に影響はないようだ。
動きが遅くなることもなく、平然と動いている。

「無駄だよ。私にとって自分の重さなど自由に設定できる項目の一つではない」

しまった！

魔王という存在の性質上それくらいのができてもおかしくない。ならこの魔術を使い続ける意味はないわ。

グラビティの魔術を解除して、今度は障壁貫通能力に優れたダークランサーを連射する。

この魔術は追尾能力こそないけれど強力な障壁貫通能力を持ってい

る。

それでも一撃で魔王の障壁を破るほどの貫通力もないし、追尾能力がないから避けられやすいけれど、それは連射することですとも力バーできる。

「秒間20発のこの攻撃を避けれるものなら避けてみなさい！」

空間を埋め尽くすように漆黒の槍が魔王に向かって放たれる。

普通の人間がこんなことをすれば5分も経たずに魔力切れになるけれど、私のように膨大な魔力があれば十分に可能な荒技よ。

放たれる漆黒の槍のほとんどは魔王に回避されるが、それでも少ない数の槍が魔王の障壁に命中し、目に見えるほどの速度で障壁を削っていく。

よしこれならいけるわ！

「マリー！ 魔術の一斉射撃で魔王の動きを完全に止めて頂戴！」

「任せなさい！ 全ての闇を晴らす光となれ『ライジングサン』！」

魔王を包み込むようにして光球が発生し、その身の障壁を削っていたダークランサーごとその姿を飲み込む。

マリーが放ったライジングサンは一定範囲内のありとあらゆる存在を焼きつくす広域殲滅魔術だから、いくら魔王でもあの魔術の範囲内にいたら防御に全力を注がなくちゃいけないはずだ。

その間に私とシンシアは強力な魔術の詠唱を終わらせ、和也とゴドーはライジングサンの効果範囲のすぐ外側で魔王に切りかかる準備をする。

その予定だった。

だけどその予定は脆くも崩れ去ってしまった。

いつの間にかマリーのお腹に穴が開いていた。本当にいつの間にかだった。

マリーに向かって攻撃がされた痕跡はないのに突然マリーのお腹に穴が開いた。

原因はなに！

いえ、そんなことよりもマリーの治療が優先事項だよ。

「シンシア！ マリーをお願い！」

「分かったわ！」

声も上げることなく崩れ落ちてしまったマリーにシンシアが駆け寄り治療をしてきている。どんな状況か知りたいけれど今はそんなことを気にしている余裕はない。

「凜！ さっきの攻撃だがたぶんレイサだ！ ライジングサンのおかげでまともに照準はつけられなかったみたいだがな！」

確かにそれなら攻撃の手段は納得はいくけれど、それなら何で効果範囲がマリーのお腹に穴が開く程度だったのか分からない。

照準がつけられないなら、効果範囲を大きくして当たる確率を高めようとするはずなのにそんな様子もなかった。

「ふむ、私の攻撃が当たってしまったのか。それでは詰まらんぞ。もっと我を楽しませてくれ」

何事もなかったかのようにたっている魔王がいた。

その顔には詰まらなそうな表情が浮かんでいるだけで、私達が玉座の間に突入した時に浮かべていた笑みはない。

「ふざけるな！」

和也とゴドーが突貫して斬りかかっているが、魔王の剣によって弾かれていて障壁に剣が当たることすらない。

私達の武器には強力な破魔の力が付与されているから当たれば障壁を貫き、魔王存在を削ることができけれど、剣で防がれていてはその効果も発揮できない。

半年前とは違いまともに打ち合うことはできているが、ただそれだけだ。

「勇者たちお前達の力はそんなものか？ そうならば、我を殺すことなど到底できんぞ」

半年前と同じで見た目は可憐な少女なのにもかかわらず理不尽なまでの膂力を持っているようだ。

剣術そのものは大したことはないのだけれど、こちらの攻撃を剣で受け止めた瞬間その圧倒的な膂力を発揮して力づくで和也達の身体ごと吹き飛ばすことで追撃を防いでいる。

だから、あの膂力にさえ対抗できれば十分に勝ち目はあるし、その為の対策もこの半年で十分練ってきたのよ。

「ふざけんな！ 俺達の力がこの程度のはずがないだろうが！」

和也が激昂した様に見せかけながら魔王に切りかかる。

その間に私は1つ目の切り札の詠唱に移る。

これは普通なら4〜5人ではなく少なくとも100人以上の集団に10人程度が掛かりつきりになってかける魔術なんだけれども、既存の魔術で自分でかけている身体強化魔術の邪魔をせず、さらに身体強化魔術を他人が重ねがけできるという条件に見合うものはこれくらいしかなかった。

「漲る闘志よ力となれ『グランブースト』」

この魔術は対象とした相手に注ぎ込んだ魔力に応じた身体強化を行うという単純なものだ。

だがこれが魔王の圧倒的な身体能力に対して有効な対抗策になる。そもそも私達が魔王に接近戦で押されているのは単に膂力や反射神経などの基礎能力がどうしても魔王に勝てないからだ。

私達がどれだけ剣術の研鑽を積み素晴らしい一閃を放とうとも、魔王は単純な反射神経だけでそれを避けて反撃してくる。

つまり技術でなく物理的な速度が足りないから避けられているのよ。例えて言うなら私達は自転車^{ママチャリ}で魔王がバイク^{マウンテンバイク}よ。

そして剣術^{ママチャリ}の素人から剣術^{マウンテンバイク}の達人になったところで到底魔王^{バイク}には勝てはしない。

だから私達は自転車^{原付}にエンジンを積むことにしたのよ。

エンジンの積み方は簡単、私達が自分一人で身体能力の強化を行っても及ばないなら、他人に身体強化魔術を重ねがけしてもらえばいい。ただそれだけなんだけれども他人が他人に身体強化魔術をかけるのはとても難しい。

この他人にかけることを考慮して作られたグランブーストでも下手な人がやると魔術同士が干渉しあって逆に身体能力が下がるだけじゃなく、最悪の場合体が機能不全起こして死ぬことすらある。

そんなことにならないようにこの魔術を使う適性が高かった私とマリーが徹底的にこの魔術の訓練をやったのだけれど、この場面で一番上手くこの魔術を使えるマリーが戦線離脱しているのは痛いわね。私じゃせいぜい身体能力をさらに2倍にすることくらいしかできないけれど、マリーなら4倍にはできるのに。

まあそれでも和也達が魔王と対等に戦うのには役に立つわ。

現にさっきまで吹き飛ばされてばかりいた和也達も、ともに打ち合えるようになっていく。

まだ少しだけ力負けしているようだけれど、それは十分技術で補え

る程度のものよ。

このままいけばそのうち魔王に致命傷を与えることもできるでしょう。

魔術のことを考慮に入れなければね。

「ふん、多少はやるではないか勇者達よ。だがそうではなくては面白くない！　だがこれは凌げるかな？」

魔王の周りに20近い魔術陣が浮かび上がり、魔術の嵐が吹き荒れた。

炎に氷、風、土、光に闇、ありとあらゆる属性の魔術を属性同士の相性など考慮せずに出鱈目に放たれた。

だがそれだけに予想もできない軌道と効果を発揮し、防ぐにしても避けるにしても厄介きわまりない。

向かってくる炎弾と氷弾を避けたら、その2つがぶつかり合って起きた水蒸気爆発でダメージを負ってしまった。

風刃と炎弾がぶつかったら急激に炎弾の効果範囲と威力が増して魔術障壁を張りなおさなきゃならなくなってしまった。

至近距離でこの魔術の嵐を避けながら魔王と剣撃を交わしている和也とゴドーに比べてれば私は楽なんでしょうけれど、こっちだってシンシアたちも守る様に障壁を張っているから魔力の消費が激しい。できるだけ早く戦いを終わらせないと。

『凜！　マリーの治療も終わったわ。私もマリーもすぐに戦いに復帰できるけど、何かやってほしいことはある？』

よかった！

マリー達が戦いに復帰してくれるのなら勝ったも同然よ！

『私に向かってくる魔王の魔術の対処をお願い。それさえやってくれば私が魔王の魔術障壁を無効化できるわ』
『分かったわ』

念話が終わると同じタイミングで、マリーとシンシアが協力した魔術障壁が張られたわ。

仕事が早いわね。

そんなことを思いながら、自分で張っていた魔術障壁を解除し、魔王の魔術障壁を無効化するための魔術の詠唱に入った。

確かに魔王は強かった。

だが、それ以上じゃなかった。

常識外れの身体能力と圧倒的な魔力量にものを言わせた魔術の弾幕。どちらも生半可な魔術障壁では防ぐこともできない威力を持っていた。

だけど、半年間血反吐を吐きながら鍛え続けた俺にとっては何とかなるだろう、と思える程度でしかなかった。

はじめの方こそ、その身体能力によるゴリ押しが辛かったが、凜がグランブーストをかけてくれたからは近接戦闘は明らかに俺とゴドの有利に進み始めていた。

魔王も魔術でその劣勢を挽回しようとしていたが、マリーとシンシアが復帰したことでそれすらもできなくなった。

「なぜじゃ！？　なぜ我がたかが人如きにこうも押されておる！
ありえん。ありえんぞ！」

「それは貴女が完成した存在だからですよ。貴女は生まれた時から完成していて、成長の余地など存在しなかった。その時から圧倒的

な能力を持っていたから今まで気にもしていなかったでしょうが、成長できない貴女程度時間さえあれば十分に対処可能です。魔王軍が私たちにとって恐ろしかったのは魔王が強かったからではなく。魔王軍の数が多かったからですよ」

本当にマリー言う通りだ。

この世界で人類側が魔王軍に押されていたのは魔王軍が広大な範囲に渡って攻勢をかけてきているせいで戦力の集中ができずにいたことが原因だ。

その問題が無くなった以上俺たちがここで負けても、オービスさんたちが問題なく魔王を討伐するだろう。

まあ俺はここまで来て負けるなんて考えちゃいないけどな。

「お前は人間を舐め過ぎてたつて事だ。凜やつちまえ！」

「任せなさい！ 吸い尽くせ」
『アブソーブマジック』

大量の魔力が一度に身体から吸い出されているせいで力が抜ける。

魔術の直接の対象じゃない俺でもこれだけの効果があるんだ。

魔王は堪ったもんじゃないだろう。

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！……！」

魔王の体は魔力でできている。

だから対象とその周囲の魔力を吸い尽くすこの魔術の効果は拔群だ
さすがに魔王そのものを消し去るには効果が弱いけれど、その身に
纏っている魔術障壁を消し去るには十分だ。

後は踏み込んで切るだけでいい。

「うおおおおおおお！！」

袈裟掛けに1太刀打ち込んだが、回避行動をとった魔王に避けられた。

だが返す刃で腕を斬り落とす。

「サンダーレがはっ」

魔術で反撃しようとした魔王の腹にゴドーが剣を突きたてる。動きが止まったその瞬間に俺の剣が魔王の首を刎ねた。

宙高く舞い上がり飛んでいく魔王の首には信じられない、という思いがありありと表われている。

よし勝った！

魔王の首が地面に落ち鈍い音を立てる。

「やったわよ！」

凜達がこちらに駆け寄ってくるのが見える。

その顔は喜びに溢れていて、俺の顔も自然と笑顔になるのが分かった。

だからだろうか？

戦いは敵が死ぬまで終わらないということ忘れてしまっていた。

「許さんぞ」

声が聞こえた。

「許すものか」

首を刎ねたはずだ。

あれでもまだ死なないというのか！？

凜達の顔も驚きに染まり動きが止まっている。

「我だけが死に、貴様らが死なないなどという結末が許せるはずがない！！」

ようやく体の硬直が解けて振り向いた俺が見たのは、徐々に消えゆく魔王の首だった。

魔王が死ぬまであと5秒も掛からないだろう。

だが魔王はその5秒で最悪の置き土産を置いて行った。

『魔王軍全軍に告ぐ。殺し尽くせ。例え四肢を引き千切られようとも。この世から人間どもを駆逐しろ！』

切り札（前書き）

お待たせしました。

遅くなった理由は主人公の切り札がプロット通りだと不自然に思えたから別のものに書き直したからです。

矛盾がないようにできる限り以前投稿した分も見直しましたが、もしかししたら矛盾があるかもしれません。
見つけた場合はご指摘お願いします。

切り札

随分と殺したな。

手に着いた血を拭い、刃こぼれが酷くなった剣を捨てて近くにあった死体からちようど良さそうな剣を拝借する。

さて魔王軍もずいぶん殺されたことで動揺が出てきているな。

碌な知性もない魔物ばかりなら、戦線が崩壊してもおかしくないほど殺したから、当然と言えば当然なのだが、後は指揮を執っている魔人の戦意を折ることができれば潰走を始めるだろう。

そう思った次の瞬間

戦場から音が消えた。

実際には肉を剣で断ち切る音や魔術の着弾音が響いているが、その音が激減している。

周りを見渡して分かったのは

魔王軍の動きが止まっている？

さっきまで動揺していながらも嬉々としてこちらを殺しに来ていた魔物たちの動きが完全に止まり、一方的に殺されるだけとなっている。

『対魔王連合軍全兵士に告ぐ！ 魔王の魔力反応の急激な減少を確認した！ 勇者達が魔王を倒したぞ！』

歓声が爆発した。

私の部下達もここが戦場だということを忘れたかのようににはしゃいでいる。

勇者達が魔王を倒した。

それが本当なら私のしていた最悪の懸念も外れたということだ。
よかった。

この懸念が当たっていたら私は死ぬしかなかったからな。
そう思っていたのに

『魔王軍全軍に告ぐ。殺し尽くせ。例え四肢を引き千切られようとも。この世から人間どもを駆逐しろ！』

最悪の内容の念話が戦場を駆け抜けた。
全軍に動揺が走っているのが分かる。

魔王を倒したと念話が響いたその矢先にこの念話だ。

動揺しないほうがどうかしてる。

さっきまで動きが止まっていた魔物たちが動き出し、動揺している
こちらの兵士たちを次々と殺している。

「ボーっとするな馬鹿ども！ 死にたいのか！？」

私も動揺している部下達を叱咤しながら再び魔物を殲滅べく攻撃
を開始するが、魔物たちには魔王の念話のせいで動揺はなくなり、
むしろ腕や足を切り飛ばそうともこちらを殺しに来るバーサーカー
のようになっいて厄介極まりない。

これはやはり私の最悪の予想が当たったということなのだろうな、
となればおそらくあれが来るはずだ。

「団長！ 左右の地平線の向こうから魔物の群れが！」

.....後方から魔物が来ていない分私の予想よりまだ

ましたが、ここは敵地だいつ後方から魔物が出てくるかも分からない。

後退するべきだろうな。

ただでさえ圧倒的だった物量がさらに増えた魔王軍とこのまま戦うなんて自殺行為でしかない。

ない、が。

ここで引いても結局は物量で押し切られて私の祖国は蹂躪されるだろう。

つまり私がこんなときの為に準備していた2つの切り札の内の1つを使うしかないということだ。

「おい！ 司令部に私の名前でこう伝えろ。『今から私の大魔術で敵の殲滅を図る。巻き込まれなくなければ直ちに後退しろ』以上だ」
「了解！ こちらイーリア特殊戦団ライフハート団長より。『今から私の大魔術で敵の殲滅を図る。巻き込まれなくなければ直ちに後退しろ』以上です」

司令部からの返信を待つ間に雄叫びを揚げながら私に向かって突進してきたミノタウロスの心臓を一突きにして殺し、その手に持っていた全長5メートルほどの斧を奪い取り、私の部隊に襲いかかるうとしていた魔物の群れに向かって投擲する。

群れの3分の1がミンチになったが全く動揺も見せずに私の部下に襲いかかるうとする魔物たちに今度はミノタウロスの巨体を投げつけさらにその数を減らす。

あそこまで減らせば部下達も無傷で魔物を殲滅させることができるだろう。

「それにしても団長は回復魔術と身体強化魔術以外使えないと思っ
ていましたが、そうでもなかったんですね」

「そうだな。基本的に使っている魔術はその2つの系統だけだが、

それ以外でも生体に干渉する系統のものなら使える。尤もその殆どが禁術指定されていて使う機会などそうそうない」

「そうですか。では今回使うのは生体干渉系の禁術ですか？」

「詳細は言えないが違うな」

部下達との最後になるであろう会話を続けているうちに司令部からの返答が届いた。

『こちら司令部、貴官の提案を受け入れこれより全軍に後退命令を出す。貴官にもできる限りの援護を行う。何か要望はあるか？』

「『要望無し。いかに迅速に後退するかだけに気を配ってくれ』と伝えてくれ」

部下の1人が司令部に念話をしている間に私は他の部下たちに作戦前に教えた魔術を使うと共にバハムートに念話をしてここに呼ぶように指示を出しておく。

これでいい後は魔術に必要な魔力が準備でき次第発動させるだけだ。部下たちには戦いの前にきちんとこの戦いで最低でも死んでもらうことになるとは言っておいた。それに対して

「国を守るために命程度ならいつでも捧げます」

と言ったお前たちを私は誇りに思う。

「お前達の献身に感謝する。その命を国の為に捧げてくれ」

私の切り札を使うには膨大な魔力を必要とする。いや、発動するだけなら何とか私個人の魔力だけで発動が可能だが、

その後の攻撃に繋げることができない。

だから部下達に教えた『造魔術』^{クリエイトマジック}の出番になる。

部下達に教えた『造魔術』は300年ほど前に私の先祖が『オールインワン』の解析をしたときの副産物として生まれたものだ。

この魔術は使用者がこの魔術の魔術陣を思い浮かべてその時の心の底から浮かんできた言葉を詠唱することさえできれば発動できる、という魔術の歴史の中でも空前絶後に発動が簡単なものだ。

尤もこの魔術の元になったのはオールインワンの魔力強制徴収機能だからこの魔術が発動して生まれる魔力の材料は使用者の血肉と魂だ。

使えば寿命が縮み、それでも使い続ければ死ぬ上に魂すら魔力に変換し尽くしてしまう。

つまり魂がこの世界から消失し、輪廻の輪からも消えてしまうという最悪の魔術だ。

その魔術を部隊の半分ほどが詠唱をしている。残りの半分は詠唱している部下と切り札の準備をしている私の護衛だ。

そして護衛をしている部下達もおそらく造魔術を使ってもらうことになるが、その後の護衛は

「来てやったぞ。ありがたく思え」

支配下に置いたときの従順さがずいぶんと薄れたバハムートだ。

まあ、命令に従うなら言葉遣いなどどうでもいい。

「そうか、それでは私と部下達の護衛をやれ。そのうち残りの部下達も造魔術を使うことになるから、その後はお前1人で魔物の群れを食い止めることになる。出来るか？」

「ふんっ、我を誰だと思っている全ての竜の頂点に君臨し支配する者、バハムートであるぞ！」

いつか聞いたセリフを自信満々に言っているが、そもそもお前は現竜王に負けて封印されていただろうに。

「なら、この魔物の群れを1匹たりとも通すな」

そして私は切り札の魔術の発動に意識を集中させた。

私の言葉に反応して何か言っているようだが、私の耳には入らなかった。

深い集中を維持するために聴覚を切ったからだ。

そして視覚を閉ざし、触覚すら遮断する。

よしこれなら死にさえしない限り魔術が中断することはない。

私の周りに膨大な魔力が発生したのが分かる。

部下達が造魔術の詠唱を終えたのだろう、その魔力が私に向かって流れてくる。

そして私は流れてきた魔力を吸収し、準備しておいた魔術陣に流し込む。

直ぐに魔術陣が魔力で一杯になるので、2つ目以降の魔術陣に注ぎ込んでいく。

十分に魔力を流し込めた魔術陣の数は8、これだけあれば十分だろう。

よし、準備はできた。

後はこの魔術陣を発動させ魔物どもを殺し尽くすだけだが、脳裏には懐かしい思い出ばかりが浮かんでは消えていく。

この戦いが終われば私は死ぬ。

それが分かっているせいかだろうか？

私がまだ人を殺したこともなく、ただ家で父と鍛錬に励んでいたあ

の頃の光景とセリカと遊んだその場面が次々と思い浮かんでくる。
あの頃は良かった。

人を殺さずとも良かったし、義務はあっても今ほど大変なものではなかった。

そして何よりセリカがいた。

セリカを殺した私にはこんなことを言う資格などないのかもしれないが、それでも言いたい。

私はセリカを愛している。

この手で魔人化したセリカを殺した今でもその思いは変わらない。
貴族としてなら思い残すことはいくらでもあるが、レオン個人としては思い残すことなど何もない。

むしろ死にたいとすら思っている。

だからこれからやろうとしていることは私の貴族としての義務と個人の願いを同時に叶える最高の一手だ。

「身体強化魔術発動、強化倍率『リミットオーバー物理限界』」

これで魔術陣が発動し、私の体は物理法則が許す限りの強化を施されたはずだが、あまり実感はないな。

まあいい。

思いつきりやる。

拳を構え、正面にいる魔物の群れを見る。

タイミングが良いことに丁度正面にガイアドラゴンがいる。

大きさは15メートルほどだろう。

あれだけの大きさがあるなら私が攻撃を外すこともないし、空を飛べないガイアドラゴンに避けられることもないだろう。

その代わりにオリハルコンに匹敵するという硬度を誇る鱗を持っているが、今の私の障害とはならないはずだ。

地面を踏み締め、踏み込む。

信じられない速さで身体がガイアドラゴンに近づいて行き、空気との摩擦で身体が焦げる。

眼球が瞬く間に白濁し、視界が消えそうになるがぎりぎりのところで回復魔術が間に合い視界が回復する。

空気との摩擦で焼け焦げ続けている身体も回復魔術で回復し続ける。間合いにガイアドラゴンを捕えた。

拳を固く握り直し、踏み込みの速度を拳に乗せ一直線に拳を打ち放つ。

そして拳がガイアドラゴンに当たった瞬間、世界は閃光に包まれた。

対魔王軍 司令部

閃光が世界を覆った。

魔王軍から必死の撤退を行っていた私達は背後からの閃光に包まれ、驚き振り向いた先に信じられないものを見た。

空高くまで立ち上るキノコ雲、その巨大さは今作戦で使われたどの

戦力級魔術が発生させたものよりも大きく、その威力の強大さを示していた。

周囲では部下達が呆然と立ちすくんでいる。

私もそうしていたいがそうもいかない。

「何をばさつとしている！ 衝撃波が来るぞ！ 全軍に対戦力級魔術防御態勢をとらせる！」

私の言葉を聞きやつと慌ただしく動き始めたが、まずいな。

キノコ雲との距離が近過ぎる。

距離が近いということは衝撃波の威力もそれだけ減衰が少ないということだ。

ただの余波にすぎないはずの衝撃波でもあれだけの規模なら戦力級魔術に劣らない威力を発揮するだろう。

そして、一番厄介なことは効果範囲が全軍を覆うことだ。

1つの対戦略級魔術用の魔術障壁では1キロ程度しかカバーできない。

その理由は魔術障壁の強度の問題だったり、発動と維持に使う魔力が膨大だったり様々だが、今ここで問題となるのは全軍を護るための1つの魔術障壁を張ることができず。

個々が張った魔術障壁を繋ぎ合わせたような継ぎ接ぎの防御しかできず、その場合必ず隙間ができるということだ。

それでは魔術障壁の継ぎ目から衝撃波が入り込んでしまい防御できない。

八方ふさがりか？

「司令！オービス殿から緊急の念話が届いています！ あの衝撃波

に対する対策を伝えるとのことですよ」

神は私達を見捨てていなかった！

「直ぐに全部隊との通信を繋げる！」

一々こちらから通信をするよりは直接全部隊に対策を伝えたほうが時間の短縮になる。

私達にそれほど時間は残されていないのだからな。

『時間もないので単刀直入に言うんじやが、『コンフォートフィールド』を発動するのじゃ。あれは耐熱耐寒用に開発されたものじやが、その原理は真空を作り出すことによって熱や冷気を遮断するというものじゃ。そして空気がなければ衝撃波が伝わるようなことはない。尤も衝撃波の影響で『コンフォートフィールド』は簡単に解除されるじやろうから何重にも展開して、その上で『コンフォートフィールド』の間に通常の魔術障壁を挟み込むのじゃ。そうすればおそらく其方の位置ならば防ぎきれん』

「分かりました。皆聞こえたな？ それではかかれ！！」

全ての兵士たちが必死の形相で準備を行っているこの間にも衝撃波は凄まじい速さでこちらに迫っている。

間に合うのか？

いや、間に合わせるんだ。

間に合わなければ死ぬだけだ。

『それでは後の指揮は頼んだぞ。僕は自分の身を守るので精一杯に

なるじやろうから、そちらにこれ以上の助言はできん。己が最善を
尽くせよ?』

「はっ！」

そうだ。

我らと違いオービス殿は1人でこの衝撃波に耐えねばならない。それに比べれば我らの苦勞などないに等しい。

「司令！ コンフォートフィールド及び魔術障壁の展開終わりました！」

「そうか」

これでは衝撃波の到着を待ただけだ。

双眼鏡を持ち、後方から迫りくる衝撃波にピントを合わせる。

……凄まじいな。

双眼鏡から見えたのはこの目で見ても信じられないような光景、ガイアドラゴン、サイクロプスなどの体重が1トンを軽く超えるような魔物たちが吹き飛ばされ宙を舞い。

ワイバーンやレッドドラゴンなどの空を飛ぶ魔物たちも衝撃波に翻弄され地に落ちる。

魔物たちを一掃しながらこちらに迫りくる衝撃波、あれに私達の障壁は耐えきれぬのか？

そんな疑問が思い浮かぶ。

既に衝撃波は我らの後方1キロもないところにまで迫っている。

あの速度なら後20秒もしないうちにここに到達する。
逃げる時間もないから障壁が耐えきれると信じるしかないのだが、
信じきれない。

「おい、私達も障壁を張るのを手伝うぞ」

だから、何も考えなくていいように身体を動かそう。

「ここでじっとしていても何の解決にもならん。この衝撃波で魔物
共も全滅するだろうから、それについての対象は考えなくてもいい
んだ。それなら生き残るためにも私達も障壁を張る手伝いをするぞ
！」

部下達と障壁を張るために動き出した瞬間、衝撃波が障壁にぶつか
ったが、障壁が破れることはなかったようだ。

障壁に沿って衝撃波が受け流されていくのが分かる。

地面の揺れも想像していたよりも軽い。

この程度なら走っていても転ぶようなことはないだろう。

だがそこで予想外の問題が起きた。

土煙りに太陽が遮られ全く光がない暗闇に全軍が包まれたのだ。

所々で障壁を維持する魔術陣の光が見えるだけで、それ以外は完全
な暗闇だ。

照明弾を撃ちあげたいところだが、下手をすれば障壁を内側から撃
ち抜いてしまいかもしれんから撃ち上げるよう命令を出すわけにも
いかん。

怪我人が出ないといいのだが。

「司令！ 前方の障壁にかかる圧力が減少しているようです。そろ
そろ衝撃波も終わるか」と

部下達は安堵したような表情を浮かべているが、まだ脅威は終わっていない。

「馬鹿者！　これだけの衝撃波だ。この後には必ずこの衝撃波によって生まれた真空が猛威をふるうぞ。全部隊に気を抜かないように命令を出せ！」

慌てて全軍に命令を出す部下達を見ながら私はこの衝撃波を生み出したであろうレオン＝ライフハートのことを考えていた。

彼は回復魔術と身体強化魔術しか使えないという話だったが、やはりあれは嘘だったようだな。

まあ何はともあれ、これで我らの勝ちが決まったようなものだ。

この衝撃波の影響が収まったら反転して帝都に向けて進軍することにしよう。

「死ぬかと思ったな」

それが私の嘘偽りの無い本音だった。

物理法則の許す限りまで加速した体は空気との摩擦で焼け焦げるところか磨り潰されかけた。

ガイアドラゴンを殴りつけた拳はあまりの衝撃に耐えきれず砕け散った。

それにもかかわらず私がこうして生きているのは、回復魔術で回復し続けたからに他ならない。

皮膚が焦げた一千万分の一秒後には再生を終わらせ、砕け散る拳は砕け散る途中で再生させた。

それに費やした魔力と労力の方が身体の強化に使った魔力と労力より遥かに多い。

まあその甲斐あって魔物たちの殲滅は完了した。

掛かった時間は半日ほどだろう。

使った魔術陣の数は7つ。

何とか部下達の魔力だけで殲滅を終えることができた。

それにしてもここも随分と殺風景な場所になったものだ。

草木もなく、あるのは巨大なクレーターだけ。

クレーターから這い出してみても近くにあった筈の帝都の城壁は跡形もなく消え去り、辛うじて王城らしき建物の残骸が残っているだけだ。

さすがに皇族が住んでいた場所だけあって完全に消し飛ぶことはなかったようだが、見たところ1階より上は完全に消し飛んでいる。

まずいな。

勇者達を巻き添えにしたかもしれない。

出来ることならば転移魔術で逃げ出していてほしいのだが、それは楽観的過ぎるだろうな。

まあこの後の用事が終わって余力があれば味方が戻ってくるまでの間にあの王城の探索をして勇者達を探しておこう。

尤もこの後の用件が終わった後の私に余力が残っているとは思えないがな。

風景が切り替わる。

一瞬前まで色鮮やかだった世界が突然モノクロの世界に変わった。

いるのはバハムートと私だけだ。

「主、これはやはりそういうことか？」

無言で頷く。

やはりこうなったな。

私もこうならないはずなどないと思っていたし、バハムートはあれでも竜王の妹だ。私のやったことの意味を正確に理解していたはずだ。

そう神々が降臨する。

目的は禁忌を犯した私に天罰を下すことだ。

神々の天秤

8メートルほど前方に神々しい7本の光の柱が天まで聳え立ち、光が消えた後に表れたのは伝承に語り継がれるものと寸分違わぬ姿をした神々だった。

『さて、我らが降臨した理由は分かっているでしょう？ おとなしくなさい』

随分と上から目線の言葉だ。

いや実際神々の方が圧倒的に立場が上なのだが、私たちライフハート家の人間にとって神とは信仰するものではなく、いずれ打倒する者という認識だ。

だから、その上から目線が気に入らなかった。

私の一族が神々を倒そうと思った理由は単純だ。

神々は私達が知る限りこの世で一番強い存在で、その存在を倒せる力を持てばあらゆる敵に勝てる力を得た証明になるだろう。

ただそう考えただけのことだ。

なんとも馬鹿馬鹿しいことだが、事実だ。

私の先祖たちが延々と続く内乱で敗北し、国を失うことがないよう

に力を求めた結果がその結論だったそうだ。

だから私の家系には対神用の戦術プランがいくつも残っている。尤もそれらは考えられただけで使われる機会が来ることなどはなかった。

今この瞬間までは。

回復魔術のおかげで身体の調子は万全、精神的には多少疲れが残っているがそれは脳内物質の操作でどうにでも誤魔化せる程度のもんだ。

残念なことにオールインワンは手元にない。

魔王軍を殲滅するために使った物理限界リミットオブルールの衝撃波でどこかに吹き飛んでしまった。

今ならもしかしたら神の根源である神核を傷つけることができるだけの魔力を確保できるかもしれないのに、手元には棒切れ1つもなく。

あるのは己の身体だけだ。

幸いなことに『物理限界』の魔術陣がまだ1つ残っているからこれを使えば一矢報いることくらいはできるだろう。

なにせこの世界が許す最高速度で攻撃を叩きこむことができるのだ。

それに反応できる存在がいるとは考え難い。

神経を研ぎ澄ませ、足を心持ち開いて拳を握り込と同時に物理限界を使う準備を始める。

『大人しくはしてくれないようですね。なら仕方ありません』

圧倒的な魔力の奔流が私の身体にぶつかりながら流れている。

神々は自然体のままで戦闘態勢に入っているようには思えないにもかかわらず。

手が震え、足が萎えそうになる。

感じる威圧感は今まで敵対したどんな存在よりも強大で、勝てるはずなどないという諦観が私の心に忍び寄る。

感情はこんな存在に勝てるわけがないと叫び、だから諦めて裁きを受け入れると叫んでいる。

理性はこんな存在に勝てるはずがないと叫び、それでも生きることが諦めることなど許されないと叫んでいる。

理性も感情も勝てるはずがないと叫んでる。
しかし、それぞれが出した結論は違う。

感情の出した結論は神々との間にある絶望的な實力差とセリ力を喰い殺した罪悪感に支えられている。

それに比べて理性の出した結論は貴族としての義務を放棄してに逃げることは許されないというただの使命感によって導き出されたものにすぎない。

しかしそれでも、私の中で意見が割れた時に優先するのは理性の出した結論だ。

感情と理性の結論が違う場合、貴族としての使命を元に理性が導き出した結論を優先することを子供のころから延々と叩きこまれてきた。

それが『貴族』を育てるためにライフハート家が選んだ教育法で、

価値観を『貴族』として固定する洗脳と言っても過言ではない。

そして私はそのことを理解していても、私が物事を選ぶ判断基準として最も信頼するのは『貴族』の価値観だ。

だから私が選ぶのはどれだけ絶望的だろうとも理性の出した結論だ。

負ける可能性が高いからと言って諦めることなど『貴族』としての価値観が許しはしない。

それにセリ力を食い殺してまで貫いた『貴族』としての在り方を高々この程度のこと曲げてたまるものか。

そう考えることによって怖気づこうとしている心を叱咤し、脳内物質を調整して心理状態を調整する。

『汝の罪は18の魂を輪廻の輪より消滅させたこと、及び神に対する反逆です。反論はありますか？』

もちろんある。

「なぜ貴様らは今頃になってこの世界に完全顕現した？ もっと早く貴様らが顕現していれば、人類はこの戦争でここまで多くの死者を出すことなどなかった」

そしてセリ力をこの手で殺すようなことにもならなかったかもしれない。

「人々に信仰されることを望みながらここまで最悪な状況になるまで碌に手を貸さなかったのは貴様らだ。貴様らがさつさと完全顕現し、私達を助けてくれていたならば今回の魂の消滅も起こることは

なかった」

神々の存在感に圧倒されそうになる心を叱咤し、神の言葉に反論する。

「勇者を呼んだだけで十分な手助けをしたとでも言うつもりか？」

そんな馬鹿な話はない。

神々は勇者を呼んだだけで、魔王との戦いを終わらせたのは勇者達の努力と挺身だ。

神々は全く魔王との戦いに関与していない。

「そんなふざけたことは言わせない」

物理限界の魔術陣の発動の準備が終わった。

狙うのは一番近い位置にいる炎の神でいいだろう。

できうる限り魔力が魔術陣から漏れないように注意を払い、常にに一定の殺気と敵意を放ち、神に私の攻撃タイミングを悟らせないようにする。

よし、やるか。

覚悟を決め1歩踏み出そうとした瞬間に神々からの威圧感が消えた。

あまりにも予想外なその事態に踏み出そうとした足が止まる。

罨か？

いや、神々がそんな小細工をする必要などないはずだ。
私と神々との間には圧倒的な地力の差がある。

ならばなぜ今この瞬間にこんなことをやってきたんだ？

『汝の言い分は分かりました。ですが我らが人類を直接助けなかったのはそれなりに理由があり、貴方方の関知するところではありません。間接的ではあるものの勇者の召喚を上げて上げたことに感謝してほしいものです』

.....心が冷えていく。

心から余計な感情が消え、ただ殺意だけが研ぎ澄まされていく。
あの澄ました顔に全力の一撃を打ち込んでやる。

『怒りましたか？ ですがそれが我らの共通見解です』

物理限界を発動させ、殴りかか『その拳を振り抜くのならあなたの国を滅ぼしますよ？』.....ろうとした拳は神の発したその言葉で止まった。

「貴様ら！ それでも神か！？」

正気の沙汰ではない。

『私達としてもそのようなことはしたくありませんが、貴方が我らに反抗するのならそういう処置もいたしかたない。そういうことです』

溢れそうになる憤怒を抑え込み魔術陣を待機状態に戻す。

『貴方は強くなりすぎました。今の貴方を殺すには最低でも私達の内1柱は犠牲にする必要があるでしょう。もちろん魔術が使えない貴方では私達の神核を破壊することはできないので、我らが完全に死ぬことはないでしょうが、貴方の物理限界の魔術は我らの受肉した肉体を完全に破壊することは可能です。それをやられた場合我らは世界に干渉する術を失います。具体的に言うなれば肉体を破壊された神の魔法と加護がこの世界から消えてしまいます。それは世界の管理を行う我らにとって看過できる事態ではありません』

私の編み出した物理限界の魔術は予想以上に強力なようだな。これはうれしい誤算だ。

「で？ 結局何が言いたい」

『そうですね、前置きが長くなりました。簡潔に我らの結論を言うところになります。「世界を護るための守護者となりなさい。そうすればこのたびの罪を許しましょう」ということです』

私の耳がおかしくなったのか？

神々が私を許すだと？

私の考える限りでは魂を消滅させることは重罪のはずで、極刑以外はあり得ないものだ。

しかも私が消滅させた魂の数は1つや2つではなく18もの数だ。許される事は考えづらい。

『その顔は自分が許されたことが納得がいけないといったところでしょうか？』

「その通りだ」

『それは簡単です。今のあなたを殺そうとすれば我々からも犠牲が出る。それに比べればあなたの犯した18の魂の消滅など問題にならないものだということです。それに元々魂が消滅して輪廻の輪から消えることは人為的な関与がなくても起こることですから、それの対策として多少手間が掛かりますが新しい魂の補充を行うことができます。ですからこの身が破壊される危険を冒してまで貴方を裁く必要性はないのですよ』

「なら最初の威圧感は何のつもりだったんだ？」

『あれは戦闘態勢に入ろうとしていた貴方の出鼻を挫くためと、あれで怖気づいて死を受け入れてくれたならばもうけものだという程度のことです』

こいつの言っていることが本当なら私は死なくて済む。

けれど問題は世界の守護者になるということがどういうことか分からないことだ。

「世界の守護者の役割は何だ？ それを聞かないことには受け入れるかどうか決めることはできない」

『世界の守護者の役割は単純です。「世界の敵を倒す」ただそれだけです。具体的に言う今回の魔王のような他の種族を殺し尽くそうとする存在を殺すことですよ。我らとしても魔王のような存在が今後現れた場合に備えて対策を打ちたかったですから』

「何か制約はないのか？」

話が上手過ぎる。

必ず何らかのデメリットがこちらにあるはずだ。

『幾つかあります。まず1つ目として我らの許可がなければ造魔術は今後一切使わないこと。2つ目はより多くの種族が生き延びるよう選択を行うことです。貴方が気に入らない種族が減ぶまで事態を傍観されては堪りませんから。どちらかの制約を破った場合の罰は貴方には貴方の大切なものを貴方の手で壊してもらうことです』

1つ目はまあ当然の要求だろう。

私としても受け入れることに異論はない。

2つ目は解釈次第だが問題としないことができる。

例えばエルフの国のように1種の稀少種族の大半が集中している国が減ばされるのを傍観したとしても、他の国にある程度の集団でエルフがいれば種族としてのエルフが減びることはない。
そんな解釈をすることもできるからな。

今後国家同士の戦争で他国を滅ぼすかもしれない私としてはこの解釈が通用するかどうかは重要だ。

『ええその解釈で構いません。ただしその解釈の結果種族が減びた場合はペナルティーを負って貰います』

残る問題は罰についてだけだが、これはかなりえげつないものを出してきたな。

正直この罰の条件を飲むのは気が進まないが、かといって神々を納得させることができる代替案を出せる自信もない。

なにせ肉体体系の苦痛は私には効果が殆どない。

幻術の類も脳内物質の調整で何とか乗り越えてしまえる。

そう考えると神々の出した罰くらいしか私に効果的な抑止力を発生させることができない。

この条件の場合私が制約を破って壊さなければならぬのはイーリアという国そのものになるだろうが、その時は逆に殺されればいい。

私が死んで神々は満足し、私も国を壊さなくて済むからな。

結論としては神々の提案を受け入れたほうがいい、ということになった。

「その条件を受け入れよう」

『そうですかそれではこれが契約書です。貴方の血を垂らしてください』

親指を噛み切り、差し込まれた契約書に血を垂らすと契約書が発光し、私の腕に神々の紋章が浮かんで消えた。

『それが契約の証です。今は消えていますですが浮かび上がる様に念じれば紋章が浮かび上がります。神殿関係者に見せればかなりの優遇措置が取られるでしょう。好きなように使いなさい。ああそれと貴方の持っていたオールインワンは貰っていきます』

ただそう言っで、神々は消えた。

それと同時にモノクロだった世界に色が戻る。

「主よ、これでよかったのか？」

よかったも何も、実質的に今回の交渉で私に選択の余地はなかった。イーリアを護りたければ神々の言うことを聞くしかない。

神々の交渉を撥ね退ければ私は神々に一矢報いることこそできたかもしれないが、イーリアは滅び、私も死ぬしかなかった。

なにせ私の手元に残っている物理限界の魔術陣は1つだけだったからな。

7柱の神々全ての身体を破壊することはできなかっただろう。

「最善ではないが、生き残ることはできた。それだけは事実だ」

死ねばそこで終わりだが生きていれば何とかできるかもしれない。

「今はとりあえず帝都の方へいくぞ。勇者達とオービスたちが生きているかどうか確認しなくてはならん。司令部の方にはお前から念話を入れておけ」

「……………分かった」

神歴5920年マケミアの月45日

勇者が魔王を討伐し、魔王と人類との戦いが終結する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6208u/>

勇者だけでは勝てない

2011年11月29日21時46分発行